改造

創刊號



諸大家實際家の監修賛助

清水の
新形 模範 日本六法全書

清水書店編輯部編纂

イ印	ロ特製印	ロ上製印	ハ印	ニ印	ホ特製印	ホ上製印	ホ並製印
天金總皮特製爪掛	天金總皮特製本	天金背皮上製本	總クロース製爪掛	總クロース上製本	薄手本天金總皮特製	薄手本天金背皮上製	薄手本總クロース製
正價金貳圓八拾錢	正價金貳圓六拾錢	正價金貳圓貳拾錢	正價金貳圓	正價金壹圓八拾錢	正價金壹圓八拾錢	正價金壹圓五拾錢	正價金壹圓貳拾錢
郵送料金八錢	郵送料金八錢	郵送料金八錢	郵送料金八錢	郵送料金八錢	郵送料金八錢	郵送料金八錢	郵送料金八錢

東京神田區今川小路
清水書店
電話本局｛九六四番 九六五番
振替東京七四四七番

改造創刊號目次

拾壹版

山本實彦著

我觀南國

（洋裝菊判頗美 紙數四百二十頁）

定價壹圓五拾錢

送料十二錢

◎寺崎廣業、黑田淸輝、小杉未醒、和田英作、藤島武二、町田曲江、岡本一平七畫伯挿畫

內容

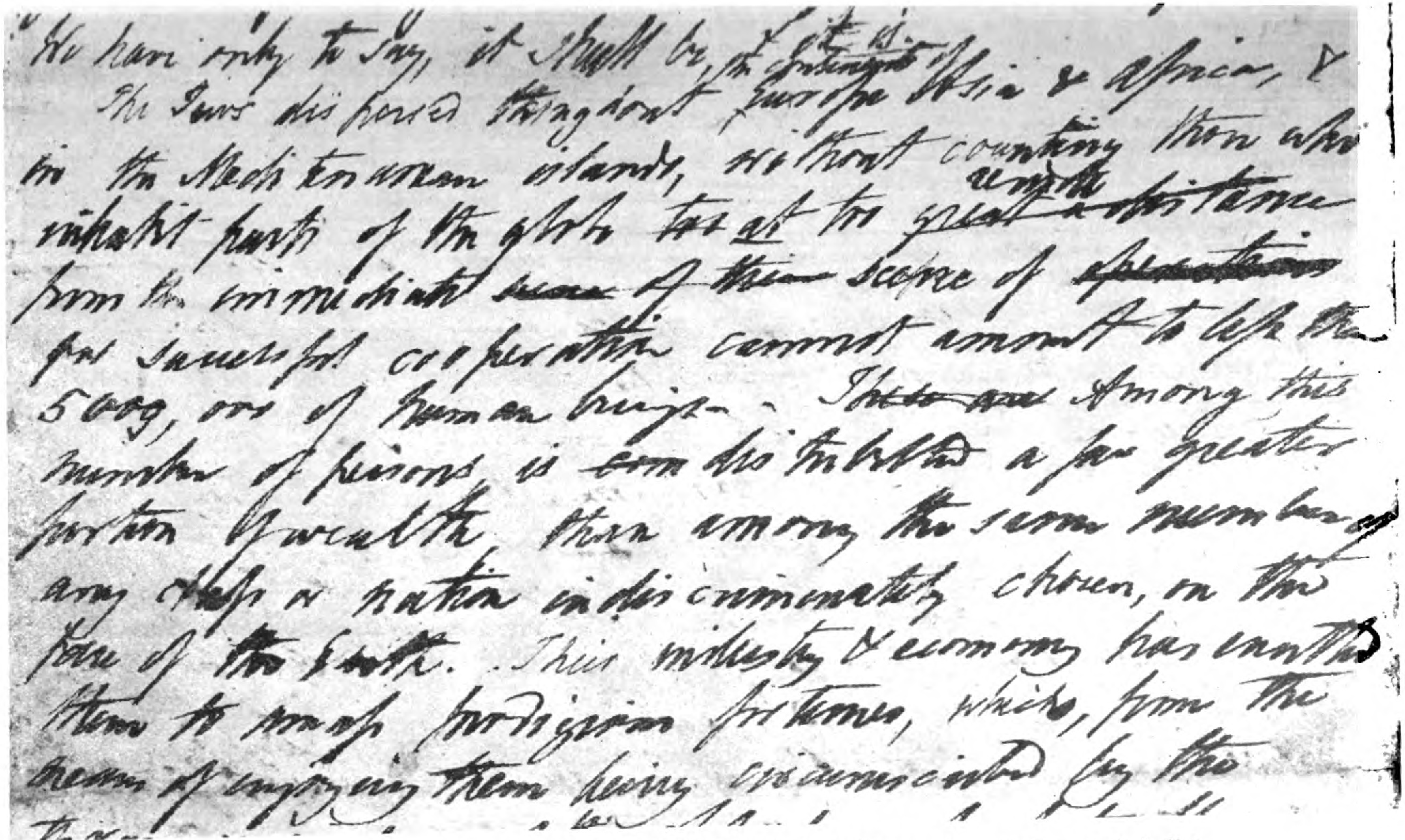
スパルタと薩摩
箱根蘆の湖と池田湖
トリアングレーと平田三五郎
神都川內
元帥「馬鹿平八」
宮守は閥族蛙は民黨
薩摩琉球の文學美術
天馬の說
春波四百海里
吐月峯蛇話
大久保とクロンウエル

靑記宮鳥より飯蛇へ
琉球の小赤壁
首里城とエヂンバラ城
舞姬カマデー
琉球史上の人物
糖業の沖繩
女工の天下
嗚呼海底の友
南九州の旅
靈の國日向
小村と伊庭

臺北大屯山上の瞑想
東京から臺灣
雪の上海
香港丘山の美觀
新嘉坡から瓜哇
瓜哇の首府
和蘭政府の壓迫振
醜業婦から蘭人の妻
瓜哇に雄魂なし
瓜哇王と語る
底力論

東京南品川東間淺臺二四六
改造社發行
電話高輪一一九〇

セエレーの直筆



（故リヂャードガーネット博士より當時滞英中の土井晩翠氏に贈られしもの）

創刊號



——(社説)——

帝國の主動的講和條件

一　固執すべき外交政策

默して蜚ばずば三年を出でずして、我帝國は思想上、財政上、外交上、世界より孤立して、あらゆる大艱難に逢着すべし。須く大勇氣を鼓して、帝國の前途の爲め、世界人道の爲めに堂々とヴエルサイユにて戰ふべき也。

翻つて我國の現狀に見よ、徒に區々たる內政にのみ齷齪して對外策の困難なるは忘れたるもの丶如し、普通選擧運動素より必要なり、而も普通選擧其物の成功は早や問題に非ず。其解決を內閣に於て爲せば可なり。民本主義の聲も、事新らしく聞けど、我國は創元の初紀より此問題は解決され居れり。中間の官僚、藩閥、軍閥の專恣を矯むれば可也。文官任用令の擴大も可。華族遞下法を設くるも可。此等の事は豈大政治家、大

經綸家を俟つの要あらんや。唯勞働者の地位の向上より、我社會組織に大變動を及ぼすの期近きに在るを思はざる可からず。ヴエルサイユ會議に於て、二十六ヶ條より成る國際聯盟案はウキルソンに依りて提唱されたるも、其實ロイドヂョージ案なることは想像に難からず。而して其目的とする處は、軍備の縮少、領土の委任統治、國際勞働保護に在るが、此等の批判は近く各國の選出したる執行委員の手に依り處理さるべく、規約違反としては、之を干戈に訴へざるを原則とす。案は多少の修正を經て、成立するものと見て、直接其結果より加藤、グレーの第三回日英同盟、ピション、栗野の日佛協約、本野、イズウォルスキーの日露協約、石井、ランシングの日米協商に如何なる結果を齎すべきか。就中日英攻守同盟に對して最も研究するの餘地あり。日英同盟の滿了は一千九百二十一年七月十三日なれば、今後尚二年四ヶ月間は有效なり。併し乍ら、此の有效期間中に於て國際聯盟完成を告げなば、實體上の日英同盟は效力を喪失することゝなるも、形式に於ては同盟其ものは國際聯盟の成立に依りて效力を消滅すべきものに非ず。其は國際聯盟の第二十二條に何等牴觸する處なければ也。而して日英同盟の延長が今後必要なる場合ありとて、兩國は直ちに之れを改訂すること能はざるべし。然らば今後の東亞及印度の政局は日英兩國が主人公となりて、總てを支配し恣に振舞ふことの困難なる事情を見るに至らん。否、現在にても、決して日英兩國は威を賴み、主人顏して東洋を處理し居れりとは見られず。是れ日英同盟の側面に尙、日露、日佛、日米の三協約の鼎立して萬鈞の重きを成し、互に相牽制しつゝあるによる。而して來るべき新國際聯盟の成立と倶に、日本の東洋に於ける威力は聊か殺がるゝは自然の數なるべしと雖も、素より我國は列國と協商して、淸國に於ける機會均等主義、及東洋の平和を確保するを唯一の國

是となし居るが故に、今回の國際聯盟成立せりとて、我國の主義政策に何等の變改を及ぼすものならざるを知る。又現今まで列國よりも、支那よりも、帝國が常に猜疑の眼を投ぜられつゝありし侵略主義、武斷主義なるものは此際を以て明瞭に打切るの覺悟なかるべからず。是れ實に日本將來の立場、及世界人道の上より見て、當然のことならんと信ず。殊に日支の親善を徹底的ならしむる上に於て亦然り、然らば玆に日本は如何なる條件を以て、主動的にヴェルサイユに臨むべきか。第一人種差別撤廢、第二、支那及西伯利其他に於ける排外的施設撤廢、第三、國際勞働保護案より來る日本の理解を列國に求むること、第四、經濟障壁の撤去の四題目は逸す可らざるものなり。

二　東洋に於ける排外的施設撤廢

東洋に於ける排外的施設撤廢に對する要求は、今迄一つとして論議されたることなきも、此題目は最も重視せらるべき性質のものにて、且つ直接の影響を帝國に持たしむるものなることを忘るべからず。我國は支那に對しては前述せる如く、衷心より武斷侵略の政策態度を捨てゝ、日支兩國民の親善、利益增進の方法を講じ、且つ支那民心の歸嚮を察して支那及支那人當然の慾求に向つては、帝國の威力と同情とを傾けて、之を貫徹せしむる方法を執るは日本の支那に對する親善第一策なり。支那領土の保全は日英、日佛、日米、日露諸協約に依りて、殆んど言ひ盡され居るも、其實列强が何れ丈け援助し、支那國民の爲めに那邊まで利益を增進せしめしかは疑問に屬す。然れば將來に於ける支那の福利と我帝國の國運進展とは脣齒輔車の關係を以て進むに非ざれば不可也、支那政府及支那有識者も三度思を玆に致す

べき也。遲くとも曲れる枝は直さゞるべからず。況して君子は過つて改むるを憚るものにあらず。日本政府は今日迄、或は段祺瑞一味の北方派を援け、或は孫文、唐紹儀一派の南方派に肩を持つの不公平を演じたるも、今後は公正なる方針にて支那に反省を求め、而して最良と信ずる手段を盡して、善隣としての情誼を完ふすべき也。

　對支經濟的發展の爲めに、必要にして、又、帝國としても之を支那に促して、寸時も躊躇すべからざるは、畢竟現在支那の排外的施設を撤廢することにあり。而して支那は日本の維新當時の如く外人を排斥し、外國人の施設を極端に排斥すれど、斯くては、世界文化の趨勢に同化すること不可能に了り、遂には世界の落伍者となるをも保す可らず。故に緊急第一の方策として、支那人は支那及支那人の前途の爲めに排外的施設を撤廢することをなすべきなり。我帝國の講和委員又ヴェルサイユにて列國に議り、其解決を叫ぶべき也。試みに支那に於ける排外的施設撤廢を要すべき其主なるものを擧ぐれば鐵鑛暫行辯法等鐵鑛閉鎖主義の法規を潔く撤廢するにあり、支那政府は四年以前より、內密に、該法案を制定して、鐵鑛國有の端を啓くと共に、鐵鑛に對する外資の輸入を杜絶せり、爾來日本政府の屢次の申込を拒絕して、該法の細目を制定し、漸次其實施の步武を進めつゝあり（露領西伯利に於ける鐵鑛も其通りなるが）然るに鐵鑛の閉鎖は、支那人自からの資本に乏しきと、團結心の容易ならざるより、支那人自からの採掘をも困難ならしめ、且つ條約上の義務にも背反する行爲なり。又原料國にあらざる帝國より言へば、到底其耐ふる所ならざるのみならず、非常なる影響を日本の鐵鑛業に及ぼしつゝあり。單に理義の上より論ずるも、支那政府の執れる行爲の條約違反なるのみならず、又、支那人のみにても單獨に其

鐵鑛を開發することの不可能なるが故に、かゝる有益のものは世界に解放して外國も共に其利益に均霑すべきものならん。

第二に支那の內地を開放し、外國人の居住、營業の自由を認むるにあり。殊に支那は從來極力領土閉鎖主義を執り、唯、外國の强要に依つて、一部の都市のみを開放して、其地域に於てのみ外國人の營業居住の自由を許容するに過ぎず。然し乍ら、かゝることは畢竟時世の趨向を裏切る舊思想の遺物にて、支那自身は言はずもがな、日本及列國の共に利益する所以に非ず。それ故に、支那內地の開放は、列國の治外法權撤去と相俟つて、一日も速に斷行すべき最重要問題たるを失はず。

第三は外國人に土地所有權を認めしむるにあり。（然し之は日本其ものも司法省其他の頑迷連ありて解決の運びに至らず、米國又土地所有權を認むるに至らざるも）支那の民心は未だ稚弱にて土地所有權と領土權との觀念を明確に分離し居らざる結果、今日に於ては、內地は勿論、開放地に於て、外國人の土地所有權を認めず。（但し外國人は或地方に於ては、永借權、若しくは商租權の名義の下に、所有權に等しき實を擧げ居るの例あり）

第四は布教の自由を一般的ならしむることにあり。現在支那法令にては耶蘇敎徒の內地布敎權を認めながら、古昔より支那に存在したる佛敎の布敎を拒斥したるは奈何なる理由によるや。日本政府は信敎の自由の題下に佛敎を耶蘇敎と同じく自由にせよと再三再四提議する處ありたるも、未だ解決を見るに至らず。これが爲め、宗敎的に善隣の意思相通ぜずとなさば遺憾も太甚し。斯は是れ純粹なる人道の見地よりして一日も早く、支那政府自ら人道の爲めに解決を下すべき問題に屬す。遠交隣排の外交と稱せ

らるゝも、支那政治家は一言の是に酬ゆるの辭なからん。さるにても無能なるは我が外交家なる哉。

第五は幣制統一及貨金制度の整理等にて、此等の問題は支那の財政の根本的基礎を作る上に於て、一日も早く處置さるべき問題なり。其他法典編纂、教育制度の改善、度量衡制度の統一、軍民分治等一として其解決を等閑に附すべきにあらず。

三　西伯利處分につき

次に方向を變換して凍土寒天の西伯利を見よ。地下には寶玉を藏し、地上にも富源乏しとせず、而も西伯利の鎖國的排外施設は支那に優るとも劣らず。殊に西伯利に於ける鑛山法は世界中比類稀なる複雜せるものと傳ふ。而も此地もムラビヨフ一派の野心兒が强奪するが如くして露領下になせしものなるをや。されど世界平和の爲めに過去は追求せじ。とは言へ、此際西伯利も或程度に於て、世界に公開するが人道の爲也。露西亞の爲め也。西比利亞そのものゝ爲め也。西伯利の寶庫と云へば先づ第一に石炭、砂金の類に屈指す、特にヤークツク、イルクーツク、ゼーヤの金鑛の如きは、何れも數億乃至數十億の價値あるものなるが、窮屈なる露西亞鑛山法の爲めに、外國人の投資は絕對不可能に屬す、是れを西伯利發展の上より見て、若しくは露西亞の前途より稽へて、外國の投資を拒斥するは甚だ不利益のことなり。結局、支那の排斥的施設を撤廢すると共に、西伯利に於ける排斥的施設を是非とも撤廢する必要あり。西伯利鑛山の開發なるものは、帝政時代露西亞母國の力を以てしても、完全に行かざりしもの、殊に現在の狀態にては之を開發することの到底不能事に屬するは瞭かなる所なり。西伯利の炭鑛、鐵鑛及

金鑛の開發は、莫大なる資本を提げて、第一に鐵道を敷設し、交通機關を整備して然る後此に當るの要あり。第二には交通機關に依りて食糧を西伯利以外の地より移送せざるべからず、かゝる豫想外の困難と多大の經費の伴ふが故に西伯利は露西亞のみにては開發先づ以て覺束なし、帝國の講和使は此事を知れりや。

今一つ。西伯利鐵道管理權問題は大體既に聯合軍の協定に依りて、一般管理方法は協定し盡したる如きも、猶細目の協定、及實行といふ問題に至りては、又數多の交渉の頻出することを豫期せざるべからず。我政府の立場として、若しくは、日本國民の露西亞國民に對する友情の表象として、西伯利は飽迄でスラブ人の自治を許すべきなり、此際なまなか野心を擁して、庖丁を下すべからず。なれども、現今の西伯利の狀態にては、露西亞一個を以てしては、到底之を完全に運轉し行くことの困難なるは、看取するに難からず。而して其鐵道にしても、幾多改善を要すべき處もあり、又鐵道管理に就ても、輸送關係に於ても、技術方面に於ても、守備の方面に於ても、單獨に露西亞人を以てしては當分不可能事と云ふ外なし。西伯利は我國とは一葦帶水の地にて密接の關係を有し、不幸西伯利の秩序壞亂の結果は我國は之が爲めに受くる損害、打擊は一二にして足らず。故に成るべく西伯利は、日本其中心となり、之を保護するの當然にして、又便宜多きも、今日領土的野心を疑はれ、若くは侵略的武斷政策を執れるを疑はれつゝあるの秋なれば、駐屯部隊も必要程度に減じ、日本は飽く迄も、領土的野心なきを示して、玆に世界强國の一般管理の形式を選ぶこそ當然の道行なり。而して其秩序の恢復すると共に、之を露西亞人に還附して、正眞正銘の日本の王道、正義を彼等に玩味せしむべし。これを措いて、日本出兵宣言の

大趣旨はあるべからず。

かくありたらんには西伯利にある露西亞人も、我政府及我國民の誠意を忖度し、日本武力の西伯利駐屯の意義も氷釋し、萬事につけて了解と同情とを生じ來らん。然し乍ら現在の狀態は、之を裏切つて日本政府の執れる方針が領土的慾求、侵略的野心を藏せりとのみ臆測して、危害を加へ、或は日本武力の線域へ不穩の狀態の絕間なきは歎ずべし。三月二十五日ユフカ附近に於ける戰鬪の形勢に檢せよ、又何が故に戰端を開きしか裏面の消息を讀め、無名の軍に陛下の赤子を喪ふことを愼め。知らず講和使節は此問題をいかに取扱ふべきか。

四　人種撤廢と蘭領印度

茲に百尺竿頭一歩を進めて大英斷を下さゞる可からざるは、蘭領印度及英領印度の解放也。英國にせよ、和蘭にせよ、先進國の一なり。今や此等植民地の土民は人類としての特權を悉く白人の爲めに褫奪され、身に自由なく、天與の利源は總て征服者の爲めに蹂躙され、日常の生活は禽獸と遠く選ぶなし。正義と人道の一手販賣と目せらるゝヴェルサイユの最高審判を仰ぎて無辜の民草を救濟すべし。先づ帝國は正義の爲め、人道の爲めよりして、赤裸々となりて、英米等正義の假面を剝ぐの勇氣なかるべからず。これ實に人類の福祉の爲めなり、人道は炳乎として日星の如し、我が講和使節は須くこの憐むべき民族が東洋に介在するを忘るべからず。

豈に獨り、蘭領印度、英領印度乃至は佛領印度の領民に止まらんや、國際聯盟が最高權威を保維し、

英米の言ふ處一も二もなく强要され、人種撤廢案も一顧されざる今日にあつては、光輝ある我帝國は、一等國として一等席に坐しながら、實質上の待遇は二等國以下なるを奈何せん。日本委員の無能、無經綸は玆に於て極まれりと謂ふべし。斯の如きは微力なる小弱國民を好餌とする强國の强要にあらずして何ぞや、ウヰルソン氏の希望は世界の平和にあり、人道の擁護にあり。戰爭の防止にあり、その所思や遠大にして、期待も凡ならざるを示せども、尙ほ人種問題の解決に全力を用ゐざるは、果して賢明にして萬全の策なりや、眞率にして堂々たるの道程と稱し得べきか、名を正義と人道とにかりて中弱國以下を脅威するの方途にあらざるなきか。帝國委員が片言隻句も之に及ばざるは何の故ぞ。此問題に就て、長く、日米間に交涉され、解決未能の裡にありしも、今回或種の諒解の下に、殆んど解決さるべき形勢を見たるも、反つて英國の爲めに、裏切られしとの說は果して眞乎。帝國と英國とは永く日英攻守同盟の下に、相協力し、相扶援し來りたれば諒解も相等にありし筈なり、かくの如きは國際政治道德の上より見、若くは一層高遠なる人道の上より論じて、堂々皷を鳴らして英國に訊す處なかるべからず。

五　國際勞働局と我富豪

更に緊要なるは國際勞働保護問題なり。國際聯盟第二十條に於て「締盟各國は、自國、及通商産業上の關係を延長する總ての男女子供に公平にして、人道に叶へる勞働狀態を獲得し、之を維持するに努力すべし。之が爲め聯盟組織の一部分として、常設勞働局設置に同意すとの一項を存す。此問題に就ては我國の資本家及勞働者は、未だ深く注意を拂はざるのみならず、政府も甚大なる注意を缺ぐの觀あるは

甚だ遺憾のことなり。然し乍ら、此問題はマーシャル、カロリン群島及青島の處分其ものより重大なる意義を齎らすことを自覺せざるべからず。今回戰爭の經驗と共に、英國は多數の榮譽ある歸休兵を迎ゆることゝなり。之が爲には年金を與ふる必要も生じ、又失職者救濟の如き策も講ぜらるゝことならん。之に要する設備は英國政治家の最も苦心せる處にして、之と共に勞働者の時間制限も一層困難となり、勞銀の暴騰も又一問題たるに至らん。若し玆に國際勞働局なるもの成立するに至れば、勞働賃金及勞働時間も世界的に共通することゝなるべく、然も其場合最も困難を生ずるは、日本の資本家ならん歟。今次の議會に於て政府者の言明を見れば、勞働組合の設置は自由なり、その成立も自然に放任して何等の干渉もなさずと。

この言明の如きは國際勞働局なるもの、果して何れ丈けの働きをし、若くは、其設置の爲めに、日本の資本家及勞働者が、何れ丈け影響を受くるかと言ふことを究明せざる結果にはあらざるか。勞働局の設置に依る間接の影響として、日本資本家は勞働者に引ずられて困却するのみならず、勞銀の世界的共通、及勞働時間の世界的共通より延いて、日本の社會政策に非常なる革命を起さしむるは、瞭乎として火を視るが如し。若し政府の考案にして玆に思ひ至らば、ヴエルサイユ會議の國際聯盟第二十條の討議に於て强國との諒解を得置くことは日本の爲めに緊要のことに屬す。三月二日の各新聞に散見する處によれば、勞働時間外に完成せし品、及老人、小兒、婦女子の製品にかゝるものは、悉く輸入禁止たるべきことを議せる國あり。此の案にして現實さるゝに至らば、益々我社會組織に變動を及ぼすことあらん。帝國は農本國に屬す、農業上の收穫は二年若しくは五年を以て、其產額に三割乃至四割の增收を希

望するは絶對不能なり、如何に科學の發達したればとて、五年の間に五割乃至四割の增額を見ることは全然望むべからざるなり。而して此の農本國に、世界共通の急激なる時間制度、及勞銀共通の如き問題の殺倒したらんとき、如何にして我國は之に對應策を講ずべきか、兎に角、日本の資本家は非常なる危機が此處二、三年の內に潮の堤を決するが如く押寄せ來ることを豫知する必要あると共に、之に對して最も勞働者に同情ある準備を怠るべからず。

英吉利、及佛蘭西にては今次戰爭にて負傷せる名譽ある人々を勞働者として迎へざるべからず、而も今次の戰爭による、外債及內債に對する利息のみを以てしても、英國は年々四十億を突破し、其利子のみにて一國の經常豫算を超過す、若し內外債を償還すとせば、現在の三倍以上の負擔を要す。加ふるに一面には三倍以上の稅金を徵收し、一面には、多數の失業者を勞働者として迎ふる英國及佛蘭西は共に非常に困難なる立場に遭遇すること勿論なりと雖も、我國の困難は更に此等に數倍する難關の伴ふを覺悟せざる可らず。此點より見るも、勞働組合の設立に對して、政府が如何に鋭意努力せざるべからざる要あるかを略々推知し得べし。さるを、議會にての問答に見れば、殆んど雲を掴むが如く、何等具體的に之を解釋する、一の材料だに發見し得ざりしは、來るべき困難なる場合に處して、既に勞働問題の解決不能てふ事を示せるにはあらざるか。

六　經濟障壁撤去の主張

其言の美にして、何ぞ其果實の之に伴はざるよ。門戶開放、或は正義、或は人道の爲め、或は世界恒

久の平和の爲に、軍備の制限を叫び、一方には仲裁裁判制度を起して、戰爭の防止に熱中すれど、之れと全然矛盾せる結果が、今回の講和會議より生れ出でたり。其は經濟障壁の撤去に非ずして經濟的障壁の新らしく構へられしことこれ也。戰時中にても、米國は鐵の輸出を禁止し、英國亦護謨其他の輸出を禁止するに至りたり。何れも原料國として、第一位に居る國柄だけに、帝國以下の中小國は、全然經濟的封鎖を行はれし觀ありき。我國の如き原料に乏しき國に取りては非常なる苦痛なると共に物價の騰貴市場の動搖、人心の不安は一時極度に達せりき。これと同一筆法にて獨逸國も物資の封鎖と共に人心の動搖、食料品の缺乏、士氣の沈滯となり、さては一國の運命も旦夕に迫れる狀態となりき。之に反し、米國は何時にても、自給自足の大策を樹て得べく、加ふるに南米といふ巨大なる寶庫を提げて起つが故に、持久戰に出でらるとも些少の困憊を來すことなく、泰然自若として大國としての權威を保ち得べし。英國亦然り、濠洲、南阿、印度の如き偉大なる寶庫を從へつゝあるが故に、孰れも自給自足の方策は立處に成るの確信を有す。然れども我國は、米國或は支那よりして、原料を仰がざるべからざる立場にあるを以て、一旦事あらば甚だ危險なる境遇に陷らざるべからず。今翻つて獨逸の形勢を見るに、獨逸は始めは戰捷に依つて得たる償金を以て、戰後の財政を整理せんとせしも、こは南柯一睡の夢に歸し、隋眠豐かなりし、獨逸保守黨及軍閥は開けて悔しき玉手箱の嘆ありき。又彼等軍閥の第二策は露西亞と羅馬尼に戰費の一部を負擔せしめ、而して軍事公債の一部を償却し、獨逸の波蘭を援けし報酬として、獨逸の軍事公債中、百億馬克を負擔せしむべく、年々之が利子及元金の内二億五千萬馬克宛を償却せしむると共に、波蘭の北西地方に於て石炭の採掘權を獲得せんと計畫せり。併し乍ら此の第二案も脆

くも破れたり。第三策は蕩計玆に盡きたる結果として獨逸領土に生存する獨逸人の財産より一定額の財産を强請献納せしむる策に出でたるが、彼等は此の第三案を以て財政を整理するといふ他には何等の策もなかりき。しかし獨逸には卓越せる財政家の存在し、その財政家の智嚢より絞られし一案は成りぬ。そは獨逸國内の有利有望なる事業を官業として其利益より公債を償還すべしと云ふにあり。原料國たらざる獨逸はかくして、恢復を計らんとす、若し帝國をして假りにこの地位に立たしむれば奈何。來るべき講和の結果、獨逸は其殖民地を悉く沒收さるべき運命に立至り居れるが、如何なる成竹を有して獨逸は復興を企劃するやこれも見ものなり。されど斯は人事にはあらず、我國と獨逸と比較したらんには、獨逸は未だ〳〵原料國としては、我國の上位にあるは喋々を要するまでもなし。一面、今回の國際聯盟に於ては、武力制限を實行するが故に、其結果として、軍事費は幾分の餘裕を見ることあらんも、少くとも、我帝國は獨立國として立つ以上、殊に四周環海の國ゆゑ、武備を今日以下に制限し減殺することは絕對に不可能事たり、かく觀れば武力制限に依りて、得る所の軍費なるものは何等我國を利益するに至らず、我國は國際聯盟二十六ヶ條の上より見て、直接にも、間接にも、利益の認むべきものゝ一として是れ有るを見ず。抑つて經濟上の障壁を見るが爲めに、非常なる打擊を蒙るのみなり、國際聯盟に就ては、始め英國は佛蘭西と提携して米國に當れり、佛國の英國と提携せしは大なる因由の存ずることなり。米國は參戰以後戰爭は非常に長久に亘るべきを豫想し、その方針の下に、總ての食糧品、其他を貯藏せるも、戰局意外に早く段落せしを以て米人の倉廩には貯藏品山の如く積まれあり、其貯藏せる食糧品を外に向つて、輸出するは現在米國の最大の急務なるがゆゑ、ウキルソン及米國人は獨逸に對しても、

苛酷なる條件を附するを欲せず。寛大なる處置を以て、之に當れり。米國は實に獨逸に對して、食糧品を賣却せんとの野心の下に、寛大の處置と交換條件に附せんとはせるなりき。佛國は之を聞き、かくするに於ては獨逸は再び擡頭して、佛蘭西の國境を脅かすべきを懸念し、クレマンソー及佛國民は米國の此の態度に飽迄も妨害を加へたり。之に於てウキルソンの主張も幾何か佛國と妥協するの止むを得ざるに立至れり。併し乍ら、米國の方策としては、一日も速に講和を促進し、貯藏品を獨逸に輸送するの希望なるは改めて說くまでもなし。

斯の如く外交には、正義人道を賣物に爲し居ると雖も、裏に廻れば斯の如き事情も伏在せることゝて我國の講和會議に臨むものは、常に此點に多大の注意を拂はざるべからず。今回國際聯盟完成の曉に英米の强國が原料を中弱國、及小弱國に輸出するを防止せば、世界は却つて寒心すべき經濟上の大波瀾を惹起するに至らん。而して、其苦痛を最も多く享くるは我日本國なるを知らざる可らず。英米兩國の默して、一言も是に及ばざるは、老猾の遣方なるも、帝國委員がこの重大事に想到せざるは殘念なり。又原料國としての印度支那あることも忘るまじき事なり。

七　帝國の使命と西園寺侯

前述の如く、帝國は今や極めて重大なる時機に際會せり、併し乍ら、原首相の如きは、講和使節出發の前には、英佛に駐在する大使をして、之に充當せしめる位の考案を有し、會議其物にも、一つの希望をも有し居らざりしと聞く。然るに豫期せざりし國際聯盟が突として出現せり、而して、國際聯盟の成

立は一見困難の如きも、今や、米國大統領と米國の上院との、對內的解決に依りて決せんとしつゝあり。英國は自國の提案同樣のものなるにより、一議に及ばずして賛成するの當然にして、佛國と雖も、伊國と雖も幾何かの修正の下に之れに賛成し成立するに至らん。ウヰルソンの反對黨なるタフト亦今は之を默認せる形跡あり。然らば卽ち國際勞働問題の影響、經濟的封鎖、支那、西伯利の排外的施設撤廢、及び人種差別撤廢等の問題は、我帝國使節に依りて解決を主動的に提供さるべきものたらん。今回の國際聯盟乃至講和會議の問題は、延いて帝國國運の降替に係はる大問題なるに、政府國民共に晏々如たるは歎ずべし。今になりて原首相の不明、日本國民の不明を詮議するは蓋し野暮なり、又、西園寺侯の悠々として地中海の朗月に嘯き居る間に好機を逸したるも何等言はぬが花ならん。併し乍ら、今後我講和使節の奮闘努力如何に依りて、日本は落伍するか、若しくは大勢に順應して行くか、天下の岐れ目なれば飽迄も、我國民も努力し、又、西園寺侯以下の使節も、日本の立場を慮り、大局の上より我日本を誤まらしめざるやう、細心の注意を拂はざるべからず。日本は日本國內に、講和に關する新らしき、實質のある委員を選び、後れ走せながら日本の講和態度を愼思再議し、及び日本帝國の飽迄も、把持すべき問題を協議して我講和使節に飛電し、又、關係諸子は此際新たに我帝國百年の根本策を確立して、內外相應じて帝國を死地に陷落せしめざるを念とすべき也。一面には外務省の役人を現在より二倍乃至三倍にも增員すべき也。唯だ、手を拱いて巴里使節の大勢順應を呆れ果つるのみが能事にはあらざるべし。講和會議に於ては、幸ひにして、我國は五大强國の班に入れるも、其實質に於て、五大國と對抗して行く丈けの確乎たる案件を持せりや、抱負を持せりや、今回の講和に於ける帝國の地位は、決して、我國民

の一部が思惟せる如く、爾く輕視すべきにあらず。帝國政府及帝國國民の覺悟の如何に依りては、我國は或は英國と提携し、或は米國と提携して、人道の爲め、世界人類の爲め、帝國の爲めの大業を成し得べきの秋なり。而して之が解決の根柢には正義、人道を基礎とせざるべからざること勿論にして、侵略的、軍國的なる思想を有せば日本は世界の外交界より又思想界より孤立するを思はざる可らず。此の重要の位置にある、使節がヴエルサイユの會議にて、支那の使節以下の小輩と喧嘩する陋態は千古の物笑ひとなり、延ては、原内閣の責任、日本國民の面目に關する大問題なり。西園寺侯も既に巴里に到着せり、是れより、大處に着眼して、正義を以て一歩も恐れず、飽く迄、我日本の國際的地位を高め、意氣地なき大勢順應論の古招牌を脱して、清鮮なる正義人道の大旆の下に帝國の所信を披瀝し、以て日本の新らしき使命を(非侵略的、非武斷的)絶叫し、列國に先んじて今回の講和條件、即ち勞働問題、支那問題解決の任に當らざるべからず。因循姑息、會議に列しても、自己の主張をすら述ぶること能はず、只英米の後塵を拜して不平の聲のみを高むるに於ては、日本は益々誤解され、痛からぬ腹を探らるゝことなしとせず、原首相の講和委員選定の方針眞面目を缺き、其人を得ざりしことは、改めて内閣の責任として論議せんも、今は既に講和大使萬里の外にあり、須く愚痴を封じて帝國の使命が果さるゝを希ふて筆を擱く。(大正八年三月五日記)

勞働省を新設すべし

豫期せられざりし、國際勞働問題は突如として、ベルサイユに其姿を現はし來たり、その波動の迨ぶ處、勞働問題と社會組織に一大變革を見ずんば止まざらんとす。帝國は對外的影響より來るものと、對內的政策の變革の意味より見るとの二樣の形式を以て是が解決を進めざるべからず。特に我國に困難なるは勞働者の社會的地位が急變して、一躍、再躍する當然の歸趨として、社會の根本的基礎に大斧鉞を加ふるの必要あること也。然らば、之が適應策を講究するは、刻下の急務に屬す。帝國の現在の地位と現勢を一顧すれば、未だ富豪、貴族の間にありては、封建の迷夢全く醒めざるものあり、資本家は勞働者を奴隷視し、舊時の主從關係に慣れて、雇傭者と資本家とは別人種の感を以て居るもの尠しとせず。而も今次戰亂の勃發と共に、その傾向頓に一變し、勞働者の地位は漸くにして認められたり。勞働者の提議は幾分容れられたり。戰局の一段落、講和の提議と共に勞働者、資本家は漸く對等の域に足並みを揃えたるが、我國にては資本家、貴族よりは勞働者の思想進步せるがため、勞働問題の如きは、勞働者に引ずられ行くの感なき能はず。單に資本家、貴族が勞働者に引ずられ行くのみならず、政府も、有識者も牛に引かるゝの觀あるは一奇ならずや。随つて政府の施設せんとする勞働機關が勞働者の滿足を得、又、世界的勞働問題と順應し行くやは疑問なり。朝は輝き、夕は曇り、氣象萬千測られざるは、天候のみにあらで、近時の社會的現象を以て殊に然りとす。されば之が適應策として、勞働保險制を完成するも可、勞働組合の成立もとより必要なるべく、勞働黨の組織又自然の數也。對勞働者關係の多端な

る枚擧に遑なく、從つて勞働者と政府の地位は政務中最も重要なる部分を形成すべく看取さる。若し其新施設にして緩急機宜を失せば、國家の不祥事はその實際より發せずとも限られず。玆に勞働省の新設を絶叫する所以也。

近時の我國の思潮に照せば、資本家と勞働者の關係は同情と理解のみを以て解決さるべくもあらず。且つ此語は言ひ易くして行ふの難く、到底具體的法案の成立に俟たずんば、內外の趨勢に適合するは至難事たらん。これ政府者と見を異にする所なり。又自然に放任して徐ろに慣例、典故に見んとの說にも左袒し難し。飛火は既に海の彼方、巴里の空に擧れり。巴里會議の結末を見るまでもなく、本問題の解決は急がざるべからず。その解決を容易ならしめ、渾然たらしむるを得ば、世界改造後の我帝國も一等國として英、米國等と角逐し得るの時也。勞働諸問題の解決は焦眉の急を要す。勞働省の設置は實に之が前驅をなすもの也。

帝國大學と國際聯盟

一び蹶けば强國の班を絶つ、まして今次の國際聯盟は各國の主權を侵害するものとの解釋も出で、憲法の運用にも或る制限を加へらるべしとの說を生むまでの大問題也。その形式より見るも、實質より見るも、空前の大仕掛の芝居なることは勿論なり。從つて帝國の地位、國民の休戚に迨ぼす影響の甚大なるは想像も及ばず。此の秋、我が衆議院に於て此事につき何等傾聽に値すべき討議なく、且つ聯盟其者

の根本的に議せられたるなきは遺憾も太甚し。かくの如く貧弱なる議員を有し、低能なる立法者を有するは、我國民の災也。かくの如き經綸なき政府者を有するは我國民の不名譽也。政府者、議員の頭腦空虚なるは、世、既に定評あれば、追及するを避けんも、學府の權威として、智識の寶庫たるべき、帝國大學の教授は、此の千載一遇の時に當りて、春眠未だ醒めざる乎。其の蘊蓄を傾けて、赤誠を國民に披瀝し、智嚢を餞けて、帝國講和使の蒙を啓くを忘れたりや。

今次の講和會議は帝國側の主張も、列强の主張も斷じて秘密的性質を帶ぶるものにあらず、人道の上より堂々と公開さるべき性質を含む。單に講和會議と言はず、平和會議として然り。經濟學を專攻する博士も、哲學を擔當せる先達も、たゞしは政治學を指導する大家も、自己の見たる見地より、我帝國現在の地位、百年の大策より稽へて、人道の爲め、國家の爲め是なりと信ずる方途に邁進勇往するの時にあらずや。徒に左顧右眄せば、長蛇を逸するの憾は覿面ならん。進むは一路のみ、直前（シンプ・ラー・ストレート）のみ。敢えて英米の顰に模するに足らざれど、此等碩學が一團となりて、在野、在朝の有力家、實際家と團結して、智識を交換し、講和使に電照誨告するは策の得たるものたるを信ず。帝國の爲め實に重要なる一緊急事たり。

銀行事業の統一策

足一び滿鮮を視察せるもの、若くは內地の各府縣を視察したるものゝ、均しく感ずるは金融機關が、

各勢家の城砦となりて、形の異りたる封建小諸侯の觀をなせることとなり。金融機關は公的性質を帶ぶるもの、斷じて私的勢威の擴大に供用せらるべきものにあらず。殊に近時勞働者の地位の向上し、資本家と同等の地歩を占めつゝ、社會組織の變改を見んとするの機なれば、此際私的欲望、私的勢力に利用され易き、銀行業者は細心の注意を以て、最近の新思潮に適從すべき也。さらでだに、民衆呪詛の府となり易き、金權者が一私人の榮耀顯榮のため、一政派の野心の犧牲になるが如きは戒慮を要し、その使途の一般的に、公共的に運用さるゝを念とすべき也。

講和條約締結後の金融界は一波の動く處、直ちに世界的變動を見、世界的交渉を保つは理の當然なるが、かくては群小割據の制は自然と倒潰の秋に遭逢すべし。大正三年末の英國は銀行數に於て六十二、資本金に於て二十九億萬圓、而も現在に於ては三十七八の銀行に減少せられ、資金の合併は急速度を以て斷行されつゝあり。我國にては銀行數二千百六十二、資金は漸く九億五千萬圓に過ぎず。世界的飛躍を試みざるべからざる今日、豈に心細き次第ならずや。之を獨逸に見る、大正元年末に行數二百一、資金二十億萬圓、佛蘭西は普通銀行のみの二十八にて資金八億を出で、尚ほ他に行數六百二十四を有す。近時列强の金融政策を看來れば、皆銀行を合併整理し、資金を豐富にして、銀行勢域を相互に劃定し、對外投資を容易ならしむる傾向あり。加之、英、米、獨、佛の諸强國は東洋に各々一銀行、若くは一支店を有するのみにて、事業の投資にも、節制あり、統一ある行動をなす。帝國の銀行業者たるものも、思を玆に潛めて、私人的小城砦を棄て、村の殿様的觀念を去りて、世界の思潮に後れを取らずして、國家の大處に就くの覺悟あるべき也。これ單に銀行業のみにあらず。

(以上三月六日稿)



經濟生活改造の第一步

——(虛禮と虛儀に束縛さるゝ國民生活)——

法學博士　河津　暹

一

歐洲大戰爭は有ゆる方面に亘つて思想上の大動搖を惹起した、思想上の大動搖が起るや、從來正しきものとして何人も疑はなかつた制度も、思想も、習慣も悉く懷疑の眼を以て批判せらるゝに至つた、こゝに於て未だ曾て見たことのない程度に於て破壞が起らざるを得ない、破壞は一面から見れば創設であるから、若しこの破壞作用の爲に不合理な制度、習慣等がこの世の中から除き去られたなら、社會の面目はこゝに一新して生氣潑溂なものになるであらう、予輩はこの意味に於て社會の各方面に起つた、新運動を歡迎するものである。

予輩は單に新しきが故に之を是とし古きが故に非とするものではないが、古き歷史と因襲とに由つて社會に牢乎として拔くべからざる勢力を持續し來つた文物制度の如きはこの破壞作用に由るにあらざれば之を改むることが出來るものでないから、この思想上の大動搖が起つたのを機

會として一切の制度、思想、習慣等を嚴正に解剖し批判し、維持すべきものは維持し、革新すべきものは革新すべきものであると信ずる。我國の文物制度の中で批判すべきもの少くないが、經濟生活の如き最も嚴正なる批判を値するものであると信ずる。

我國民の經濟生活ほど不合理で不經濟のものは世界何れの國を求めてもあるまい。其の不合理であることは識者の中には夙に氣が付いてゐることであるし、從て數々種々の形式、體樣に於て革新改造を試みたものがあるが、其の効果を擧ぐることが出來ずに畢つた、恰も颶風が猛然として砂煙を擧げたものが數時間の後には何等の痕跡を止めぬに至ると一般である、其の効果を擧ぐることが出來ないのは結局我國民の消費狀態を根柢より改むることが困難であるからである、消費狀態は兎角因襲舊慣の惰力に支配され易いものであるからである。若し我國民の經濟生活にして不合理、不經濟のものであるならば思想上の動揺が起つたを機會として嚴正に批判して革新をなすべきものである。

昨年夏米價暴騰を機會として米騷動が起つたことは改めて論ずるまでもないが、智識階級を中心として我國民の經濟生活を革新すべき目的を以て種々の運動が起つた、此等の運動は我國民の消費經濟を一變せんとするものではあるが、經濟生活の不合理を指摘して之を矯正しようとするのではないので唯、生活費の節減を目的とするものか、若くは米穀の不足を補充するを當面の目的とするものが多い。予輩はこれ等の運動が國民をして生活に對する理解を促す上に少からぬ影響があることを信ずるものであるが、我等の生活の費用を節減する點からすれば米穀の消費を節減改變するよりは、經濟生活に伴ふ不合理を少しく改變する方が實行し易くして効果が多いのである。例せば一石二十五圓の白米が五十圓となつた所で一人一年の米穀の消費が一石二斗とすれば、一年三十圓丈の生活費用の增加に過ぎぬ、價が騰貴すれば他の物品の價格も騰貴する傾向があるから、生活費用の增加はこの程度に止るものではないが、假りに生活費用の增加が六十圓とした

所で、之を救濟することは稍餘裕ある家庭ではさまで困難ではあるまい、例せば、盆暮等の殆んど無意味なる贈物の習慣を廢止するか、廢止しないまでも其範圍程度を抑限するとが出來たならば其れ丈でも大部分は目的を達することが出來よう、こう考へて來れば我等の經濟生活には少からず不合理不經濟があるが故に假りに其の一部分丈でも矯正するとが出來たならば米價の騰貴位で我等の經濟生活は甚しく迫害を受くるものではあるまいと思ふ。予輩は米價の騰貴を自然のまゝに放任し置くべしと論ずるものでもなければ米價の騰貴するのを見て喜ぶものでもない、從て米價騰貴を抑制せんとする各種の施設に對して感謝するものであり、米食革新の運動にも衷心から感謝するものであるが生活の費用を輕減する點からいへば、我等の經濟生活に附隨してゐる不合理不經濟の點を矯正する方が遙に効果があることを注意したに過ぎないのである。この觀察點からするならば、予輩は世の識者が結束して我等の經濟生活に伴ふ不合理不經濟を攻擊し、論難し、以て世人をして經濟生活を改造する方に力を盡すべきものであらうと信ずるのである。予輩はこの種の運動が猛然として起らんことを希望して已まないのである。

二

經濟生活の革新改造といふとは平くいへば我等の經濟生活に伴ふ冗費や不必要なことを除去するとを意味するのである、更に六ヶしくいへば我等國民の經濟力を無益に消耗しないとを意味するのである、生産は終局の目的は消費にあるのであるから、我等の消費狀態が一變して遙に合理的經濟的のものになつたならば、我國の生産狀態も亦こゝに一變して遙に合理的のものになるであらうと信ずるのである、消費經濟の革新改造はこゝに至つて初て經濟力の節約、增進の目的を達することが出來るのである。予輩は自ら經濟生活の革新改造を提唱する資格がないことを能く承知してゐるが、自分等の常識等に照して我國民の經濟生活の不合理不經濟の點を指摘してこの種の運動を促進し若くは

促進するの一資料たらしめようとするのである。

抽象的にいつたならば我國民の經濟生活の不合理不經濟の點は主として次の諸點にありと信ずる。

第一、我國の經濟生活は無益に多くの勞力、人手を用ひるように出來てゐる、出來てゐるといふより多くの勞力(人手)を用ふる慣習になつてゐるのである。我等の家庭の狀態を少しく注意して御覽なさい、食事拭掃除から、寢道具の仕末に至るまで勞力を要するとが少くない、これは賃金が極めて低廉であつた、若くは事實上奴隸經濟が行はれてゐた時代の產物で、國民が生活につき相當の考慮を費さゞりしが爲に今日まで傳はつたものである、我等の生活が多くの人手を必要とする上に多少餘裕あり身分ある者は自ら勞働をなすとを避けて家族若くは婢僕をして之をなさしめてゐる、俗に頤使するとか、横の物を竪にもせぬとかいふはこの有樣を形容して餘がある。賃金が低廉である間は、言葉を換えていへば人間が廉い間は尙この生活狀態を繼續して行くことは出來るかも知れぬが下女下男の給料が高くなつて行つた曉には普通の家庭ではこの生活狀態を繼續することが出來難いのは明白である。今日既に下女等の供給が大に減じたことから見ても早晚、我等の濟經生活は勞力の不足の爲に改造しなければならぬこととなるのであらう。我々は今日合理的經濟的生活方法を研究する必要に迫られてゐる。或實業家が洋行せられて歸朝談の中に、自分は米國に渡つて文明は捻るに在るとを感じた、其譯は米國の生活は殆んと人手を用ふるとがなく、機械の作用で栓子を捻れば熱い湯も冷い水も何もかも之を得るとが出來て、生活が如何にも簡單に出來てゐるといふことを感じたといはれたとがあつたが比喩が如何にも巧妙で、米國邊の生活狀態を說明して餘がある、之は賃金が頗る高いから出來る限り勞力を省くが爲に機械力を應用しなければならぬ必要から生じたとではあるが我國の經濟生活と比較すれば實に非常の懸隔であると信ずる。米國等の例を引かずとも支那あたりでも自ら湯を沸す勞を省くが爲に湯を賣買するとに比較しても我國の消費經濟を

根柢から一變せずとも勞力を省約する方法を案出するとが出來るものと信ずる。之は家庭に於ける經濟生活が勞力を要するとが比較的多きとを例示したに過ぎないが其以外にも我等の經濟生活にては自ら必要とする物品を購買するが爲に戶外に出づるとを避けて出入の商人に注文して之を持ち來らしめてゐる、之は我家屋の構造も關係があるには相違ないが、家庭內の勞働が比較的に忙しいことも關係あるとであると信ずる、其結果之に必要なる勞力が甚だ多くあるといへる。結局は我等の購ふ物品の價を高くすることになる譯である、御用聞の制度は獨り無益な勞力を要する許りではない、物品の選擇も、價格の判斷も事實上不可能ならしめる結果となり我等の生活費を高くすることと決して尠少ではあるまい、予輩は出入商人に無暗に注文をして物品を購求する習慣を廢して戶外に出でゝ必要品を購ひ求むる習慣を起すことが生活の費用を輕減する上に於て必要なことであると主張したい、昨年米騷動のあつた後は諸方で公設市場設置の論を聞いて竊に大に喜んでゐたが、多少費用を要するのと、小賣商人等が頻りに反對運動を起したに由りて、有るかなきかの廉賣所が少し許り出來たのみで公設市場の設立は葬り去られたようである、公設市場の設置が我國民の生活費を節減するのは結局生產者と消費者との間に介在してゐる機關卽ち勞力を省くが爲である、其れを米騷動に驚かされて發作的にこれ等の市場を設置しようとしても、少時にして之を忘却するに至つては實に痛嘆せざるを得ない。要するに我國の經濟生活には無益に多くの勞力(人手)を用ひてゐるのであるから、之を節約する工夫をなすことが最も必要である、其れには我等の經濟生活を改造しなければならぬことになる。

第二、我國の經濟生活には基準とすべきものがない

經濟生活に基準とすべきものがないとは例へば婚禮の披露をするには如何なる範圍にしたならば普通の中流若くは上流の家庭で適當であるか、又は反對に如何なる程度の御祝物をしたならば禮を失せざることになるか、我等の生活に附隨して起つて來る種々の出來事に

典據とすべき標準が一定してゐぬといふことである。古昔は社會階級の區別が嚴として明であつたから自ら生活の基準が立つてゐた、其基準が我々から見れば正しくあるか否やは別問題として兎に角其基準があつたから生活する上に於て之に據りさへすれば分限を守ることが出來たり、又無禮をする危險もなかつたのである、然るに今日にては社會階級の區別が殆んど破れて仕舞つたのである、其に加へて外國等の習慣や迷信等も輸入したのであるから、全く生活の基準は消滅して仕舞つた、其結果財力のあるものは如何なる豪奢のことでも出來るようになつた、其れが爲に益々混亂を惹き起すようになつて來た、事實上財力のあるものが派手のことをするのは差支ないとしても、財力のしかくないものまでが、苦しがつて派手にしたがる傾向がある。口には質素にするとはいつてゐるが其の實其の財力等が許す範圍程度を超えてゐることが多いのである。一事が萬事で生活に基準がないが爲に經濟生活の費用が如何程に高くなつてゐるか計算して見れば驚くべきものがあると信ずる。貝原益軒の十訓などを見ると流石に一世の鴻儒丈あつて親切に生活の基準となるものを按出なり教えたりしてゐる、普通のものは之に從つてやりさへすれば宜しいのである、これ等古昔の生活の基準を今日に復活することは出來るものではないが我等は現代に適應する生活の基準を研究制定することが極めて必要なことであると信ずる、或皮肉家が我國の儀式の中で基準となるべきことは葬列を廢することのみであるといつたことがあるが、其は皮肉にもせよ我國の生活に基準となるものがないことを示してゐるものである。我國では日本と西洋の二重生活をしなければならぬといふものがあるが、獨り二重生活のみではない、如何程無益のことをしてゐるか判斷に苦しむのである。これは多少研究したならば生活の基準となるものを作製することは絶對に不可能ではあるまい。

生活の基準を定むるに當つて注意しなければならぬことは奢侈生活と普通生活とを明に區別して考へることである。生活の基準といふことは普通の生活に關聯

してゐることであつて、其の基準に從つて行けば合理的生活が行へるといふことである、富豪等が其の基準などに頓着なく奢侈な生活をやつた所で、其を自身は社會上から見て決して稱すべきことではないが普通の生活は之に由りて破壊せらるゝものではない、予輩の憂ふる所は普通の經濟生活が生活の基準が定まらぬ爲に經濟上面白からぬ結果を生ずることである、故に其の基準を定むることを要求するのである。

第三、我國の經濟生活には虚禮虚儀が甚だ多いといふことである、予輩がこゝに多くの事例を列擧して説明するまでもなく我經濟生活には、精神も誠意もない儀式が少くない、これ等の虚禮虚儀を行つてゐるものも多くは其の無用のものであることを知り抜いてゐるが、強いて理由をつけて之は交際の爲であるとか、若くは之をするのは昔の恩を忘れぬ爲とかいつてゐる、其れなれば虚禮虚儀ではなく誠心を籠めて之をなすべきではないか、葬式に行つたものが金談等をして嬉々として戯れるが如きは無禮とも何とも比喩すべきものがない、所でこの種の虚禮虚儀がなくなつたなら、時間の節約が如何程出來ることであらう、經濟生活費用が如何程節約せられるとであらう。近い話が少し許の旅行をなすものに對しても送迎をするものが少くはない、外國にでも行くものに對しては其れこそ大騒をするのである、これは或意味に於ては旅行するものゝ名望が高いから致す所であるとはいへようが、其實虚禮虚儀に過ぎないが、其れをも其人に阿ねる爲に外ならないのである、かゝることは昔時の遺俗であつて決して稱すべきことではないのであるから、之を廢止するか、其れとも出來得る限り之を制限することが必要である。我國の慣習の中でこの種の虚禮虚儀が頗る多いので數へれば隨分ある、尤もこの慣習も起つて來た時には決して今日の如き無意味のものでなかつたのであるが、之を行ふものゝ範圍が大に擴大した爲に自然誠意も精神もなくなつて仕舞つて獨り其の經濟生活上の弊害のみが殘つてゐる次第である、故に之を御互になす範圍を大に制限をしたなら、或は虚禮虚儀でなくな

るかも知れぬ、旅行をする夫に對して妻子が之を見送つた所で、之は虚禮とか虚儀とかいふことは出來まい、其れを見送り人の範圍が擴大するから、全く意味を失ふことになるのである、こう考えて來れば、性質上虚禮虚儀と稱すべきものは之を廢止するのは勿論、性質上虚禮虚儀でないものは之を行ふものゝ範圍を大に制限をしたならば、これ又經濟生活を改造することが出來ると信ずる。

第四、我國の經濟生活には公私の區別、さては事務と娛樂との區別が殆んどない。我國の經濟生活を少しく注意して觀察して見たまへ、其の無秩序、無區別のことは殆んど御話にならぬ體である、官廳などでも訪問の如きは殆んど無制限である、其れも公用で已むを得ないとであるならば兎に角、其實公私無差別の有樣である、之を嚴格に區別を立てようとすれば却て官僚式であるとか、尊大であるとかいつて之を攻撃するものが多い、獨り之れのみではない、政治家や實業家等は殆んど事務と娛樂とを區別してゐないものが多く、極めて眞面目でなからねばならぬ事務をば茶屋等に於て行つて却て怪しまぬ、否彼等はこの方が話がよく解つて却て都合よろしいといふてゐる、其のことが單に口實に過ぎざることであると信ずるのであるが其れは大なる誤謬である、經濟生活は之に由つて大なる破壞をしなければならぬことになる、事務と娛樂とは截然として之を區別しなければならぬものである、娛樂として或種の行動をなすは其のことが道德に背かざる限りは深く論ずる限りではないが、之と事務とを混同し、公私を全く區別せざるように至ることは甚だ宜しからざることである、之は是非共明確に區別しなければならぬと信ずる。

以上は抽象的に我國の經濟生活に伴ふ不合理不經濟分子の存在の理由を陳べたことになるのであるから、經濟生活を合理的、經濟的ならしめようとするならば、これ等の分子を除却する工夫をなすより外に道がないと信ずる。試みに予輩の見る所に從つて經濟生活改造の要旨を少しく論じて見よう。讀者はこれ等の趣旨に

從つて改造の具體案を作られたならば我國民の生活に對して利益でもあり、我國民の生活費用を節減することが出來ようと思ふのである。

三

予輩の希望する所を卒直にいへば以上陳べたる四箇の原因の中で最も容易に實行することを得るものを擧げたならば、虚禮虚儀の廢止である、若くは其の制限である、勿論近頃は社會一部のものが生活が樂になつた爲であるか、人情浮薄になつた爲であるかは知らぬが、無意義なる虚禮虚儀が益々盛に行はるゝようである、是れ、我國の發達の上からいつても實に由々しき大事であつて之を抑制しなければならぬことゝ信ずる。虚禮虚儀は多くの場合奢侈的消費が伴ふものであるから、獨り國民の勞力時間を浪費するに止らず、資金等をも徒費するものといはなければならぬ。是れ我々國民の一家の經濟より觀るも大に戒めねばならぬことであり、經濟社會全般より見るも經濟力の消耗といはねばならぬ。我國經濟力の如き歐米先進國に比較して甚だ微弱である上に、これから起さねばならぬ事業も多く、なさねばならぬものも甚だ多くあるのであるから斷々乎として之を抑制しなければならぬ。虚禮虚儀といつても數えて來ると頗る多く、其の目的動機も亦一ではない。正月祝、雛祭、節句其他の古昔よりの儀式等も詮ずれば虚儀であつて、若し強いて其意味を求むれば古風を偲ぶといふ位のものである。是れ等のものも廢することが出來れば最も可なれども、これ等は其數が限りがあるのであるから無意味なる奢侈三昧に陷ることがなければ必しも國民生活上に甚しい害を與ふるものでもあるまいが、例せば知人等の送迎等の爲に御祭騷をしたり、頻りに長夜の宴を張つたりする等は、御祭騷をするものからいつても、又されるものからいつても無意義であるといはなければならぬ、地方などに行くと少しく名望でもあるものが來遊すると歡迎會と稱して長夜の宴を張ることは珍らしくないのみならず、連日連夜これに忙殺せられ、唯已むを得ず席に連

るといふ次第で、歡迎の意味もなければ誠意もない、かくの如きは全く無意味のことで、かくの如き虛禮も速に廢すべきである、近頃富豪等に由つて催される結婚の披露の如き亦然りである、かくの如きは宜しく其の親族故舊の範圍に止めなければならぬのは勿論、其の一夕の宴の爲に數千金を投じ、若くは新婦の爲めに幾襲ねの美服を調ふる如きは奢侈といはんか浪費と稱せんか殆んど許する辭なきに苦まざるを得ぬ。富豪だから、浪費をして宜しいといふ道理はない、富豪なるが故に其の富を社會の利益の爲に用ひねばならぬのである、勞働問題の如きは畢竟これ等富豪等の富を用ふる道を知らぬより起つて來るのである。予輩は近頃或席上で勞働問題を論じて資本家と勞働者は夫婦のようなものである、決して初めから利害相反するものではない、然るにこの種の問題が起るのは恰も夫は其の收入の大部を自分の爲め消費して仕たい三昧のことをしてゐるに拘らず妻は食ふものもなく、着るものもないといふ有樣では妻たるものゝ夫に對して憤らざるを得ないではないか、其も古の如く妻は奴隷の如きものとして諦めてゐた間は問題も起らなかつたが、妻が自覺するようになれば必ずや問題を起さずには置かぬ、其れと同じで勞働者は衣食に窮してゐるに拘らず、富豪が仕たい三昧のことを爲しつゝあるのを見ては不平を抱くに至るのは當然ではあるまいか、予輩は富豪は富を善用する社會的義務あるものであると主張したい。筆が稍岐路に奔つたが、所謂虛禮虛儀の大部分は富有者が行ふものであり、行はしむるものであるから、これ等富有者が進んで虛禮虛儀を廢止し、更に廢止せしめなければならぬと信ずる。予輩はこゝに予の眼に映ずる虛禮虛儀を擧げ來つて之を攻擊しようとするものではない、虛禮虛儀を擧て社會が之を捨てゝ、之をなさざるが當然であり、之をなすのは間違つてゐるといふ風を起すに至らんことを要求するのである、是れ經濟生活を革新改造する第一步である。

　これに附隨していはねばならぬことは我國では兎角他の人まで型に入つた行爲をなさしめたがる風があ

る、換言せば他人の意思行爲の自由を重んぜない風がある、これが或は虚禮虚儀を盛ならしむる一原因をなしてゐるのではあるまいか、各自が好む所に從つて行動し、又行動をさしさへすれば無意味なる虚禮虚儀は生じて來る道理はない、故に虚禮虚儀を廢さうとするには各自は好む所に從つて行動し、他より拘束もせられねば、自分も亦拘束せぬといふ風を起すことが必要ではあるまいか。

虚禮虚儀を廢止し、若くは制限することが出來たなら、次に我國民の經濟生活を改造する上に於て必要なことは、勞力を尊重する風を起したいと思ふのである。而して前にも一寸陳べた通り、我々の家庭生活で、我等は自分の事は成るべく自分でするといふ風を起すのが第一歩である、さうすれば、我等の經濟生活も或程度まで簡單になることが出來ようし、自然他人の勞力を尊重する風も生じて來よう、他人の勞力を尊重する風が起つたならば他人の時間を尊重する風も起つて來よう、我國では種々の事につけて時間を勵行することが出來兼ねる、地方などに行くと、時間の觀念などはないのではあるまいかと思はれる場合に會することが珍らしくない、一時間や一時間半位待たした所で何とも思はぬ、又待たされる方でもさまで苦にも思つてゐぬ、これは勞力を尊重せぬから來るのではあるまいか、所で勞力を尊重し、勞力が高くなつて來ると、我等は我々の經濟生活で勞力を省く工夫をしなければならぬ。近い話が、「ランプ」を用ひてゐた時は其の掃除やら、油注やら相當に勞力を要したのであるが、電燈を用ふるようになつてから其れ等の勞力を省くことが出來た、井戸を用ひた時は水を汲むのに相當の勞力を要したのであるが、水道を用ふるようになつてから其勞力を省くことが出來た、其の理で、我々は工夫をしたならば經濟生活を營むのに今日より遙に勞力を省くことが出來なければならぬ。其れにしても我々の食事の如きは勞力を要すること餘りに多いようである、第一に米飯を炊くことから勞力を要することが多い、一派の學者の唱へてゐる如く二食と改めることも一案では

あるが、何とか勞力を省く工夫がありはしまいか、共同炊事場制の如きも或は一案ではあるが之を配分するのに相當勞力がかゝつては何にも成らぬ。予輩は世の先覺諸氏が米食、主食について代用食物等を用ふること等について熱心に盡力せらるゝに對し滿腔の敬意を表するものではあるが、我等の生活の費用を節減する上からいつても、經濟生活を改造する上からいつても、食事等について勞力を省く工夫を案出せらるゝことが更に必要ではあるまいかと思ふのである。其れに次ては我國の商業組織を適に簡單ならしむる工夫をすることが肝要である、其の目的を達するには差し當り公設市場の設置と、消費組合の利用とをこゝに提唱して置きたいのである。

公設市場は之を設けて經營に困難を見るものはない、臺灣等の公設市場でも立派に經營してゐるのであるから、我內地で之を經營して行けぬといふ道理はない、所で之を利用したならば我々は低廉に生活の必要品を購めることが出來るのみではなく、我々は比較的多いものゝ中から自由に選擇をすることが出來るから必ず經濟生活の一改良をなし遂げることが出來ると信ずる、其れは畢竟生產者と消費者との間の手數を省くことが出來るからである。或は我國でこの種の機關が起つても之を利用するものが少からうといふが、予輩は之に同意することが出來ない、假りに一步を讓つて、之を利用するものが割合に少いとした所が、其の公設市場の相場等が新聞等に由つて世に知れ渡ると小賣商人等は其の相場より餘り高く賣ることが出來なくなる、若し之をなせば、公設市場を利用するものが多くなる理であるから、結局小賣商人を抑制して日用品の價格を低廉ならしむる効があると思ふ。予輩は公設市場について更に多くの注意を致されんことを要望して已まぬものである。公設市場について論じたいことがあるが問題の範圍を逸するから之を他日に讓つて置く。

消費組合の利用も結局は公設市場と同じ効果があるが、消費組合の場合では組合の經營者は上手に日用品

等を仕入れ之を分配する工夫をしなければならぬから公設市場の經營に比較して寧ろ困難であるといふことが出來る。然し、其の經營が旨くいつたならば、我々の經濟生活は之が爲に大なる利益を受くることが出來よう、一派の論者の憂へてゐる如くに我等は公設市場に至る煩勞をなすことなくして比較的廉價に日用品を求めることが出來るからである。消費組合のことは多くの人に由つて紹介せられてゐるから之を省いて置かう。

生活の基準を定むることが予輩の希望の最後のものである。奢侈の生活と普通の生活との區別も凡て之から生ずるのである、例せば、我國では家を建てるにした所が、柱の長さでも障子の大きさでも殆んど定律なるものがないので、其の人の勝手である、從つて普通のものと異つたものを作らしめて自ら誇つてゐるものが多い、其結果、建築の費用は少からず增加するのである、所が外國では建築物等には定律定型があるから、之に從つて置きさへすれば、何等の不都合もなく、而かも費用も易く行くのである、專門家の話に由ると米國の如き賃金の甚だ高い所でも我國よりも低廉に家屋を建てることが出來るといふことである、これは其材料等は定律定型があつて機械力等に由つて低廉に作り得たものを用ふることが出來るからである、これは一例に過ぎないが、凡て生活の基準となるものが大凡そ定まつてゐると、自然之に由るものが多くあるから、之に應ずるものを比較的廉く製造することが出來る道理になる、從て經濟生活を低廉ならしむることが出來る譯である、經濟生活を合理的になす所以である、生活の基準となるべきものを定むるに當つて研究すべきことが多くあるが他日に讓つて置かう。

要するに我等は今日經濟生活に伴ふ不合理不經濟を少しでも除くことが經濟生活を改造する所以であると信じ、其の効果は決して少くあらざるべきを思ひてこゝに此小論文を草したのである。

欲望を出發點として人生問題の解釋

帝國大學教授　木村泰賢

こは、もと予が曾て某會で講演した時の手控を修正したものである。從て所論些か通俗的に渉れる所もあるけれども亦この間に多少の主張もあるので敢て本誌、創刊號の餘白を汚すことにした。内容は哲學か、宗教か、科學か、倫理か?、何れでもないと同時に、その何れにも渉れるものであるといふことを附記して置く、讀者諒之、

一、出發點

人生の眞相はいかなるもので、その最終目的の那邊に存するかといふことは古來よりの大疑問であつた。所謂、思想家は勿論の事、凡ての學者の事業は、直接なり間接なり、この問題の解決に注がれたものと言つても然るべき程の大問題である。併しながら、由來、人生の現象たるや頗る複雑にして而も非常に變態に富んでゐるので、大思想家逹の觀察も往々にして一局部に偏して全體に通じて而も最も適切なる總合的解釋を下しかねるを通例とした。殊更、近代となりて諸科の學問が專門的に發達するに從て、その觀察の出發點も學者によつて種々に分れ、人生現象の全體に渉つて總合的觀察を下すことが彌々困難な事態となつて來たのである。この時に當つて吾人の如き淺學の輩が、たとへ試みにした處で、この問題に觸れて見やうとするが如きは、誠に以て嗚呼の沙汰たるや言ふまでもない。併しながら、この問題はたとへ困難にせよ、何人も少くも一應は考へて見るの義務があらうと思ふから、暫らく表題の如き題目の許に、少し許りの考を述べて見たいと思ふ。

そこで、先づ、何故に表題の如く欲望を以て觀察の出發點としたかといふに、要するに吾人は之を以て人

生現象の最も原始的原動力と見たからである。俗にも人間萬事、欲の世の中とか云へる言葉あるが誠にその通りにて、見來れば人生のあらゆる現象にて直接なり間接なり欲望を基とせぬものがない。信仰現象や理性現象の如きも、その本源に戻せば矢張欲望を豫想する況して一般の人事現象にして欲望を離れて成立したものが一つもないのである。この意味に於てウパニシャッドでは、人は欲よりなるといひ、佛教では、欲愛によりて世界ありといひ、ショーペンハウエルは世界の本源は意思なりと言つたのである。勿論、欲望に宇宙論的意義を與へるとに關しては細心の吟味を要するものがあるけれども、少くも之を人事現象の本源と見る段に於ては些かも異論を挾むの餘地がなからうと思ふ。即、吾人が之を人生問題解釋の出發點とした理由は全くこの意味からであつて、差當り、主意主義などと言つた六ヶ敷い根據よりは寧ろ與へられた最も明確な事實として選んで見たのである。而も、其期する所は必ずしも嚴密なる哲學問題としての論究ではなく、寧ろ常識に何程かの基礎を與へんとする所にあるから、別段、某主義の見地からといふ程のものでないことは豫め斷つて置きたいと思ふ。

二、根本欲

ところで、欲望を基礎として人生問題を考察するとすれば、そのいかなる欲望を根據として立論すべきかといふことは、次で來る問題であらねばならぬ。蓋し吾等の欲望には殆ど數限りもなき程多數ある中、その一々を捉えて觀察してゐては徒らに多岐に走るのみならず、遂に立論の基礎をも失ふの恐があるからである。そこで、これが爲めには、先づ諸欲中に於ける根本的原始的欲望を捕へて以て觀察の出發點とするの必要があるのである。然らばその根本的原始的欲望とは、何んであるかといふに、改めて言ふまでもなく、根本中の根本と謂ひつべきは、先づ食欲と性欲とであらねばならぬ。此二欲は共に本能的にして、食欲は生れてより死ぬるまで持續して諸欲中にても最も根本的なるは

別に說明を要せざるもの、亦、性欲は生れながらにして、直ちに表はれるものではないけれども、その發するに到るや諸欲中にも最も猛烈にして、殆と盲目的にその滿足を求めて止まざることも、今更、說くを要せぬ所である。而も、この二欲は生命保存の條件として、獨り人間のみならず動物にも共通してゐる處を以てすれば、軈て生物一般の基礎的欲望であるといふことが出來るのである。乍併、人生問題を考察する上に於て、この二欲のみを根本欲として見ることは不足である。吾人は尙ほ、其上に第三の根本欲として數へねばならぬ一欲があると考ふるものである。卽ちそは遊戲欲又は自由欲とでも名くべきものにして、他の制限を排して自らの欲するまゝに活動せんとするの欲望である。蓋しこは一見すれば前の二欲に比して、左程、本然的必須的ではないやうであるけれども、已に植物生活にその傾向が表はれ、動物に到りて一層著しくなり、人間となれば、時に死を屠してまでこの欲の充たされんことを要求し、從て後に述ぶるが如くこの要求の基く所、種々の形で人類の生活を支配してゐる所から觀察すれば、是非とも、之を生物一般に通ずる根本欲の一と見ねばならぬからである。卽ち之を逆に云へば、之を豫想せねば、食欲、性欲のみにては到底、理解し得ざる種々の現象が生物一般に、特に人事界に最も著しいのである。

そこで、吾人は、この自由欲を加へて、食欲、性欲、の三欲を以て生物の三根本欲を名けたい。而して亦、吾人は、あらゆる諸欲は凡てこの三根本欲より、直接、又は間接に派生したものと見るものである。勿論、いかにして之を確實に證明し得るかといふ問題となれば、稍々困難を感ずるけれども、要するに學問的常識と、爾かく判ずるを正當と信ずると同時に、後ちに說かんとする生命の三相との對照上、爾かく見ねばならぬ理由に基くのである。從てこの見地からすれば欲望を基礎とするの人生現象は、所詮は、この三欲望を根本基礎とするわけで、複雜なる世相も、その根本原動力に還源すれば、凡てこの三欲望に歸着するものと言

はねばならぬ。即ち宗教も美術も學問も、凡てこの三欲が遠き、而も根本的なる原動力となりて起した現象で、そして、この欲望の意義を全體として充實をせるやうな内外の組織の完備した所を以て、吾等は、進歩した文明といひ、充實した國家とは名くるのである。敢て皮肉を言ふのではないが、文明の最も進歩したと言はるゝ大都會には種々の精神的機關の具備（こは、欲望の裏面的意義の產物なることは後に說く）と共に、必ず立派な料理店、美人の巣窟、諸種の遊戯場等の具備するも、所詮、文明と三欲との必然的關係を露骨に具體的に表徴する現象と言ふべきであらう。

此意味に於て、吾人は昔より今に到るまで絶えざる一類の人生觀、即ち欲望の滿足を以て人生の歸趣であると主觀する快樂主義、自然主義の論據には、極めて味ふべき眞理の一面を寓するものと考へてゐる。蓋し、人生は欲望から成立する限り、その欲望の滿足を目標とするといふことは、疑もなく、その本然の性に契へる生活法であるからである。道德者流の中には、慾望の滿足などゝは、苟も士君子の口にさへ上すべからざるものゝ如く考へてゐる人もあるけれども、斯の如きは到底、共に人生を談ずるの資格を有せざるものである。

乍併、實をいへば、こは一面の觀察である。人生は疑もなく、欲望から成立するけれども、その欲望の意義、内容を單にその表はれた方面のみに限つて觀察しては、到底、其の人生觀は成立するものではない。欲望には表はれた方面以上に更にもつと深い裏面的意義の存するものがあつて、而も寧ろ其方面が人間活動の根柢をなしてゐることを見逃してはならぬ。早い話が三根本欲は人生のあらゆる現象の根源でありといひながら、單に其表面的活動に限るとすれば、それは要するに動物と共通する生活形式に從ひ居るのみでそれだけでは、何處に人間の人間たる特長が表はれてゐるか。而も人間には、動物の有せざる所謂人文現象なるものゝ存する所以は、全く、その欲望の表面的活動以上にその裏面的意義を發揮した結果に外ならぬものと解さね

ばならぬ。たゞ、吾人の主張する所は、たとへ、いかに所謂高尚に見ゆるものでも、その本に戻せば、遂に、三根本欲に歸着するものである、觀察の出發點としては飽くまで之を忘れてはならぬといふことゝ、從てこの根本欲の滿足といふことにも偉大なる一種の哲學的意義の存することを見逃してはならぬといふことである。

然らば、その欲望の裏面的意義とは何んであるかといふに、所詮は生命の本質的要求といふ一事である。そこで、此事を明にするためには、進んで生命の要求に就て調ぶるの必要がある。

三、生命の要求

欲望の裏面―從つて人生現象の本源たる生命の當體はいかなるものであるか?、これ實に古來よりの謎題であつて今尚解決し得ぬ問題である。殊にその起原に關しては古來より幾多の假說が提供せられたけれども、未だ眞に公認の說明が下されないやうである。或は之を宇宙精神の個體化と見る哲學者もあれば、或は單に物質の化合の上に表はるゝ一種の勢用に過ぎぬと見る科學者もあるなどその說が一定してゐないのである。これ實に學界に於ける一大恨事であつて、人文科學の基礎觀念の確立し得ない理由も主としてこゝに起因すと言つても不可なからう。併しながら、差當り、吾人の知らんと求むる處は生命の本體ではなく寧ろその活動の根本樣式、若しくは根本要求である。蓋し人生は畢竟するに生命活動の發現である限り、その活動の根本要求が分ればそれで人生現象の起原も分り、從つてその歸趣をも定め得るからである。然るに生物學者の敎へる所に從へば生命活動の特徵に三通りあるといふことである。第一は生長(Wachstum)、第二は營養(Ernahrnvg)、第三は順應(Anpassrung)である。卽、外界より營養をとり外界の境遇に順應して自ら生長發達するものとの義である。スペンサーが內的關係の外的關係に對する不斷の調節と言つたのも要するにこの意味であらう。吾人も亦之を認容するものである。し

かしこは要するに原型質(プロトプラズム)を基礎としての客觀的靜的觀察であるから、これ丈けでは人生問題の解決の手懸りとしては些か不足である。何故なれば、これ丈では何故にこの特徴を有する生命は次第に發達進化して人類にまで進んで來たかの根本動力を解くことが出來ぬからである。そこで、之を解く爲めには、この三特徴はそのまゝ認むるとして、更にこの靜的特徴を動的要求の形に直ほし、言ひ得べくんば、生命の內部に入つてその原動力を求むるの必要がある。

然らばいかにして、之を求め得るかといふに、この爲めの針路を與ふるものは、實に前の三根本欲の內的意義で、つまり根本欲は何を目標としてゐるかの意味(ベドイツン)を討ねて、以てそれを生命の要求と見るの仕方である。而してその結果として得らるゝものは、卽ち生命に三大要求がありて絕えざる活動進展の原動力となつてゐるといふことである。卽ちそは第一に自發的活動の要求、第二に持續の要求、第三に擴大の要求であつてそれ――自由欲、食欲、性欲に應ずるの裏面的意義である。少しく之を說明すれば――

先づ第一に自發的活動の要求からすれば、こは自由欲（若しく遊戯欲）より推定せらるゝものである。抑々何故に生物一般に、他よりの制限を排し、自ら欲するまゝに活動せんとする本能的欲望があるか。已に植物に地球引力の法則に反して上に延びんとするの現象表はれ、動物となれば步行飛躍してまで欲するがまゝの活動を求め、更に人類となれば「我に自由を與へよ、然らざれば死を與へよ」と絕叫せしむるまでに强い要求となつて表はれて來るのは何故であるか。所詮、こは生命の內部に備はれる本質的要求の痛切なる叫びに外ならぬと見ねば、その起源を到底解くことが出來ぬ現象である。この內部的要求こそ卽ち吾人の所謂、「自發的活動の要求」と喚ぶものであつて、或る意味に於ては、直に生命活動その者であると云つても然るべき程の意義を有するものである。蓋生物と無生物との問の區別は種々あらうけれども、常識的に考へても、自發的活動のあるものは、生物で、これなきものは、

無生物と言ふことが出來るからである。かの進化の現象なるものも、實に、主として、この內事的要求に基いて、其力に推されて、生命自らが自己を、より自發的に進展し行くことに外ならぬもので、自發的能力の多い程、進化の度が高いと言はるゝのも之が爲めである。これ卽ち吾人が前に、この要求の衝動的發現としての自由欲を根本欲と見た理由で、而もそを、亦、遊戲欲とも名けた所以は、遊戲は自發的活動の最高點を示すからであるが、逆に云へばこの自由欲、遊戲欲を根本欲と見ることによつて、初めてこの生命の深義が理解し得らるゝことになるのである。

序でに言つて置くが、この意味に於て小兒の遊戲欲は、他日、獨立自由の人格者たるの順備として、決して無暗に禁壓すべきものではないが、更に現代の流行たる種々の解放運動も、哲學的に云へば、所詮、この生命要求の自覺的運動に外ならぬものであるから、是等の點は敎育家、宗敎家、爲政家などの常に心得て置かねばならぬ所と思ふのである。

第二に自己持續の要求とは、生命が飽くまでその有機的個體的體制を維持し持續せんとするの要求をいふのである。こは食欲、卽ち所謂「自己保存の欲動(ドライブ)」の意味であることは改めて言ふまでもない所である。世の中が一方には世智辛くなり、他方には贅澤になるに從て、食はんが爲めに生きてゐるのであるか、生きんが爲めに食ふのであるか、一寸、戶惑ひすることもないではないけれども、要するに生きんが爲めに喰らふといふことは疑のない事實である。卽ち生命が外界より營養をとり、自らを外界に順應するのも要するにこの要求を充たさんとする所に發するのである。これも、已に植物よりその傾向を示し初め特に人類となれば、一層著しくなり、食はんが爲めの手段のいかに精密に發達したかは改めて說くまでもない所であるが、而もその期する所は、一に生命の持續で、換言すれば生命持續の要求がその手段として食欲を產み出したものであると言ふことが出來るのである。

第三に自己擴大の要求とは、專ら性欲の裏面に潛む

の意義である。とかく性欲は、特に人間にありて、最も錯覺を起し易きものではあるけれども、その結果は、否でも應でも種族保存の則に契ふことになるもので、卽ち自已の分身の增加となる。之、蓋し、生命はたゞに自己の個體的存續を要求する許りではなく更に增大し繁殖して、自己の持續と同時に擴大を要求するの致す所、所謂性欲的本能として發現したものに外ならぬと見ねばならぬ。卽ち前の自己持續の要求を時間的存續の要求とすれば、これは、時間的と同時に空間的擴大の要求とでも名づくべきものであつて、同じく生命の根本的必須的要求たるや言ふまでもない。而も、この要求は、動植物にありては、專ら肉體的實現となるに過ぎぬけれども、人類となると、獨り肉體許りではなく、精神的方面にも及び、名譽、權力、愛、といふが如き、自己を多數の人の中に見出すの要求及び活動となつて表はれて來るのである。家庭の根元のこゝにあるや勿論のこと、國家の成立も主としてこの要求に基くもので從てその家庭、國家を成立せしむる所以の精神的條件も間接にはこの要求の產み出したものであることは後に述べやうと思ふ。

かくして、吾等は三欲望を出發點として、生命に三大要求のあることを確むることが出來た。たとへ、生命その者の起源、本質は分らぬとした所で、苟も生命の存在を認むる限り、その活動の大本が右の三大要求にあることは疑ふべからざる事實とせねばならぬ。從てこの見地からすれば、前に一切は三欲よりなるといへる、立言も、實は、一切は三要求よりなると改むべきが至當で、つまり、三欲望は三要求の手段に外ならぬことになるのである。而してかの進化論に從つて、生物は次第に下等動物より高等動物に進化するといふ事實を認むる限り、その進化の原動力となるものも、言ふまでもなくこの三大要求の力で、生命は自ら、より持續し、より擴大し、より自由にならうとするの要求が斷て絕えざる進化を促してゐるものと解すべきである。然らざれば何を目標として何に因つて進化するかの理由が分らぬことになる。ベルグソンの言葉を藉

りて云へば、こゝに卽ち創造的進化の根據があるのである。

四、生命の進展とその阻礙

所でこゝに疑問となるのは、然らば生命の創造的進化に一定の方針があるか否かといふ問題である。ショーペンハウエルは意志は盲目であるといひ、ベルグソンも創造的進化には一定の目的がないと說いてゐる。然しながら吾人を以て見るにこの解答は當を得てゐないと思ふ。いかにも古風な目的論者のいふが如き、已に與へられた或る目標がないに相違がないけれども、これから創造せんとする目標となれば大體に於て定まつてゐることを認めねばならぬ。何故となれば前述の如く生命の特徵としてその內部に備はる一定の要求ある限り、生命の進展は凡てこの要求の實現と見ねばならぬからである。勿論、生命は何故に、而も何處からその要求を賦與されたかといへば疑問であるけれども、少くも生命の根本的活動樣式として一定の要求のあることを認むる限り、軈てその要求は創造的進化の原動力である許りではなく且つその方針を指示するものと解すべきが至當である。之を喩ふれば生命の方針は恰も放たれた矢の如きものである。たとへ偶然手を辷つて放たれた矢でも、已に一度び放たるれば一定の方向が定まる如く、生命も、たとへ偶然生じたものにせよ、一度び生じた以上は少くもそれ自身としてはその進むべき針路も自ら定まつてゐるものと見ねばならぬ。卽ちそは、前にも述べた所の生命自らが、益々自由となり、益々持續し、益々擴大することとそれ自身で、換言すれば無機界を有機界に、自然界を精神界に雜多を統一に改造して益々生命の範圍を擴ぐることとである。此事は後にまた「無限生命」の說明の處で一層明にしたいと思ふが、とにかく生命の活動に一定の方向を認めないでは進化も創造も說き得ぬといふことは吳れ〴〵も忘れてはならぬ

然るに右の如く說き來るとこゝに亦、一疑問が起つて來る。卽ちそれは若し謂ふが如く生命の進路に一定

の方向があるならば、恰も放たれた矢の進むが如くに、生命は驀直に容易に、順當にその要求を實現し得べき筈なるに然らざるは何故かといふことである。吾人は之に對して次の如くに答へる。右に述べた處は要するに專ら生命の内的傾向より立論したまでゝ未だ此中に、その要求實現の條件までも含めて言つたのではないと。換言すれば生命は一定の要求に推されて一定の方向に躍進するの傾向を以てゐるけれども之を實現する段となると幾多の障礙に逢はねばならぬといふのである。これ實に生命の絶えざる進展の側らにはその凝滯もあれば退化もあり、殊に人間となると限りなき矛盾を生ずるの原因である。然らばその障礙とは何であるか、吾人はこゝに三種を數へることが出來やうと思ふ。第一は自然である。第二は他の生命である。而して第三は特に人類に至りて著しく感ぜらるゝ欲望の表面と裏面の意義との衝突である。

先づ第一より述ぶるに。生命と自然との根本的關係は後ちに讓るとして、暫らく相對立するものとして考ふるに。先きに述べた如く、生命には自然に順應するの作用があると同時に、また自然はその中に生命を抱持する限り生命を撫育するの意味を持てゐるものと見ることが出來る。從て此意味からは自然は生命の恩惠者で生命は自然の從順者と見ても多くの不都合がないやうである。併しながら能く考へて見ると、これは要するに一面の觀察であつて他面からすれば亦兩者は常に絶えざる爭鬪を營みつゝあるものと見ることも出來る。蓋し自然と生命とは、或點に於て共通の法則を持てゐるけれども（こゝは妥協點）其核心に至れば自然には自然自らの法則ありて生命をも之に從はしめんとし、生命には生命自らの要求ありて自然をも之に從はしめんとしてゐるからである。幼稚な例ではあるけれども、一例を擧ぐれば自然は萬有引力の法則で、凡てを地球の中心に引かうと努むるに反し、先きにも述べた如く植物となると―程度の低い生命ながらも―却て上の方に向つて延びんと欲し、殊に人類となると、尚進んで空中までも征伏して、その範圍の中にとり入れ

んとしてゐるではないか。然らばこの爭鬪の結果はいかにといふに、生命は一方には巧みに自然と妥協しながら、他方に於て次第に自然を征伏して幾分かづゝ勝利を占めた結果として、少くも人類の生命にまで進展して來たことは言ふまでもない所であらう。乍併此途中には幾多の敗北者もあり、凝滯者もあり、進化論者の所謂自然淘汰の運命に逢つた生命の數限りもなく多かつたといふことを忘れてはならぬ。否人間も今尙ほ盛に爭鬪しつゝありて、而も屢々敗北の運命に接し、時に迂餘曲折、辛ふじて全滅者たるの不幸を免れてゐる場合が多いのである。これ即ち、生命が一定の方向に躍進すべきの運命に向ひながら、容易にその要求を實現し得ぬ理由の一つである。

第二に他の生命による阻礙とは。抑ゝ生命は本來唯一であつたのが後ちに雜多に個體化したものであるか、將た初より雜多なもので而も永久雜多のまゝで續くべきものかといふことは昔より大議論のあつた問題であるけれども、今はこの根本問題にまで觸れないで、暫らく現象のまゝとして觀察すれば生命の雜多なることは言ふまでもない所である。而して其等生命相互の關係を見るにこの間に互助的關係の存することは動物に種屬現象あり、特に人類となると社會國家といふ大有機體を組織してゐる事實に徵しても疑ふことが出來ぬ。併しながら、また同時に此間に大爭鬪があつて、所謂生存競爭を續けてゐるといふ事は、早い話が、下級の生物は上級者の食料として犧牲に供せらるゝの一事に徵しても之亦疑ふことが出來ぬ事實とせねばならぬ。而もこの現象は人類に至るも尙、やまないで、個人對個人の間に、國家對國家の間に、所謂弱肉强食の事實の行はれてゐることは、今更指摘するまでもない程著明の事實であらう。蓋し吾人を以て見るに、各生命は、その本來の目的上、幷に自然征伏の必要上相互に融通すべきの特質を有しながらも、その自由と擴大と持續との要求が物質を通して實現せらるゝ限り、相互制限の免るべからざるの約束として、かゝる爭鬪的現象が起つたものと思ふ。とにかく生命、對生命の

間に爭闘のあるは事實で、而もこの事實は軈て各生命の本來の要求を容易に實現せしめないで、稍ともすればその進路を阻礙せしむる一原因である。

第三に欲望とその裏面の意義の衝突とは、言はゞ欲望と理智との衝突であつて、人類に至りて初めて明となる障礙である。抑ゝ欲望は生命存續の基礎的條件ではあるけれども、然しながら下等生物にありてはその欲望も單なる衝動として存在するのみで、生命の特徴たる順應作用があるにしても、たゞ苦樂の感じ(?)によつて調節するのみで之を意識して辨別的に活動するといふことが出來ぬ。然るに進んで稍ゝ高等の動物となると欲望に伴ふ所の感情も發達し、之に從つて辨別力も多少備はつて來ることは動物心理學の吾人に敎へる所である。かくして人類となるや欲望の種類も增し、感情生活も非常に複雜となり、殊に理智の作用が著しく發達して來て非常に辨別力が强くなつたのである。然らば是等心理作用は何故にかく發達したかといふに、所謂意識的になるといふことは生命の自發的活動の必然的進化の結果ではあるけれども、若しこれを手段として見れば要するに生命存續の意義を完ふせんがために外ならぬことは、各種の心理作用の意味を考へて見れば容易に分ることである。感情は欲望と直接に關連するもので、苦樂の示唆は大體に於て生命の安危を司り、意志は活動の機關として生命要求の遂行を司り、分別力即ち理智作用は感情や意志にその方向を指示するの役目を司るものであることは、必ずしも實用論者(プラグマチスト)でなくとも、大體に於て認定せねばならぬ所であらう。人類が萬靈を超えて優先者たるの地位をかち得た理由も全くこの心理機關の發達、殊に理智作用の發達に負ふのである。從つてこの見地からすれば生命の原始的衝動たる欲望も、その最も發達した理智も要するに同一目標に向つて活動してゐるものではあるけれども、實際の活動としては、不思議にも兩者の間に屢ゝ衝突することがある。蓋し欲望の表面的要求は要するにそのアペタイトを滿足する所があつて、而も盲目的に發動するに反し、理智の作用は欲望の裏面の意

味を考へて、飽くまで生命その者の要求を主とするからである。幸に欲望は理智の指道に從ふ限り、生命の針路は無難であるけれども、元來、欲望は盲目で且つ强力であるから、時に理智の拘束を脱し、時に理智その者を却て奴隷として我意を恣にせんとするや、こゝに稍々もすれば生命の針路に於てその目標を逸するといふ危險に相遇するのである。早い話が例へば、食欲は自己保存の要求より起つた欲望であるけれども、アペタイトに任せて、必要以上に攝取して却て食傷のために生命活動を弱むるが如き、性欲は種族保存の要求に基く欲望なるに、餘計に之を縱にした爲めに却て生殖能力を失ふが如きものである。其外數へ來ればかゝる事例は枚擧に遑あらざる程で、斯の如きは要するに理智と欲望が衝突して而も理智が欲望のために敗けた結果に外ならぬのである。佛教で煩惱の根元を無明にありと言つたのも所詮此意味であつて、欲望は必ずしも煩惱ではないけれども、その意義を發揮し得ないで單に欲その者に拘泥するは大理智(佛教では之を般若とも菩提ともいふ)の缺乏によるといふ意味と解さねばならぬ。故に佛教はまた煩惱即菩提ともいひ、欲望の裏面の意義を發揮すれば、それは總て大生命實現の菩提道となるとも喝破してゐるのである。とにかく、欲望の表と裏とは、もと離るべからざるものであるけれども、稍ともすれば衝突するもので、而もこれは理性の發達した人間に至りて初めて感知せらるゝの現象である。人間が他の動物に比して優秀なる點のこゝに存するは言ふまでもない所なれど、亦人生現象內には動物現象に比して幾多の矛盾衝着の存する理由も全くこゝにある。一體何故に人間にかゝる矛盾があるかといふ問題は極めての難問であるが吾人を以て見るに、蓋し生命進化の道程に於てその原始的保存法が尚ほ殘留してその進めるものと併立してゐるために、兩活動の間に完全の連絡がつき得ぬ所に起因するものではなからうか。即ち生命の順序的進化としては欲望の理智化にあるべき筈であつたのが、種々の理由よりして欲望も殘り、その上に理智が發達して所謂人間となつたも

のではあるまいかと思ふのである。とにかく、その理由は何れにしても、人間に欲望と理智との爭闘あるは事實で、而も理智が欲望に敗けて生命の方向を錯まるのも亦疑ふべからざる事實である。これ卽ち吾人がこの事實を、生命進化の障礙―特に人類に於ける―の一に數へた所以である。

要之、生命は絶えざる進化であると同時に、その進化を實現するためには絶えざる爭闘を經ねばならぬ。自然に對して、他の生命に對して、而して自己內面の欲望に對して、常に宣戰を布告しながらその進化の陣營を進めねばならぬ。勿論、進化は必ずしも爭闘許りで出來るものではない。爭闘と同時に絶えず妥協し協同し、融合するの必要がある。否、寧ろこの方は進化の目標ではあるけれども、少しもその道程としては闘爭を經ねばならぬのである。これ卽ち生命はその本來の要求として、一定の目標を望んで進展しながらも、容易に之を實現し得ないで、而も稍々もすれば敗戰の結果として却て後退し凝滯し乃至敗滅するもの丶尠からざる原因である。佛敎で悉有佛性の有情が輪廻に彷徨ふと說くのも、主として宗敎的見地からの立言ではあるけれども、この意味に於て如實に生物現象の說明に宛てはまるものと思ふ。

* * * * *

以上は吾人の所論に於て、言はゞ、與へられた事實を解釋した部分である。然らばこの事實的解釋から、いかなる結論が導き出されるかといふに、之れ軈て何程か吾人の主張の存する所で、要するに遂には絶對的生命（假稱）の一事に歸し、その實現の道として、學問、宗敎、國家を見んとするのが、本論の目的とする所である。乍併、これは到底、紙數の許るさぬ所であるから、改めて第二號にて說くこと丶したいと思ふ。



改造の巨靈

土井晩翠

巴里パンテォンの地下室にヂャンヂャックルウソウの墓あり。其墓標として棺中より巨大の腕を出して高く松火を振らしむ、棺側面に銘あり『こゝに自然と眞理との人やすらふ』

棺より抜け出る巨大の腕(かひな)
巨大の松火(たいまつ)高らにかざす。

嗚呼ヂャン　ヂャック　ルウソウの
使命　まさしく　大火焰
千載　永く　全歐を
おほひし　黴と　芥とを
燒きて　再び　純眞の
自然の　あとに　歸れとぞ。

ノートルダムの塔の影
　して　長し　セイヌ河
その　江流を　どよもして
やがて　乾坤　――心靈の
耳開くところ　及び布く
自由　平等　友愛の
おほいなる聲　その本を
こゝに　ひらけば　驚ける
虚僞と　僞善と　陋習と

阿附の　學者と　一齊に
力をあはせ　天の聲
暗に葬り　塵に投げ
跡たやすべく　勉めしや。

狂へる火焔——革命の
あらび一時（ひととき）　春到り
花は　薫じて　鳥歌ひ
洋々の樂　おほいなる
思潮　四海に布き滿ちて
天才　ルウソウ　不朽のほまれ。

塵骸　曳きずる　苦惱の一生
終れば　やがては　輿論の力
こゝ　パンテオン　神聖の
堂に　とこしへ　先覺の
遺骸　收めて　世につたふ。

セイヌ　南に　橋　渡り
カーテル　ラタン　青春の
血の　湧く　區劃　過ぎくれば
サン　ゼ　ネビイブ　丘上の
空に　聳ゆる　大伽藍
「感謝の　祖國　おほいなる
靈に　捧ぐる」聖の宮
Aux grands hommes la patrie（オウ　グラン　ソンム　ラ　パトリイ）
reconnaissante（ルコンネッサント）　尊うとくも
ふさはし　こゝに　ルウソウの
終の　やすみの　床は　あり。
おほい　なるもの　美なるもの
まことなるもの　集りて
靈火　これより　霹靂を
飛ばし　四海の　果に馳せ
ラテンの　精華　光明の
春に　ひらめく　香を　吐きて
流風　千古　吹きやまず。

人類活動の三方面―文藝主義の宣傳

文學博士　高楠順次郎

生命慾を經とし、智識慾を緯として織出した人類の活動は、個人に於ても、社會に於ても、相應に目醒ましいものであつた、智識慾の低級な時代には皷腹して歡んだ太平の民も、多少智識の進んだ時には、智識を利用するものゝ爲に煽動せられて、動もすれば平地に波瀾を起さんとする傾きを生ずる、今でも印度の雪山の山の中には、全く世界から切離されて、黒船も來ず、惡智識も輸入されず、依然として平和の別世界に滿足して居る民族がある、若し滿足の度を以て人の幸福を測量することが出來るとすれば、雪山民族の幸福は、他の民族の知り得ざる所である、されど智識を土臺として、その生命を開拓せんとする方向に一旦足を向けたものは、再び彼の仙境の幸福には復歸し得ないのが通則である、そうして見れば民族の運命も、國家の生命も、智識に由つて解決せらるゝ外に路はないことゝなる。

かく智識を源底として生命慾を發揮する形式は、凡そ三方面あることが認められる、第一は我々の存在を認識せしむる上に、最も直接で而も最も有力な方式、即ち我々の武力活動である、これを假りに名けて

人類の武的能力の活動

とする、古今の歴史を通觀して見ると、この方向に於ける人類飛躍の光景は實に驚くべきものである、ハーキュレスやラーマを崇拜した腕力時代から進んで、兵力時代に入ると、刀槍でも、弓矢でも、凡べて武藝の來に勢れたものが兵馬の權を掌握した、城砦時代、銃砲時代となると、直接に學術の土臺がなくてはその成功は覺束ない、殊に海の方面では軍艦も盛んに武裝せ

られ、その航海操縦と相待つて學術的能力を要することは偉大なものである。最近の世界戰に於ては、戰爭は遂に航運力の競爭と化した、鐵道運輸、遠洋輸送、海洋封鎖は勿論、航空機、潜水艇、自動車、タンク車、自動自轉車など、殆ど航運力の發展に依らざるものなきの觀がある、こゝに到りては戰爭術は最早一の專門技術と云ふよりも、社會のあらゆる新發明、あらゆる新進歩を殘らず吸收利用せるものと云ふが適當なやうに思はれる、この腕力時代から航運時代までの活動を戰術專門の人が面白く順序を立てゝ叙述したら隨分興味のあることゝ思ふ、我々の武的能力の活動は、この二十世紀の初葉を以てその極點に達したと謂つても宜しからう、少くとも世界の人心は、武裝せる國家の永久的價値を疑ふに至つたのである。

　人類活動の第二の方面も、亦我々の存在を認識せしむるに、極めて有力なる方式である、即ち我々の財力活動である。

人類の財的能力の活動

とでも名けたらよからう、これも經濟學者の筆を借りて面白く叙述したら興味ある問題である、我々が若し遊牧時代から銀行と手形で活動して居るのなら單調なものであるが、太古の畜產力時代から今日の如き幣制時代までには色々な變化があつたのである、印度の昔しの例で云へば、太古の畜產時代は重もに牛を以て財產として居つたらしい、この習俗は言語からして推測することが出來る、「戰爭」と云ふ字は「牛を望む」(ガヴィシュチー)と云ふ字である、實際「マハーバーラタ」の大戰爭の勃發は「牛の掠奪」(ゴーハラナ)から始つて居る、範圍、又は領分と云ふ字は、「牛の歩む處」(ゴーチャラナ)と云ふ字である、釋尊の名は「ゴータマ」(瞿曇)と云ふが、古代七聖の一人の名であつて「最善き牛」と云ふ意味である、外に「ゴーピンダ」と云ふ名がある、「牛を見分ける」と云ふ字で「智者」の義である、保護(グプタ)と云ふ字は「牛を守る」と云ふ字から出來て居る、かく日用の言語から、牧牛が活動の中心であつて、財產は牛であつたことが分るのである、支那は

之に反して畜産時代の中心は羊であつたらしい、羨が羊であり、養ふが羊から出來て居るのは、或は羊が常食であつたことを示すに止まるかも知れないが、理想を示す文字が、羊で示してあるのは慥に當代の財産が羊であつたことを語るものである、善は羊の下に古の字が二つ書いたのが古字らしい、義は羊の下に我の字で羊の我が所有たるを主張する意味で、美は羊の大なるを指した意味らしい、これらは字體に依つて多少の解釋は違ふとしても、羊が主要の動物であつたことには異論はない、畜産時代が經過すると貝貨時代となるのである、或は畜産時代にも牛羊の數取りとして併用したかも知れないが、小貝を通貨として用ゐることは印度でも隨分古いらしい、原語が「カパルダ」と云ふのであるからこの音譯として古貝、吉貝などの字を用ゐ、又貝の口が齒に似て居るから貝齒とも譯することがある、之を俗語で「カウリー」と云ふから英語にも殆ど同音で傳つて居る、これは貝の名である、現時でも雪山の裾野の田舍に行くとこの小貝を通貨として用ゐて居る、これは貝の口が女陰に似て居るから泉貨にしたと云ふ說もあるが、貝はこの外にも珍らしいものもあるから、一般に貝が財産の代表として、比較的輕貨として扱はれたものであらう、この點でも文字は有力な材料を我々に與へて居る、先づ財の字も貝、貨の字も貝、買賣も、價も、買も、貿も皆貝の字で示してある、之から見ると商業上の通貨として相當に勢力を占めて居つたものらしい、硬貨時代は最早文字製造時代とは遙か後に在つたらしく、金銀銅の實名をその儘に用ゐて居つて、他の理想を顯はす文字に影響した痕跡は見出し得ない、若し今日理想を顯はす文字を作ることゝしたら、少くとも支那に於ては大抵の文字は金扁で作らるゝであらうと思ふ、今の紙幣時代となつては、汚れて見る影もない紙片でも、大切に皺を伸ばして懷中に藏めるのは、金貨の代表だと云ふ一片の信用が爲さしむるのである、その信用の有無は即ち國家の財力如何の問題である、國家がその信用に依つてあらゆる財力を吸收し得るとしたら、之に依

て何事も成し得られる、初めて財力即武力の時代に到達したのである、財力の存する處、即ち武力の存する處である、若し武力の制限が、世界平和の爲に止むを得ぬとすれば、財力を武力に使用することの制限は必用となるのである、弱者の叫びが多少耳を傾けらるゝに至つたならば、武力も財力も同一に見らるゝ時期はさまで遠くはあるまいと思はるゝ。

人類の活動の第三方面は、即ち我々の文力活動である、今これを

人類の文的能力の活動

と名けて、この方面を總括して見たい、我々の文力の活動は、前の武力財力の活動と全くその趣を異にして居る、その活動は重もに我々の智識慾が相當に發展した以後に始まるのである、書契あつて以後の活動である、されば此の活動の原素は如何なる野蠻民族にも存在して居ると云ふ風のものである、武力財力の二者は生存競爭の動的方面であるが、文力は生存競爭の靜的方面である、前二者は文明の先鋒ではあるが後者の如き文明の標識ではない、前二者は進めば進むほど個人の領分を脫して團體の活動に入るのであるが、後者はいつまでも個人の領分を脫せず、個性の發揮、人格の實現そのもので、即ち文的能力の活動である、この意味で文力活動の方式を吟味するには、人格構成の源底である理想を以つて標準とせねばならぬ、哲學は理想の學たる範圍に於て思想指導の原動力として之に入らねばならぬ、宗教は理想實現の敎たる意義に於て平和宣傳の重心力として之に參加する、一切の藝術は、自ら畫き上げたる理想を以て他を啓導する人格向上の中心機關として主位を占むべきものである、尙分り易く云つて見れば、人の畫き出だした理想を目を通じて受取るものが、繪畫彫刻の美術である、人の畫き上げた理想を耳を通じて受取るものが音樂である、美文學と名のつく韻文、作話、小說の類は、讀めば目、聞けば耳から人の理想を受取るのである、戲曲、演藝の類は、視覺、聽覺を合して人の理想を受取るのである、世間には哲學を智の發動に取切り、宗教を情の發動に

取切り、文學を情の産物とし、美術を情の導力の如くに云ふ人もある、又美の爲の美とか、藝術の爲の藝術とか云ふ僻說にかぶれた人もある、これらは皆誤まられたる見地から出たものである、文藝は人生を離れて存在すべきものでもなく、我々人格の一部分を顯はして全部を顯はさないやうなものでもない、已に理想の發現である以上は、理想を源底としたる人格の實現である、文藝は人格の實現である處に一般の科學との相違點があるのである、科學が部分的であり分析的であるに反して、文藝は全體的で總合的である、科學は重もに物に在る自然を攻究するのであるが、文藝は人に在る自然を發現するのである、それよりも一層大なる相違點がある、一般科學は戰爭にも平和にも、同じく一の武器として直接に利用し得るのである、文藝は飽くまでも平和的である、病的文藝に非る限りは、人生の平和を害し、若くは戰爭の武器として用ゐることは出來ないのである、殊に廣い意味の文藝運動、即ち文力活動は、之を武力活動に合すれば、武力活動を神聖にする、之を財力活動に合すれば、財力活動を健全にする、文力活動を離れたる武力活動は遂に正義の爲に排斥せらるゝ、文力活動を含まざる財力活動は結局公共の爲に擯斥せらるゝのは自然の數である。

この文的能力の活動の外にこの活動に隨順すべき中間の活動は澤山あるのである。例せば我々の法治的能力の活動などは隨分著しいものである、併し今は直接に理想、人格に關する方面の活動のみを舉げることとする、この方面の結束活動を名けて

文藝主義の宣傳

としたいのである、それは人文運動である、又文化主義であると云ふ人もあらう、獨逸の廢帝は、曾て白人の文化を脅かす黃禍があるとして、飛龍に御せる金佛を畫き、劍を把れる白神結束して之に對抗する圖を作り、外、露皇に贈りて日露戰爭を誘發し、內、國內の小學校に分つて國民教育の標的とした、今回の世界戰に獨帝の發したる警語は「人文戰爭」であつた、若しかかるものが人文であり、文化であつたら、六金色旗下

の佛教徒は實に結束して立つの必用があると感じた、幸にして世界の趨勢は漸く正義に傾き、米國の人道主義の唱道は稍ゝ意を强うするに足るべきものであつた、されども我々は到底現時の文明に滿足を表し得ないのである。そこで文化、人文、文明と云ふやうな曖昧な名を避けて、泰西文明を背景に持つて歐化の潮流に乘ずるかの如くに見へる活動は全く排斥したいのである、さすれば人類の文力活動の中心たる文藝主義を標榜するのが最も適當と信ずる、この意味の文藝主義の宣傳には、思想問題の包含せらるゝは勿論、宗教現象も考慮せられねばならぬ、倫理運動もある、藝術運動もある、苟も健全なる文藝主義の開發を目的とし、人生の病的惡傾向を去るべき活動は、或は主義に於て或は實際に於て、相結束して立たねばならぬ。

かゝる意味の文藝主義が、永久的平和の原動力であることは、昔しから認められて居つたのであるが、武力、財力、其他の壓迫の爲に、文力は少からず變調の發達を爲した、ルーテルの叫びも、ルーソーの著書も、奴隷解放の問題も、一人一票の宣傳も、近時ではトロストーイでもタゴールでも、何れも何らかの壓迫に對する自由の叫びである、今は早自由かぶれの時代も過ぎて、平和の天使たる文藝が、正面にその面目を露はすべき時期であると信ずる、今回の戰爭は明かにこの文藝主義少くとも文力活動の勝利を語つて居る、上に述べた人類活動の三方面を列强の戰爭に當てゝ見れば、米國は財力と文力とで戰爭した、之に反して日本は武力と文力とで戰爭した、英佛伊は錯綜して居るが、結局財力と文力とを脫出せずして戰爭した、獨逸は之に反して全く武力と財力とで戰爭した、獨逸は文力活動の見るべきものが少しもないことは驚嘆に値する、自ら人文戰爭と名け、天の使命を全うし世界を統一する選民であると號して居ながら、天道を守らず、人道を守らず、正義もなく、武士道もなく、非戰鬪員を虐げ、兒女を殺し、國際法を破り、赤十字旗を侮辱し、俘虜を虐待し、武裝せざる商船を擊沈する、爲す所は凡べて人道に對する挑戰であつて、宗教に對する侮辱である、

獨逸文明の虚僞なりしことは、今時の戰爭に於て十分に立證せられて居る、日本は日露戰爭に於ける文力活動に依り、辛うじて强國の列に加つた、之に反して獨逸は現戰爭に於て文力活動の拒否に依つて世界の舞臺から退去せざるを得ざるに至つた、戰時に於ける文力活動は極めて一少部分に過ぎないやうであるが、それでも最後の勝利はその精神の存否に依て決せらるゝと謂ふて宜しいのである。

一國の運命を支配する當路者に在りては、またこの三活動に向つて偏重の處理のないやうに注意せねばならぬ、殊に教育の當局に在るものは恒にこの點を怠つてはならぬ、若し一般學術に偏重し、その應用に心を奪はれて、文力活動の何ものたるを知らず、文藝主義を輕視し、思想問題の處理を誤る如きことがあつたならば、大和民族の進運に向つて一大障壁を築かんとするものである、一國の財力は、財力養成の資源を除いて、その餘力は望むべくんば之を武力と文力とに平分してその經營を全うすべきである、假令平分にせずとも、時代の必用に應じて、その割合を定め、少くとも文力活動に對して積極的の施設をなすべきである、然るに我國從來の舊慣は、僅に消極的警戒をなす外に曾てこの方面に向つて積極的の施設をなしたことがない、かくて猶一國の進運に暗雲の翳すなきを得るか、文藝主義の宣傳は今後愈その必要に迫まらるゝことゝ思ふ。

巴里講和會議の暗闘

某外交大家

小僧にしてやられる日本使節

日本委員の巴里での譟駄〳〵はどうぢや、顧維均と云ふ小僧を捉へて牧野などが喧嘩の相手をする處は何

と言つても可笑なことぢやないか、一體陸徵祥といふ奴は獨逸仕込みで口も八丁手も八丁却々拔かりはないからねー、其下つぱの奴も四十前後の顧維均や四十足らずの劉宗傑などといふ元氣の手合がピシ〳〵やつて居るが、這麼手合がよし失策した處で後で陸徵祥が取消せば夫れで濟むぢやないか、其處で持つて來て日本は何うだ、手を縛り口を緘し、お剰けに珍田とか又蝿の樣な松井等が講和使といふのぢやから、いやはや驚き入つた話さねー、俺が一つ霞ヶ關の棚卸しをやつて聞かせようか、一體ウヰルソンといふ男は一面哲學者見たやうな、一面政治家に適當した元氣と努力があるからねー。頭から言つては一番出來て居るし、夫れにウヰスコンシンといふ大學の大きな智惠袋を持つちよるのだから各國の講和委員に較べると頭の成金さねー、處が日本の講和委員は牧野にせよ、西園寺にせよ、松井にせよ、伊集院にせよ、珍田にせよ皆んな同じ程度のものさ、松井の持つて居るものは伊集院が持つて居るし、牧野の智惠は又西園寺にもあるさ、要するに自分一個の智惠さ、大きな智惠袋も何にも背景として居る譯ではないからねー、ウヰルソンは其大きな智惠袋と大きな國の威力と大きな金とを持つて向ふに行つたから溜らないさ、而して英國に行き佛蘭西に行つて講和會議に提出するやうな大體の見當を附けたのさ、始めは英國は癪に觸つて佛蘭西と伊太利と與んだのさそして米國に當つたのだが、國際聯盟といふ問題でロイドヂョージがクレマンソーに背負投を喰はしたのさ、つまり寢返りを打つたのさ、其處になると英國も却々ズルク立廻つて居るわい、一體英國人は外交に掛けては天才であつて佛國人は正直の處もある、クレマンソーは英國の寢返りには非常に憤慨したが、さうなつては伊太利と相談より外に仕方がないのさ。

聯盟案の骨拔は英國の手品

今回提出された二十六ヶ條の國際聯盟といふのはウヰルソン案は大抵は骨拔きで皆んな英國案だよ、佛蘭西は獨逸を恨んで何うしても獨逸を根本的に酷める必

要があつたのだから、獨逸を國際聯盟の仲間に入れるのは危險だといふので散々反對して見たのさ、遂には妥協が附いたやうなものゝ、英國から背負投を喰はされて恨めしいのさ、處が英國は未だずるいよ、南阿とか、濠洲とか、加奈陀とか印度とかいふ殖民地の票數で國際聯盟を決定しやうといふのだからねー、然し茲に恐ろしいのは英國にしてもぢや、若し此等の殖民地が本國に寢返りを打つた日には英國の立場が無くなつて英國は英國自身で潰れることになりやせんか、世の中はようしたものだよ。

米國にしてもぢや、タフトと云ふ奴はウキルソンの後釜を狙つてチツト見て居るからね、此の後の大統領は無論タフトだらう、米國上院は此の仲裁裁判といふものを何れ丈け認むるか、而しそこにはタフトが居つて野心と野心の交換をするだらう。

今回の講和會議には日本からは外交官の古手許をやらないで專門家をやつたら善かりそうなものだよ、專門家をやつて英米の政治家に太刀打ちが出來るか何うかと思ふのに、素人の人間をやつた處で到底問題にならないのは分り切つて居る話ぢやないか、今は世界改造といふ大きな看板があるのに勞働問題や、經濟上の何んにも分らない奴等を引張り出した處で何になるものか、松井とか、珍田とか、伊集院とかいふ手合よりは、福田德三とか濱口雄幸とか、夫れから帝國大學の文科の教授とか法科の教授とかいふやうな手合を遣つたら好かつたらうがねー、それから近藤廉平だとか福井菊三郞だとかいふやうな地平線以下の人間をやるよりは井上準之助や河上肇も居るぢやないか。

米國の内輪揉め石井の間抜

何にしてもウキルソンは國際聯盟といふ看板を出しは出したが内輪揉めして居るよ、タフトはチツと覗て居るし、上院が睨んで居るし、どうせ此の次の大統領にはなれはせぬからねー、いや夫れ許りでなく、米國の人心といふものは恐ろしいもので、皆んな獨逸に秋波を送つて居るからねー、といふのは戰爭は未だ三年や

五年續く積りで鐵とか、食料品とかいふものを外國にも出さないし、又内國でも儉約して儲けやうと腹の中に極めて居つた處、其後戰爭が一段落したので食料品其他のものが何處の倉庫に這つても山のやうに積んで居るやうな狀態ぢやないか、米國人が獨逸に秋波を送るのも御尤の理さ、夫れに米國には獨逸民族は一千四百萬人も居るといふんだから、却々英國の注文や、佛蘭西の注文を其儘オイソレと引受ける譯には行くまいよ。

間拔けたものは石井だよ、彼奴は調子に乘れば内田とか珍田よりは仕事は出來るが、ウヰルソンが佛蘭西に渡る前に一遍も會はなかつたさうぢやないか、若し此れが英、佛の外交官であつたならばチャント日本の立場は言ふて居るよ、併し夫れを本國政府から何とも言ふてやらなかつたといふのは、實に間拔けの骨頂ぢやよ、尤も當時は石井もインフルエンザで寢て居つたさうぢやがね。

少壯日本委員の牧野攻撃

夫れから巴里の樂屋を覗いて見やうか、ボンクラ揃ひだからといふのでワザ〱瑞西から本多を呼んださうだよ、處が本多といふ奴、此奴チョットばかり骨のある奴で、いくらか世界の思想も分つて居るといふので、若手の委員が本多を大將に祭り上げて、而して牧野にブッかつたのだよ、處が牧野はボケて居るから迚も分らぬのさ、其處で本多は業を煮やして憤然として瑞西に歸つた譯さ。

實際日本の委員は顧維均などといふ自分の國の小僧と喧嘩する位が關の山さ、人種撤廢も、勞働問題も何にもあつたものでない、一方ぢや基督教徒と佛教徒の喧嘩とか或は白人間と黄人間の喧嘩とか大きなことを言つて居るが、ソンナ大きな芝居を打てる役者はありやしないよ、夫れから近藤にしてもさうじや、戰後新らしく開ける通商貿易とか經濟政策を考へて居るやうな氣の利いた人間ぢやないだらう。

あゝ、もう日本人も眼が醒めたら好からうが、這麼ことを知らずにスヤ〳〵寢つて居る、日本國民は何時眼が醒めるだらうか、眼が醒めた時は二進も三進も動けなくなつた時ぢやあるまいか。

西伯利のことでもぢや、陸軍の奴等と海軍の奴等が喧嘩をするし、陸軍と外務と喧嘩をするし、又參謀本部と外務もやつて居る、丸でお話しにならんぢやないか。

霞ケ關の大改造が肝要ぢや

それから今の外務省の組織は一體小さ過ぎる、一人の病人が出來ると其補缺は出來ぬといふことぢやないか、一局には少くとも三人や五人の勅任官を遊ばして置くやうにせんと一文惜みの百文足らずになつて仕舞ふわい。

少くとも英國や米國の政治家と相撲を取るにはモ少し世界的政治家、世界的外交家の素養を以て掛らせねば駄目ぢや、囘向院の角力と村角力の取組を見るやうで、土俵に上らぬ前から何等の期待も何等の興味もない譯だ、其村角力と囘向院の角力とが同じ一等國の大使として交際して居るのぢやから溜らぬ、夫よりは三十臺の若いピン〳〵した處を遣つて滅茶苦茶に喋言らして而して之を取締る人間を一人位遣つて置けば好かつたのに、皆んな大使上りとか、男爵とか、政友會に近いものとか、牧野に近いものとか言ふやうな情實から人選したもんぢやから日本は誤まられて仕舞うんだ、人種撤廢處の騷ぎでなくして親類撤廢も出來ないぢやないか、牧野一家で日本國の大責任を持つて行くなど〻大外れた、間違つた考へでは、此れはもうお話しにならぬなー。





寒き光

金子薫園

■病中、「佛蘭西革命夜話」を讀む

まくらべに友の新書のフランスの革命夜話が寒く光れり

佛蘭西の革命夜話を讀みをれば吹雪戸を打ち荒れにけるかも

いつしかに吹雪しづまり枕邊に革命夜話は讀みさられけり

■寺崎廣業氏逝く

君が指す手の光より繪の國のやみはほのぼの明けにたりけむ

繪のひじり天に昇りて日の光地上にしばし翳りたりけり

この君のひとりあらねばわが國の繪畫の道は暗からむとす

大寺の外にさへこそあふれけれ君を哀しむ人のみぞあはれ

大寺の内外に人らみちみてどしいんと靜まりかへりけるかも

本堂に鉦鳴り經のきこゆればへだたりをりて涙ながすも

■病中

まくらべの水仙の花の香もさむし病み衰へをしみじみ知る身に

女子改造の基礎的考察

與謝野晶子

○

こゝに雜誌改造が發刊されます。私はその貴重な第一號の誌上で、女子の改造に就て私の菲薄な感想を述べることをうら恥しくも思ひ、また光榮だとも思ひます。述べると云ふことは、必ずしも思想の宣傳ばかりを意味しません。之がために、混沌として居る自分の思想に秩序を與へ、その不純なものを切り捨て、その思ひ違ひと不合理とを訂正し、それを更に明確なもの、堅實なものに鍛へ直す機會を得て、それだけ私自身を整調し、深化します。またこれを公にすることに由つて、世上の識者や知人から非難して頂くことも出來、或は客觀的の價値を是認して頂くことも出來ます。

改造は最も古くして併せて最も新らしい意味を持つて居ます。人生は歴史以前の悠遠な時代に一たび文化生活の端を開いてこのかた、全く改造に改造を重ねて進轉する過程です。男子は巧みにこの過程に乘つて、その個性を開展し、幾千年の間に男子本位に傾いた文化生活を築き上げました。兎角この過程に停滯し落伍する者は女子でした。人生の幼稚な過程に動物的本能がまだ餘分に勢力を振つて居た時代――腕力とそれの延長である武力と、それの變形である權力とが勢力を持つて居た時代――では、すべての女性が男性に壓制されて、從屬的地位に立たねばならなかつたことは、已むを得なかつた歴史的事實だとも云はれるでせう。併し之がために女子はその人格の發展を非常に鈍らせ、且つ一方に偏せしめて仕舞ひました。それは蜂の女王が生殖機關たることに偏した結果、それ以外には畸形

的無能力者となつたのに喩へても好いやうな狀態に墮落して仕舞ひました。『時事新報』の一記者が近頃その『財界夜話』の中で引用されたリバアプウル大學副總長の言葉の如く『國家が人民の半分だけを（卽ち男子だけを）社會的、經濟的、並に公共的の業務に就かせて居る限り、强かるべき筈の者（卽ち女子）も弱く、富むべき筈の者（卽ち女子）も貧しいのだ』と云ふ狀態になつたことは、女子ばかりの不幸で無く、引いて人類全體の不幸であつたのです。

今は世界の女子が前後して自覺時代に入りました。今日の改造は全人類の改造を意味し、之に女子の改造の含まれて居ることは言ふまでもありません。唯だ問題は、如何に改造すれば好いかと云ふ點から始まります。

○

この點に就て、私は初めに『自我發展主義』を以て改造の基礎條件の第一とする者です。人間の個性を豫め決定的に一方へ抑壓すること無く、それを欲するまま、伸びるまゝ、堪へるがままに、四方八方へ自由圓滿に發展させることが自我發展主義です。人間の個性に內具する能力は無限です。一代や二代の硏究でその遺傳質が決定されるもので無く、その人の自覺及び努力と、境遇の變化とで、どんなに新しい意外な能力が突發し成長するかも知れません。ラヂウムと飛行機との發明を見ただけでも、過去に於て豫測しなかつた創造能力を現代人に發揮したことに驚かれます。女子は殊にまだ開かれざる寶庫です。過去に於て、その自我發展を沮止されて居ただけに、男子本位の文化生活に見ることの出來なかつた特異な貢獻を齎すかも知れません。今日のやうに非戰論が勢力を持つ時代となつては男子の腕力に代つて、女子の心臟の力が最も役立つことになつて行くでせう。それは何れにもせよ、私は實にこの新理想的見地から、舊式な良妻賢母主義にも、新しい良妻賢母主義――卽ち母性中心主義――にも贊成しない者です。

誤解されない爲めに云つて置きますが、これまでからも私の述べて居る通り、私は妻たり母たることを決して輕視して居る者では無く、私が私の理想の下に行はうとする一切の事は、それが私の自我發展の具體事實としてすべて尊重し、すべて出來る限りの熱愛と、聰明な批判と、愼重な用意とを以て之を取扱ひたいと祈つて居ます。人間の事項には殆ど同時に爲し得るものと、爲し得ないものと、志が餘つて居ながら境遇其他の事情の許さないものとありますから、おのづから本末前後の關係は生じるのですが、併しその關係は流動的のものであつて、私には固定的に見ることが出來ません。例へば、私自身が大病を煩つて居る場合に、私は先づその病氣を治療することに私の生活の重點を置いて、其他の事はその重點を繞つて遠景的に暈影を作るでせう。數年前に亡くなつた友人のＨ氏は、粟粒結核菌が大腦を冒して殘酷な疼痛を起した時、看護して居た奧さんがお子さんの事に就て何か相談されると、氏は悲痛な聲を出して「今は子供のことなんか考へて居られない。そんな場合で無い。自分の苦痛で俺は一ぱいだ。子供には健康がある」と云はれました。さうしてＨ氏は二週間もその苦痛を續けた後に歿せられたのですが、病院へ見舞に行き合せて氏のその悲痛な言葉を聞いた良人と私とは、一つの嚴肅な人間的教訓をＨ氏から受けたと云ふことを感じました。人生はかう云ふ突き詰めた所まで考へねば眞劍であるとは云はれないかと思ひます。親として最愛の子供を思つて居られない程せつぱ詰つて目前の小さな自己を抱かねばならない場合もあるのです。人情の眞實に徹しない人達は、このＨ氏の場合を見て、「子の愛の淺い親よ」と云ふでせう。私は其れに與することが出來ません。

Ｈ氏の例は極端なやうですが、人間は平生誰れでも之と類似した生活をして居るのです。飢えた者は何よりも先づ食物を求めて、其他のことを後廻しにします。儒敎では父母のある間は遠方へ旅行しないと云ふことを道德として居ます。それだからと云つて、人は食物中心主義とか孝道中心主義とかに一生の重點を決めて

仕舞ふ譯には行きません。

○

三月の「婦人公論」を讀むと、山田わか子女史は、私が屋外の勞働や、屋外の女子參政權運動をしないのを咎めて、其等の實際運動を他の婦人には盛んに奬勵しながら、私自身には常に否定して居ると云はれましたが、私が屋外の勞働に服さないのは、其れを避けるのでも否定するのでも無く、私には久しく屋内の勞働を持つて居るからです。私は如何なる婦人に對しても、專ら屋外の勞働を盛んに奬勵した覺えがありません。それと同時に、私にも若し屋内の勞働が無くなれば屋外の勞働に進んで就きます。私は以前から述べて居る通り、新聞記者とも、事務員とも女工ともなることを辭しません。また屋外の政治運動にしても、幼年期の子供をすべて小學へ送るやうになれば決して辭するものでは無いことは、早く私の著書の中に明言して居ます。

序でに申し添へます、山田女史は近頃その評論の中で、私に對して頻りに斯う云ふ類の臆斷を敢てされるやうですが、他人の意見を全部的に評される時には、その人の著書を一通り參照されるだけの用意を持つて頂きたいと思ひます。私が屋外運動をしないと云ふことに對し、更に女史が「私は子供が大切で可愛くて、とても家庭を離れる譯にはいかない。けれどお前さん達はどうでもいいだらう。なぜこぞつて屋外勞働に從事しないか、なぜ政治運動に飛び出さないかと、晶子氏が云つて居るやうに私には思ひます。そして、何と云ふ不人情な事を仰つしやるだらうと思ひます」と云はれた一節などは、餘りに甚だしい無反省な物の言ひ方で無いかと思ひます。私は母性保護問題に就て意見を異にして居る山田女史と此上論爭する考を持ちませんが、かう云ふ女史の臆斷に就ては女史に對して反問せずに居られません。第一に私が實際運動を「いつも否定して居る」とは何を證據に云はれるのでせうか。次に私は如何なる場合に、すべての婦人にその子女の

養育を抛つてまで屋外の勞働と政治運動とに飛び出すことを奬勵したでせうか。また私の十餘年間の著述の何處に、婦人に對して「お前さん達はどうでもいいだらう」と云ふやうな愛とデリカテとを缺いた『不人情』な氣分を持つた發言を敢てしたでせうか。それから「不人情」の一語は何よりも私の全人格を顚覆せしめるものです。最も同情と禮意のあるべき女子と女子との意見の交換に、女史がかう云ふ言葉を用ひられたのは、女史の倫理的意識に省みて疚しくないだけの御自信があつての事でせうから、私は其れを立證して頂きたいと思ひます。或はこれは私が『母性の國庫保護說』を主張される女史達に對して『短見者流』と云ふ評語を加へたことに由つて憤激されたのかも知れませんが、女史達の主張が短見であり幻想であることは、一條忠衞氏が本年一月の『六合雜誌』で明晰に論斷して居られます。女史達が一條氏のあの議論をまだ今日まで論破されない限り『短見者流』の評語は不當で無いと信じます。

○

筆が思はず側道へ入りました。山田女史が右のやうに私を非難されたのは「與謝野晶子もまた家庭が主で文筆を持つての社會的奉仕は副產物でないか」と云つて、女子達の母性中心說へ引付けられる積りでせうが、私も時に或事件に對しては——從來も言つて居るやうに——家庭を主とする場合があるのは事實です。卽ち『妻は病床に臥して子は飢に泣く』と云ふやうな場合、家庭に大病人がある場合、さうして私の現在のやうに、大家族を擁して、夫妻ともどもそれの物質的供給に追はれると共に、今暫く手の離せない幼年期の子供のある場合が其れです。それだからと云つて、私は「常に家庭を主とする」と云ふ考は少しも持つて居ません。屋外の運動と云ふやうな行爲に對しては屋內の行爲の方を主として考へねばならぬ境遇に居ますが、文筆を透して實現する私の生活の上には、決して家庭を主としては居ません。例へば私が人類生活に就て思索して居る

場合には、私は主として人類生活をして居るのです。家庭も、國家も、其他の何事も、その時の重點となつて居る人類生活を取圍んで有機的に繋がつて居るのです。私の心理的實證を平明に述ぶればかう云ふ外はありません。私は宗教家達が四六時中に神や佛を持念すると云ふやうな事を信じ得ない者です。況んや女子が常に新良妻賢母主義を中心として生活するなどと云ふ事は實際に不可能な事だと思ひます。言葉を換へて云へば、人間は母性と母性的行爲とがその全部で無く、母性と交渉しない無限の性能があり、其等の性能が發展した無限の種類の行爲があるからです。例へば女子が田の植附をしたり、化學の實驗をしたりする場合、それらの行爲は少しも母性と關係を持たず、男女の性別を越えて、男子と共に爲しつゝある事です。それとも母性中心說の支持者は、田を植附ける時にも、試驗管を覗く時にも、良妻賢母の意識をはつきりと持たなければならないと云ふのでせうか。また田を植附けたり、試驗管を覗いたりする時の女子の心理をたぐつて突き詰めると、それが母性中心說へ逹せねば已まないものであると云ふでせうか。

○

次に私は「文化主義」を以て人間生活の理想とすることを、改造の基礎條件の第二とする者です。自我發展主義だけでは、人間の活動が動物に共通する自然的受動的、盲目的運動の域から一歩脫して、纔かに自發的、創造的、有意的活動の端緒に就いたと云ふだけで、まだその目的が一定しないのですが、文化主義の自覺を待つて初めて自我發展主義に「眼」若くは「魂」を入れたと云ふことが出來ると思ひます。

私は文化主義に就て、曩に阿部次郎さんの譯述されたリップスの『倫理學の根本問題』から多く啓發せられたのですが、近頃は高田保馬さんと左右田喜一郎博士の論文とから更にいろいろの敎を受けたことを茲に感謝します。

文化とは、人間が自發的、創造的、有意的の努力の

結果として作り上げた事象の全體を云ひ、その內容としては、高田さんに從へば「一は吾人の心理的內容及び之に伴隨する動作にして、人爲を待ちて成立し、從ひて價値を認めらるゝもの、宗教、科學、藝術、哲學等より、言語、道德、法律、習慣、風俗等の內容に及ぶ。他は外界の事物にして、しかも人間の努力を加へられたるがために價値を有するに至れるもの、謂ゆる經濟的財は殆ど皆之に屬する。猶この外に第三の種類として社會組織を擧ぐべきかとも思ふ」と云はれるものが其れです。さうして是等の文化內容を創造し增加することに由つて、リップスの謂ゆる「絕對的な道德的、社會的、全人類的有機體、即ち世界國の完成」に資することが即ち文化價値であり、この文化價値を實現する過程を文化生活と云ひ、人間の思想と行爲との一切の歸趨を文化價値に置くことを文化主義と云ふのだと思ひます。

人間は文化價値實現の生活に參加して、初めて完全に自然人の域を脫した人格者と云ふことが出來ます。文化主義が最高唯一の生活理想であることは、文化內容の何れを採つて調べて見ても、その歸趨を文化主義に置かない限り徹底した解釋が附かないので解ると思ひます。例へば藝術のための藝術とか、良妻賢母のための良妻賢母とかでは、それの絕對價値を定めることが出來ません。藝術至上主義や母性中心主義が中途半端なものであつて、到底文化生活の全體を一貫した理想の標語となり難いのは之が爲めです。藝術も、母の行爲も、學問も、政治も、あらゆる人間の活動がすべて文化主義を理想として、初めて文化生活の上に意義と價値とを持つことが出來ると思ひます。

○

次に私は「男女平等主義」と「人類無階級的聯帶責任主義」とを、改造の基礎條件の第三第四とする者です。前者に就ては、これまでから度々私の感想を述べましたから、今は簡單に、男女の性別が人格の優劣の差別とはならず、人間が文化生活に參加する權利と義

務との上に差別的待遇を受ける理由とはならないものであると云ふだけに止めて置きます。

後者は自我發展主義と、文化主義と、男女平等主義とに促されて起る必然の思想であつて、文化生活を創造するには、すべての人間が聯帶の責任を持つて居ます。私達女子も平等に其れを分擔することを要求します。貴族と軍閥と資産階級とが之に就て階級的の特權を持つことが不法であるやうに、文化生活が從來のやうに男子本位に偏することは、文化價値實現の爲めにする女子の自我發展を男子の利己主義と階級思想とに由つて拒むことに外ならないのです。

左右田博士が「文化主義は、あらゆる人格が文化價値實現の過程に於て、それぞれ特殊固有の意義を保持するを得、その意義に於て何れかの文化所産の創造に參與する事實を通じて、各個人の絕對的自由の主張を實現し得ることを求むるものである」と云はれ、また「各人格は一部的文化所産の創造に由つてその全き人格を發揚し、かくして一切の人格に由つて相互に補充的且つ協働的に文化一般の意義をその窮極に於て顯彰し云々」と云はれたのは、男女、貧富、貴賤、黃色人と白皙人と云ふやうな差別を超えた所の無階級一律的の要求であると思ひます。

○

この男女平等主義と人類無階級的聯帶責任主義との上に立つて、私達女子も男子と等しく教育の自由、參政の自由、職業の自由等、人間の文化生活に必要な限りのすべての自由を要求します。是等の問題に就ては、以前から他の機會でしばしば述べて居ますから、今は略しますが、唯だ文化主義の學者達が女子のために是等の要求を奬勵される一證として次にリツプスの言葉を引用して置きたいと思ひます。

リツプスは教育に就て言ひました。「特に我等は女性に對して高等なる精神的教養を拒むべきで無い。それが人間の教育である限り、それは各人の能力に從つて男女の差別なくすべての人々に與へられなければなら

ない。精神的能力の優秀な女性は、その能力の低級な男子よりも、この教育を受くべき一層多くの道徳的權利を持つて居る人間の精神的能力が開發されなければならないのは、それが男や女に屬するからで無くて、それが(即ち精神的能力が)存在するからである。自己の內面から出て開發されることを望んで居る事柄であるからである。」

また女子の參政權問題に就て言ひました。「婦人の政治的權利を承認するは、兩性の差別を無視するもので無くて、苟も婦人もまた男子と共に人間であり、人類の一員であることを認める限り、寧ろ兩性の差別がこの承認を要するのである。……婦人には婦人獨特の利害と、欲求とがある。さうして國會に於ては、あらゆる方面の利害が代表されて居ることを要求するが故に、其處には婦人もまた代表されて居なければならない。……人は女性の政治的未熟を力說するかも知れない。成程これは男性の平均程度に比べても一層甚だしいであらう。併し、それならば人は女性の政治的教育に骨を折るが好いのである。」

職業の問題に對する女子の要求に就てリップスの言つたことは後に於て引用しようと思ひます。

○

最後に私は「汎勞働主義」を以て改造の基礎條件の第五とする者です。之に就ても私は、最近に公にした感想集『心頭雜草』に可なり多く述べて居ますから、玆には只だその補充として少し許り書いて置きます。

私は勞働階級の家に生れて、初等教育を受けつつあつた年頃から、家業を助けてあらゆる勞働に服した爲めに、「人間は働くべきものだ」と云ふことが、私に於ては早くから確定の眞理になつて居ました。私は自分の家の雇人の中に多くの勤勉な人間を見ました。また私の生れた市街の場末には農人の町があつて、私は幼年の時から其處に耕作と紡織とに勤勉な澤山の男女を見ました。私はさう云ふ人達の勞働的精神を尊敬する餘りに、人間の中にその精神から遠ざかつて居る人達

のあるのを見て、その怠惰を憎惡せずに居られませんでした。私はすべての人間が一樣に働く日が來なければならない、働かない人達があるために他の人達が餘計に働き過ぎて居る、その働かない人達の分までをその働き過ぎる人達が負擔させられて居ると思ふのでした。之は私の家庭で、私と或一二の忠實な雇人とが餘りに多く働きつつあつた實感から推して直觀したのでした。

以前から私の主張して居る汎勞働主義は、實にこの直觀から出發して、私の半生の生活が斷えず勞働の過程であるために、之が益々私の內部的要求となつたのですが、私のこの要求に對して學問的基礎を與へて呉れた第一の恩人はトルストイです。

私は文化價値を創造する文化生活の過程は全く勞働の過程であると考へ、人は心的または體的に勞働することに由つて初めて自我の發展が出來るのですから、文化生活は勞働の所產であり、人間が一樣に勞働すると云ふことを外にして、決して文化主義の生活は成立たないと思ふのです。それで私は、すべての人間が勞働道德の實行者となることを望み、現在のやうに不勞所得に由つて衣食する階級と、勞働の報酬に由つて衣食する階級との對抗を無くして、勞働者ばかりの社會となることを要求して居るのです。（私の近著「心頭雜草」と昨冬の「中外新論」掲載の私の一文參照）

最近に出た米田庄太郞先生の幾つかの論文を讀むと、今日は『勞働』と『勞働者』との概念が大に擴張されて『手に由りて働く生產者』の外に『腦髓に由つて働く生產者』をも勞働者と呼ぶ時代となりつゝあると云ふ事を教へられます。其上また三月號の『中外』に出た米田先生の論文に由れば、現に露西亞の學者ミハイロヴスキイは『人格とは勞働の發現である』と云ひ、勞働する者のみが人格者と呼び得る者であると云ふ風に云つて、勞働人格說を唱へて居ることを教へられます。私は自分の幼稚な直觀が益々是等の思想に由つて確實な支柱を得ることを喜びます。

○

私はこの汎勞働主義の立場から、女子にもあらゆる勞働とあらゆる職業とを要求し、また其れの準備として女子の高等教育と職業教育とをも要求します。私が女子の學問と經濟的獨立に就て今日までしばしば意見を述べて居るのは、實にこの要求を貫徹したい爲めです。

リップスは勞働に就て言ひました。「我等は自己の素質と、世界に於ける我等の位地とに由つて、最も實現するに適する目的に其力を集中する義務を持つて居る。すべての人は同一で無い。故に個人がそれぞれの地位に於て社會的全體の中に織り込まれ、それぞれに分業を以て全體の文化的使命に貢献する」と。人間の能力が多種多様であつて、適材が適所に於て文化價値を創造することが望ましい事である以上、個別的に適應した各種の職業が女子にも開放されねばなりません。左右田博士も云はれたやうに、「一切の人格が、文化價値實現の過程に於て、たとひ其中の一個でも、その過程の表面以下に埋沒せらるる事なく、悉く皆その表面に於て、其れ自身固有の位置を占め」て、私の云ふ人類無階級的聯帶責任の文化生活を實現しようとするには、職業の自由を一齊に享有することを前提としなければなりません。

世には之に對して澤山の反對説があります。女子の能力範圍を良妻賢母主義に局限して經濟的獨立の不可能を云ふ論者があり、また女子の現在の心理、體質、境遇だけを根據にして職業能率の悲觀的であることを云ふ論者があり、また女子を裝飾物や玩弄物と見た男子の迷信的感傷的感情から、女子が職業に就くことを悲慘の行爲であると云ふ論者があります。併し最も古代からの勞働的精神と勞働其物とを神妙に維持して居る農民階級の女子を初め、屋内工業に從事して居る近代の女子が、今日もその母性に屬する勞働と共に經濟的勞働を並行させた立派な成績を示して居るのを見れば、第一の反對説は消滅すべき運命を持つて居ます。

平塚らいてう、山田わか兩女史はその御自身の經驗を基礎として、第一の反對說を唱へる人達ですが、兩女史が母體の經濟的獨立が不可能だとされるのは、何か兩女史御自身の上に、及び兩女史の境遇に、それを不可能にする缺陷がありはしませんか。農民や漁民階級の勞働婦人が立派に妻及び母の經濟的勞働を實證して居る事實を兩女史は何と見られるのでせうか。甚だ露骨な事を云ふやうですが、兩女史は經濟的勞働を必要とする家庭にお育ちにならず、從つてさう云ふ勞働の習慣をお持ちにならないのでは無いのですか。

今度の戰爭に由つて、意外にも女子の勞働能力が男子に比べて甲乙の無いことが確認される機會を得ました。最早この事は多くの辯明を要しない事實ですから右に擧げた第二の反對說も根據を失つたと云つて宜しい。第三の反對說は嚴肅な文化生活の意義を解しない人々のセンチメンタリズムとして唯だ微笑して置けば好いでせう。

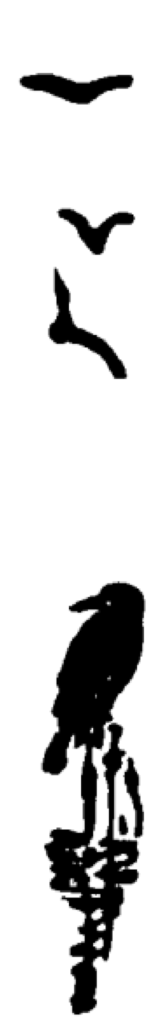
○

女子を閨房と臺所とに幽閉すること無く、之に職業を與へる事は我國に於ても早くから實行されて居ますが、併しその職業の範圍を男女平等主義に由つて擴げることに就ては全く拒まれて居ます。リツプスは女子の職業を肯定して「この問題に對する一般的の解答はすべての人はその特殊なる天性と能力とに從つて、その力に及ぶ限りの利と善とを（即ち文化價値を）この世界に造り出さなければならぬと云ふ規則である。此外に婦人の職業を決定すべき特殊なる規則の必要は無い」と云ひました。女子にも一切の職業を開放して、女子自身の實力に應じた選擇に任せたなら、さうして今日の女子を奮起させる必要上、特に職業上の自由競爭を奬勵するなら、山川菊榮女史の云はれたやうに、日本の婦人界も一人や二人の婦人理學士を珍重がるやうなみすぼらしい狀態には停滯して居ないでせう。リツプスが「人は出たらめに婦人の能力を否定せずに、

確實なる經驗に之を決定させる必要がある。そのためには、女性に其力を試めし、其力を發展すべき機會と權利とを與へなければならない。之を開展させずに萎縮させて置く限り、女性に如何なる力が潜んで居るか、何人も知ることが出來ない。……同時に人はこの問題に就て、單に女性と云ふ一般概念を以て議論を進めることを避けねばならない。女性もまたいろ〳〵である一人の女性の天性に適しないことで、他の女性の天性に適することもまた有り得るのである」と云つた眞理に、日本の男子も女子も深い反省を取られることを私は熱望します。

○

以上は甚だ粗雜な説明となりましたが、私は此五つの條件の上に基礎を置くことに由つて、初めて女子の改造が押しも押されもしない堅實性を持つと思ひます。是等の條件はやがて男子の改造の基礎條件ともなるものであつて、女子のために特に選ばれた賢母良妻主義とか、母性中心主義とか云ふやうなあやふやな生活方針では無いのです。此中でも他の四つは悉く一つの文化主義に向つて集中し、さうして文化主義は、各個人がその個性の差別に應じ、限られたる範圍に據つて、人類全體の文化價値創造の生活に參加する意味から云へば徹底個人主義であり、人格主義であり、之に由つて一切の人格が偏頗なく、依情なく、平等に、圓滿に、その生を享樂し得る意味から云へば人造主義であり、十二分に現在の人間性と社會事情とを考慮しながら、未來の飛躍の可能を信じつゝ合理的の改造を志す意味から云へば新理想主義であり、新浪漫主義であると思ひます。（三月七日）



社會の根本的改造は婦人の責務

――(女性の消極的性慾は男性を制裁す)――

山田わか

大戰爭後改造と云ふ言葉があらゆる方面に用ひられて居ますが、普通に云はれる改造の內容を見ると大抵其れは、唯、表面だけの改造か、さもなければ一局部の改造に過ぎないやうです。私は今人間社會の根本から、そして、一般に行きわたる改造に付いて少しく考へて見たいと思ひます。

私共のどうしても離れる事の出來ない此の社會と云ふものは、一體、どうして出來たかと云ふ事は、最早、學說の時代を過ぎて、今は明瞭な事實となつてゐます。十七世紀十八世紀頃には、未だ、社會哲學者達が社會の由來に付いていろ〳〵な說を立てゝ居ました。神の御心によつて造られたのであるとか、又は人間が相互の利益を計るために契約して造つたものであるとか云つてゐたのでした。

けれど、十九世紀の科學の進步は種の起原を明瞭にしたと同じやうに、社會の起原をも明瞭に說明しました。一時は、社會の起原は生命の起原と同じやうに神秘であつて到底人智で解釋する事は不可能とされてあつたのですが、今や、其の不可思議な霧はすつかり吹晴されてしまいました。

人間は此の地球上に生れたそも〳〵最初からお互ひに相依賴して居たものでした。生殖のために、又、子供を養育するために男女が結合しなければならなかつたのは勿論、食料を得るために或ひは敵の襲擊を防禦するために、同族は團結する必要がありました。これが社會進化の基礎であつたのです。ですから、人間生

活の過程は根本から社會的であつた事、同時に社會の進化は生活の必要から起つたのであつた事が明らかです。人間は孤立では到底發達する事は出來なかつたのです。

最初は、唯單に、物質上に於てのみ相依賴して居たのですが、追々に進歩を重ねて居るうちに、何時の間にか心理的に相依賴し合ふやうになりました。これが、今日私達が云ふ意味の社會の始まりです。心理的に相依賴し合ふやうになつて始めて社會と云ふものが生れたのです。ですから、社會とは原始時代の生物學上の統一則ち單なる男女の一對より發達した、心理的性質を帶びた一層高尙な一層複雜な統一であると見なければなりません。

人間は孤立狀態に於て發達したものであると見る假說は、社會が形成された發端をどうしても說明する事が出來ません。どうして人間が團體を造るやうになつたかと云ふ點に付いては智力的にも機械的にも說明する事が出來ません。けれど、人間は生活の必要上最初より共同的であつた。云ひかへれば、食慾愛慾の滿足を得やうとする本能から人間は自然と團體を造つたと云ふ事實が發見されるや、否や社會の生れた由來は明瞭になりました。

食物の供給、敵に對する防禦は團體生活の二大要素ではあつたのですが、併し、生殖と云ふ事は共等の二要素よりも、もつと、大切な要素でありました。そして、人間が進歩すれば進歩する程、子供の養育と云ふ事が重要視されて來ます。動物社會の團結は一時的であり不定であるに反し、人間の社會は恒久的です。動物の母子の關係が保たれる期間は極く短いものですが人間の母子關係は隨分長い間續きます。動物の子は生れると間もなく完全になりますが人間の子はなか〳〵一人前になりません。そして、一人前になる迄親はどうしても子供の傍を離れられません。

そして、此の長く一所に居なければならないと云ふ事が深い〳〵同情を生みました。男親の方は常に浮浪

して歩いて居たのですが、女親の方は必ず子供の傍を離れませんでした。其の女親の子供に對する同情に男親はツイひかされて男親も母子の傍に居るやうになりました。これが家族と云ふものゝ形成された始めです。此の家族から同族團體が出來、此の團體が大きくなつて、そして、今日の社會に於ける重要な制度が生れたのです。

あらゆる社會と云ふもの、たとへば、蟻の社會、蜂の社會などから人間の社會に至る迄、これ等は皆次代を生み育てるために、つまり生殖を營み母性を保護するために工夫されたものゝやうです。云ひかへれば、生殖を營み母性を保護する事が社會の中心となつて居るやうです。ですから、社會生活は子供養育を中心に發達したものだと或る社會學者が申しましたが、其のうちには大きな眞理があると思ひます。

ですが、有機的進化の二大要素、則ち、食慾と愛慾の外に人間には智力があります。此の智力は環境との爭鬪によつて、又、だん／＼と大きく複雜になつて來る團體生活によつて發達したものです。猶、他の言葉で申しますと、人間は經驗を合理的にしました。そして、此の經驗を合理的にしたものを以て人間は本能を制裁し、有利な調節を致しました。そして、此の經驗、この調節から傳說が生れました。此の傳說を徐々と變更し殖して行つて、そして、文明が生れたのです。

唯物史觀論者は人間社會の一切の現象を食慾と愛慾と其れから、敵に對する防禦に關しての活動によつて解釋しやうとしてゐます。彼等は大體に於て、社會心理の重要さを忘れて居るやうです。ですから、彼等の議論は動物社會を解釋するには充分ですが人間社會を解釋するには不充分です。何故なれば、彼等は人間の腦の智的中心が順應の重なる機關になつて居る事を不問に附して居ります。

ですから、社會の本當の改造は唯に經濟上の改善だけでは充分でない事は明らかです。勿論、經濟上の改善は必要ですが其れは表面の或ひは一部の改造にはな

りますが、根本のそして、全體の改造にはなりません。

文明の起原と發達、及び、社會制裁の制度の出來た事、たとへば、政府道德宗敎敎育の如きを解釋するには、人間の高等な心的、殊に、智力的進化の基礎の上に造られた集合的智力的生活を了解すれば足ります。云ひかへれば文明の進步不進步は本能則ち愛慾と食慾を制裁する、しないによつて定まります。そして今迄は政府道德宗敎敎育等が其の制裁の任に當つて居ました。けれど此れ等は重に外部的に食慾則ち經濟慾の制裁でありますし、且つ又消極的でありますから何物をも建設しません。のみならず此等自身が經濟上の要素を含んだもの、つまり、經濟の上に立つて居るものでありますから人間の二大本能を充分に制裁する事は到底不可能です。丁度株屋をして居る父親が子息の賭博をやめさせやうとするやうなものですから。到底、其れ等の諸機關は愛慾則ち性慾を制裁する力などはありません。本當に本能を制裁するにはもつと根本的な内部的な力でなくてはなりません。

其の根本的な内部的な力とは何でありませうか？それは婦人が天から賦與された社會制裁權です。今日迄、婦人は自身に與へられてある其の偉大な力、權利を自覺して居りませんでした。婦人の政權や法律の改正が絕對に無用だとは申しませんが、併し、其等の人爲の權利よりも、此の自然權を自覺し其れを利用する事が一層重大であり、より大なる效果があり、從つて急務です。

男子は放浪性を多分に持つて居るに反し、婦人は靜止狀態を好む性質に富んで居ます。ですから、元始時代には人口の集まつて居る處は男子中心ではなく、いつも婦人が中心でありました。從つて婦人が社會を制裁する權利を持つて居ました。が、其れよりも重大な婦人が天から賦與されて居る力と云ふのは、女性の性慾は男性の性慾にくらべて遙かに急でないと云ふ事です。男性が盲目的に異性を求めて來るに反し、女性は冷靜なる態度を續けて居る事が出來ます。これは何を

意味して居るでせうか？　天は種族の善のため、女性に充分配偶を選擇させる餘裕を與へたのです。此の天賦の特點を凡ての婦人が自覺したならば、そして、男子制裁の要具に用ひたならば社會の風儀は立所に改善されてしまいます。これが政府の力、道德の力、宗教の力、教育の力よりも偉大な、そして、有效な社會制裁の力になります。

悲しい事には今日迄婦人は其の特點を發見する事が出來ませんでした。其のため婦人は徒に、腕力の强い從つて經濟力を獨占してしまつた男子に今迄無條件に服從して居ました。自身の力と威嚴と任務を知らない處から婦人は男子の奴隷のやうに今迄されて居たのでした。婦人の性的の優者の位置、婦人の精神的の威化力が婦人自身からも、勿論、男子からも無視されて居たものですから、そして、男子の腕力が世の中に暴威をふるつて居たものですから、社會はかたわな進歩を遂げてしまいました。

凡ての婦人が參政權を得ても、資本と勞働の問題が解決出來ても、婦人が其の與へられた力を自覺せず、其の威嚴を保つ事が出來ず、男子の腕力に服從して居る間は、いつ迄も、戰爭と云ふやうな蠻行は止まないでせう。根本からの改造は難しいものです。

天は種族の善のため、婦人に充分配偶を選擇させる餘裕を與へたと前に申ました。種族改造の仕事は、そも〱配偶なる男子を選む時から始めて婦人の掌裡に委ねられてあります。婦人は社會制裁の力を次代の上に及ぼさなければなりません。そして、其れは次代が胎內にある時から始めねばなりません。云ひかへれば子供が未だ胎內に居る時から教育を始めねばなりません。そして、其れは心理的制裁でなくてはなりません。

子供の性格を造るには子供の行動を直接に取り扱ふのでなく、善行を創造するやうにしなければなりません。云ひかへれば嚇威や約束をもつて子供の意志を直接抑制するのでなく、社會的價値と云ふものを諄々と悟らせるやうにしなければなりません。規則づくめに

して罪科を罰すよりも模範を示す方がよろしいのです。つまり、牢屋よりも圖書館の方が效果があるのです。かくの如く、外部制裁よりも内部制裁の方が效果があるのは、内部制裁は感情と道理と意志に同時に達する事が出來るからです。

古より何千年の間、否、何萬年の間人は善を行へ、惡を避けよと敎へられて來ました。けれど、世の中に惡が絶えた事はありません。これはどうした事でせう。其の敎へが、制裁が凡て外部的であつたからです。外部からでは何者も根本から改善されません。そして、其の内部的の制裁は婦人の仕事である事は前にも申ましたが、今迄の母なる婦人はあまりに無學でありました。國家百年の計を立てるには此の點から出立しなければなりません。先づ、女子の敎育が重大事であります。

人間の母子の關係を保つて居る期間は動物の其れよりも遥かに永い事は前にも一寸申しました。母子の關係を保つて居る期間の短い動物に於ては母が子に制裁を加へ感化を與へる餘地がありません。從つて、動物には進歩がありません。社會もありません。これに反して、人間に於ける母子關係の永いと云ふ事は、此處に進歩の可能性がある證據です。動物の子は生れると間もなく形が出來てしまつてゐます。動物の子は材料でなく既製品なのです。ですから、千年以前の犬と今日の犬も同じやうです。

これに反して、人間の子供は材料です。材料も材料粘土のやうなものです。母の聰明な制裁、及び、感化によつてどうにでもなります。善くするのも惡くするのも母の力次第です。其の粘土なる子供を死にするのも貴重な磁器にするのも母の手のうちにあります。死であれ磁器であれ、とにかく一つのまとまつたものにして、つまり子供を成人させて社會へ送り出すのが母なる婦人の仕事です。ですから、婦人の賢愚は直ちに國民の賢愚です。此の點に一朝氣が付いたならば婦人の責任の如何に大なるものであるか。婦人の敎育は

如何に重要なるものであるか。又、婦人の仕事の如何に社會的であるかは直ちに了解出來ると思ひます。

要するに、國家は男女一對によつて形成された家庭を外的にひろげた形式に過ぎないのです。そして、何千年、否、何萬年の間人間が蓄積した無形の遺産、則ち、思想理想及び、社會的價値は、皆、父よりも一層親密な關係を子供に對して持つ母から其の子供に傳へられて行くのです。永い間續く母子關係が其れ等の遺産を次代へ次代へと傳へて行くのです。故に、婦人が其の任務を自覺し、そして、社會が婦人の母性を尊重し、其の任務を遺憾なく遂行せしむる事によつて國家は、否、世界は改造されるものと私は信ずるものであります。

（大正八、三、四）





（一）▽普通選擧案のお輿も輿丁の一八が逃げた爲め普通選擧の神主（今井）を煩はして大阪くんだりまで追かけさせたが結局輿丁は戻らなんだ。

（二）▽憲政の神様も時勢に鑑み洋行して冠の塗替へをやる



（三）

▽原敬どんが店に坐つてからお米さんは段々梯子を下りて來た。俺れが番頭して居た時はあれ程骨を折つたに上り詰めて許り居た氣儘娘の癖にと前番頭仲小路の怨言



（四）

▽陶庵公雪月花のご旅行樂しく巴里へ到着の頃はウキルソンはもうさつさと用事を片付けて歸つて仕舞ひ巴里にはウキルソンの靴の足跡だけ殘つて居た

田中問題の表裏

雲井鳥瞰

(一)

◇昨年來貴族社會の問題となつて居る田中伯、渡邊氏の復活事件は、表面、社會風敎上觀過すべからざる重大問題、事、皇室に關聯する事件と稱さるゝ外、其眞相に就ては、新聞紙等にも餘り多くを記されず、從つて世間の多數は、問題の實相經緯、運動の表裏目的に關して、殆んど其梗概さへも知り得ざる模樣である。勿論如何なる事件、如何なる問題に就ても、其表裏眞相を確認する事は、却々容易の業にあらざるのみならず、其概略筋書さへも窺知するだに困難なる事は、單り田中伯、渡邊氏の復活事件に限られたる譯ではないが、併し世間多くの問題は、大概一般的に又平民的に發起計劃せられ、自然に活動範圍も亦民衆的を例とするを以て、其波動を及ぼす狀況、又社會に反影する模樣も、同時に社會的民衆的となり來る事は、之れ當然の締結である。然るに今回の田中伯、渡邊氏の復活事件は、一般社會の風敎問題、事、皇室に關係ある事件と稱さるゝにも拘らず、其發端が貴族社會よりし、其關係範圍も亦自然貴族社會に局限されたる狀態にあるを以て、一般社會の之を見る事、宛も之れ階上の一運動、別世界の一問題たるかに解釋し觀過して居る形がある。是れ、さなきだに分明し確認し、若しくは窺知するさへも困難なる事件の經緯眞相を、更らに一層不明曖昧、果ては無我夢中の間に經過しつゝある所以であらねばならぬ。

◇若し單純に事件の主體を說明すれば、夫れは至極簡單分明の問題である。田中伯、渡邊氏の如き、社會道德上許すべからざる一大汚點の印されある人物を、此時此際宮中の一要職に復活重用し、而も夫れは畏れ多くも明治天皇の御紀を編纂せんとする重大重要の大役に据へたりとあつては、殊に我日本帝國としては、一日一刻も猶豫觀過すべからざる大問題であるとの理由であるから、此正理正當にして、而も堂々たる其主張に就ては天下恐らく何人も異議あるべき筈がないのである。併し世間一切の事物問題が、單に純理一偏でのみ通らぬ事は、今更ら云はずと明かな事情。別けて理由の正々堂々として、何人の耳目にも是非の判別、即時に決定さるゝが如き問題に於ては、更らに之を利用し又據りて以て乘ずべしとする、陰險不純なる野心家の機に生じ來る事の、一層多かるべき事情は、之れ又世間普通の內情と稱しても差支なき事柄である。今回の田中伯、渡邊復活事件に就ても、此一般的情弊、否な甚だ忌むべき不純陰險なる手段は、折角の正々堂々たる此主張理由に對して、如何にも氣の毒な次第ではあるが、宛も影の形に添ふが如く、貴族社會の一部に動いて居ることを認めざる譯には行かぬ。斯くて事件

の内容を愈々複雜多岐ならしめ、問題の解決を益々紛糾困難ならしむる虞があるのである。

(二)

◇先づ問題の發端から説明せぬと判らぬが、事の起りは寺内内閣當時の話である。山縣公の意見として、故大浦氏並に田中伯渡邊氏、此三人は、其後謹愼の情狀顯著なるものがあるから、モウ世間に復活さしても、大して反對故障もあるまい、何れ機會があつたら、夫々方法を講じては如何との事であつた。時の首相寺内伯も亦波多野宮相も、無論反對の意向がなかつたので、着着其機會を得せしむべく、事件の具體的表現に考慮しつゝあつたのである。然るに玆に意外にも有力なる反對者の出現を見たといふのは、寺内首相としては、其政府の與黨として、萬事萬端支持を受けつゝあつた政友會總裁の原氏が、故大浦氏の復活を極力排斥せんとする氣勢であつた。斯くて寺内伯も強いて之れに反抗的態度を採るの非常なる不利益を感知し、加ふるに夫れ程迄に此三人者の復活が重大事件にもあらざる關係上、之れは暫らく高閣に束ねて手を觸れざるの、寧ろ怜悧の方法なるを覺り、其後は之れが解決に關し宛も忘れたるが如き態度があつた。其内に寺内内閣倒れて原内閣となり、大浦氏間もなく頓死したので、原氏としては他の二人者復活に關して、何等故障を挿むべき理由が消滅したのである。勿論其間に土方伯の逝去其他で、宮中の重要位置に缺陷を生じたる等の重大理由もあつたが、兎も角大浦氏の死去といふ一事が、此二人者の復活を何等の故障なく進捗實現し得た、最も有力な理由であつた。

◇前内閣の計劃が、政友會の反對に依りて實現されず、爾も其反對せる政友會が内閣に立つや否や、即座に解決實現せしめたといふ一事は、事情の一切を知悉する貴族社會に於て、第一自儘勝手の遣方として、最も不快の感情を湧ましむる所以であらねばならぬ。況して夫れが大浦氏の死去と重大關係ある事を熟知する人々にありては、政友會の餘りに手酷しき自黨本位の利害觀念に依りてのみ、國務に當るの我利主義として、一層其反感心を挑發せしめた次第である。事は宮中の一問題たるに拘らず、又原首相が之れ宮内省の問題にして、政府の與り知らざる所と、飽迄表面上の責任問題に依る根據を楯とし、其責任を回避せんとするに拘らず、貴族院側の追窮頗る急にして、然らば之れに對する政府としての所見如何と、疊みかけて切り込み行く處、蓋し其根帶玆に存するからである。殊に況んや直接田中問題とは一言も之を口にせずして、何處迄も社會風教問題で歩一歩周密に論陣を進めて行く處、政府としては眞綿で首の纒を其儘に遣られて居る譯である。

(三)

◇扨て問題は其本筋に立ち還るが、此二人者の復活問題に就て、

最も眞面目に且つ初めに反對の氣勢を揚げたのは、貴族院及び樞密院に於ける守舊派の老人株であつた。而して是等の人々は眞實之れは國家風敎上の重大事件であると憤激したのである。勿論其間何等の野心もなく、又陰險不純なる理由劃策等もなかつた、全く一本調子に、上にしては事、皇室に關聯する問題であり、下にしては社會一般の風敎上に害毒を流す重大事件として、中心から國家の重大問題と觀取したのである。兎角する間に伯爵團の一部有志は、寄々協議の結果として、結束以て此問題の爲めに蹶起するとなつた、男爵團の一部にも亦熱烈なる有志團が形成される樣になつた。之れは舊臘中の事であるが、報道の機敏、社會の木鐸を以て自任する都下十幾種の新聞紙は、一切擧つて之れが報道を怠つたのである。故意か無意か之は敢て捜索する必要もないが、當時貴族社會に於ては、現内閣の新聞政策、流石にお手に入つたものなりと、皮肉を並べ居たるものの少なくなかつた事丈けは確かである。夫れは兎も角として、貴族社會に此氣勢の勝さに醞らんとする以前に於て、早くも態て來るべき其機運を觀て取つたのは、流石に敏捷先見の明に於ては、天下無比と自任する丈けありて、伊東巳代治子其人である。子は巧みに例の慣用手段を弄して、樞密院、貴族院方面の頑固守舊派を煽り、更らに猿臂を延ばして、憲政會側にも其氣勢を盛んならしむべく、夫々運動網を張つたのであつた。

◇此運動は或る程度迄効を奏し、樞密院、貴族院方面には、相當に氣勢を煽り得たが、流石に憲政會側に於ては、問題は至極明白にして相當の主張、理義ある運動に相違ないが、迂濶に之れを助成して、後日傀儡師の手先に翻弄せらるゝ虞なしともせず、愼重の上にも愼重の調査研究を遂げたる上にすべしとの事で、當分は之れに關する態度鮮明を保留したのであつた。一方巳代治子幕下の策士連は、憲政會側の此態度に慊らず、何とかして同件者たらしめんが爲め、夫れとなしに憲政會側の惡聲を放ち、甚しきに至りては、田中伯は土佐の先輩なり、憲政會は土佐派の政黨なるを以て、寧ろ田中伯を庇護せんとするものである抔、厭やがらせの謠言さへも傳へて見たが、更らに何等の反應がなかつた。其内に黑幕には伊東子ありとの内情、貴族院並に樞密院方面に知れ渡るや、從來眞面目に論議し、又は活動奔走し居たる守舊派の老人株は、何時の間にか次第々々に表面的反抗の氣焔を收める樣になつて了つた。斯くして最初の熱心なる主張者は、宛も既に燃え盡して灰となつたかの觀を呈する樣になつたのである。

(四)

◇然らば何故、斯樣なる奇現象を呈するに至つたか、之れは玆に一應説明して置く必要がある。伊東子の野心家として、又策士として一般社會、殊に貴族社會に警戒されて居ることは、今更ら事新らしい問題ではないが、特に此問題に就て警戒さるゝ所

以は、第一山縣公攻撃、第二宮相の後釜を狙ひ居る事、此二大問題が、直ちに夫れと聯想されるからである。而して伊東子としても、此事件に關する活躍努力は、主とする處、此兩問題に外ならぬのであつた。樞密院に於ける山縣系の勢力驅逐は、子年來の主目的である、第二は宮中に入りて、茲に自己の根據を据へんとの大野心であるから、今回の事件の如きは、子としては其宿望を達成する上に於て、之れに越したる屈強の好機會好問題がない譯である。加ふるに過般皇室婚嫁令の問題で、あれ程手酷しく樞密院で苛めつけられ、果ては大味噌をつけて、從來の勢力今何處へやら、院内に於ては全く孤立無援、只一人の金子堅太郎子を味方とする以外は、末松謙澄子さへ反對側に立つといふ慘めな境遇、不平懊惱の場合とて、一層山縣公に復讐せんとの念は燃へ立つて居るのである。搗て加へて問題の當の責任者は波多野宮相である以上は、一矢能く兩人を射貫くの好機會、世間は勿論何等反對の餘地なき、是非曲直の最も明白なる事件であるから、此機會に乘じて宮相をも排斥蹴落す事、必ずしも困難なる問題ではない事を信じたに相違ない。當人としても亦問題の性質上、此計劃の必ずしも單なる不可能事を、獨り決めに夢想した結果に立つとのみは云へんのである。併し如何に問題も機會も其間に一點朱の入れ處がない十分滿足なものとしても、計劃者其人を得ず、發頭人其柄にあらざるに於ては、到底人の利を得ることは不可能な話で、之は事々しく其理由を述べる迄もない事である。此意味に於て、伊東子折角の名案妙策も、子自身の存在稍分明するに至りて、却つて問題の火の手を鎭める樣な結果に傾いた次第であつた。是れ一に繫りて個人其物の德望人格如何に關する問題であるから、如何に理屈を並べ論議を盡して見ても、亦如何ともすべからざる事態である。

（五）

◇夫れで伊東子の手が、次第々々に此活躍運動の間から拔かれる樣になつたので、問題の火の手は又々風力を加へられた火事場の樣に燃へ上つたのである。中堅は云ふ迄もなく伯男階級の有志者であるが、熱心なる運動、執拗なる努力は、終ひに此事件をして、一般貴族階級の大問題たらしむるに至つたのである。最初伯男有志團の計劃では、之を一般社會的の表面問題とせず、華族間の問題として、伯子男三階級の一致申出により、波多野宮相に覺書を提供し、田中伯、渡邊氏に辭職を勸告せしめんとの穩和手段を講ずる積りであつた。此形勢を見て取つた渡邊氏は、事の未然に早速辭職を申出て了つたが、田中伯は却つて反撥心を起し、一度恩命を辱うして此重任に膺つた以上は、粉骨碎身敢て或ひは及ばざらんことを恐懼する以外に、老臣としては執るべき道がないのであると、絕えて辭職の意志なきを宣言したのである。聞けば其内に辭職する心持であつたが、餘り外間で彼是云々する爲め、此際は寧ろ之れに反抗するとの、國家

に對して親切であり、又一身の潔白を天下に表明する上に於ても、最良の機會であると自覺した結果、斯くは却つて反撥的態度に出たのだとの說もあるが、兎に角伯の挑戰的宣言公表に依りて、問題は更らに一層紛糾し來つた次第である。

◇伯男有志團も、田中伯に斯樣に高飛車に出られた以上は、尙更ら其儘に收まり兼ぬるは、事情の當然な次第で、其後益々運動の手綱を強く引き緊めなければならぬ場合となつた。夫れで第一着手としては、豫定の計劃通り三爵一致の覺書を作らうとしたが、子爵團は終に應じて呉れない。却つて踴起運動の結果は、田中伯の反撥心を挑發し、問題の解決を紛糾困難ならしめたと稱して、其罪の大半を伯男有志團の行動に歸し、更らに華族階級としては、斯の如き團體的運動を開始する事の、頗る不穩の行動なる所以を反駁して、寧ろ該運動の中止を勸告するのであつた。斯て伯男有志團折角の期圖は、全然玆に畫餅に歸したのであるが、併し運動は之れが爲めに益々熾烈となつた、同時に又表面的となるのも止むを得ない。初めは貴族院の問題とする豫定でなかつたが、終に坂谷男の貴族院に於ける頗る痛烈なる質問となつたのである、更らに首相の答辯には、滿足出來ぬとの言明迄附け加へさせたのである。一方侯爵の有志者迄網羅して、華族會館に於ける華族有志の集合を催し、波多野宮相に對する覺書提出と迄、貴族としては從來殆んど其例を見ざる深刻激烈な程度に迄進んだ所以である。されど依然として子爵團は、一致結束加盟を峻拒して此運動に參加しないのである。

(六)

◇問題の經過は今や玆に止まり、伯男有志團としては、箭は既に絃上を放れたが、今に何等の手應へがない。一方波多野宮相としても、箭は確かに身に立つたが、別に夫れ程重傷を負はせる程度でないから、案外平然と納まつて居れるといふ狀態。併し華族間に於て斯樣な問題を何時迄も未解決に殘留し置く事は、如何にも將來に甚大の餘映を貽す所以で、華族間に於ては勿論、亦宮內省としても、貴族院としても、全く厄介至極迷惑千萬な問題である。されど既に問題が白熱高潮に達し、相互極端なる感情の離隔を來して居る今日、何れか一方に勝利を得せしむる解決方法は、例へ問題が一段落を告ぐるとしても、其祟りは何時迄も殘存して、何か問題の起る每に紛糾の種子を蒔いて置くも同然。夫れに就ては例へ當面の問題其物の解決が、姑息塗糊的なるにしても、禍根を將來に貽さぬ事を根本主義として、之れが適當の解決方法を講ぜねばならぬ。其處で四方八方障りなしの、三十二方美人とも云ふべき妙案捻出に苦心した結果、編纂局の移管問題と云ふ、隨分苦しき不徹底の一案に想到したのである。從來宮內省に設けられた編纂局を、改めて國家事業に移し、玆に宮內省の手を離れて、內閣直屬の一部局とせば、田中伯の總裁は辭職免職等の表沙汰とせずして自然に消滅

すべく、一方伯男有志團の表面に唱ふる素志は（敢て表面的素志と云ふ）、之れ又自然に貫徹される譯であるから、其何れにも怪我なしに、表面上の解決はつき、又相互共面目上には何等の汚點を印せずして濟むといふ譯柄である。

◇斯て所謂田中問題なるもの丶一段落は、宛も引分けの狀態で勝負なしに解決さる丶妙案（？）は出來たが、玆迄確執した貴族社會の内情は、却々之れ限りで、靑天一碧忽に收まりのつきそうな狀態も見へぬ。夫れといふのも、表面伯男有志團の唱道する處は、單に社會風敎問題との標榜なれども、其内部には老閥排斥、勢力圏の擴張など、種々錯綜したる理想目的を抱藏して居る事である。此經緯を叙述すると、久しい歴史附の問題であるから、却々一朝一夕には云ひ盡されぬが、要するに、由來貴族院に於ては無勢力なる伯爵團の、事毎に研究會、幸倶樂部に無視される境遇を、不平鬱々、無念至極に思つて居たとは今更ら云ふ迄もない。之れと同時に木曜會の瓦解分裂以來、男爵議員の多くは幸倶樂部内の無所屬に屬し、常に勅選議員の頤使する所となりて。常に頭の上らざる境涯に不滿侮辱を感知し居ることは久しい間の問題であつた。斯て伯爵議員團の内には、時に貴族社會に類例稀なる脫線的行動を敢てする者が現はれ、又無遠慮に其所存言議を公にして、絶えて憚らぬ輩も珍らしくはなかつたのである。之れを目して伯爵連の自棄的行動とも評するものがあつた程に、伯爵の若手連中と云へば、無遠慮脫的線なものとして、一般社會からも目されて居たのである。男爵階級に於ては、斯様の現象を耳目にする場合は少なかつたが、何れは一度木曜會の再興を計らうと云ふ念慮は、期せずして各議員の間に一致するものがあつた。而して機會だに至らば、猛然として立つべく、内部の結束は略出來上つて居たのである。自然の間に盟主首領として推さる丶に至つたのは、故有地品之允男で、男も亦疾に其決心を抱藏して居たのであつた。

◇此氣運を見て取つた前内閣の遞相田男は、己れ男爵團操縱の野心滿々たる折柄、直ちに有地男を拔いて樞密院に祭り込み、男爵議員團をして、折角の企圖を中途に腰折らしめたのであつた。以前の木曜會を攪亂瓦解せしめたるも田男の惡辣陰險手段、今回の有地男引拔策も、亦田男の計略なるを知れる心ある男爵議員連は、一度ならず二度迄も男爵界を攪亂する讐敵として、田男に對する怨恨益々深かつたことは云ふ迄もない。併し事は既に決せられた後日であつた爲め、暫らく隱忍自重の外なしと觀念し、依然有地男を隱れたる盟主として、此計劃を進めつ丶あつたのは疑ひもない事實。昨年の貴族院議員總選擧も無事終了し、之れより愈々男爵議員團旗揚の段取りに進まうとする矢先に、不幸有地男は他界の人となつて了つた。眞か僞か保證の限りではないが、有地男臨終の遺言には、飽迄初一念を貫徹して、男爵議員團の創立を期せよとの一言があつたとさへ傳へられて居る。併し有地男の逝去によりて、此計劃に非常絶大

の打撃を受けた事は云ふ迄もない。實を云へば、殘されたる男爵議員は、中に相當の實力家もなきにあらねど、畢竟するに鈍栗の丈較べで、內に衆望を荷ひ、外に經歷と勢力の以て、適れ頭目と許さるゝものが居ない。之れ男爵議員團旗揚げには、最も不便不利なる、殆んど不可能的の弱點なのである。されど初一念に對する執着と、久しき間の侮辱的境涯に對する鬱憤は、何時か其具體的發露を見せずに居られぬと、之れ當然の歸結である。時宛も田中問題といふ、社會風敎上の問題として、又貴族社會には最も注意留心さるゝ事件の持ち上つたのを幸ひ、玆に同じ不遇不平の伯爵團と連袂蹶起するに至つた次第である。

（七）

◇翻つて子爵團の此運動に參加を拒絕し、飽迄冷然と我不關焉の態度を持續したのは、伯男團體をして此運動の中堅ならしめ、結局其成功を助勢するとともならば、次いで來るべき問題は伯男團體の勢力增加である。加ふるに研究會に對する有力なる一團體組織は、男爵議員年來の宿望であるから、自ら助力して强力なる敵黨を形成して遣る結果にもなる。研究會としては斯樣な愚擧は、自分で自分の實力を削ぐも同然であるから、何處迄も此運動勢力を微弱爲すなきものにせざれば、自派としては非常なる不利益の立場に陷る前途を考へねばならぬ。それが即ち最大原因で、又波多野宮相は自派出身の長老である事も、副因としては可なり有力なるものである。斯樣な複雜錯綜した經緯內情があつての田中問題であるから、却々簡單に濟まぬ事情は明かに夫れと推される次第であるが、更らに男爵議員團の企圖する所は、從來倶樂部內の茶話會に屬する勅選議員に依りて、萬事萬端指揮さるゝかの觀を脫せんとする事是れである。所謂老閥打破なる問題が夫れで、男爵議員團の組織例へ不可能に了ると雖も、セメては此勅選の頤使から脫出すると丈けでも、此際實現したいとは、彼等の堅き決心と強い執着であるから、今日此際急に其事、實現せられずとするも、今回の事件を機として、漸次其態度を明かにし來るべく、恐らく問題每に其鋒先は步一步露出し來ると推せらるゝのである。

◇要するに今回の事件は、單純なる田中問題、更らに一般的に云へば、社會風敎に關する問題と云ふ丈けに過ぎぬが、其關係範圍斯の如く頗る深刻且つ宏大にして、今後の政治界には深甚且つ微妙の影響關係を及ぼす重大問題なるに依り、政府者は勿論として、一般政界に於ける其注目警戒の態度は、實に外間の想像以上に大なるものがある。今後に於ける問題の發展方向は如何に、更らに其餘波が流れ流れて、今後如何樣の怒濤となり海瀟を起すに至るか、夫れとも亦男波女波の如何にも穩かな漣波となりて、渚邊に戯るゝ漁夫の子供を洗ふ位に止まるか。是れは兎に角最も興味ある問題として、今や前途に投げ出された次第である。

新聞記者組合の精神と實行

大庭柯公

(一)

歐米の新聞紙が、夙に金權化しつゝあつて、今後も尚一層金權化せんとする傾向であるに反して、我國の新聞紙は、今尚ほ大體に於て、官權化の色彩に富んだものである。例令へば英國に在て、デーリーテレグラフやモーニング・ポスト等、佛國に在て、タンやマタンや若しくはゴーロワ、フイガロの類、獨逸に在ても、安價新聞として氣受の好きモルゲン・ポストや、發行部數の最多と云はれるベルリーナー・ターゲブラット、更に社會黨機關フオルウエルツなどは、孰れも猶太人の所有に屬してをつて、新聞紙そのものゝ根本傾向は金權本位である。我國には今日未だ此の新聞紙の金權化がない、これは我が言論界の幸福であり、誇りであるが、併しそれに代へて、或は夫れにも増して、今日依然たるは官權本位の新聞紙である。昔時新聞通信の幼稚なる時代には、若くは獨立した言論の見られなかつた時代には、その新聞記事が、官權本位又は官僚的資料に過ぎなかつたことは、已むを得ぬ次第であつたに相違ないが、今日依然として官權本位の新聞紙であることは、歐米の新聞紙が滔々として金權化して行くのと同樣、新聞紙本來の意義から見て、遺憾千萬な事である。私は最近「中央公論」誌上に於て、新聞記者組合組織の必要を提唱し、又黎明會の講演會に於て「新聞紙の民衆化」を演説したことであつたが、爰には更に新聞記者組合の精神を闡明して、之が實行方法に論及して見ようと思ふ。

下院が國民の代議機關であらねばならぬ如く、新聞

紙は民衆の言論機關でなければならぬ。勿論新聞紙の報道は、普遍的のものであつて、官民內外の別のあるべきではないが、その言議は、飽まで民衆代辯機關であらねばならぬ。然るに我國の新聞紙は根本的に非民衆的である。先づ新聞紙法を見よ、實質に於て官權の命令下に在るではないか、發行禁止といふ生殺與奪の權は、正さに官權の手に在るのではないか、發賣禁止といふ痛棒も、官僚の手に持たせてあるではないか。保證金制度といふ金縛り方法も、何んの不思議もなく行はれて居るではないか。或は言ふであらう、現に今新聞紙法は、其改正案さへ議會へ提出されんとしてあつて、現行新聞紙法は、早晩改正を見るであらうと。併し私の見る所を以てすると、今度の新聞紙法改正案の如きは、新聞紙を金權化することを欲する新聞經營者側と、それを常に官權化せんと欲する官權との、妥協案であるといふを憚からぬ。それは何故であるかと云へば、現行新聞紙法中一番に全廢しなければならぬ保證金制度さへ、改正案は之に手を觸れずに、官權の希望と特權とを其儘にして置いてあるではないか。保證金制度は、言論機關發生の妨止方法である、言論機關を孕兒のまゝで墮胎せしむる好方便である。隨て新聞紙法の改正は、該制度の全廢を、第一急務と爲すべきが至當である。然るに事實は之に反して、今回の改正案が、此の第一急務に手を觸れぬといふに至つてはこれを金權と官權の妥協であると見る外はない。そして一方に於て、依然一切の責任や處罰を、所謂署名人──名義上だけの看板人に負はせて、實際執筆の記者其人は、責任から回避し得る便法を、改正案中に規定せる如きは、新聞記者の德義を、自から公然蹂躙して官權と妥協せんとするものである。斯んな要點を避けたり、根本精神を謬つてをる改正案が、果して何ほどの改正の實を示し得るであらうか。之を要するに現行新聞紙法は勿論、近く或は實現を見るべき改正新聞紙法にしてもが、畢竟官權下に新聞紙を作るにのみ適して居つて、決して民衆本位の新聞紙を造るに適してはをらぬ。

(二)

現行新聞紙法の改正を必要としながら、而かも何故に改正の實の擧らないやうな改正案が出來上つたのであらうか。それは外でもない、新聞經營者若くは其代表者のみに依つて、作り上げられた改正案であるからである。言ひ換へれば、新聞記者一般の意志が閑却されて、邪魔物にされ幽閉され蹂躙されてあるからである。俸給や賞與のみを貪つて、經營者の鼻息を窺ふことのみに老練である所の、今日の、我國各新聞社の幹部なるものは、經營者の利益上から、又自己の利益上から何時も一般記者の存在を眼中に置かぬ、如何なる場合にも一般記者の人格を尊重することを知らぬ。新聞紙は決して幹部者のみに依つて、作らるゝものではなく記者の手を借つて民衆の意志に依つて、作らるゝものであらねばならぬ。然るを其記者を閑却し、其記者に謀らぬ所の新聞紙法改正案に、何程の誠意と眞價とがあらうか。今回の改正案が、畢竟新聞經營者と官權との妥協案に過ぎぬのは、全くその爲めである。

一般官權は勿論のこと、新聞經營者及其幹部なるものは、一般記者を事毎に無視せんとする、一般記者を沒人格的に取扱はんとする。ツマリ一般記者に對して攻勢を取つてゐる、壓迫手段を取つてゐる。若し此の儘に過ぎ行けば、記者は永久に埋沒的にあらねばならぬ、隨て記者の手に依つて作らるゝ眞正の新聞紙は永久に見ることは出來ぬ。それ故に記者側の立場よりすれば、今が新聞經營者の其幹部に對する、對立運動の必要ある時期である、記者の人格的承認の强求時期である。そして之れが運動方法、要求方法の第一歩は一般記者の大聯合大同盟を組織することである。

一般記者の大聯合を具體したものが、所謂記者組合であることは言ふまでもないが、今其の組織と實行とを説くに先つて、その立場上、經營者側との根本的相違の點を、明かにする必要があると思ふ。則ち新聞經營者(總ての場合に於て所謂幹部をも含む)は、金權を背後の力とする、そして時には官權とさへ隨意に妥

協する。之に對して一般記者は、何者を味方とし、何者を背後の力とすべきであらうか、言ふまでもなく一般記者の永久不斷の味方は、一般民衆であらねばならぬ。故に新聞記者の位置は、官權や新聞經營者に對して、當然對立の位置でなければならぬ。新聞記者が、事實上一新聞紙の社員であるといふことからして、記者自身に、其新聞社主の配下のもの、乃至は其の隷屬下にあるものと思惟するものがあるならば、それは大なる誤謬である。記者は官權、金權は勿論、經營者に對しても、決して隷屬關係を持すべきものではなく、飽までも對等關係に在るべきものである。官權者流や經營者側が、官權とか金權とか、權力を味方とするに對して、記者は絕對に民衆の力を味方と爲すべきである。而してその民衆の力を、如何に背後の力として、記者の人格的權威を發揮すべきかは、記者組合の實行方法として、次項に述べるであらう。

(三)

今日我國新聞記者の現狀は、餘りに個々別々である何等聯絡もなければ、聯合もない。これでは力を產み出す譯に行かぬ、對抗し戰鬪する譯には行かぬ。そこで私は一般記者諸君に向つて「諸君先づ團結せよ」と叫びたい。そして其方法の第一着としては、現在便宜上に組織されてをる各倶樂部又は會――例令へば大手倶樂部、霞倶樂部、黑潮會等の類――を、同一目的の下に聯合することである。是等の倶樂部又は會は、今日に在ては單に新聞材料蒐集の――と云ふよりも、官權製出の御用資料を頂戴するための、便宜上の會合に過ぎぬ。その外には些の意義だもなき會合である。隨つて斯んな團體に、何等の權威も伴はぬことは勿論である。私が叫ばんとする記者の團結は、斯かる無意義のものではない、少くとも團結の必要を、個々に自覺して造られた團結であらねばならぬ。卽ち(一)自分の生存の爲めに(二)新聞記者の獨立的人格保持のために(三)記者の本來の職責を完ふするために、有力なる結束を實現する團結でなければならぬ。則ち斯

かる意味に於て、先づ有らゆる現存の記者會合の、聯合團結を圖るべきである。そして夫れが直ちに記者組合と爲るとも、その聯合團結から、別々記者組合を興すとも、孰れでも宜しきに從ふが可い。

第二の仕事は、右の聯合團結は一體と爲つて、二個の期成事業に任せねばならぬ。それは第一には、各新聞社をして必定的に、編輯總會議制を採用せしむることである。即ち編輯部員總體、換言すれば記者全員が出席し、發議し、議決し、實行する編輯總會議の設定の必成を期することである。第二には、幹部廢止の期成同盟である。編輯部員各自が、責任を以て事務を遂行する以上幹部の必要が何處にあるか。新聞製作の作業は飽までも共同作業であらねばならぬ。共同作業は總員の全力が、平等に働いてこそ有效である。其處に特權階級があつてはならぬ、況して今日の所謂幹部のやうな、經營者の爲めに代理的勢力が存在してはならぬ。以上二個の期成事業は、一般記者の權力伸張上是非とも之が實現を期さねばならぬ設定である。此の兩個の設定が實現されぬ以上、記者組合は永久に實權を持つ譯に行かぬ。蓋し記者組合の眞意義は、新聞記者の精神的及物質的の獨立的人格の承認である以上、新聞編輯上の一切の事務の上に於て、記者が人格的に承認されべきことは、當然の事である。特に幹部なるものを存置し、之に議定實行の權能を附與することは經營者少數記者(幹部と稱する)の橫暴であつて、最大多數記者の獨立的人格を無視するものである。記者聯合團體が、此の二個の期成事業を最先の事業とし、此二個の設定の期成せられざる以上、記者組合の成立が無意味である理由は、爰に存する。

第三には、記者組合が其の實權を有效に支持する方法である。之に關しては、曩に私が記者組合組織の提唱を爲したるに對して、二三の反對論――と云ふよりも寧ろ疑問を、私に寄せた人々がある。それは記者組合そのものは、如何にも理想的であるが、之が實行は困難であらう。現に今日の新聞記者は事實上、新聞經營者の被傭人である、從つて傭主に對して對等の地位

に立つべき記者組合は、如何なる實際的方法に依つてその實效を擧ぐべきであるかと云ふのであつた。私は今之に答へねばならぬ。

(四)

經營者に金權が存する以上、之と對等たるべき記者組合にも、何等かの力が必要であることは明瞭である此處で一寸誤解のないやうに斷つて置くことは、此場合經營者に對立するものは記者個人ではなく、記者團體卽ち記者組合であることである。則ち團結といふ力の下に立つた多數の記者であつて、一社々々に限られた個々の記者ではない。斯て其處に第一の力が出來た。

團結した記者には、更に第二の力が產れる、外でもない民衆の力である。民衆は平常は新聞社を民衆の有力なる味方であると思ひ込んでをる、飽まで信賴してをる。然るに新聞社が、一朝非民衆的立場に立つに至つた場合には、群衆心理的に斯かる新聞社の燒打さへ實行するものである。卽ち公平にして正直なる批判者である民衆は、新聞社が彼等の味方である時に於ては新聞社の前に來つて、其の萬歲を絕叫するものである同時に民衆は、若し新聞社が一朝官權や金權の味方になつた場合には、其の新聞社を燒打ちもし、打ち壞しもするものである。現に其の實例は、從來決して乏しくはない。團結した記者、卽ち記者組合の有力な味方は、卽ち此の民衆の力である。假令へば爰に記者の人格を蹂躪して、新聞紙の主張を官權又は金權に賣つた新聞經營者があつたとする。その場合記者はその職分に忠實なるべく、此の經營者の處置に絕對的反對をする、その絕對的反對は、勿論團體の力卽ち記者組合の力に倚つて經營者に反抗する、而かも尙ほ經營者の暴力が、記者組合の意志よりもヨリ强かつた場合に於ては、組合は則ち第二の力に倚らざるを得ない。卽ち民衆の公正な判斷に訴へ、民衆の力に倚りて、該新聞社に對して非買同盟を實行せしめることとである。激昂した場合には新聞社の膺懲さへも敢行する民衆は、記者

組合の主張公訴にして正しき以上、直ちに之に味方して、該不正新聞社に對して、其新聞紙の非買同盟を實行する位は、容易に行ふべきものである。

勿論此の方法に訴へるまでには、種々の緩和手段があらう。記者と經營者との衝突、若くは記者と官權との衝突にも、記者組合なる團結力さへ現存すれば、大概の解決は着く、大概の解決と云つても、曖昧な妥協の意味ではなく、多くの場合記者側の勝利に歸すべき解決に到達し得らるゝことゝ信ずる。併し最後の場合は、永久の味方である民衆の力に倚らざるを得ぬ。これでも尚ほ記者組合の實效的權能を疑ふ人があれば、其人は是れ民衆の偉大なる力を信ぜぬ人であつて、時代を理會する能力を缺いた人である。

○

黒龍州は不相變混沌場裏に上下流暗鬪致居候豫想通り過激派はぼつ／＼起りかけ候

青年時代十八史略を讀み其末代の經歷が

宗明は軟派跋扈し破れけり

の感なくんばあらず自己自派を本位とするものは兎角國家を誤るは既往歷史の證明する所大と小との差こそあれ原則は唯一と存じ候

なければかしと思ふ間にすきができ

いつそ勇進することが成功と存候

於黒龍州武市　陸軍少將　山田四郎

故國に餞するのことば

尾崎行雄

(一)

政は正也、子帥正を以てす、孰れか敢て正ならざらん、自ら正うして人を正し、自ら行ふて、人之を信ず、政を爲すに德を以てす、此に以て至し。

飜つて之れを我國に看よ、上政府に正を行ふ者なく、之を擁護する政黨者流は强盜の集團に等し、國民信賴せんと欲するも豈に得可けんや、政府已に信なく、國民亦之を賴まず、上下一致の政治を爲すこと能はざるは、自然の數、理の當然ならずや。

今や我が國民は世界大戰の刺戟を受けて、國民的大自覺を誘致し、滔々堤を決するが如き勢ひを以て侵入せる新思想は、青年血氣の勇を鼓して一大變革を來さんとす、邦家の爲め眞に喜ぶべし、然れども亦玆に此新勢力を擁塞して江河の清流を阻止せんとする者あり、何ぞや、即ち封建的思想の病弊膏肓に入れる輩是れ也。

由來我が國民は、封建的思想の根柢極めて深く腦裡に滲透し、殆んど先祖代々、遺傳的に其病弊に囚はれつゝあり。明治維新當時、我が國民的思想の變動は、殆んど根柢より德川三百年の封建的迷夢を打破し、社會的にも、思想的にも、殆んど丁髷的國民の域を脫したるが如く思惟したりと雖も、變革せられたるは、單に外面的形式的の範圍に限られ、內部的には殆んど何等改造せられたる痕跡を遺さゞりき。是れ我國民の封建的思想が、全然我國民の腦裡に固着せるの致す所なり、近時所謂新思想なるもの、青春の壯者を動かし、或は此れに依つて封建思想を一掃することを得るやに

感ぜざるにあらざるも、而も根强き弊竇は遂に一指をも染むること能はざるものあらずやと、憂慮の至りに耐えざるなり。而して此封建的思想の頑强なるものを他に求むれば、獨逸即ち之れなり。

（二）

千七百九十九年、ナポレオンが埃及を遠征し、シリア海岸に進擊せしとき、其高級副官に命令して曰く「ジャッファ（シリアの海港）の捕虜は、戰鬪員たると、又武器を有せる土耳古人たるとを問はず、悉く之を海岸に運びて一人も殘さず銃殺せよ」と、此殘酷なる命令は、基督敎的歷史家の齊しく攻擊する所なるに拘らず、普國參謀本部のワルテンブルヒ伯は、曾つて之れを賞讚して曰く、「單純なる敎訓的歷史家の眼には、該行爲は殘忍極まるものと映ぜんも、實際的軍事史眼より見れば、決して然らず、若し斯る行爲にして、一軍の安全を圖る上に必要なりせば、啻に是認すべきのみならず、將來の戰爭に於て、斯る行爲の繰返さるゝは、勸奬するに憚らず」と、斯くの如き無神論者的思想は、普國人に依りて常に養成せられ、遂に一般人民の品性に浸潤せること深かりしのみならず、其支配者の精神にも亦透徹するに至れり、是れ獨逸が今次の戰爭に於て、殘忍酷薄見るに忍びざる蠻行をも敢て辭せざりし遠由ならずんばあらず。我が國民思想史には、未だ斯くの如き殘忍暴虐なるものあるを聞かずと雖も、而も、尙之れに類似せる覇道的思想は、封建的思想と共に國民の腦裡に浸潤し、拔かんとして拔く可からざるの弊竇を釀成し來れり。是れ極端なる帝國主義、軍國主義とは離るべからざるものにして、軍國主義即ち愛國主義なるかの如き思想を養成し來れる結果に外ならず、政は正なり、兵は奇なり、予は軍國主義を以て覇道と爲し、政治を以て王道を體現せしむべきものと爲す、從つて軍國主義の破壞は、即ち覇道の撲滅にして、眞の政治は王道の勃興復活なりと信ずる者なり。

古來正義人道を規矩として起てる者の榮え、覇道的沒人道的國家の一時榮ゆるも數代ならずして倒潰する

は歴史の明白に示す所なり、否遠き歴史は之を檢するの要なし、近き世界大戰の實例に之を鑑みよ、沒道義的國家たる獨墺は、人道主義の旆下に參じて戰へる聯合國に勝利者たること能はざりしが如き、洵に明かなる實證を吾人の眼前に展開せしめたり。我が軍國主義的思想に囚はるゝ者、封建思想の迷夢未だ醒めざる者、宜しく此殷鑑に三省すべきものなるに拘らず、今尙之れを覺らざるものゝ如くなるは、邦家の爲め洵に痛歎の情に耐えず、元來近時侵入し來れる新思想は、覇道を一擲して王道に就き、人道主義を高唱して軍國主義を驅逐せんとするものにして、遺傳的封建思想を根柢より掃蕩する唯一の道なるに拘らず、恰も之れを以て危險思想視し、努めて之れを阻止し、抑塞せんとするの形迹あるは笑ふべし、之れを例ふれば、電車の危險なるを思ひて利用せざるに等し、愚之より甚しきはなし。

(三)

我國は今や巴里講和會議に於て、英佛米伊諸國と共に比肩して、五大强國と稱せられ、國民は恰も世界の一等國として是認せられたるものゝ如くに、有頂天となつて歡喜し居ると雖も、巴里會議の現狀に看よ、國際聯盟の如き重要問題の議せらるゝに方りては、我が使節は殆んど其下相談にも與らず、英米佛三國の豫め妥協し終りたる草案に對して、單に追隨して贊成するに止まり、片言隻句發言の權利をも有せず、是れ果して彼等三大强國が、日本を以て眞に自己と同等の强大國たるを以て遇したるものと云ふことを得るや、成る程日本は過去に於て淸國に勝ち、露國を膺懲したるとありと雖も、幵は已に過去の迷夢なり、試に思へ、日本の軍備は五十萬の兵力を擁すと稱するも、五十萬の兵力を有するは、塞耳比亞、モンテネグロの如き二三等國も尙能く之を備へり、財政は如何、正貨十餘億の增加に、國富增進を云爲すと雖も、之れを英米佛伊諸列强に比する時は、眞に九牛の一毛に過ぎず、斯くの如くにして尙且世界の一等國と自任するの無謀なる、洵に

驚くに耐えたり。予をして云はしむれば、日本が五大强國の一として巴里會議に參加することを得たるは、全く英國の情誼より出でたるものにして、英國は曾て日本が日英同盟の誼に依りて參戰したる恩義に對し、之に報ゆるの道として五大强國の一たらしむることに盡力したるものなり、故に米佛伊國等にては、或は日本の五大强國たることを、最初より豫期し居らざる者ありしを疑はず。

日本は斯くの如き極めて薄弱なる根據に立ちて、五大强國の一たり、是れ果して幸福と稱すべきか、若し日本にして眞に實力ありて伍伴に列したるものなるに於ては、吾人は決して憂とする者に非ず、然れども殆んど歐洲の二三等國と同樣なる實力の上に起ちて、而も一片の情誼以外、政治的にも、外交的にも全く孤立の境遇に在る狀態を以てしては、到底晏閑枕を高ふして臥榻の下に仙夢を貪ること能はざるなり、然り、日本は孤立なり、無援なり、日英同盟ありと雖も、尙此孤立無援の境涯より救出すべき力と爲すに足らず、東洋に於て當然日本と相提携すべき支那は、已に日本に反きて巴里講和會議を攪亂し、努めて日本を避けて英米佛と結ばんとし、米佛亦滿腔の熱情を傾けて、日本と相提携するの意ありとは思はれず、現在に於て形勢已に然り、況んや將來に於てをや。

外交的危機は已に業に今日に於て明白なる判斷を下し得ること上述の如し、之れに處するの道は、爲政者も國民も、今日より充分に考慮せざるべからざるに、現内閣の諸公も、我が國民も、徒らに現在の五大强國てふ迷想に醉ひて、何等將來に處するの道を講ずるの模樣なし、鼓を鳴らして之を警告すと雖も、政府者は之を笑ひ、政黨は冷視し、國民は關知せざるの觀あり。

(四)

予が玆に日本を以て孤立無援と云ふは、更に之を詳言すれば、將來經濟的に孤立無援たるに至るべきことを意味す。而して此經濟的孤立の秋到るの期は、我が國危急存亡の機に瀕せるの秋たるを知らざるべからず。

而して此危急存亡の機に際しては、急坂に巨石を轉ずるが如く、之を阻止せんと欲するも得可からず、假令如何なる巨人をして全權を有せしむるも、尙此危機に際しては如何ともすること能はざるべし。唯之れを救ふの道一あり。我國民をして封建思想を一擲せしめ、覇道を捨て、王道に就き、政は正なりの元則に從つて國本の信條と爲すこと是れ也。軍國主義は改造せらるべき新世界には通用するものに非ず、道義を無視せる國家主義は、强盜團と何等選ぶ所あるを知らず、强盜團的國家の存立は、今回の講和會議に依りて全然人類としての待遇を受くること能はざるは、極めて明白なる所なり、然るに我が國上下は、今尙强盜團的素質を矯正せんことを思はず、近き將來に於て、世界の孤立國たるに至るべきを想はず、危い哉。

予は信ず、我國民の思想的革命は、上述の最大危急に際會し、國家存亡の危機に際するに非ざれば、到底成熟せらるべきにあらずと、明治維新の政治的改革、黑船の來朝に因る外部的刺戟は、尠なくとも我が國民思想、特に封建的思想を一掃するに大なる力ありたり、然れども來るべき大改革期には、思想上更に之れにも倍せる效果を齎すこと疑ひなしと思惟す、而して其危急存亡の時に於ては、各種各樣の形式に於て、思想的動搖を惹起し、之を壓迫すれば、壓迫するに從つて却つて思想的改革に效果あり、壓迫者が志したる方向と正反對に、新思想の成果は熟するに至るべし、然れども此大改革が遂行せらるゝも、尙我が國民思想の根本的革正は期すべからず、何となれば、今日の封建思想病は、親讓りにして、此親の頭を根本的に掃除すること能はざる以上は、如何なる改革も遂に一少部分を導くに過ぎざるを以てなり、故に近き將來に於て來るべき、國家危急存亡の秋に於て、新日本の改造を成さんと欲せば、先づ此頑迷なる病根に一大外科的手術を爲し、以て第三國民たる少年敎育を施さゞるべからず、如何に學校敎育を完備するも、此外科的手術を施さゞるに於ては、第三國民の思想は、更に知らず〱の間に親の思想に浸潤し行くべし。

(五)

今日の政黨が、國利民福を思はずして、一黨一家の福利をのみ念とせるは、是れ亦我が國民の封建的思想の然らしめたるものにして、政界の革正は、此の封建思想を驅逐するに非ざれば、遂に百年河清を俟つに等し、予は今日迄三十餘年間、常に政界の革正を志とし、造次にも顚沛にも忘るゝことなしと雖も、而も未だ其志の一端をも達すること能はず、其弊竇は封建的亂倫思想に因することを覺り、更に之が革正矯匡に向つて猛進せること、再三にして止まらざりしも、何等得る所なくして今日に至れり、蓋し此病根の外科的手術を、僅に予一人を以て分擔せんとしたることが抑も革正の道を誤りたるものなるべく、近時に至り此手術は、國家危急存亡の秋ならでは、如何なる巨人の力を以てするも不可能なるを知り、寧ろ其時機の速に到來して、日本が正義王道の上に安定するの時來らんことを希望し居れり。

予は今日の政黨を以て强盜團なりと云ふを憚るものに非ず、由來政黨は主義政見を以て一團と爲るべきを原則とす、然るに我國現下の政黨は、頭目に何等主義あるなく、下僚に何等の政見あるなし、而も此輩が漫然として集團し、或は情實に依り、或は利益に據り、親分乾兒の關係を作し、親分にして强盜せよと云へば、乾兒は其命に應じて直に之れを實行す、即ち黨員は黨首の强盜を補佐するの役目を爲し、其間何等の主義も政見もあるべからず、加之多年親分の命にのみ服從して、自己の主義政見の如何を省ず、唯々諾々と頤使せらるゝ者を主義一貫せるものと稱讃し、主義政見の異なるが故に去るものを目して變節改論と云ふ、奇此より太甚しきはなし、由來政治は活物なり、時と場合とに依りて之れに順應するの大策を樹てざるに於ては、遂に政治は進步すること能はず、政治已に活物なり、之を司る者亦常に進步するは理の當然なり、唯其進步するや王道の軌條を脫せざるを原則とす。

孔子の始めて志を政治に立つるや、濟世の念禁ずる

能はず、或は齊に行き、或は衞に走り、陳に適き、蔡に往き、葉に赴きたるも、事志と合せずして離る、殊に衞に於ては、君の寵姫南子に見へたることあり。公山不狃の費に據りて季氏に反するや、東周を作らんが爲めに招聘に應ぜんとし、晋趙氏家臣佛肸の中牟を以て反するや、更に赴かんとす。之れを常人の眼を以て判する時は、主義なく、節操なく、去就常ならざるが如しと雖も、而も聖人の心は賢聖にして始めて之を察すべし、後聖之を以て却って孔子の志の眞且誠なるを說き、斯く迄にして自己の主義と志を行はんとしたる孔子の苦衷を讃歎せり。實際的政治家としての孔子は、必ずしも成功せるものに非ず、然れども政治的教訓者として遺したる偉蹟は、比類するものあるを知らず、我が國今日の政治家が主義と政見を異にせるの故を以て去就を決せんとするや、世は稱して變節改論と爲す、予は其何の故たるを解するに苦しむ。政黨は主義政見に依りて團結すべし、斷じて朋黨的親分乾兒的なるべからず、然るに今日の我が政黨が、一として朋黨ならざるものなきは驚くべし、蓋し日本の國民的思想を以てしては、到底免るべからざる所にして、封建的思想より脫却すること能はざる者の作れる政黨が、封建的組織となるべきは當然の歸趨ならずや。

封建的思想の我國に及ぼしつゝある影響實に上述の如し、之を矯正するものは唯國家の危急存亡に際して國民の自覺するより外に途なし、而も其時は遲きに在り、爲政者卽ち之に備へ、國民亦之に對應して世界の大勢に逆行するとなきを念とせよ、日本の經濟的孤立は、火を見るが如く瞭々たり、封建的軍國的思想に醉へる間に、世界は擧げて日本を無援の國たらしめんとす、獨逸の覆轍に省みよ、世界の大勢正義人道を主とし、之に反する者は共同の力を以て膺懲せんとす、自覺せずんば日本は累卵の危きに在り。

予は日本を去るに莅みて、叙上の言を餞として國民に送らんとす。

(大正八・三・八)

駐日列國使臣論

（一）米國大使モーリス氏



日本の外交官で現に大公使として各國に駐在して居る者は、大概六十に近い老人許りだ。其中で四十臺の比較的若いのを求むれば、小幡酉吉君、中村巍君、坂田重次郎君、本多熊太郎君位のものだ、而も何れも公使級で大使には四十臺の者は全く一人もない、然るに東京駐在米國大使モーリス君は本年四十五歳の血氣の青年大使として極めて注目すべき活動をして居る。元來米國と云ふ國は、人材拔擢には隨分思ひ切つた遣り方をして居る、殊にウイルソン氏が大統領に就任して以來、外交官方面に記錄破りの人材拔擢を試みた。一文士たりしヘンリー、バンダイキ氏を起して、一躍和蘭大使に任じたるが如き、或は一新聞記者として亦一介の文士として、未だ米國人の記憶に深からざる、ウオルター、ページ氏を拔いて英國大使たらしめたるが如き、日本の外交官任命には絶對に見る可からざる所である。モーリス氏も亦一辯護士にして、ヒラデルフイヤ州の民主黨代表選擧長と云ふ、比較的輕い身分から、一擧日本駐剳大使に任ぜられた人である。一州の選擧長と云ふから、日本で申せば政黨の院外者、又は政黨の支部長と云つた格である、政友會は果して地方支部長を拔擢して、一躍大使に任命するの大勇氣と大英斷とがあるだらうか。

ウイルソン大統領は米國南方の出である、隨つて人材の登用も主として南方よりせられたものだが、其中にモーリス君は獨り北方の出にして拔擢せられたので、當時維氏の思ひ切つた遣り方に尠なからず米國人を驚かしたが、然し此異例の拔擢は當然なことで、其人格と政治的手腕とは疾く已にウ氏の認むる所となつて居たのである。所が任命の發表があると同時に、モーリス君はブリーフを發して、『予は米國を代表して日本大使たるに不適任たり、何故なれば予は東洋の事情に通ぜず、寧ろ予の本願を云はしめば、一士官として從軍するに如かず』、と宣言した。維氏も鳥渡困つたが、直に『然らば、

從軍する氣にて日本大使たるべし』と、のつぴきならぬ樣に押し付けて無理往生に承諾させて了つた。

モーリス君が外交官としての舞臺は僅々數年間に過ぎぬ、然し乍ら今日では最も注目すべき大使として、列國外交界に重きを爲して居る。元來が平民的で、事に當つて熱心にして卒直である、其遣り口を見るに外交を以て術策と爲さず、飽迄友誼的なるべきを主義として居る、隨つて氏の外交には何等の權謀術數をも弄した形迹が見へない、是れ氏が外交官として成功した唯一の理由である。一體石井ランシング條約の締結は、日米人間に感情の疎隔を加味した困難な問題で、少しでも日米人の何れかの感情を損ねると、全然條約の締結が畫餅に歸すると云ふ憂があつた、赴任匆々にして此困難な問題に打つかつたモーリス氏の行動は、霞ケ關邊りでは大分評判となつて居たものだが、交渉を進めるに從つてモーリス氏の誠意も解り、外交官的手腕の侮るべからざるものあることが解つたので、安心して此重大問題を議したものである。當時モーリス氏が或會の席上で『私は日本人を仲の好い友人だと思つて今度の條約を締結しました』と云つたヿがあるが、決して之は御世辭でも外交的辭令でもなく、全く氏の遣り口の凡てが此主義であつたのである。

氏が第二に出つ會した難問題は日米船鐵交換問題である、米國政府は日米交渉の全部を擧げて氏の自由裁量に任せた、如何に大使の手腕を依賴したとは云へ、本國政府が全部を自由裁量に任せたと云ふのは、世界の外交界で異例に屬するヿである、而も氏は一毫一絲をも苟くもせざる討議を試みて、遂に日米兩國の滿足なる解決を爲したのであつた、相手は愚痴の多い我が實業家である、其交渉の困難なヿは想像に難くない所であるが、氏は飽迄友好的なる態度で折衝したので、遂に我が實業家連中も氏の前に兜を脱がざるを得なかつたとのヿである。又西伯利問題に際しても、氏は日本との友誼を保たん爲めに、却々苦心して赤誠を吐露して折衝するの方途に出でゝ居る。

モーリス氏のお爺さんは、費府に於ける日本人贔負として知られた人で、日本の學生で費府に在る者は多く此御爺さんの厄介になつて居る。夫人は御轉婆勝の米國人には珍らしく溫良從順な質で、モーリス氏と同じく、如何にも逢つて話して賴もしい感じのする人である。夫婦共揃つて交際上手で人を反らさない、そして上ツ調子でない、親しみを感ずる人である、日本の外交官が、單に外務省の畑ばかりで培養され、年齡順で押し上げられて大使となると云つた連中は、一辯護士、一地方支部長より、一躍大使たりしモーリス氏の前にお恥かしい氣がせぬものだらうか。

（二）露國大使 クルペンスキー氏



東京に於ける青年外交家として、モーリス氏を擧ぐると共に、吾々はクルペンスキー氏を推擧せねばならぬ。モーリス氏は冲天の勢ひある米國の大使として得意の絶頂に在るが、クルペンスキー氏は本國政府の基礎さへ定まらぬ爲め、其立場も危く其生活も洵に氣の毒な狀態に陷つて居る、乍去個人としても亦外交官としても、青年外交官の錚々たるものであるとは否むことが出來ぬ、氏は土耳古に參事官たりし後、支那公使として赴任し、積極的手腕家として北京外交團の評判者であつたが、後轉じて日本大使となつた人である。露國革命以來生活費にさへ不自由を感じて居る始末なので、更に外交官的手腕を揮ふべき機會なくして霞ケ關に煤つて居るが、若しオムスクの露國政府にして樹立せられ、列國の承認せられたる政府の下に外交官として此講和會議に際せしめたならば、必ずや其利鎌の如き技量は遺憾なく發揮せられたことであらうに洵に惜しいことである。日露協約の締結に際して、我が外相本野子と折衝した時の外交文書が、レニンに依つて發表せられ剩へクルペンスキー氏の出した秘密電報迄も暴露せられて了つたので、臂の穴の小さい我が外務省では、一時クルペンスキー氏を妙に警戒したこともあつたと云ふが、祖國の爲めにせる行爲は寧ろ斯ることのあるべきは當然で決して咎むるには及ぶまい。

クルペンスキー氏は四十六の今日尚獨身である。何故結婚をしないかと聞いて見たらば、『イエ私は世界中迷ひ歩いて居るので、落付いて鄕里に居ることがない、從つて獨身が結局呑氣です』と云つて居た。一體露國大使館は獨身者の世帶で、參事官のアプクコース君も獨身だ。却々の交際上手で露國人には珍らしい程平民的である、言ふことが凡て明快で曖昧なことを言はない、外交家としては飽迄積極主義で、自ら進んで事を起し事を成す質である、曾て支那公使であつた時、日本の對支外交が如何にも退嬰姑息であるのに見兼ねて、『最う少し積極的に遣つては如何です』と、日本人に逢ふ毎に人事でない樣にヤキモキしたものである、今でこそ逆境に沈默して居るが、若し露國復興の曉は、青年外交官中の白眉となるべき人であらう。

勞働者改造の急務

安部磯雄

私は昨今社會問題の大半を占めて居る勞働問題に就て少しく意見を陳べて見たいと思ふ。現に瑞西ベルンの萬國社會黨大會に於ても國際勞働問題を中心として各般の問題が討究され、又巴里講和會議に於ける國際聯盟案にも重要なる條項として國際勞働局設定が議せられつゝある際、日本の勞働者及勞働者に同情ある知識階級が刺戟を享くる機會は寔に尠くないのである。

デモクラシーの影響

近頃我國に於て勞働問題に關する大體の意見は先づ勞働組合を組織すべしとする議論と時機尚早論との二樣に分れて居る。然し乍ら勞働問題は今日始めて勃興したものではない。夫は如何なる點かと謂ふに、デモクラシーの思想が人々に徹底した結果自然勞働者の自覺を促し、且つ戰爭の機會に於て此勢ひが益々熾んになつて來たと言ふに過ぎない、我國の如きも戰後必ずデモクラシーの思想は旺盛になるであらうし、今日迄と雖も其思想は甚だ多かつたのであるが唯種々の障害物に遮られて控え目になつて居たのである。隨つて今後デモクラシーの思想傾向が勞働問題に影響する處は決して尠少ではあるまいと思はれる。

勞働者階級の自覺

勞働者の境遇と資本家の境遇との間には非常なる懸隔がある。時に勞働階級に在つても熟練ある者は相當の生活を營み得るが、多くの勞働者は見るに耐えざる悲慘な生活を送つて、所謂優勝劣敗のみを進化の原則とする資本家の犧牲となり彼等の意の欲する儘に虐げ

られ鞭たれて居る。然るにデモクラシーの思想が發達するに從つて個人生存の權利に對する牢固な觀念が認められ勞働者と雖も亦一個の人間として見る思想が强くなつた。昔しは「王侯將相寧ぞ種有らん」と云ふ思想もあつたが之は多く書生が靑雲の志を伸べんとする單純なる議論であつて寧ろ其時代は極端なる階級制度に苦しみこれらも貧乏人は永き習慣が後天的に性を爲して如何なる階級の壓制をも左程の苦痛を感ぜずに甘んじて居たのである。然しデモクラシーの思想が强烈となればなる程、深く人間の立場を考へ人間として同一なる生存の權利を享受したるものが斯くも悲慘なる生活狀態に在らねばならぬと云ふ事は甚だ不審に耐えられなくなつて來る、玆に於て貧富の差別を宿命論に歸納して一種の諦めを着けるか。或は進んで貧富の懸隔を打破し生活の安定を求むるか二途其一に出でねばならぬ、社會は人間の力を以て改造の出來るものである。否今日は將に社會を改造して自由と平等の思想を擴充せねばならぬ時が來て居るのである。

暴君の如き資本主

即ち勞働問題の起れる所以は實に此社會を改造して勞働者自ら生活の向上と保證を要求せんとする處に在るのである。今日の勞働問題は要するに勞働者の地位の向上を圖り從來著るしく無視せられたる生活上の安定、之に附隨せる健康問題、食料問題、衛生狀態等苟も生命に關する確乎たる保證を得んとするが其骨子であり經緯であつて其の精神は人道問題より出發して居る。往時米國に於て黑人を奴隸としたる時代には、白人は黑人の無智無學なるを便として非常なる壓制を加へ之を酷使した、實際綿製產等には白人の耐え得ざる處であつたが彼等は黑人を奴隸として自由に慘酷に之を使役し自己の缺陷を補つた、其結果が人道問題として彼の南北戰爭を見るに至つたのである、今日より觀れば往時の奴隸制度假令ば米國の黑奴の如き露國に於ける農奴の如き何人も其悲慘なる生活に同情して斯る非文明的背人道的の制度を慷忘せざる者はあるまい、

然し今日の勞働階級の狀態は形こそ變れ往年の奴隷生活と何等擇ぶ處のないものである、彼等は鞭を以て虐げられ刄を以て生命を取らるゝ事はないまでも失職すれば直ちに餓死せねばならぬ、又失職せざるまでも肺病になり癈人となつて主人の爲めに虐殺せられる、人は手を下さないが今日の制度は明かに勞働者に對し資本家をして生殺與奪の權を恣まにする暴君たらしむるものである、此慘狀を果して勞働者自身が默過し得るであらうか、多數の人口を占むる勞働者の境遇は恐らくは悉く夫れである、私は理想から言へば社會に於ける貧富の懸隔を根柢より一掃し各人の富の程度を等しくするに在るが此理想は直ちに實現し得ざるものであるから、今日の要求としては人間としての生活基準たる物質的保證と貧富の懸隔を漸次接近せしむ可き制度の改善とを研究するに在る、勞働者の生活保證たる賃金の標準額は左程調査に困難ではないと思ふ。卽ち一日一人の營養分攝取に要する見積金額及一年に於ける衣類住宅費其他の所要額最低限度を以て我國一家族平均六人の割當てを計算し、夫れ丈けは是非共最低賃銀として取らねばならぬ、斯る方法は歐米各國に於て頻りに唱道され英國の如きは旣に某鑛山の石炭工夫の間に於て立派に實行されて居る、此標準賃率は如何なる者でも受けるが夫れ以上は工夫の腕次第に依るものである、勞働者が現在の如き貧乏狀態から脫却するは此最低賃銀の問題を先づ解決しなければならぬ。

勞働組合設立の要

第二は如何にせば勞働者が貧乏なる生活よりより良き生活に移り得るやの問題である。勞働組合の實質に就ては相當敎育ある人にして猶且つ非常なる誤解に陷つて居る者がある、勞働組合は資本家に對立する爲めに造られ多數を擁して賃銀の値上げを迫り又動もすればストライキを以て資本家を脅威せんとする機關なるが如くに解し、且つ資本家と勞働者との軋轢紛更を一層滋からしむるものなれば我國の國情に於ては極めて時機尚早なりと做す者がある。斯る議論は勞働組合の

本質を知らぬ迂論であつて資本家に對立の要ある事は言ふ迄もないが目的の大部分は組合組織に依つて組合員の相互保險を爲すに在る、相互保險には種々の方法が行はれて居るが其一事例を示せば一週間毎に一回宛の掛金を爲し組合員の病氣なる時或は失業したる場合其組合員の日給が若し假りに一圓五十錢とすれば其缺勤期間或は失業期間は約三分の二即ち一圓內外の補給を受ける事が出來る、又家族の死去したる時は組合に於て葬儀費を支辨し其他不時の用意に備へられて組合員は生活上の不安を顧念する必要がない、勞働組合の副產物としては消費組合が設けられ日用品一切を卸賣商から直接に購入して廉價に供給するの方法を執つて居るが最近は製產者より購買し或は組合機關自ら製產者となつて自給自足を講ずるものも尠くない、其組織の如きも極めて大規模であつて二百萬人以上の勞働者を組合員とする消費組合は決して珍らしくない、獨逸に於ける勞働組合の信用組合に在りては資本金三十億馬克の巨額を以て金融機關を造り二百四五十萬人の勞働者を包擁し組合員に低利の貸付を爲して生活向上の途を與へて居る、之等の方法に依つて勞働者の團結は益々鞏固を加ふるのである。

勞働組合の目的

　勞働組合の目的は又完全なる勞働教育を施すに在る勞働者は概して小學校教育を終れる程度の人々であるが歐米の勞働組合本部には完備した圖書室が設けられ種々の教育機關が備はつて居る、此點が勞働組合の最も緊切なる眼目でなければならぬ、勞働者が自己の力を無視して人の扶けに依賴する時代は既に去つたのである、政府又は資本家が恩惠的に勞働者に對して助けを施すのは正當な事ではない、資本家は自家の利益を圖る爲めに種々の計畫を爲す者で之が勞働者の自助的精神の範圍にまで立入つて發言する權利はない筈である。組合の主たる目的は立憲國に於て選擧權を擴張し之に依つて國民的立憲教育を施し憲政の運用を完美ならしむる如くに勞働者に對して社會的勞働教育を施し

自助的精神を涵養せしめて勞働者の地位を向上するに在る、デモクラシーを政治の理想とすれば國民個々の教育を完全にして普通選擧を施行し一方社會的には人口の最大多數を占むる勞働者の自啓自發の途を招かねばならぬ、此實例は英國に於て最も進歩したるものを見る、英國は戰時中纔かに四五名の主腦者に依つて擧國一致内閣を組織し選擧を休止し一切の黨爭を絕つて居た、當時閣員の有力者たりしヘンダーソン氏の如きは小學校を終つた丈けの勞働者出身で組合の組織的教育に依り斯る傑出した人物をも產んだのである、又同じ閣僚のジョン・バーンス氏は機械職工から國會議員となり大臣となつた人で今日の勞働者は自ら學者たり政治家たり得なければならぬ、米國の勞働組合長ゴンパース氏の如きは三百萬人の勞働者を率ひウイルソン大統領も此人の意見に聽從する事が多い、氏も亦屡々政府を扶けて大統領と對等の地位を保つて居る、斯る實例は總て皆勞働者の自助機關たる勞働組合に依りて贏ち得られたる特權である。

資本家と勞働者の接近

國際聯盟案にも在る如く勞働同盟は國際的に勞働者の狀態を向上せしむる人道上の要求であつて婦人小兒の勞働者も同一の權利を賦與せらる可きものである、今日は實に勞働者の一致協力を要する時である、然るに我國に於ける勞働者の狀態は如何であるか、工場に在る多數の婦人殊に紡織工場生絲工場の工女を見よ、彼等の健康は全く傭主の爲めに蹂躪せられ、彼等の生活は恐る可き肺病の巢窟と化して居る、鄕里に歸れば工場の黴菌は更らに周圍の村々に傳播される、之等は個人として氣の毒であるのみならず國家としても大問題である、妻となり母となる可き若き女は亂暴にも無制限の長時間働き詰めて而も想像外の惡食の爲めに健康を破壞して行く、夜具は敷詰めの儘で晝夜交代に一つの蒲團へ二三人宛寢なければならぬ、之をしも人道問題と謂はずして何であらう、勞働者の境遇を最も能く知るものは勞働者である、此奴隷的生活から脫却し

向上するには勞働組合を組織して勞働者自ら意見を提出するに限るのである、組合組織を以て勞働者が團體的勢力を恃み資本家との對抗運動を企つる機關として排斥するが如きは非常なる短見であつて資本家の壓制を矯むるには少しは衝突をするのも已むを得ない、資本家は自家の利益にさへなれば如何なる慘酷な所業も敢て辭せざる階級である、然し日本に於ては未だ何と言つても知識階級が中立の地位に立つて勞働者を善導し兩者に對する公平なる判斷者たらねばならぬ、私は資本家と勞働者の孰れにも恩怨なきものであるが歐米に比較し生産事業を改善するには勞働者の改造を先決問題とし勞働者の改造は勞働組合の組織に依つて其目的を果し得るゝものである事を信ずる者である。

日本人的色彩を發揮せよ

海軍中佐　溝部洋六

一、將に改造せられんとする世界

世界大戰が人類の思想に、感情に、經驗に、智識に、生活に、大なる或物を與へた事は確かである。

人類の理性上よりする慾求、希望の目標として、世界の數人者によつて論議せられて居つた「國際聯盟」も、多數者は之を一種の空想視して居つた間に、兎に角、是が草案も可決せられて、其の成立の一光明を認め得らるゝに至つたのである。

「海洋の自由」「軍備制限」等の實行力に關する重大なる問題は取殘されてあるとは云へ、兎に角世界各國の爲め、全人類の爲めに慶賀すべき事と云はねばならぬ。

文明の向上であつて、理性の進歩であつて、且つ萬人の希望する「世界永久平和」への一階段であつて、世界

歴史の一新記錄であつて、とにかく目出度きことゝ云はねばならぬ。

將に改造せられんとする世界は、之を國家的見地よりすれば『より國際的』であつて、之を個人的見地よりすれば「より平和的」にして、「より多幸的」である。

二、我が帝國の現狀大觀

五大國の一となつて、最も重大なる世界改造の實際問題に參加することになりたるよりして。有利なりし、戰時中の我が經濟界事業界が、「平和」の聲を聞いて、却つて一種の或る『ショック』を感じたるよりして。中流階級の生活が異常に壓迫の痛苦を感じたるよりして。成金者流の夢將に破ぶれて、成金者流を取りまきたる黄金萬能の隨喜者が、一種の樂しみの悲哀を感じ始めたるよりして。戰時中各國の政治家、軍人、實業家、學者等が各其の國家の爲めに偉大なる、果敢なる、又精細なる努力をなしたる刺戟を、我が國人が後ればせ乍らも漸く感じ始めたるよりして。…………帝國の現在はとにかく、國人の自奮と、反省と、稍失望と、樂觀と等によつて、一種の大なる「世界的刺戟」を受けつゝあるのである。

三、世界の現狀に對する正しき理解

「世界の現狀」を正しく理解する爲めに、先づ「帝國の現狀」を正解せねばならぬ。「帝國の現狀」を正解する爲めに、先づ「自己」を反省し、其の思想と智識と經驗とを點檢せねばならぬ。而して、「自己」を日本人として自主的に解決せねばならぬ。安心の出來る樣に、思想の動搖せぬ樣に先決問題として解決せねばならぬ。

あらし吹き雲は迷へと動きなし
日本島根の雪の富士の根。

とは余の最近の腰折である。天下太平を謳歌して居る結果の歌ではない。友の或人等が思想の動搖を感じて居る間に、余は幸に動搖を感ぜざることを喜んでの作である。

「日本人としての眞の自覺」は帝國の社會の現狀より

のみしては中々容易に得られぬのである。其の理由や現象を具體的に陳述するかわりに余は奇異なる……(しかも余はそれを眞相なりと信ずる)……一句を述べよう。『帝國の現時代は漸次女性化しつゝある』

黎明會のことはよく知らないが、大概想像することが出來る、そうして諸學者の努力に全部ではないが、一部の敬意を表する。又老壯會とか浪人會とか云ふものゝこともよくは知らないが、略ぼ推察することが出來る、しかして且つ一種の敬意を表するものである。余の想像と推察とは次の如きものである。

「一は急進的で他は保守的である、一は智的であつて他は情的である、一は餘りに歐米化で他は餘りに純日本主義である、一を頭にたとふれば他は腹である」

余の想像と推察とは必ずや兩方の人士によりては、受け入れられぬとであらうと思ふ。何となれば彼等は皆自己の主張を全眞なりと認定して居らるべきが故に。

余の希望は此の頭と腹とを共に具備する日本人になりたいのである。そうして若し余が、日本人たる同胞に希望を呈し得るとせば、それは、頭の人たらむよりも先づ腹の人たらむことである、腹を先づ養つて而して徐々に頭を開發して行くことである。

「觀察點によりて意見を異にす」(Point of view is every thing.)とは恐らく眞理であらう『自己の觀察點』にして先づ正鵠ならざらむか、其の見解、意見の相違眞に驚く可く、毫厘の差、遂に千里である。同じく日本人でありながら先づ『日本』をのゝしり、又『日本』のみを考へて、他國を排斥するが如き結果に陷らむとも限らないのである。

『帝國の現時代が女性化しつゝある』との言ひあらわしかたは、中々說明に六ヶしきとであるが、要するに、『國民精神が、日本的たる特色美點を少しづゝ失ひて、稍萎縮退嬰の氣味ある』との意味である。余は現時代の聰明にして叡智、浩潔にして、大勇あり、大雅量あり、公正なる情操を有する我が日本人中の數人の大人格によつて、そうして其等の人々の努力によつて、此の『女

性化」を「男性化」せられんことを中心よりして希望して止まないのである。此の大人格は名聲をほしがる如き權勢をのみあこがるゝが如き、只自己の都合のみを考へて行く樣な人にはのぞまれぬのである。

余は帝國の現在は萬人が此の如き眞面目の人の出現を待ち望むでいることゝ思ふ。時代は男性的の人、青年の奮起を促して居るのである。

「世界の現狀に對する正しき理解」は日本人として自己確立後の眼によつて洞察せらるゝことである。

四、日本人的色彩を發揮せむ

「日本人としての正しき自覺」は日本人としての正しき情操を養つて、そして、自主的精神を以て、公正に列國の文物を批判し比較し、取り扱ひ得るに至つて達成せらるゝことゝ思ふ。我が國の歷史を心讀し、我が國の國民精神を理解反省することより着手せねばならぬ。

日本人としての幸福を眞に先づ味はねばならぬ、帝國の恩惠によつて先づ吾れある今日を反省せねばならぬ、「國際聯盟」に對する功獻も惠福も「我が帝國」を通してゞある。日本人としての幸福も光榮も「日本」を先づ大成、向上、充實する事と共に、又後に得らるゝのである。

余は國內の思想問題も單に思想問題にのみよつて解決し得ぬと信ずるものである。日本帝國の國力の充實、經濟的發展に伴ひ、吾々の生活が安固となり、向上することによつて、解決せらるべしと思ふのである。同胞が國家に奉仕する尊き愛國心を基礎として、各方面に努力し、奮勉し、小異の見を去り大同の見につき、日本として、同胞として、擧國一心を實現し、改造せられんとする世界の各國の平和的競爭を目標として日本的色彩……(眞に、正しき、美なる、大なる)……を發揮しつゝ勇往邁進せんことを希望して止まないのである。

「國際聯盟」の成立して、これが眞の世界永久平和の保證たる爲めには、猶幾多の艱關がある、各國の國防

上よりする軍備に對する問題や、人種の差別撤廢問題や……等がそれである。「國際聯盟」か出來て帝國が其の恩惠に浴する範圍は、やはり帝國の實力……（國民精神の元氣や、國防實力や、經濟力や等による）……を背景とする丈に止まる可きであらうと、余は世界の現狀を觀察しているものである。國民が餘りに理想主義に傾きすぎて國力の充實や其の實力の建設に對する實際的努力を輕視するが如きことあらば、是れ實に恐る可きことである。

　自主的精神を振起して、自主的日本人の見地に立つて、先づ吾人の建設しつゝある此の國家を大成すべきである。それには外國模倣主義や外國崇拜の思想は禁物である。自主的日本主義によつて、對等に列國の文物を取り扱はねばならぬ、我が主なるもの中に在つての後、他の長を取り短をすてるべしである。

　改造せられむとする世界に對して日本帝國の功獻するものありとせば、其は日本の長所美點を赤裸々に紹介して、幾分殺風景に、無味乾燥に、個人主義的に、物質的に傾き過ぎて居る歐米の文明に一點の情味（日本味）を加ふることであるであらう。

　日本的色彩を發揮して自主的に行動することによつて、帝國が向上するのみならず、世界が進歩するのである。

　公正にして優美なる、排他的ならずして抱擁的なる、三千年の尊き歷史によつて養ひ得たる國民精神の反映たる日本的色彩を以て、自主的精神を以て、將に改造せられんとする世界に正對すべきである。



國際的自覺

一　學・究

(一)

學究は豫言者では無い、現實に卽するが故に敢て普通選擧論を高唱して他年一日衆愚の投票に依て議會に入るの素地を爲らうと云ふ遼遠な見識も抱かねば、將た又既成政黨無能論を呼號して近き將來に於ける官僚內閣復活の大勢を馴致し社會主義者と相響應して極端な國家主義を實行して見度いと云ふ陰險な野心も持ち合せて居らぬ。唯ゝ現在の大勢を解剖して聊か高等政策の確立に資して見度いと思ふのみである。

(二)

國際聯盟規約の草案が發表せられたのを見て日本の地位が危險であるとか云ふて心配する人もあるやうであるが、一體日本が五大國の一に加へられたのは英米のお情に與つたのだとしたならば今更何も事新しく論じ立てる迄もないであらう。今回の戰爭に於て勝敗の決せられたのは西部戰場で而して日本は國力の上から又地位の上から之に對して決定的威力を示すとが出來なんだのであるから講和會議に於て權威ある發言を爲すことは至難である。併し是は楯の一面をのみ觀て立てた意見で實は英米兩國では內心大に日本を憚て居るのである。而して英米兩國では日本の實力を蔑ー視しつゝあるが如く見えて實は日本を恐れて居るのである。蓋し日本の戰鬪力は兎に角東亞を威壓するに足るので英米兩國は從來この點に於て日本を敬畏して居り或る場合に於ては日本の實力を買ひ被つて居つたのである。殊にこの敬畏せる日本に對して米國も英國の植民地も移民渡航禁止と云ふ侮辱を與へて居つたので衷心日本を憚らざるを得ぬのである。然るに今や日本は人種的差別待遇撤廢問題を講和豫備會議に提出し更に從來存置されて居つた鎖國時代の遺制を一掃して異に開國主義を世界に提唱せんとするに至つた。正義人道

は必ずしも基督教國の專賣思想では無い日本も亦十分に之を理解し之を主張し得るのである。而して米國竝に英國植民地の政策は從來正義人道の思想に矛盾して居つたので日本は益す英米兩國に憚らるるのである。

（三）

大戰勃發の當時之が原因を説明して全獨主義と全スラーヴ主義との衝突にありと極力主張する論者もあつたが併し大勢を達觀して見ればカイゼル・ウイルヘルム第二世の世界征服戰であつたと云はねばならぬ。而してこのカイゼルの大望が敢なくも見はてぬ夢と消え去つて扨今や講和會議となつたのであるが國際聯盟規約草案を一瞥したのみでも直ちに看取さるるが如くケイ・ドルセイとヴエルサイユとの間には二個の相反對した思潮が流れて居る。一は國際間の平和と安全とを確保せんとするの思想で他は戰爭に依つて新に覺醒された國家對立思想である。この矛盾した思想の相對立する無くば國際聯盟規約草案は法三章と迄は行かずとももつと簡明に出來上るのであるが永久平和の根本思想も隨時隨處に國家對立思想に對して交讓せざるを得なんだので扨こそ草案の逐條に於て單文は數は複文と化したのである。

（四）

然らば今後の世界は果して如何になるであらうか、換言すれば如何に改造さるゝであらうか。冒頭にも述べたが如く學究は豫言者で無いから敢て斷言は下さぬが、日本の高等政策と定むる上に於ては別段多言を費すの必要はない、要は日本の國際的地位を自覺すれば可いのである。而して國際的自覺とは日本は五大國の一には加へられて居るが兵力を以て英米兩國の一と戰ふとは出來ぬと云ふとである。否戰ふとは出來ても決して戰はぬと云ふ決心を定めるとである。休戰前には或は戰爭は勝負無し兩軍の交綏に終るであらうと信じ或は 結局獨逸の勝利疑無しと信じ英國屬領の獨立運に同情して徒らに日英親交を妨碍せんと企てたもの動あつたかも知らぬが今日は最早かゝる危險思想は日もの內地には存して居らぬであらう。米國に對して日

本に於ては敢て之と干戈に訴えんことを思ふものは無いが併し上海や浦鹽でもマニーラやホノルルでも扨ては米本國でもこの次には日米戰爭は避く可からずとの流言が行はれて居る。日本が米國に對して偏に通商上親密なる關係を保たんと希望して居る際に米國に於ては先づ西洋の日本の處分ありたれば次には東洋の獨逸を膺懲す可しと考へて居るものもあるやうである。玆に於てか日本に於ては擧國皆兵制度を實行して十八歲以上四十八歲迄の男子は悉く軍隊的訓練を受けて萬一に對して準備せねばならぬとの說さへ行はれて居る、否この說が存外世間に勢力がある。徵兵制度を廢止して民兵制度にしやうと云ふ議論も極端は相一致するの理でこの恐米軍備論と相混同されて益すその主張を熾盛ならしめんとして居る。是は實に由々しき大事で日米兩國が自覺しつつ最後の衝突の日を迎へんとするは愚も亦甚しと云はねばならぬ。我等は米國が如何に一八九八年以來帝國主義に傾いたとは云へ建國の理想たる正義人道を片時も忘却するもので無いと信ずるが故に米國より進んで日本に挑戰するが如きことは絕對に起り得ぬことと心を安んじて居る、若し萬一かゝる不祥事が起つたとしたならばその時こそ日本七千萬の人民は最後の一人迄抵抗せねば止まぬので異逆に尊大な米人も假令北米印度人のうちには日本人に酷似するものありとは云へ日本人を以て紅色人と同一視することはなからう。それにしても上海に於て浦鹽に於てマニーラに於てホノルルに於て米人が日本人を嫉視するのは遺憾至極の次第である。日本は勿論決して東洋の獨逸にならぬやうに努力せねばならぬが米國も亦西半球の獨逸にならぬやうに甚だ差出がましいが注意して欲しい。

(五)

日米戰爭論を宣傳するものは日米兩國の外にもなほあり得る筈である。先づ第一に今回の大戰にカイゼルに盲從して大敗北を招いた獨逸國民で何等かの機會に於て聯合軍に決定的勝利を與へた米國に酬い更に獨逸の植民地のうちに於て最も有望であつた日本に報ゐんとすることであらう。併し卒直に云へば我が同盟國た

る英國にも日米兩國の衝突を希望して居つて兩國を煽動しやうとして居る向が無いとは云はれぬ。蓋し獨逸の無力となつた今日世界を支配するのは一口に云へばアングロ・サクソン民族即ち英米兩國である、この兩國は獨逸に對抗してこそ互に戰友として戰場に馳驅したのであるが米國獨立以來兩國は動もすれば相反目し既に一八一二年には兩國の間に再度の戰爭を招いた程で一八六〇年代の南北戰爭には英國の輿論は確に南部に同情を寄せて居つたのである。故にアルサス、ローレーン兩州の鐵鑛を回復した上にザール河流域の炭坑をも首尾よく手に入れた佛蘭西が戰爭前の獨逸の如き工業國となつた曉は兎に角戰後當分の間は英米の間に世界に亘つて資本主義の激烈な確執が行はれ兩國は次第に相反目するに至るとと思はれる。國際聯盟草案第二條に於て締盟各國代表者會議の議決に際し締盟國は各一票を有すと規定し而して第七條に於て完全なる自治國たる以上自治領及び植民地も聯盟に加入し得可しと爲しかくて大英帝國はキャナダ、南阿、濠洲、ニュー・ジーランドに加へて五票の投票權を有するとを得るが如き規定を立てたるに就ては既に米國にも異論が主張されて居る。併し英國はキャナダと米國との接壤せる關係上之と干戈を交ゆるとを不利として居るので日本を利用して米國と相爭はしめんとを思ふは當然のとである。英國がかく考へたから逆決して之を責むるの理由は無い唯日本は之に利用されぬやうにして輕擧盲動を愼まねばならぬのでこの立脚地からすれば日本はむしろ光榮ある孤立を國是として英國との政治上の同盟を繼續するとを避けた方が得策であると思ふ。

（六）

日清日露の兩戰役で日本は事實領土の侵略をしたので今なほ日本には柳の下に何時も鰌が游いて居るとと思ふて居る人も多少は見受くるであらうが、かゝる領土的野心は獨逸の强大と組織とを以てしても失敗に歸したのであるから況して日本の如き五大國の末席を辛うじて汚して居るものの抱懷す可きで無い、これが爲であらう世間には國際聯盟呪咀の聲が盛んに唱へられ

て居るやうであるが苟くも日本人に眞正の國際的自覺が起つて來たならば將來は如何なる場合にも親ら進んで干戈を執つて立つ可からざるヿを堅く覺悟せねばならぬ。若しこの覺悟が定められたならば軍團組織計畫の如きは暗から暗に葬り去つて然る可きで、十八歲以上四十八歲以下兵役論の如きも之を差控えた方が可いであらう。蓋し國際聯盟に於て幾許の程度に陸軍の兵數を定む可きやは勿論判然せぬが二月二十四日の倫敦電報にロイド・ジョージ內閣と特別の關係ある『デーリー・エクスプレッス』の所報として新休戰條約の條件を以て獨逸軍隊の兵員數最大限を三十萬人とし將校の數は兵員總數の五分以下に限るとしたやうである。ザット戰爭前の獨逸平時定員の三分の一であるが元來獨逸帝國の憲法第六十條には陸軍の平時定員を百分の一と定めてあつて獨逸に於ける數次の陸軍擴張は常に人口の增加をその理由の一に數へて居つたのである。目下獨逸の人口は幾許なりや正確の數字は得難いが開戰當時の約六千八百萬人からアルサス、ローレーンの百八十七萬人波蘭人三百萬人等を控除すれば約六千三百萬人となるが今回の獨逸陸軍三十萬人は人口千分の五弱となつて居る。さて日本の平時定員は本年度に於ては約二十七萬人であるとのヿであるから大體日本の人口(臺灣朝鮮を除く)五千七百萬人の千分の五弱である。して見れば目下の平時定員を維持するヿは國際聯盟成立の曉も困難であるまいと思はるゝのである、して見れば何をか憂へ何をか恐れんやで、且短期教練兵を以て二年服役兵と何等の逕庭なきかの如く說くが如きは素人論の殊に空疎なるものである。殊に眞に國民皆兵制度を徹底せしめて普通選擧の實施を之が要件となす可しと云ふが如きは最も過てる議論である。反對に人口が增加して來て必要が無くなつて來たならば貧民の子弟は勿論兵役を免除してやつても可い。兵役も亦治者階級のヿであるから遊牧人の性格を傳へたもののみで獨占しても差支無いのである。人は生れ乍らにして平等なりと云ふが如き謬說を信じて居るから普通選擧論抔が起るのである。

（七）

貧民にして選擧權獲得に必要な納税の出來ぬもののみでは無い徵兵忌避に憂き身を窶す青年の如きも之を入營せしめ無いで可い。强て之を服役せしむるが爲に行政權力で青年の海外渡船を抑止するが如きは不自然極まることである。愛國とは之を口に標榜す可きものであつて身に體驗す可きもので無いと解して居るが如き不健全な思想を抱いて居る青年は寧ろ之を國外に放逐し去る可きである。不貞な妻は家庭に置く可きでは無い之と同一の理由で不忠な男は國家に無用である、物資の缺乏して物價の騰貴して居る今日國家は無用の長物を養つて往くことは出來ぬ。殊にかゝる無用の長物にして昨今流行の生存權抔を唱道するに於ては國家の爲に日夜營々して居るものは迷惑至極に感ぜざるを得ぬ。英國の如き富裕な國家では徵兵制度に對する信念上の反對論者をも養つて往くことが出來るが日本ではそんな贅澤は眞似も出來ぬ。故に徵兵忌避の爲に海外に渡航し度いと云ふものは毫も拘束を加へずに之を許可し他國の國籍を收得し度いと云へばその意に任せて然る可きである。勿論他方に於ては兵營生活に於て軍規の維持と何等の關係なき弊害多く改善を要す可き點あらば愼重に調査を加へて弊害を除くに於ては毫も躊躇す可きで無い。かくして全國の壯丁をして指を屈して入營の日の到るを樂み俟つと云ふやうにならねばならぬ。軍事行政の當局者は壯丁に兵役忌避の傾向の存するのは何故なるかと反省することが大に必要である。否軍事當局者のみでは無い、爲政家も敎育家も之に就て大に考慮を費す可きである。

（八）

以上は戰後國家對立思想が依然として旺盛であるものと假定して日本たるものは英米兩國の格闘を外に見て常に萬一の場合に備ふるの覺悟が必要であると云ふ趣旨であるが、日本が既に領土的野心なく平和的競爭に依て世界の舞臺に立たんとする以上國を擧げて鎖國思想を一擲し去つて開國思想を體得せねばならぬ。米國や英國の植民地に對して移住禁止の撤廢を要むるに

は外國人の土地所有權鑛山採掘權等に對する制限を解除するは勿論前項所論の如く國內より海外に移住せんとするものに對してもその出口を解放せねばならぬ。世界に向て廣く正義人道を唱へて保護貿易と云ひ入國制限と云ひ苟くも鎖國思想に胚胎するの制度は悉く之を撤去す可きことを堂々主張せねばならぬ、是が爲に或は米國若くは英國植民地の反感を招くことはあつても正義人道を主張するに於ては何人に對しても敢て憚る處は無い。政府は或は之を主張するに差支があるかも知らぬが國民は居常堂々之を口にして何等恐るゝ所は無い、論者は動もすれば米國と云ひ英國の植民地と云ひ民主政治の國であるから多數人民の利益に相背馳することは之を要求するも無效であると云ふが、苟くも正義人道の主張であるならば之を拒絕さるるを豫期し得べしとするも決して默して已む可きで無い。古來正義人道の主張は弱者の口より出づるの常であるが日本が弱者たることを國際的に自覺せば殊に正々堂々として開國思想のチャムピオンとして奮鬪せねばならぬとゝ思ふ。是れ卽ち日本として最も深く永久の平和に貢獻する所以である。

戰後の財政政策

大藏省　加藤儀作

(一)

戰後、內外諸國を通じて、解決を要する重大問題は、もとより二、三のみに限らぬ。或は財政、經濟政策に、或は軍事外交方針に、將た或は思想、敎育問題等に、一として解決を要せざるものはない。また是等は、何れも輕忽に付すべからざる、重要問題たることも勿論である。乍而、各國の爲政家、政論家等が、今より苦慮し、痛心

しつゝある、將來の財政政策………即ち巨大なる戰費負擔の結果、財政上殆んど致命的傷痍を受けたる交戰諸國は勿論、參戰こそせざれ、大戰勃發の爲め、直接間接に其の波動を受け、何れも不尠財政の調整を破られたる非交戰國に至るまで、戰後果して如何の財政政策を取り、其の調節を圖り、其の安定を期せんとするであらう乎……この問題程、重大にして且つ其の解決困難なる問題は、殆んど他に尠ないことゝ思ふ。歐米諸國の爲政家、政論家が、僅かに休戰條約締結せられたるのみで、未だ戰時狀態なるに拘はらず、業に既に其の考究討議に全力を盡し且つ其の結果に對し、苦慮し、痛心しつゝあるは、まさに當然のことなりと云はねばならぬ。

　參戰國としての我國は、交戰の範圍、程度等、極めて狹少で、隨つて之に由り受け、若しくは受くべき財政上の打擊も、歐洲交戰列國に比し、また決して多大なりとは云へない。乍而飜つて、戰後の財政調整の難易如何と云へば、平時の經濟狀態若しくは、國富の程度等に鑑み、之を英米其の他の列强に比し、寧ろ困難の事情多々ありと斷ずるを至當とせねばならぬ。これ我監が、本問題を提げ、敢て先覺の敎を請ふと同時に、從來の泥繩主義や、井蛙的管見を捨て、朝野共同一致、最も愼重に最も敏捷に、考究討議に黽め、苟も世界の大勢に孤立し、國家百年の長計を逸せざることを、警告する所以のものである。

（二）

　今次の戰爭は謂ふまでもなく、有史以來の大動亂である。隨つて其の戰費もまた驚くべき巨額に上つて居る。今や休戰條約締結せられたりとは云へ、尙ほ兩軍相對峙し居る以上、全く撤兵するに到るの間は、引續き相當戰費を要すること勿論である。是等今後の戰費の概算を、既往の戰費實蹟に合するときは、直接此の世界戰に要したる費額は、實に五千有餘億圓の巨額に達することゝなる。

　而して如此巨額の戰費は、如何なる方法に依りて、支出せられたるかと云ふに、各國共戰時稅の設定、既

定税の增率を爲したることは素よりなるも、其の主たるものは公債支辨であつた。戰費公債支辨の方法は、從來の戰爭に於ても、既に慣用せられて、必ずしも異とするに足らざるも、只其の公債額の破天荒に、巨大に上りたることは、這次大戰の齎したる、一大產物として驚嘆するの外はない。

戰前に對する公債增加額を、主要國別に示せば、

英	四九、一〇〇、〇〇〇千円	(一、九一八年一月末迄)
佛	三二、四〇〇、〇〇〇	(一、九一七年末迄)
伊	一一、八〇〇、〇〇〇	(一、九一七年十月末迄)
米	一六、七〇〇、〇〇〇	(一、九一八年二月末迄)
獨	四〇、〇〇〇、〇〇〇	(一、九一七年九月末迄)
露	二八、〇〇〇、〇〇〇	(一、九一八年七月末迄)

開戰後三ヶ年半の間に、英、佛、伊、米、獨、露の六ヶ國のみにても、千七百八十億圓の公債を增して居る。

而して此の公債增加の趨勢は、今後戰爭の全く終結を告ぐる迄、尙ほ阻止する事は出來ない。假りに交戰國撤兵の完了が、本年九月に出來、夫れ迄引續き戰費を要するとして、從來の所要額より打算するに、英國(一ヶ月二十億圓)は無慮九百億圓、佛國(一ヶ月十五億圓)六百四十億圓、伊國(一ヶ月十九億圓)二百七十億圓。米國(一ヶ月四十億圓)九百億圓、獨國(一ヶ月十九億圓)八百五十億圓に上る。公債の增加は、實に戰時財政の一特徵でまた戰後財政上最も累を爲す處の一つであらねばならぬ。

(三)

戰時公債の利子は、平時の利子に比して、高率なるは免れないのである。今之れを平均四分五厘利と假定するも英國の如き、年額四十億圓に上り、最少額の伊國尙十二億圓を超えて、戰前の總歲出額以上に當るのである。更らに之れを開戰第一年の、一、九一四年度歲出額と對照するに、

國別	一、九一四年度歲出額(千円)	一、九一九年九月迄の公債增加見込額(千円)	仝上に對する利子年額(四分五厘)(千円)
英	二、一四四、六八〇	九〇、〇〇〇、〇〇〇	四、〇五〇、〇〇〇
佛	一、九三六、五六〇	六四、〇〇〇、〇〇〇	二、八八〇、〇〇〇
伊	一、〇九八、三二九	二七、〇〇〇、〇〇〇	一、二一五、〇〇〇
獨	四、一七〇、五四八	八五、〇〇〇、〇〇〇	三、八二五、〇〇〇
米	二、〇七〇、〇〇〇	九〇、〇〇〇、〇〇〇	四、〇五〇、〇〇〇

右表の如く、戰爭により増加したる公債の、利拂額のみにて、戰前總歳出額以上となるのである。此外戰爭の爲めに被りたる、經濟的損害の恢復……鐵道、港灣の改築費、濫發せられたる、不換紙幣の整理等……にも多大の經費を要すべく、又物價騰貴による經費の増加、必然紛糾を極むる勞働問題、失業者救濟に伴ふ行政費の膨脹、出征將卒の恩賞費等も、亦計算に加へねばならぬ。加之戰後財政上の累を爲すは、例の軍事費であらう。軍備の撤廢、若くは制限が、講和會議の問題に上るとするも、實際問題としての解決は、不可能と云はざるを得ない。既に各々國を立て、其の獨立を全ふせんとする以上、國防施設は當然の事にして、世界を打つて一丸となし、各國、各民族の利害、總て共通とならざる限り、軍備の撤廢は畢竟理想論に過ぎないのである。假りに將來の擴張を制限せらるゝとするも、常に兵器の改良、補充は免れざる所にして、是等に要する國防費は、戰前に比して増加するとも、決して減ずる事なかるべく。戰後財政上公債利拂と共に、一大難物たるは免れないのである。

（四）

戰後の財政は歳出の膨脹である。而して其の主因が公債利子、戰後經營費、國防費等主として、經常的支出に屬するものなる以上、之れが支辨の途も、亦經常收入に求めねばならぬのは無論である。經常收入と云へば、租税を中心としたるものであるが、租税は無際限に増徴し得べきものではない。歳出の増加が三倍、四倍に上りたりとて、三倍、四倍の租税を増徴せば、國民は遂に破産の外はない。

租税の増徴は、戰費支辨の一方便として、各國共既に行ひ來つたので、其の概額を示せば。

	戰前（百萬円）	最近（百萬円）	差引増加額（百萬円）
英	一、六三〇	五、六九七	四、〇六七
佛	一、六四八	二、五五七	九〇九
伊	八二九	一、五〇一	六七二
米	一、三四四	七、二四〇	五、八九六
獨	一、〇七九	一、七六三	六八四

開戰後租稅の增徵せられたるもの、米國は五十八億九千六百萬圓。英國は四十億六千七百萬圓に達し。彼の戰費支辨を、敵國賠償金を以てするの、夢想を有しつゝありし獨國ですら、千九百十六年以降數次の增稅により、約七億圓の增徵を爲したのである。而して之れが一人當負擔の增加は如何と云ふに、

	戰前	一、九一七年度豫算	戰前に比し一人當の增加額	同上增加步合
英	磅三、五	磅一二、三	磅八、七	割二四、七
佛	法七五、〇	法一一九、〇	法四四、〇	六、二
伊	利五九	利一〇七、〇	利四八、〇	八、一
米	弗六、四五	弗三四、七	弗二八、二二	四三、七
獨	麻三一、七五	麻五一、八六	麻二〇、一一	六、三

佛の一人當六割二分の增加を最低とし、英の二十四割七分米の四十三割七分の如き、實に著しきものである。

此上更らに三倍、四倍に膨脹すべき、戰後歲出と均衡を保つ歲入を、租稅收入に得ること果して可能なるや否や。甚だ疑なき能はずである。

凡そ租稅收入を確實ならしむるには、之れを主として屈伸力ある、直接稅に待たざるべからざるは、謂ふ迄もない事である。消費稅極度の增徵は、却て消費を減じ、又は方面を轉じて、寧ろ減收の結果を見る事がある。殊に戰後、資本家と勞働者との紛糾、或は出征士卒の解除、乃至は失業問題等續出し、多數國民の生計一層困難に陷る傾向ある場合に於て、如何に國費增加すればとて、一般的に租稅の增徵は、事實困難であらねばならぬ。然しながら增收を圖らざるべからざるは絕對的である。果して然らば如何なる種類の範圍を可能とするかと云ふに、夫れは租稅力ある資產家階級である。富者階級に於て負擔する租稅は、主として直接稅に屬するのである。而して直接稅重課の傾向は既に戰時の租稅に表はれて居る。

英

	一、九一三年 直、間接稅歲入百分比	一、九一七年 直、間接稅歲入百分比
直	五一、五四	八〇、五三
間	四八、四六	一九、四七

佛	直	三三、〇四	三一、三六
	間	六六、九四	六八、六四
伊	直	三九、三一	四九、〇〇
	間	六〇、六九	五一、〇〇
米	直	一〇、六二	六八、八一
	間	八九、三八	三一、一九
獨	直	二三、六一	一七、五六
	間	七六、三九	八二、四四
露	直	二三、四〇	二七、四〇
	間	七六、六〇	七二、六〇

右表の如く現時の租税別歳入割合は、戰前の夫れに比し、佛、獨の幾分直接税を減じて、間接税を増したる以外は、皆直接税の増加を示して居る。米國は戰前租税の中心を間接税に置きたる爲め例外なるも、英國の如き直接税重課の傾向歴然たるものである。而して此の傾向の戰後に持續し、一層著明ならしむるものあるを想像せしむるは、國民思想の一大變轉である。

世界を風靡せずんば止まざる、民本主義の思想は、勿論多數國民の負擔を増加する、消費税の増率を避けて、必ず富者階級に向つて、多くを要求するに相違ない。故に一般的租税の増徴は、到底時代思想と相背馳するものと云はざるを得ない。乍併如何に彈力ある直接税と雖ども、際涯なき國費の膨脹に、應じ得べからざるは無論である。而かも民衆は間接税の増徴を拒避するとせば、之れが缺陷を他に求めんとするに至るは、蓋し止むを得ない事であらう。然らば其の缺陷補塡の途は何れにありや、他なし卽ち專賣課税の方法等は、有望なるものゝ一であらねばならぬ。由來專賣の勃興は、民業の壓迫とか又は、民業發展の大障碍などの非難あるも、是等は時勢の進運を知らざる迂愚の論であつて、素より一顧の價値なきものである。

專賣は課税の一變形であつて、而かも應分負擔を爲すものであるから、民衆に苦痛を感ぜしむる事少くして、多くの收入を得る性質のものであり、又擴張の範圍極めて廣きため戰後の財政難を救ふには、好個の財源として益々重きを爲すに至るべしとは、必ずしも獨斷の見解ではあるまい。京大の小川博士も、まさに本論提唱者の一人である。

(五)

專賣と官業とは、學理上性質を異にするものなるも、兩者等しく財政上の目的を有し、私經濟的收入を增さんとするものなる以上、便宜上二者を合して論ずるも、强ち不當ではあるまい。吾人は前に專賣は戰後の財政上、必然重視さるべき運命を有するものなる事を述べたが夫れは嚴格なる意味のみの專賣でない、收入を目的とする官業を含む事は勿論である。

官業は十八世紀末より、十九世紀初頭に亘りて、國家の經費は租稅に依らざるべからずとの、學說に支配せられて、一時閑却の傾向なきにあらざりしも、年々底止するなき經費の增加に、如何に租稅が國家の本質に適すればとて、租稅にのみ依賴する事は、到底困難なる爲め、近代に入り再び官業は頭首を擡げて、漸次租稅全能主義を突破せんとする傾向となつたのである。

國別	種別	一、八七五年決算 金額	百分比	一、八九〇年決算 金額	百分比	一、九一四年豫算 金額	百分比
獨（單位千麻）	官業收入	一、一六三、四八九	四一	二、〇一九、三七三	三九	四、四三二、九四三	五三
	租稅收入	八〇一、五九〇	二七	一、二六九、八五六	二四	二、一七六、九六一	二六
	總歲入	二、八四五、四七一	一〇〇	五、二三二、二六一	一〇〇	八、三一七、四〇三	一〇〇
英（單位千磅）	官業收入	七、七二九	九	一五、〇九六	一五	二七、〇六五	一〇
	租稅收入	六五、二五五	七九	七五、五七八	七五	一七三、六七五	八一
	總歲入	八二、八八三	一〇〇	九九、八六九	一〇〇	二一四、七二〇	一〇〇
佛（單位千法）	官業收入	五二六、四八二	一九	六四六、七七七	一九	一、〇六八、一八三	二二
	租稅收入	二、一一六、四五三	七八	二、三六〇、八二九	六九	三、三三二、〇七九	六九
	總歲入	二、七二〇、六六九	一〇〇	三、四四五、九七八	一〇〇	四、八四九、七二九	一〇〇
伊（單位千利）	官業收入	三三四、二九四	二六	四九六、一七〇	二六	七七四、六四三	二八
	租稅收入	七四八、三七三	五八	一、〇三六、〇七三	五六	一、五九四、九一六	五八
	總歲入	一、二九四、二〇六	一〇〇	一、八五〇、二四八	一〇〇	二、七六九、四一四	一〇〇
墺（單位千冠）	官業收入	二五七、六一六	三一	四五七、七二[illegible]	三八	一、七六七、五四一	三二
	租稅收入	四六五、八一八	五六	六五〇、七九六	五三	一、五六三、二三四	二九
	總歲入	八二七、七六六	一〇〇	一、二〇六、五〇二	一〇〇	五、四六〇、九八八	一〇〇
露（單位千留）	官業收入	九二、六四七	一五	二七〇、二四九	二九	二、二〇四、六八八	六三
	租稅收入	四二八、六〇〇	七一	六〇九、五八九	六五	一、二五三、一七六	三五
	總歲入	五九八、一五七	一〇〇	九三五、三七九	一〇〇	三、五九八、二六一	一〇〇
米（單位千弗）	官業收入	—	—	七七、八三〇	一七	三一九、二九七	三一
	租稅收入	二六五、四三〇	九三	三七三、五七六	八一	六九九、七〇三	六八
	總歲入	二八四、〇〇〇	一〇〇	四六五、九六三	一〇〇	一、〇三五、〇〇〇	一〇〇

右表の示す所によれば、一八九〇年頃迄は、一獨逸

を除く外は、租稅收入は全歲入に對する重要なる地位を占め、就中英、米、露の三ヶ國の如きは、最も租稅收入多く、歲入の大部分は全く租稅收入なりと云ふも、過言にあらざる狀態であつた。

然るに此租稅中心主義も、漸次官業收入に重きを置かんとする傾向となつて、露國の如き、墺太利の如き、一九一四年豫算にては、官業收入は租稅收入の地位を奪つて、殆んど官業中心主義とも云ふべき狀態に一變した、其他獨逸、佛蘭西、北米等皆租稅の減退に伴つて、官業收入增加の傾向となつたのである。

歐米列强に於ける歲入の實蹟、若くは豫算に示す所の數字に見るも、將又、澎湃として世界に漲る時代思潮より觀るも、官業勃興は自然の歸結であつて、單に戰後財政難を救ふ、一手段のみと見る事は出來ぬ點もある。

(六)

顧つて我國の財政狀態如何と云ふに、歲出膨脹の急激なる實に驚かざるを得ない。明治元年の歲出三千萬圓と、十億圓を超ゆる、大正八年度の歲出とを比較對照すれば、誰れか其の長足の進步に驚かざるものがあらう。試みに世界戰前、四十ヶ年の歲出消長を表せば、

明治八　年	六九、二〇三千圓	一人當負擔	二、〇三五圓
明治三十三年	二九二、七五〇	同	六、五三五
大正三　年	五五六、三九三	同	九、八〇五

其の間實に七倍餘の膨脹である。尤も我國は歐洲列强國に比べて、非常なる後進國で、稍や文明の空氣に觸れる樣になつたのは、四十年來の事である。又政治行政、軍事等の、制度の體裁を具へ來つたのも、最近二、三十年に過ぎない。況んや歐洲列强と班を列するに至つたのは、漸く三十七、八年戰役後の事で、國費の激增も從つて、日露戰役後の事である。

而して是等の國費は、如何なる費目の增加なりやと云へば、其の主たるものは軍事費である。勿論國家の發展に伴ひて、各般の政費を增すは當然なるも、獨り軍事費の增加は、他の政費の增加步合を超えて、之れ

を四十年前に比較すれば、八倍餘に當り、實に全歲出の三分の一を占むるものである。

	明治八年 歲出額（千圓）	明治八年 百分比	全三十三年 歲出額	全三十三年 百分比	大正三年 歲出額	大正三年 百分比
官業事業費及租稅徵收費	一、九七三	二、六	三、八七三	一、三	一〇、二六八	一、八
軍事費	二三、六六八	三〇、八	一三三、一一三	四五、五	一八四、〇九七	三三、一
國債費	一八、五一七	二四、一	三四、八四一	一一、九	一二六、一九七	二二、七
事務費	二六、四八四	三四、五	五七、三八五	一九、六	一八〇、三六七	三二、四
其・他	六、〇九四	八、〇	六三、五三八	二一、七	五五、四六七	一〇、〇
計	七六、七三五	一〇〇	二九二、七五〇	一〇〇	五五六、三九六	一〇〇

如斯劇增したる軍事費は、其後更に減退しない計りでなく、却て一層增加の傾向がある。大正三年以後に於て決定せられた、師團の增設、海軍擴張は云ふ迄もなく、世上に傳へらるゝ軍備組織の遂行、八八艦隊の完成、兵器の改良、補充等將來の軍事費は、膨脹又膨脹、殆んど底止する所なき有樣である。

軍事費に亞いで、財政上注目を要するは公債の增加である。日露戰後大增加を來したる、公債整理の目的を以て、設定せられたる彼の減債基金も、其後減額せられ又流用せられて、公債額は、寧ろ却て增加したのである。

大正六年末現在の公債額は、二十五億五百五十七萬餘圓にして、三十八年末現在に比するときは、約五億圓の增加である、更に之れを大正八年度豫算綱要に見れば、大正八年度に於ける公債募集豫定額は、

（一）	電話交換擴張費	二二、一〇〇、〇〇〇円
（二）	鐵道建設改良費	四〇、〇〇〇、〇〇〇
（三）	朝鮮事業費	一〇、四〇〇、〇〇〇
（四）	臺灣事業費	五、〇〇〇、〇〇〇
（五）	樺太事業費	一、一〇〇、〇〇〇
（六）	臨時軍事費	一八〇、〇〇〇、〇〇〇
（七）	臨時事件費	二二、〇〇〇、〇〇〇
	合計	二八〇、六〇〇、〇〇〇

合計二億八千六十萬圓を算し、外に臨時國庫證券の發行限度を擴張し、新たに發行すべきもの、三億圓に達する見込なりと云へば、八年度に於て發行すべき公債は、五億八千六十萬圓に上る計算となる。加之、七年度募債計畫中の未募債額七千三百九十五萬八千圓も、亦本年三月迄に募集せらるゝものなるを以て、結局大

正九年三月迄には、六億五千四百五十六萬八千圓の公債を增す事となるのである。而して是等公債の利子は如何と云ふに大正六年末現在の公債額に對し、一億千四百萬圓を要し、之れを六年度經常歲入額に對比すれば、其の五分の一に相當するのである。公債增加に正比例して、國債費の增加は論なく。其の他國民經濟上必要なる諸般の施設費等、國費の增加は益々甚しからんとする傾向が明かである。我國の財政事情は果して如斯止むなき歲出の膨脹を許すべきか、國民は亦能く之れを負擔する事を得べきか。

（七）

既往に於ける我國の歲入狀態は、

	歲入	歲出	歲入過
明治八年度	六九、四八二千円	六九、二〇三千円	二七九千円
仝三十三年度	二七四、三五九	二六六、八五七	七、五〇二
大正元年度	六七二、八七三	五八九、一五四	八三、七一九
大正五年度	八一三、二九四	五九〇、七九五	二二二、四九九

の如く幸にも常に歲入超過し、年々多少の剰餘金を生じ來りたるもの丶、是れが原因中には、歲入歲出の關係等もあるべく、必ずしも之れを以て我が財政狀態の良好を誇り、限りなき國費の膨脹に對して、負擔の餘地あるものと樂觀するを許さない。何となれば單に如斯數字のみを以てしては、現在既に過重の負擔なりや。將た又、今後尚增徵の餘地ありや否を、知る能はざるからである。

國別	人口	國富	一人當國富	租稅額	一人當租稅額	一人當國富に對する百分比
日	五四、八四三、〇八三	四〇、九一七、二九六千円	七四七円	四一四、二八五千円	七、五五五円	一、〇二一円
英	四五、三七〇、五三〇	一九六、三三五、七九五	四、三六二	一、七三六、七五〇	三八、二八〇	八〇八
佛	三九、六〇一、五〇九	一六一、〇六七、一四一	四、〇四九	一、三二〇、一三一	三三、〇八三	八一七
獨	六四、九二五、九九三	一三三、〇一二、一一三	一、九九〇	一、〇八八、四八一	一六、七六五	八四七
露	一七四、〇九九、六〇〇	一〇六、七九〇、二五七	一五	二、一一八、八一七	一二、一七〇	一、九七八
伊	三五、五九七、七八四	五三、五三一、八八八	一、四九一	七六九、八八五	二一、六二八	一、四五〇
墺	二八、三三四、九四〇	七四、九九三、二九〇	一、五一三	七〇七、四七六	二四、九七八	一、六五一
北米	九一、九七二、二六六	二七〇、五五六、九〇七	二、七七四	一、四五〇、〇〇〇	一五、七六五	五三二

右表に依つて觀れば、我國の租稅負擔額は、一見最低位にあるが如きも、公平なる比較は國富を基礎とし

て、觀察したるものでなければならぬ。然らば所謂眞の租税負擔はと云へば、夫れは一人當國富に對する割合であつて、是れによれば、露の一圓九十七錢八厘を最高とし、米の五十三錢二厘を最低とする。我國は一圓一錢一厘で略々中間に在るものである。英、米、佛、獨の租税負擔割合は、高位に在るに拘はらず、國富を基礎とする場合は、却て低位となる。於茲、其の富力の如何に充實し居るか、又强國として誇るに足るかを知る事が出來る。英米其の他の列强が、今次の戰爭に際し、驚くべき巨額の戰費を負擔して、尙綽々たる餘裕を示す概ある事も、眞に故ありと云はざるを得ないのである。

之れに反し我國は、貧弱なる富力を以てして、比較的過重の負擔を爲し居るものといふ事が出來る。而かも、其の負擔を租税別に觀れば、

	直接税 金額（千分）	直接税 百分比	間接税 金額（円）	間接税 百分比
明治二十六年	二八、〇八七	四〇、一	四一、九一七	五九、九
同　三十五年	一〇〇、六九九	六五、五	六二、七五三	三四、四
大正　元年	二七四、一三二	六四、四	一五二、八五三	三五、六
同　五年	一五一、四六九	四三、五	一九七、一九三	五六、五

漸次直接税より、間接税に移り行く傾向がある。直接税が主として、富者階級の負擔に屬するものなる事は、前に述べたる如く、之れを歐米の租税負擔の傾向に比するときは將に逆行である。

元來租税の理論上よりするときは、直接税は租税の中心を爲すべきものであつて、我國の直接税が比較的少き割合に在る事は、將來に增徵の餘地あるが如く見ゆるも、我が直接税は、殆んど總てが地租なるが故に彈力あり、屈伸力ある租税としては、餘りに有望なりとする事は出來ぬ。

這次の世界戰には、我國亦交戰國の一員たるとは云ふものゝ、戰亂の中心より隔絶し居たる關係上、經濟上には、却て未曾有の好況を招致し、一躍十數億の正貨を蓄積する事を得たるも、戰後常態に復するときは、忽ち貿易の逆調となり、成金の榮華も哀れ一場の夢と化して、殘るは通貨膨脹による、物價騰貴の嘆と、奢

侈の弊風のみなる事は、之れを想像するに難からざる所である。果して然らば將來我國の歲入は、租稅の增徵に多くを期待する事は出來ぬと云はなければならぬ。

玆に於て年々增加する國費に充當すべき收入を、租稅以外に求むる要がある、卽ち官業の擴張は、此要求を充たす、唯一の途ではあるまいか。

(八)

我國に於ける財政上の目的に由る官業の起原は、極めて輓近の事であつて、專賣としては僅かに、煙草、鹽、樟腦を數ふるに過ぎない。尤も官業としては造幣、郵便電信、鐵道、印刷、兵器製造、製鐵等頗る多くあるも、設立の目的、秘密を保持し、或は供給の圓滿確實を期し、或は產業奬勵の趣旨に基く等、素より財政上の理由を主としたるものにあらざるが故に、其の收入の如きに至りても總歲入に對して、優勝なる地位を得る事は出來ない。近時砲兵工廠、又は製鐵所の異常の收入を擧げたるは、偶々時局の影響を受けたるものであつて、永續的のものではない。併しながら財政上の理由に因る、專賣制度創設以前たる、明治二十九年度の決算に於て、千七百七十六萬餘圓の收入を擧げ、租稅收入七千六百三十八萬餘圓に比較するときは、其の二割三分に該當し、之れを總歲入一億八千七百餘萬圓に比較するときは、租稅收入は四割一分、官業收入は約一割弱に當り、決して多額なりとは云ふ能はざるも、亦輕忽に視る能はざる財源の一であつたのである。

財政上の目的のみに由り起りたる官業としては、明治二十七、八年戰後經營の必要に迫り採用せられた、葉煙草專賣制度……其後日露戰役の戰費に充當する爲め、改正を加へ現時の煙草專賣法となつた……臺灣に於ける、樟腦專賣との連合上、起りたる樟腦專賣、及三十七、八年戰の戰費財源に充つる必要上採用した、鹽專賣の三者であるが、是等の專賣制度施行せらるゝと共に、玆に我國の官業收入は大激增を見る事となつたのである。

今官業收入の二十年前の狀況と、現在に於ける狀況とを對照すれば左の如きものである。

區分	明治二十六年度決算 金額	百分比	明治三十六年決算 金額	百分比	大正五年決算 金額	百分比
官業收入	一一、七四三、二六八円	一〇	五五、七〇二、〇六七	二一	二〇七、一〇八、五八三	二六
租稅收入	七〇、〇〇四、七六三	六〇	一四六、一六三、三六三	五六	三四八、六七三、八四〇	四三
其の他	三三、〇二一、三五〇	三〇	五八、三五五、三二八	二二	二五六、九三二、四一四	三一
總歲入	一一四、七六九、三八一	一〇〇	二六〇、二二〇、七五八	一〇〇	八一三、二九三、八三七	一〇〇

右表の示す處によれば、二十年來官業收入の增加は、頗る著しきものである。二十六年度より十ヶ年後の三十六年度に於ては、既に五倍の增加を見たるに、大正五年度に至つては、殆んど十八倍の大劇增となつたのである。反之稅租は、二十六年度に比し、三十六年度は僅かに、二倍の增加に止まり、大正五年度に至るも亦漸く五倍の增加を見るに過ぎないのである。二十六年度に於て、僅々總歲入の一割に過ぎざりしものが、大正五年度に於ては實に二割六分に躍進した事實に見ると、如何に我が官業收入が、歲入上重要なるものなるかを知る事が出來よう。

我國官業の巨擘たる鐵道は、其の收益金を以て、直ちに鐵道の建設、改良費に充當するが爲めに、官業收入中に計算せざるも其益金、大正八年度豫算によれば、四千九百三十八萬二千餘圓に上る。現在の狀態にては益金のみにては其の建設、改良費に不足を告げ、年々巨額の借入金を要するも、之れを獨逸、伊太利、及墺太利等の各國に於ける鐵道收益が、國庫の財源として稍や重要なる位置を占めつゝあるに鑑みれば、將來我國に於ても、好個の財源となるの日ある事を、想像するも强ち空想とのみ云ふ事は出來ない。

要するに我が官業收入は、漸次歲入上重要なる地位を占めつゝあることは明かである。

（九）

以上概觀する處によれば、歐米列强は世界戰により受けたる、傷痍の恢復と、戰時公債の利拂により、戰後國費の膨脹は愈々甚しかるべく、而して之れが支辨を租稅に求むるとせんも、租稅には素より限度ありて、

無限の負擔は却て國家の存立を危地に陥らしむるものであつて、加之、滔々として侵略し來れる、民本主義の思潮は、到底消費税の增徴を許さないとすれば、玆に勢ひ官業の擴張を企圖し、國家自ら經濟事業に從ひ、私經濟的收入增加の途を講ずるのは、寧ろ自然の歸趨と云はねばならぬ。

我國は世界戰の爲めに、直接多大の損害を被らざりしも、東洋の盟主として、外には戰後益々激烈を加ふべき經濟戰場に角逐し、內には國民の保健、食糧、勞働等諸問題錯綜し、之れが解決に伴ふ諸般の施設費、及國防費の爲め、國費は一層增加すべく、而かも財政狀態は之れを租税收入に、期待し難しとせば、遂に税制の整理を促し、負擔の公平を圖ると共に、歐米の大勢に、順應して、官業擴張に到達すべきことは、財政政策當然の歸結たらざるを得ない。我國民獨り、世界の風潮に風馬牛たらざる以上、將來の財政策、亦世界の大勢に逆行するを許さざることと勿論である。

(大正八、二、九稿)

今度獨逸では勞兵會の運動を緩和する爲めに社會主義實業法案と云ふものを議會に提出することを政府が發表し人民の勞力を國家の保護の下に置き國家は各人相當の生活を維持し得る保障を爲し又經濟的企業及有價物(土地を含む)を共同經濟に移すこと及共同經濟の爲めにする經濟貨物は國家の監督の下に經濟自治體の下にて行ふことにしたと云ふことだ果して斯くの如き制度が圓滿に行はれるか何うか頗る疑問であるが假令失敗しても夫れは却つて好個の經驗を同主義者に與へることとであらう。

獨逸の戰後の財政が果して斯る複雜な制度で維持されるか何うか人民の生活が戰前よりより好いものとなることが出來るか何うか之れは一に今日の獨逸國民の覺悟如何にあることとで單に庶民階級に歡迎される制度を矢鱈に實行することに依つて戰後の經營が全くなると云ふことは出來まい (世界思潮)

にきはへるなにはのみやこ空はれて
雪よりのぼる朝けむりかな

林　善　六

A glorious New Year's Morn doth hail
Fair *Naniwa* of yore renowned;
And lo! the curling household smoke
Ascending from the snow-bound ground!

雪はみな野山のものとなりはてゝ
みどりにはるゝけさのそらかな

竹内萬右衛門

The snow-flakes that fell so bounteous
Hill and dale have seized as their own;
And lo! the azure vault glorious
Shines brighter than it ever shone!

たちつゞくいらかの波のしらしらと
雪の都は明けにけるかな

尾上八郎

Day dawns upon the Capital in snow:
Unbroken rows of tiles on housetops loft,
Like the rippling waves of a mighty sea,
Gleam in the first rays of the new-born sun.

法學博士　和田垣謙三

和歌英譯

明治天皇御製英譯

仁

國の爲め仇なす仇は摧くとも
　いつくしむべきことなわすれそ

Love.

Crush thou the foe with all thy might
To guard thy sacred country's right,
But yet a heart that knows to love,
O be that thine all things above!

勅題朝晴雪英譯五首

はれわたる廣野の雪にはてもなき
　御世の光のみゆるけさかな
立花寛篤

Snow On a Bright Morning.

Gazing on the boundless snow-bright plain,
　O how I view—with the mind's eye—
The glory of the gracious reign,
　Destined to last unstained for aye!

うちわたす浦の松原ゆきはれて
　みちくるしほに朝日さすなり
中野善次郎

The pine-girt beach across yon bay
　In sparkling snow is wrapt;
And the morning sun sheds his ray
　Upon the swelling sea.

文藝漫錄

△田山花袋は、毎日晩酌二合と定めてゐるので、夕暮近くなると、咽喉がグビ〳〵鳴つて、早く、酒が飲みたくなる相な。大町桂月を向ふに廻はして、飲むには正に、好敵手だつたが、その桂月が、全く禁酒して了つたので、「大町君も嘸、淋しいだらう」と同情してゐた。

△上司小劍は、甘黨の旗頭だけあつて、奈良漬一片喰べても、顔が眞赤になる相で、その代りに、甘い物にかけては、中々の豪の物、折々、有樂橋畔の笹屋へ、顔を見せるが、いつも、珈琲に、西洋菓子と定つてゐる相だ

△廣津和郎は、新進作家として、メキ〳〵と名を賣り出したが、此の人には、妙な癖がある。向ふ見ずに、カフヱの女に戀することだ。そのため、時々、意外の事件を演出して、氣の弱い和郎は、道々の體で、一時、姿をひそめることもあつたとか。

△生田長江は、何がなしに、警句を連發したがる癖がある。それが、酒に醉ふと、一層甚しくなつて『君は貧乏だが、心は金持だ』と云つたやうな具合に、得意になつて、警句を吐き出さうと力める處は、如何にも愛嬌だ。

△岡本綺堂は、今度、洋行したが、中々の生活上手で、大分、貯金も出來てゐる相だが、綺堂の著書は、本屋から無代で呉れる外に、原價で、二十册ばかり、自費で、買ひ求め、それを友人知己に配布する相で、本屋の番頭先生は「綺堂さんは中々、几帳面な御方です」と云つて、賞讃してゐた相な。

△一時、ロマンチシストとして、未明と共に文壇に活動した西村醉夢は、その後、船舶の文化史的研究に熱中して、その方では、相當の學者として斯界に認められるやうになつて、學士院の方から二千圓の研究費を送られ此の夏は、それで、滿鮮地方踏査に出かける相だ。

△中村吉藏と共に、曾て劇壇に濶歩した「大農」の作者佐野天聲は、全く劇作の筆を絶つて了つて、今では、一個のトルストイヤンとして、靜岡の大宮に引籠り、朝夕、富嶽の姿を仰ぎ乍ら、半農半學の生活を送つてゐる。

△佐藤春夫は、何かと云ふと「谷崎」がと云つて谷崎潤一郎の事を云はねば、氣が濟まぬと云つた風がある。佐藤春夫に、これだけ、思はれてゐる潤一郎は、幸福な男だ。

△近頃、漸く認められた葛西善藏は、長い間生活難に苦められて、一時、青くなつてゐたが、今度漸く、運が開け始めたので、又々、例の酒癖を發し、旺んに、山の手邊を飲み廻つて、廣津和郎や、宇野浩二などに向つて、管を捲き、氣焔中々旺んであるげな。

△岡本一平は、何に感じたか、此の頃、文章の方に凝り出して「今の文士なんざあ甘いものさ、ヘン、乃公の文章位、書ける奴があるかい」と云つたやうな鼻息で却々、物凄い。

(△ □ ○)

エンスーズィヤズムなき生活

——廣津和郎君の『二人の不幸者』を讀みて——

宮島新三郎

風が烈しく吹き出して來た。ザーッとまるで大浪が岩に碎けるやうな音を立てゝ遠くで樹立がわめく……あゝやつて來るなと思ふまもなくどうつと雨戸に風が突當つて家をゆさぶつて行く。不安でたまらない。東の廊下の戸をはづされ、垣根をこはされ、戸袋を持つて行かれた、いつかの嵐の夜がすぐに思ひ出されて、胸がキユーとしめつけられるやうだ。此の前のは秋風、こんどのは春の風で、方向が逆だから、少しの力でもすぐにペシヤリとつぶれはしないかなどゝいふ不安な淋しさに襲はれながら、私は尚ほも凝つと机の前に坐つて、其處に開かれてある書物に心と眼とを向けてゐた。坐つてゐるすぐ下をすくはれるやうな動揺に幾度縮み上つたか知れなかつたが、その書物を伏せようとは思はなかつた。

讀みつゞけた。色々なことを考へながら。そして何時の間にか風のことなどはすつかり忘れて、その書物に讀み耽つた。グイ／＼と描くべきものは殘らず描き描くべからざるものは捨てゝゆくと言つたやうな引きしまつた筆力が殊に私の心を捉へた。其處には生々とした作者の心が文字の間から躍り上つてゐた。一つの焦點がはつきりきめられてゐることも嬉しかつた。

シモンズは「モウパツサン論」の中で嘗つて次のやうなことを言つた。「モウパツサンの書いたものは何でも面白い、偉大だと言はれてゐる何れの小説作家の作品よりも主として興味中心である、眞に偉大な作品となるには餘りに興味本位である。他の如何なる藝術品の場合に於ても同じであるが、小説にあつても、眞に偉大

な作品は非常に綿密なれ常にはりつめた注意を要するからさう容易くは讀めるものでない。私達がバルザックを讀む時には、突然非常に大きな人生のゴタ〳〵の中へ押込められたやうに感ずる。從つてこの新しい、抵抗の出來ない、忙はしない、神秘な世界を瞑想しようとする努力が私達を休ませる。私達は丁度市街の中の大きな群集から距れて戸口に遁入り込まうとでもするやうに私達自身の中に引つ込まうとする。私達は少しく考へる爲めに、この疲らさうとする要求から距れて、私達のあらゆる能力に頼らんが爲めに、ページから眼をはなして上を見上げ本を半ば閉ぢる。私達がフローベルを讀む時には、一つ〳〵の記述の完全と美とに醉つてぐづ〳〵手間取ることを喜ぶ。私達は詩に思ひを止めると同じやうに、此の散文を瞑想する。………けれども私達は單に物語としてのみモウパッサンを讀む。ページから眼を上げるやうなことはなく、急いで讀む。たゞ〳〵早く結末に達したい、どんなことになるのか知りたいとばかりあせる。」

全く今の小説にはストリーをストリーとして讀んで仕舞へばいゝやうな小説が餘りに澤山ある。讀んで仕舞つて後に何も殘らないやうな小説も隨分ある。讀んで好いことをしたと思はせるやうなものはあまりに少ないのに今更驚かれる。ページから眼を上げて、瞑想を強ひるやうなものが尠ない。最う少しどうにかならないものかしら、最つとはりのある、どこかにどしんとした重味のあるものが出てもよくはないかしらと、私は何時も今の文壇に向つて不滿を抱いてゐる。いや不滿を通りこして淋しい氣のすることがある。然し又一方から考へると、餘り多く讀んでゐないからだ、殊に好いものに眼を通してゐないからだとも言へよう。實際さういふ私自身のおちどから來た不滿や淋しさならすぐ押しやつて仕舞はなければならない。一體文壇はどういふ所まで進んで來てゐるのだらうか。

こんな不安な淋しい氣持の間にあつて、私は偶然にも廣津君の「二人の不幸者」を讀む機會に接した。そして廣津君のもつた何ともいへない大きな力に捉へられ

ない譯にはゆかなかつた。何よりも先づ斯ういふ作品を我文壇に提供されたことを廣津君に向つて深く感謝しなければならない。「二人の不幸者」は決してそのまヽ讀み流して仕舞へるものではない。傑作だとか傑作で無いとかいふとは別として、あの作の中には私達が作者と同時に色々考へなければならないものが澤山ある。それから又作者その人の心持に就いても深く考へなければならないことが多い。私はこの小説を讀んで大變好いとをしたと思つた。かういふ作品があるのだから、不滿なものや物足らないものが他にあつてもそれは仕方がない、たつた一粒の砂金しかない砂原からそれを見つけ出すには、矢張りその砂原全體をよくしらべなければならないのだから仕方がないと思つた。

風は昨夜ほど烈しくはなかつたが、でも時々立てつけの惡い窓の障子をゆさぶつて過ぎて行つた。然し晝間であるといふこと、わけても明るい日の光が障子一杯に照りつけてゐるといふことは何となく私の心を落着かせた。私は「二人の不幸者」の中の蠣崎や押川の生活を靜かに考へて見た。彼等は作者の説明してゐる通り、弱い性格を持つた現代の青年若しくは壯年者である。彼等は恰かも日陰にばかり育つて來た草花のやうなものである。彼等は薄日の光を受けてさへゐれば辛じて生活が出來る。けれども一度明るく強い日光の輝く所へ來ると、その力強さと明るさとの爲めに、彼等はなよ〳〵と萎れて仕舞ふ。蠣崎にしても押川にしても、彼等自身を支配する自我と、意思を持ち合せてゐない。蠣崎は現在下宿代も拂へないで、追出されなければならないといふ時に、宿のおかみから今までのは心配には及ばないと云はれても、それでも尚彼の身の廻りの眼ぼしいものとして只だ一つしかない置時計を宿料のかたに置いて行かうとはいはないではゐられない、氣の弱い、一方から云へば善良な青年である。而かも彼は自分のさういふ弱さ、社會に順應してゆく力の不足さに氣づかいでゐる。そして彼は緊張した氣持

になれないこと、仕事らしい仕事の出來ないことを自ら說明して「何よりも一番惡いのは、俺に何等の負擔のないことだ」と呟いた。然し彼の性格の弱さが、緊張した氣持のとぼしさが決して單に彼の呟き通りに負擔のないといふことだけではない。若し境遇の爲めにあゝいふ、賴り所のない、にへきらない、影の薄い生活をしてゐるのだとすれば、彼につきまとつて來る生活はあんなに慘めないたましい、感じを私達に起させはすまい。事實に於て、彼は立派に責任のある地位に置かれたではないか。彼はお仙といふ娘を泥沼のやうな生活から救ひ出さなければならない大きな責任を與へられた。否な與へられたといふよりは、寧ろ自からそれを求めて行つた。

　彼の性格には弱い、ヘナ〳〵した一面があると同時に、又他面には殆ど空想に近い理想的な性質がある。實行の手段には全然關係のないやうな、假令あつてもそれは極めて不合理なものである——空想や理想を畫いて、彼はすぐにも實現の出來るやうに心得てゐる所がある。あまりに易々と理想や空想を現實に移さうとする——そこから彼の悲劇は起つてゐる。其處に更に作者の所謂神經性の焦燥と餘りの反射運動的の短氣とが手傳つて來る。そして悲劇は益々その色を濃くしてゆくのである。

　蠣崎の性格の弱さ——作者が描かうとねらつたものは、(二十二)から(二十三)の終りへ行つて殆どクライマックスに達してゐる。お仙親子の家の全體の場面の點出から云ふと、お仙の母親の言葉や動作、それから周旋屋の人物や行動の描寫には今一歩深めて欲しいといふやうな不滿が感ぜられないではないが、蠣崎がフラ〳〵とあの場へ這入つて行つて、お仙の身の上について證明するつもりなのが少しも言葉が出ないで、母親や周旋人に馬鹿にされて、放り出されてから、通りに出て、電信柱の立つてゐる所まで來て、「急に倒れるやうにその電柱にもたれかゝつて」顏を押立てながら泣き出す光景は、この一篇の中でもユニークな涙を誘ふに十分なものであると云はなくてはならない。

蝋崎の性格の弱さは決して責任の負擔がない所から起つたものではない。言を換へれば境遇の爲めにあゝいふ人間的不幸を醸してゐるのではない。彼の性格の弱さは最つと根本的な所から來てゐるのである。作者廣津君の言葉を借りて言へば、「底力の缺如」に外ならない。更に悉しい言葉で言へば、自己に對する理解と、自己と周圍との關係、つまり周圍に於ける自己の地位に就いての理解を持たないからだと説明することが出來る。蝋崎は正しく自己を把握してゐるとは云へない。彼は彼の神經性の焦燥に就いて、緊張さの不足に就いて、自分が弱い男であるといふとに就いて知つてゐる。けれども彼は中心の自己そのものに就いては何物も知らない。周圍の中に自己をはつきり浮き立たせるとを知らない。彼にはいくら周圍の事情が改善されたからといつて、又、社會のことが總べて人道的に光明を贏ち得るやうになつたからとて、人間的に精神的に幸福な生活が送れようとは思はれない。飽くまでも彼は人間から、社會から見捨てられた男である。否な見捨てられたといふよりも寧ろこつちから見捨てゝ居る男であると言つた方がよい。彼が本當に自己といふものを掴まない以上、周圍に於ける自己の關係をはつきり知らない以上、彼は永久に救はれないであらう。本當に自己がはつきり掴めて、周圍に於ける自己の地位が分つて來れば、そこから動くべき力も出て來るし、又その力の動くべき方向も定まつて來るであらう。

私はこゝまで來て、ルーヂンを思ひ出した。言葉のみあつて實行のないルーヂンを思ひ出した。「ルーヂン」の中のレヂネフはルーヂンを批評して、「彼には信仰がある、彼は正直である。彼は熱狂（エンスーヂアズム）といふ現代に於ける最も尊い性質を持つてゐる。吾々はたまらないほど合理的になつて仕舞つた。どうでもいゝ主義になつて仕舞つた。無情になつて仕舞つた。」と言つた。ルーヂンはかういふロシヤの狀態に對して目をつぶつてゐることが出來なかつた。彼はより良い生活の爲めの理想に火を點じて歩いた。私達はツルゲニエーフに依つて描かれたルーヂンのユートピアニズムを以て、彼の性

格と行動とに存する「缺如した或るもの」を以て、彼の不幸の原因であるといふことを認めないではゐられない。けれども他の一方に於ては、レヂネフと共に「それはルーヂンの缺點ではない、それは彼の運命だ——殘酷な不幸な運命だ——それに對して吾々は彼を責める譯にはゆかない」と言つて、周圍といふものを重く見て、ルーヂンの不幸を考へないではゐられない。

けれども「二人の不幸者」の蝋崎はルーヂンに較べて餘りに眞底からの熱に乏しい。只だあるものは一時の神經性の焦燥と興奮とのみである。到底彼には明るみへ出て理想の火を點ずるだけの勇氣がない。お仙を救はうとする氣持にすら、隨分不安な、一時的な思ひつきに過ぎないと思はれるやうな分子がつきまとつてゐる。

正直ではある、惡いことなどはとても出來さうに思はれない、それでゐて少しも精神的に幸福を見出すことが出來ないで、如何にも弱々しい生活を送つてゐるのは押川である。彼には蝋崎の持つてゐる理想や空想や、熱狂（エンスーヂアズム）(底力のない、表面的な)さへない。而かも彼は社會とか周圍とかに對して不思議な位道義的な眼を向けてゐる。實際には道義的熱狂はないのだが只だ反射的に道德意識を働かしてゐるに過ぎない。彼に取つてはさういふことが一つの仕事なのである。社會は言ふまでもなく完全ではない。美に滿ちてはゐない。醜もあれば惡もある。けれども決して押川の見てゐるやうに、總べての社會、總べての人々が不正であり、不善であるとはきまつてゐない。然し彼の心は彼の眼は、その不善の方面のみを不正の方面のみを見たり感じたりすることになれてゐる。それなら、さういふ不善や不正を見て、烈しく心が痛むのであるから、それをどうかすることが出來るか、それを押切つて行くことが出來るかといふに、それは到底彼には爲し得られない所である。自らを淸くすることも出來なければ、他を淸くすることも出來ない。不正や惡に對して反射的に

道義意識を起しては見るが、その反應は何等の結果をも齎さないで消えて仕舞う。

作者は押川のかうした性格の薄弱さを現さう爲めに、ことさらに押川の出てゐる雜誌社の不正事件と押川と染井といふその雜誌社の電話掛りの娘との戀愛を以てしてゐる。社長にすゝめられてものにする爲めの記事を書かされることに對して押川は反抗して見るが、結局は矢張り書いて仕舞う……その結果に依つて可なりのゆすり金を得た社長は慰勞として彼に二十圓の金を與へる。彼は初めは頑としてそんなものは貰ふまいと決心したが、ふつとした心のゆるみで手が出てその包金を取つて仕舞つた。廣津氏は此處のシーンをそれからその時の押川の心理狀態をこまかに分析し且つ描寫してゐる。弱い〳〵押川がよく出てゐる。

この押川の弱々しさは更に染井との戀を得た時に一層よく現はれてゐる。色々な女とも過去に關係したことがあるが、これといつてさう大して熱も湧いたことがなしに三十幾つの今日まで獨身で來た押川には、最う戀などゝいふとで彼の生活が改善されさうにも思はれなかつた。彼は又最う美しいはなやかな戀などの出來る自分でないと思つた。彼はしみ〴〵自分の腑甲斐なさを感じないではゐられなかつた。彼は初めて同じ社に電話掛をしてゐる染井に云ひ寄られた時、どんなにか自分の身のあさましさを感じたことであらう。彼は淋しく泣き出したいやうな氣で「なに、何だつて構やしない。もう俺も三十二なのだから……三十二で而も無力なやくざ者なのだ。もう贅澤なことなど望んでゐられる柄ぢやない……この女で結構だ。十分だ。……さうだ、恐らくこれが俺の最終の戀なんだらう……」と考へないではゐられなかつた。眼のしよぼしよぼした電話掛の娘、それが相當なんだらうと彼は考へた。彼は本當に生活のみじめさに蹴落されてゐるので、本當に戀に生きる氣持がどんなに幸福だかといふやうなことは考へられなかつた。押川は染井と二人肩をならべて町の通りを歩きながら「これに限る、これに限る。こんな風に謙遜に、平凡に、ぢみに、長續き

のするやうにやつて行くに限る……」と思つた。その時の彼の顔には恐らく淋しい滿足の微笑が浮んだに相違ない、何といふ底淋しい、腹の中のものをすつかりさらつてゆかれるやうな、たよりない、はかない、泣き笑ひの人生であらう。私は二人が戀に落ちて、初めて銀座を散歩してゐるあそこの描寫を何度繰返して讀んだか知れない。そして笑ふにも笑へない、泣くにも泣けないやうな妙に胸をしめつけられるやうな心持を經驗した。

蠣崎も押川も矢張り日蔭に咲いた草花であると云ふより外はない。少しでも生々とした色艶を持たせようと思つて、日光のあたる所へ持つて來れば、忽ちにタヂ〲と萎れかへつて仕舞ふし、それかと言つて、そのまゝ日蔭に置いておけば日增にその色や艶を失つて仕舞ふ。どうすれば一體良いのか。作者と共に一種の憂鬱を感じないではゐられない。そのまゝそつくりして置けば自然に花は萎んで枯れる。たま〲日光へさらせば俄かに萎れて矢張り枯れて仕舞ふ。それはどうしたつて外からの手術や培養で生氣を吹き込むとは不可能である。彼等自身が自己を育て培ふべきヴァイタル、フォースを生み出すより外はない。空虚な肉體だけで死に打勝たうとしてもそれは無益な努力である。生命の根本の力が少しでもありさへすれば、假令それを宿してゐる肉體はどんなに病み衰へてゐても死に抵抗して生命を續けてゆくことが出來る。

けれども蠣崎にも押川にもその肝心のヴァイタル、フォースがない、生命の力がない。熱狂（エンスーチアズム）がない、作者が斯ういふ人達を目して不幸な人々と見たとは正しい。然しこの場合に於ける不幸といふとは決して世間的な不幸ではない。精神的な、人間として、一箇のマンとして生きてゆくものゝ不幸といふ意味でなくてはならぬ。

私は今まで主として蠣崎と押川との性格の弱さとい

ふことに就いて考へて來た。こゝで私は作者の觀念のはつきりしてゐることを改めて言はなければならない。作者が蠣崎や押川の生活に於て見出した不幸、それに對する作者の憂欝、さういふものを讀者はひし〱と感ぜしめられる。彼等の生活の中から不幸や、それに對する憂欝がにぢみ出て來て、讀者を押へつけないではゐない。然し又一方では描かれたる彼等の生活とは違つた憂欝や不安やが感ぜられるのはどうした譯であらうか。言ひ換へれば、作者が無理に彼等の性格の弱さを表はすべき色々の道具をあまりに並べすぎて、これでもかこれでもかと讀者に逼つてゐるやうな所がありはすまいか。彼等の生活の中から彼等の性格の弱さを表はすに都合のよいことばかりを抽出して來て讀者に訴へようとする所がありはすまいか。そしてかういふ觀念の先つ走りは動もすると、作品の採つた味を深めるといふよりは寧ろ淺くするやうなことがないとは限らない。例へば押川の道德的意識のは向ふ對象たる雜誌社の光景や、社長の身振り言動の描寫などはきまつた常識知になつてゐることから餘り遠く距れてゐない。而かも作者は可なり輕妙に快適に社の有樣や社長のことを描寫してゐるやうである。けれどもさういふものからは深い感銘は得られない。

それからこれは前のことゝは少し違ふことであるかも知れないが、作者は覘つたものに對しては非常に綿密な注意と行屆いた觀察とを施してゐるが、覘つたもの以外のこと、附屬のことには餘り深い注意を拂つてゐないやうに思はれる。例へばお仙といふ娘、その母親、それから周旋屋などのことを描く段になると、大變輕い氣持になつてはゐないかしらと思はれる。無理に淫賣などをさせられてゐたのがふとした所から自己に眼醒めてゆかうとする娘、娘を喰ひ物にしようとする母親周旋屋らしい周旋屋は、それ〱普通の意味でそれらしく描けてゐる。けれども欲を云へば、今一歩底の方から深く盛上げてほしいといふ氣が起らないでもない。さうは云つても染井といふ娘は本當によく描けてゐるやうに思はれる。眼のしよぼしよぼした日蔭

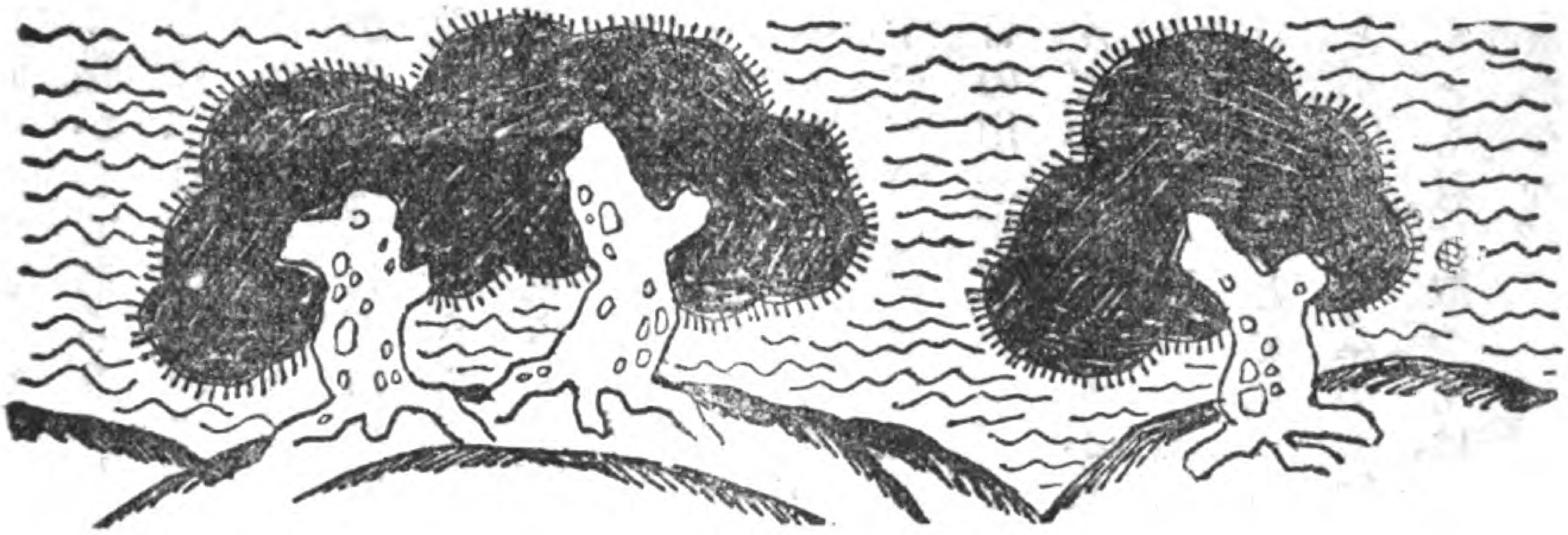
者が遲ればせではあるが機を得て有頂天になるあたりは實に驚異に價する描寫であると云つてよい。

最後に今一つ云はして貰ひたいことは、蠣崎と押川とをちやんと區ぎりをつけて別々に描いたことに就いてゞある。このことは既に他の人も何ういふ意味に於てだか言はれたと思ふが、私の言はうとすることは、蠣崎と押川の生活を描くのだつたら、二人の生活を一篇の作品中に盛上げようとするのだつたら更に一歩二人の生活、そこから湧いて來る交渉を色濃く描いたら、一層感銘の深いものになりはしなかつたかといふことである。

嘗つて或る所で廣津君やその他二三の人が落合つた時、私の友人は、「蠣崎と押川とを別々に書くに及ばなかつたやうに思ひますが」と、云つた。すると廣津君は「一方は世間知らずの男、他方は世間にぶつかつてゐる男を書いたつもりです」といふ意味の返事をされたことがあるその當時私は毎日の新聞に掲載されてゐる「二人の不幸者」をかゝさず讀んでゐなかつたので、何れの考へにも賛成することは出來なかつたが、大體に於て廣津君からよりは友人の方からより委しい說明をきいたので、友人の考へが正しいやうに思つてゐた。然し今になつて讀んで見ると、二人を描く必要はなかつたといふことは決して言へないやうに思ふ。矢張り廣津君の言はれる通り、二人は性格の方向も趣味も考へ方も違つてゐる。二人は確かに二人として描かるべき人物である。けれども「二人の不幸者」に於ては、違つた二つの小說を一囘宛順に讀むやうな氣がして、どうしても一篇の小說といふ感じがしなかつたことは事實である。此の意味で、私は二人を二人として描くべきとは當然であるが書き方に今一層の工風をこらしたらといふやうなことを考へて見た。尤も新聞へ掲載するといふ條件の下では、寧ろあゝいふ風に截然と書くとの方が讀者にごた〳〵した印象を與へないですむといふ效果があつたかも知れない。然しさういふ立場を距れて、一箇の作品として見る場合には、別々の妙なそぐはない氣持が經驗される。それからこれも例の落合つ

た時の話であるが、廣津君は主に手法とか書方とかいふ點からであらうが、「五十何回かの中の？十回かは僅かに二日の出來事さ。自分では一寸も氣がつかなかつたが驚いたね」と言はれた。その時何十回と云はれたか今は記憶してゐないが、それに又本になつた方の回數は違つてゐるが、さう云はれたのを憶えてゐたので、頁を繰つて見ると、回數二十三回總頁一九一頁の中、お仙が蠣崎の所へ來て「蠣崎さん、あたし阿母さんと一寸東京に行つてまゐりますのお留守していらつしやいよ」といふあたりから初まる（十一）六八頁から（二十三）まで、殆ど全體の三分二强はなるほど僅かに二日の出來事である。けれどもかういふ風なことは、讀んでゐては少しも不自然には思はれなかつた。手法の上から云へば前の出來事と日數との割と後の出來事と日數との割とを比べると不釣合であるといふやうなことが問題になるかも知れないが、讀む者に取つては、尠くとも私に取つては、そんなことは少しも念頭に浮ばなかつた。

作者から見て、又讀者の受けた感じから云つて、多少の不滿や物足らなさは、よしあるにせよ、兎に角「二人の不幸者」は最近私の讀んだ創作の中では一番感銘の深かつたものであることを疑はない。そして讀んだまゝで深くも考へないで、私にこの感想を書かしたといふのも、全く「二人の不幸者」が私に與へた不思議な力に依つたものであることを信じてゐる。私のこの感想は作者を傷けてゐる所があるかも知れない、又讀者を誤るやうなことがないとも限らない。けれども何故か私は私の思つてゐることが云ひたくてたまらなかつたまゝに筆を執つて仕舞つた。それから又自分の生活とからみ合はせた風に書き出したのも、實はこの「二人の不幸者」を讀んだ後で、すぐに「二人の不幸者」に出て來るやうな男の話を人から聞かされたので、それに就いても作者と一緒に考へて見たいと思つたからであるが、今はそれを語り且つ考へるべき機會もない。まとまらないまゝの感想で筆を擱く。（三月四日）



俳句

鹽濱や人屑黒く風光る　格堂

法の山雲の上なる朧かな　同

峠から瀬戸へ果園や雉子の聲　霽月

剪定も晝餉休みや雉子の聲　同

雪解川舩高々と下りけり　余子

春風や三保の畑麥昔貌　同

春讀めば西行の歌の長閑かな　喜舟

木蓮に桃に淋しき木の芽かな　同

小机に日脚の遲き二月かな　枚尺

雪國の廣さありけり紀元節　同

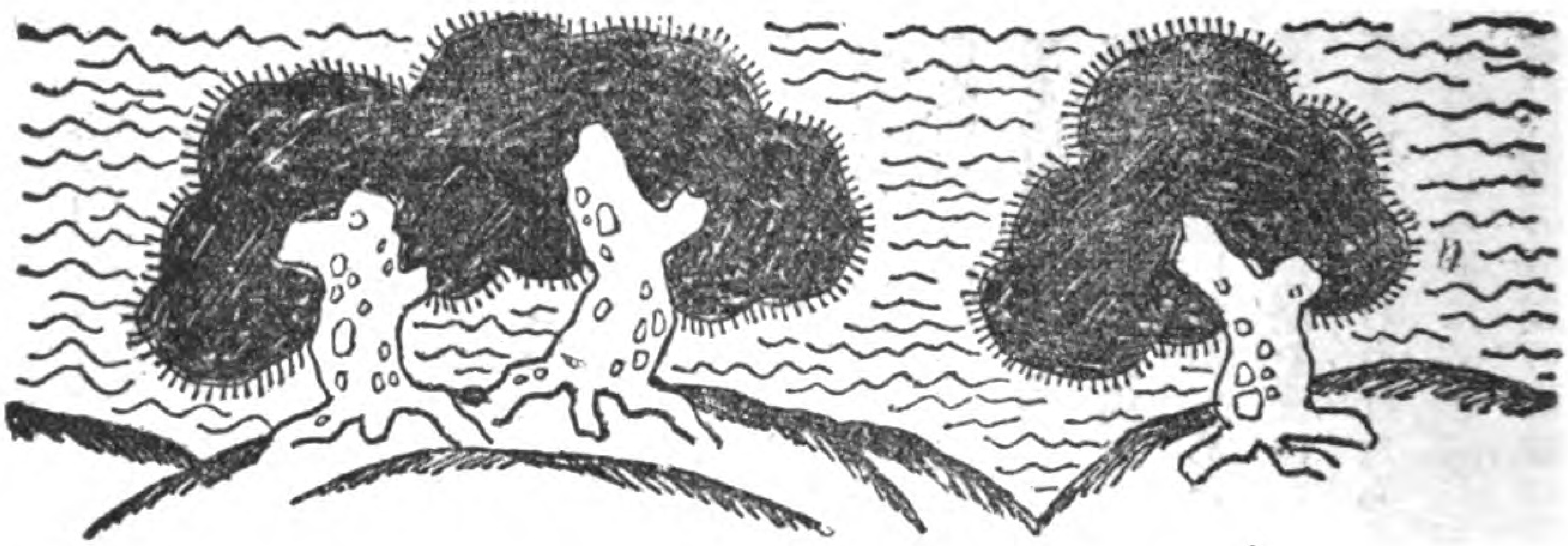
淋しさや草家の縁に野火の灰　炎天

きのふけふ雲もかよはぬ木の芽かな　同

楮の芽桑の芽に追はれ忙し　斷腸花

老漁夫や顏をぬらして春の雨　同





初雷や洗ふ椀浮く桶の水　燕子

煙る雨のぬらせるものに菫かな　同

春の夜やお寺の前のたゞの町　草々子

庵主の頑健にして木の芽かな　同

木の芽ふく善悪そこにありにけり　北斗里

河上より暮れかゝる村の長閑かな　同

畑打つやぐづ〳〵と堀に落つる土　好三郎

野遊や草に坐れば疲れゐし　同

春已に裏山かけて木の芽かな　秋刀魚

野のみどり春宵の灯に動くかな　同

春滿つや雨の中さへ揚雲雀　晨朗

山畑や雲ともならぬ梅一木　同

月出でゝ雲多き夜の蛙かな　迷堂

僧正に仕ふるひまの櫻かな　同

一燈の春の夜半となりにけり　東洋城

旅笠に古海道や春淺し　同



講和問題に對するショーの皮肉

バナードショウは其講和に關する意見を紐育アメリカン紙に寄せて居る例に依て皮肉辛辣英國の僞善的假面を引剝いて痛快極る▲講和談判は事實を基礎とすべきものであつて決してローマンスを土臺とすべきものでない、然るに何時も宣戰の布告など云ふものは好い加減なものだ這次戰爭も御多分に洩れない▲獨逸の罪惡を膺懲する爲と稱して多數の生靈は犧牲に供せられたが獨逸も同じ理由で國民を驅て戰場に赴かしめた▲英國は古來幾度か外敵の侵略を受けたから之を如何しても防止しなければならぬとの感銘を有する、之れ實に其艦隊が海上を支配し敵國の艦隊否數國の艦隊が聯合し來るとも劣らざる勢力を維持せんとする所以である、換言すれば英國は勢力均衡を保持しなければならないのである、是英國のモンロー主義である、若し米國が千の戰鬪艦を建造せば英國は二千の戰鬪艦を建造するであらう▲獨逸が衰えて佛蘭西が興隆し歐洲の覇權を掌握せんとする氣勢を示すに至らば英國は直ぐに獨逸と相結んで孤立の地位に立たしめ樣とするに違ひない、而して白耳義には愛蘭土と同じ位の自由を與へるだらう、英國の斯る行爲は斯くなさゞるを得ないからである▲



英國は如何なる事をなすにも左の手に右の手が何を爲しつゝあるかを知らしめない、英國の不干涉主義の自由黨や氣の小さい商人クエーカー敎徒（非戰主義の基督敎派）は斯くの如き計劃を欲しないだらう、英國の說敎師は地上の平和の福音を說き政治家は懇篤なる協商と壓迫せられたる小國の自由を口にするも其大艦隊は建造される、之アントウアプを脅威する覇權の第一步である▲獨逸陸軍の破滅は英國の外交政策上の普通の出來事であつて英國が隱忍して養成せる勢力の發露である、秘密保持の賜物である。

獨逸の償金と其財源

本編の筆者ポールクレー氏は米國ハーヴアート大學出身の統計學者にして、其著書數種夙に世に行はれ、其或者は三四大學に於て教科書に採用せらる。以て氏の學界に於ける地位を推知するに足るべし。今や賠償金問題は巴里講和會議の同委員會にて研究中なるが此際本編の如き獨逸國民の償金支拂能力を數字に基き研究せるものを紹介する亦興味なしとせざるべし。

賠償と懲罰との併用

償金年額過大に失せんか、其結果は確に獨逸產業の利益を減じ、產額を低下すべし。又勞働者は續々相次で海外に移住し獨逸政府は遂に支拂能力を失ふに至るの恐れあり。支拂年額は其頂點を超えず寧ろ之に接近せしめざる注意肝要なり。今一つ重要なる事は事物の性質上、賠償と懲罰とを併せ用ゆべからざる事也。

茲に懲罰と云ふは獨逸商品に對するボイコット之也。吾人は賠償を選擇し、殊更らボイコットは差控へざるべからず。何となれば賠償金の補助として商品を以て支拂に充當せしめざるべからざればば也。若し又之を爲さゞれば他に方途あるなし、獨逸の貯藏する正金總額は八億萬弗に過ぎず、而も、其一部は私有に係り、政府は之を自由にするを得ざる也。獨逸の有する鐵道工場耕地の總價値を、恰も償金として支拂ひ得べきもの丶如く云ふは非理も甚し。斯は啻に外國に手交し得べきにあらざるのみならず、賣拂ふ譯にも行かざるべければ也。斯ゝの彿き生產的財よりは其收益の一部を割いて、償金の支拂に供する外は、他に豫期するを得ず。以上は此の議論の前提なるが、普佛戰爭の償金が其五分の四は證券及商品に支拂はれたるを指摘し、這次の償金も斯くするの外なかるべく從て獨逸を戰爭の損害を償はしめんには、再び獨逸をして世界市場に立たしめざるべからずとなし次で

獨逸の損害と支拂能力

獨逸の支拂得べき償金年額は其外國貿易を破壞し、又獨逸の產業を疲弊せしむるが如き高稅を課せざるを得ざるが如き、無理なる手段を敢てなすべからず。獨逸の支拂能力を論ずるに當り第一に起る疑問は恐らく、其人的勢力ならん乎。一般印象は戰爭の損害は全體の收益勢力を減殺したりと云ふにあるも、各國の經驗により、如何に戰爭慘憺たりとするも、租稅又は商業上の制限の結果程に、其收益を損するものに非らざれば、現戰爭

に於ても、此點を杞憂する要あるを見ざる也。獨逸の戰爭損害は死者負傷者行衛不明俘虜を合し、三百六十六萬〇二百人と稱せらるゝも、俘虜負傷者の多數は再び、産業界に歸り來るものと見て差支なかるべく、軍隊の用に立たさるもの悉く、生活資料を獲得し得ざるものに非ず。故に戰爭の損害を産業損害に換算するには、三百六十六萬中より俘虜數及生活費を得るに耐ゆるものを控除せざるべからず。斯くせば産業界の損害は二百十九萬四千人に過ぎざる也。確的の數字は數年を經されば、勿論知悉し得ざるも戰爭勃發當時有せし、勞働者二百二十萬人に劣るものにあらず。又將に成年に達せんとする青年尚存在し又出産率は戰爭により激減するものにあらざるは、經驗の語る處也。成年に達する青年の數は年々四十三萬五千六百九十の勞働的産業的勢を加へつゝあり。而して其四年の總數は百七十四萬二千七百六十人に達す。故に産業上の人的勢力の損害は、實際、二百萬人にあらずして五十萬人以下也。斯くの如くにして英國佛國の勞働人員は奈翁戰爭後は其比に勝りて增大せり。又我國も千八百六十六年に於て、收益的職業に從事するものは、千八百六十一年よりも增大せり。(譯者曰ふ千八百六十一年は南北戰爭のありし年也。)故に余輩は確言す獨逸の支拂能力は戰爭中、實質上減少せずと。其勞働者監督者工場所有者を合したる勞働勢力は次表の比較の如くなるべし。

職業	千九百七年	千九百十四年	千九百十九年
農業	九百七十三萬二千七百二弗	千零五十五萬九千七百弗	千零四十二萬一千四百弗
森林業	十五萬零七百八十五弗	十六萬三千六百	十六萬千四百弗
製造及鑛業	千百二十五萬六千二百五拾四弗	千二百四十四萬九千三百弗	千二百二十八萬七千五百六十弗
商業及交通業	三百四十七萬七千六百二十六弗	三百八十四萬六千二百弗	三百七十九萬五千八百弗
勞働者	百七十三萬六千四百五十弗	百九十萬三千百弗	百八十七萬八千二百弗
執練勞働者	百七十三萬八千五百三十弗	百九十萬五千四百弗	百八十八萬零四百弗
其他	三百四十萬四千九百八十三弗	三百七十三萬一千九百弗	三百六十八萬三千弗
總計	三千百四十九萬七千百弗	三千四百五十五萬九千二百弗	三千四百十萬七千七百六十弗

千九百七年に關する數字は獨逸の職業調査より引用し其他も亦確實なる材料により算出せしもの也。此等の數字に對し、余輩の注意すべきは、只獨逸が年々所得する收入の總量に就て具體的に知識を得るには平均一人當りの收益力を知るの要ある也。

獨逸國富の增加額

普國の統計家の研究及國勢調査の結果又は我々の顧問の蒐集せし統計等は此點を明にし得べし。戰爭が勃發せざりしものとせば、獨逸の收益は下の如し

職業	一人當り	全額
農業	四百十弗九	四十二億八千百十五萬三千二百弗

農林	四百六十二弗七	七千四百六十七萬九千八百弗
製造業及鑛業	五百四十五弗三	六十七億零三十七萬三千七百弗
商業及交通業	五百六十七弗二	二十一億五千二百九十七萬七千八百弗
勞働	二百九十九弗二	五億六千百九十五萬七千四百弗
熟練勞働	六百五十一弗	十二億二千四百十四萬零四百弗
其他	三百十九弗九	十四億六千九百十四萬八千七百弗
合計	四百七十六弗四	百六十四億六千四百四十三萬一千弗

換言すれば若しも獨逸の產業が、平常の如く其全力を働さば千九百十九年の國民の收益は勞銀給料利益を通算して百六十五億位なるべし。然れども、生活費を此收入より控除し、其殘部が償金に支拂るべきもの也。幾千か償金支拂に利用し得べきものなるやを、正確に知悉するには二個の方法あり。其一は云ふ迄もなく其生活費を此收入中より支拂たる後、貯蓄したる額を見る事之也。

一般的にては先づ過去の貯蓄額を取調ぶるを以て早道とすべし千八百九十九年に三百九十二億八千五百八十四萬弗なりし國富總額が千九百十五年には九百二十五億八千七百萬に進みし發達の迹を見て略々知るを得べし。年額平均貯蓄及國富の增進は二十六億六千五百萬弗なる事明となれるが、此間に於ける獨逸國民の平均年收入は約百零八億九千九百五十二萬六千弗なり。即ち此貯蓄額は一人當り百弗の收入より二十四弗四五を節約せしと云ふに等し。約千七百五十萬人に近き收益勢力より同一額の貯蓄を爲し得らるとせば、其收入より年四億零二千五百五十萬を貯蓄して賠償金の支拂に振向くを得べし。されど此算出方法は、支拂能力を過大に見たる嫌あり。富の增加は常に富の增加に非らず。例へば米國にては、千九百年より千九百十年迄に農民の富は千八百萬弗に增加せるが、此等は八百萬弗の貯蓄と家屋農具土地收入等による自然千萬弗を通算したるもの也。此等の自然增收は耕地の地價昂騰と農產物の騰貴の結果也。斯くの如き次第なれば、獨逸の國富の增進は全貯蓄を超過する頗大なり。又更らに戰費を基礎として判斷を下し之を明瞭にすべし。

一個年の償金支拂能力

獨逸は全力を擧げて戰へりと雖も千九百十五年より戰爭の終期に至る迄、年額八十四億三千萬を費せるのみなり。然れども其國民は其收入より斯る貯蓄は未だ爲し得ざりき。此總額中には、政府が武器製造職工に支拂たる勞銀製造家の得たる利益兵士の給料等を合算したる複雜なる數を含むは云ふも更ら也。獨逸國民又は工場の收入として受けたるもの減じ、戰爭により減却せられたる資本即ち戰費との差額は年三十三億七千二百弗也。此等の數字は戰爭中の最大貯蓄能力を現はすものと見做し得べし。又平常よりも約四百萬餘多數の兵士と軍隊にありしと雖之に代ふるに同數の婦人勞働に從事し依然其職に留りたる男子の給料は頗る高額なりき。故に獨逸國民が平時に於て貯蓄し得し額は該數字を超ゆるとなすは、聊か早計に過ぎたりとせざるなり。又獨逸は百二十五萬噸の汽船を敵手に委せり。此等は一

ケ月千八百八十萬弗の收益能力を有するもの也。アルサスローレン州が佛國に還附せられ。獨領ポーランドが獨逸の統制を離脱するとせば更らに大なる割引を其支拂能力に加へざるべからず。アルサスローレンは天資豐富にして、獨逸の鐵鑛産額の總量の五割九分半を玆に採掘し居れり。其域内に百九十萬の人口を有し、富の平均額亦大なり。ポーランドの富は之に劣れども其半數の人口は、全獨逸に散在し富の生産に大關係あり。アルサスローレン及ポーランドを失へば獨逸の支拂能力は約一億七千萬弗を減殺せらるべし。殖民地は之を失ふも、多くの割引を加ふるの要あるなし。獨逸の殖民地は皆な劣惡にして統治に要する經費は、商取引より得る收益を以て償ふを得ず。之を失うは寧ろ迅速に賠償金支拂の義務を果し得べし。然れど國內工業の混亂貿易航通の衰微及アルサス・ローレン・ポーランドの諸州の喪失等の爲に國家及政府は償金支拂能力より八億弗を差引るゝ破目に陷るべし。さりながら獨逸の產業にして、全然破壞せられずんば、年約二十七億萬弗の賠償金を取立て得べく之以上は到底目的を遂ぐを得ざるべし。

◎前獨逸皇帝の虛榮心

前獨逸皇帝ウキルヘルムは極めて虛榮心の强い人で之を證する逸話が尠くないが嘗て英國の軍艦の上で起た話なぞは最も秀逸であらう▲或時英國の艦隊を訪問した時に皇帝の爲に晩餐會を開かれた宴會が終て煙草を喫い始めると卓上の葉卷を取る口を切る鋏みがなかつたので一英國士官がナイフを出すと皇帝は之で口を切て返へしながら好く保存して置いたが好からう何時かは歷史的のものになるからと厳かに言たそうだ▲又皇帝は歐洲各國のホテルの株を澤山持て戰前迄は隨分その株の配當を澤山受けて居た或時陛下は若し働いて食はねばならない様であるならばホテルの支配人になり度いと云はれたそうだが才氣煥發して語學の才能の豐かな皇帝の如きは蓋し適材適所だ一つ奮發して瑞西邊に行てホテルを經營したら千客萬來疑ひあるまい

改造社の文星招待會

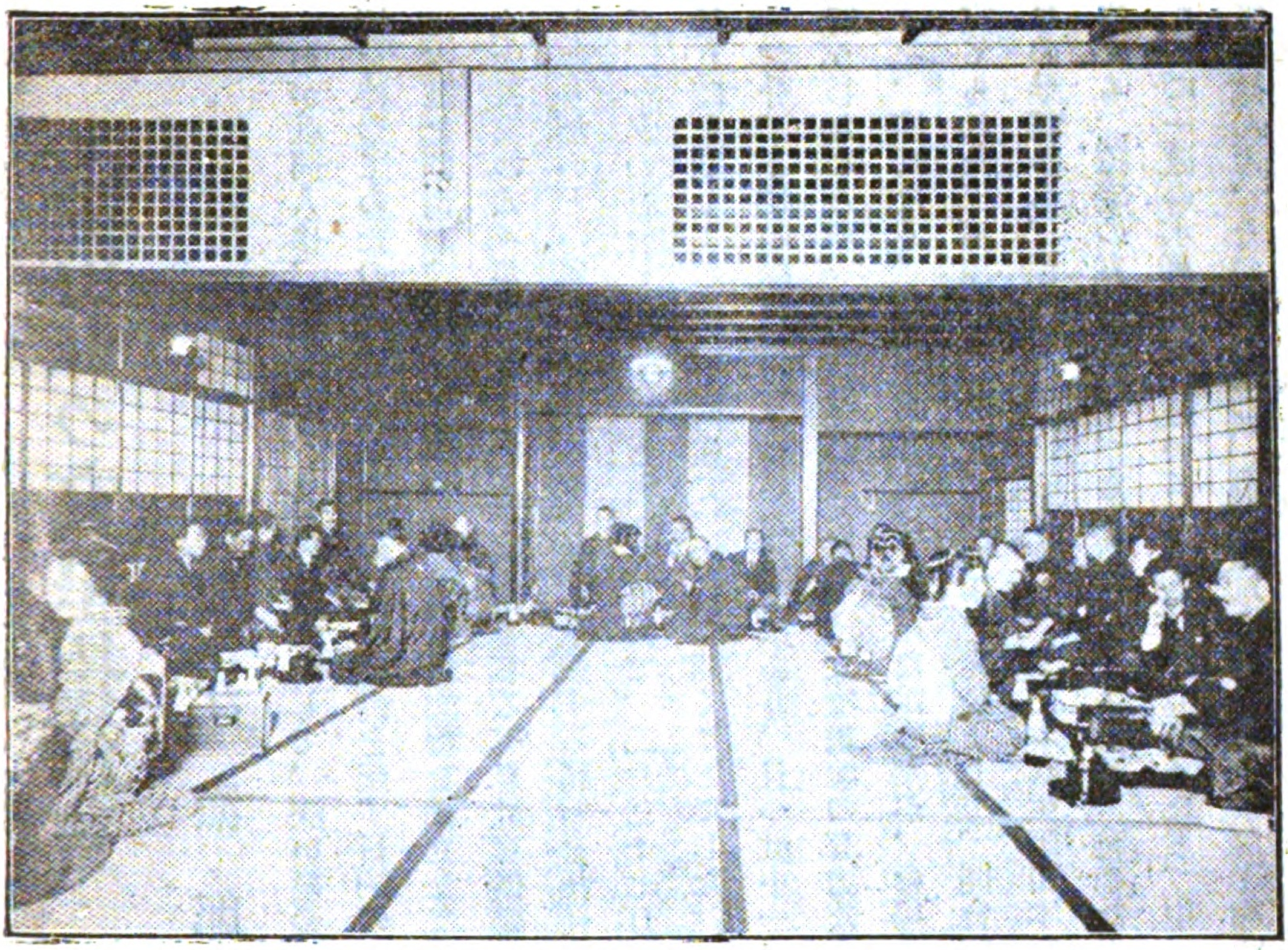
淀江漁郎

　わが社同人は、平素から、文壇諸家に對して、深い敬愛の情を持つてゐたので、今度新文化開展の運動を起す目的の下に本誌を創刊し、且つ近き將來に、文學倶樂部を創立して、文士畫家の人々が、快く團欒して歡語せらるべき社交倶樂部を作りたいとの考へから、一度、平素敬愛する諸家を招待して、一夕の雅會を開きたいと考へた。乃で、二月二十七日午後五時を期して、赤河三河屋で、淸宴を開くことにした。

　何分、多忙の際に、思ひついた事ではあり、且つ社中一同斯うしたことに、經驗が無かつたので、文壇畫壇の有力な人々を、洩れなく、招待することは、出來なかつたが、會場に宛てられた三河屋では、非常に此の事を光榮として、開會當日の早朝から、種々、準備に心を盡し、又た本誌主筆山本實彥氏も、諸家の食後に饗すべき珍菓イギリス苺や、葡萄などを特に一流の水菓子屋へ赴いて、自ら購求し來るなど、中々氣を揉んだ。その他、料理、酒、煙草の類も、三河屋と相談して、歡待の誠意を盡くさうと力めた。

　二月二十七日は、好晴ではなかつたが、その夕暮、しつとりした空氣が、溜池一帶を包んで、暖い、春の朧夜を連想させるやうな情調が、斯うした雅會を催ほすにふさはしい日だと思はせた。當日、幸田露伴氏は、早くから「是非出席する」と云つて居られたのであつたが、氏が新たに、文壇に復活すべき大作「運命」を本誌のために書いて居られて、訪客謝絕と云ふ熱心さで、恰度、二十七日は、氏が正に苦心を凝らして、筆を下しておられた眞最中であつた爲め、止むなく、來會を見合はせられた。けれども文壇の驍將田山花袋、德田秋聲二氏、學界の權威高楠博士、和田垣博士、桑木博士などは、逸早く來會せられ、次いで、文壇の耆宿として名高い内田魯庵氏、洋畫界の巨頭黑田淸輝氏や、正宗白鳥氏、上司小劍氏の如き一騎當千の豪の物と云はるゝ人々の顏も見えて、午後七時迄には、三十名に近い諸家の顏が揃つた。

　會場に當てられた大廣間には、金屛風を立て周らし、正面床の間には、狩野探幽の筆に成る山水の双幅をかけ、それを背景として、和田垣博士、小村欣一侯を中心に諸家が着席されると、赤坂第一流の美妓（大小）三十餘人が、今日を晴れ



と、装ひを凝らして、膳部を持ち搬んだ。

やがて、酒が一巡した頃を見計らつて、本誌主筆山本實彦氏は、遙か末席から會場の中央へ、その洋裝の膝を恭々しく、進めて、大要、左の通りの挨拶をした。

本夕は、何の風情もないに關らず、文壇諸大家の御臨席を賜つたのは、吾社一同の深く光榮とする所で御座います。今や、大戰後の日本は、武的方面の努力から轉じて、財的又は文的方面に開展を策し、所謂新文化運動をなすべき時期に入りました。それについて、此の意義ある運動の一機關として、私は、來る四月三日、雜誌「改造」を創刊すると共に、文壇の社交機關として、此に一つの倶樂部を設立したいと存じます。それに就ては、森鷗外先生も、大に贊同せられ、文學倶樂部が愈よ設立さるゝ搬びとなつたら、自分は、喜んで、その役員の一人となるのを辭せないと申されました。それで、今夕、會合された諸大家にも御贊同願つて、私の所志を貫徹致したいと存じます。何卒、私の微衷の存する所を諒として、偏へに御援助を仰ぐ次第で御座います。云々。

それが終ると、和田垣博士の發企で、木村泰賢氏を先頭に

一々、名乘をあげ、それから酒が又た始つて、何れも靜肅に歡語し乍ら、滿足の意を表して、暖い春の夜の情調に醉はれた。やがて、赤坂名妓の餘興が始まることとなつて、一同、淸元の「保名」を聞き、次ぎに長唄「吾妻八景」の踊を見て、何れも、感に堪えて、在來の無意義な餘興とは、別樣の共鳴に打たれたやうであつた。當日の晴れの席に餘興を勤めた光榮ある人々は左の通りであつた。

淸元「保名」
　唄　みね代　琴次
　地方　淸龍、おひろ

長唄「吾妻八景」
　踊　小りん　けい子
　唄　金三、泰子、福壽
　地方　小花、小力
　笛　福々

餘興が、終ると、拍手喝采の聲は、急霰のやうに起つた。

當夜、かねて酒豪の名がある和田垣博士は、昨年來、禁酒とあつて、特に紅ゐの葡萄酒に夜光の杯をあげられ、遲れ馳せに來られた小村侯、姉崎博士は、日本酒に親まれ、四方に歡語の聲が、しめやかに聞えた。德田秋聲氏は、持疾の糖尿病のため、平野水を飮み乍ら、花袋、白鳥、小劍、無想庵氏等と輕い諧謔に打興ぜられ、一方には、與謝野寬、生田長江、中村吉藏、本間久雄の諸氏が、藝術談に、花を咲かし、廣津和郎氏と佐藤春夫氏は、一隅に陣取つて、歡談に餘念なく、吉田絃二郎氏の江戸情調の話、岡本一平氏の氣焔、桑木、高楠、黑田、内田諸氏の醉顏快げなるも、興深く、高須梅溪氏は當夜の主人役山本氏の友人として、八方の酒戰に應酬し、旺んに、メートルをあげ、山本氏又た薩南豪傑の意氣を軒昂たる眉宇に迸らせ乍ら、氣焔やら、愛嬌やら、を連發して、座は非常に賑かになつた。柔かい此の氣分の中に、やがて、書畫帖の揮毫が始まると、内田魯庵氏は、第一に、左の通り、健筆を染められた。

改造の遊びもがなと梅見客
　デモクラシーの聲をあげつゝ

これについで、諸家も亦思ひ〳〵に筆を馳せられたのは、左の通りで、今その二三を掲げる。

□　田山花袋

はし立のきれ戸をわたる苫舟に

□　中村吉藏

こさめそほふる小ひしきや妹

□　與謝野寬

人生は不思議の饗宴に招かれたる旅客の如し

桃色に壁をぬらむとおもふなり
うつゝなき身を投げてよるため

松根東洋城

□

まとゐ人春夜のことを申しけり。

その中、いつしか、春の夜も更けて、感興尙ほ盡きるべくもなかつたが、午後十時頃、一同、徐ろに、歸宅の途に就かれた。和田垣、高楠の二博士、黑田淸輝氏、生田長江氏の面々は、尙ほ興盡きずとて、旺んに談笑せられ、十一時になつて、やつと、愉快相に、辭去された。當夜の來會者は、左の通りである。

（順序不同）

和田垣謙三、高楠順二郎、桑木嚴翼、姉崎嘲風、田山花袋、德田秋聲、中村吉藏、生田長江、正宗白鳥、與謝野寬、竹林無想庵、佐藤春夫、內田魯庵、廣津和郎、高須梅溪、谷崎精二、吉田絃二郎、本間久雄、松根東洋城、平野英一郎、岡本一平、小林欣一、黑田淸輝、上司小劍、柴田柴庵、島田靑峯、加藤謙、

終りに臨んで、わが社は、文壇諸大家が、其の不行届を寬大に見て、わが社同人の誠意に共鳴せられ、快く、一夕の歡を盡くされたとを深謝し、此に謹んで、諸家の御健康を祝福する。

◎海底汽船の引揚

平和來の聲と共に起た大問題の一は千五百萬噸の海底に横つて居る汽船の引揚を如何にするかと云ふ事である▲千五百萬噸を船の數にすると大小合せて三千隻であるが大西洋の眞只中には莫大な正金を積載したまゝ獨逸の潜航艇の毒手にやられたものもあれば紙幣をうんと積んだまゝ沈沒したものもある▲地中海には東洋方面から數千磅の値段のある眞珠を荷物の中に入れたまゝ擊沈されたものもある▲航海の安全の爲にも又漁業を舊態に復する必要からも殊に英國沿岸の海深の淺い處では完全に沈沒船の始末をする必要がある▲トロール漁業は一番其不便を被むる事が甚しいから英國の北部の漁業の旺盛な地方では殊に其聲が高い▲英國では今年の收獲の一番の價値のあるものは枯草でもない馬鈴薯でもない小麥でもない新に生れた子供であると云つて居るが戰爭で多くの生靈を犧牲にした英國としてはさもあるべき事である。

世界思潮

休戰後の萬國社會黨大會

巴里に於ける講和會議に世界の耳目集中されつゝあるが爲に、興味を惹く事、甚大ならざりしと雖、本年二月三日より同十日に至る間、瑞西のベルンに於て開催せられたる萬國社會黨大會は、確に注目に値する出來事たり。國際社會黨事務局は、白耳義のブラッセルに設置せられ、同國社會黨の首領ヴアンダーベルトを總裁としユイスマン書記長たり、大會召集の權利を附與せらる。戰時中は、政府筋の干渉と各國黨員も亦感情上、相反目の姿なりしより、久しく各國の代表者一堂に會して意見を交換する機を得ざりしが、英國のヘンダーソン等の提議に據り、遂に社會黨大會の成立を見るに至れり。本年一月三日各國社會黨各派に向て委員の派遣方を招請する書狀を發せしが、極左派は、始より之を輕視し、應ぜず、又米國の勞働組合及英國のパーンス一派は出席を拒否せり。戰時中、社會黨大會に壓迫を加えたる各國政府も、此度は黨員に向て旅券の下附を爲せり。一月中旬、早くもヘンダーソン、ルザルング等の有力者はベルンに來り會せり。始めゼネバに開催せんとせしも同市は之を喜ばず、當時、恰も、同盟罷業熾烈を極はめつゝありしかば、瑞西政府亦之を欲せざりしより、結局、ベルンに決定せり。斯くて二月三日愈萬國社會黨大會は開會せられたるが、委員を派遣したる國は、英吉利、佛蘭西、墺太利匈牙利、獨逸、ボヘミヤ、勃牙利、希臘、羅馬尼、露西亞、芬蘭土、リトアニヤ、エストニヤ、ポーランド、瑞典、丁抹諾威、和蘭、アルサスローレン、ルクサンブルグ、西班牙、亞爾然丁、其他猶太人、土耳古、アルメニヤ等にして其數百名近かりき。始め期間は八日迄の豫定なりしが、遂に十日に至れり。本會開催の目的は、勿論、勞働者の地位境遇の改善にありと雖も、現戰爭は世界を驅て改造の時機に遭遇せしめたり。此氣運に會し、社會黨は、年來の主張を基礎となし、將に來るべき平和時代に處するの方途を確立し、一面巴里に各政府の代表者相會し、平和問題を議しつゝあるが故に、萬國大會を催し其勢威を中外に示さんとするにあるは、ヘンダーソンの開會の辭に徴するも明也。而して會議中上程せられたる議案は左の數項也

一、戰爭に關する各國社會黨の責任　二、國際聯盟案　三、領土問題　四、俘虜問題　五國際勞働法規制定　六、ボリシエヴキズムに對する社會黨の態度決定、以上の外英國側より提案せる大會の決議事項を實行し、且平和成立後、世界の狀態が、平常の如くなりし時に、更めて萬國社會黨大會を開催する爲に二

名の常設委員を設くる事も附帶事項として、決議せられたり。大會の中心勢力は、英佛社會黨にして開會はヘンダーソンによりて宣せられたり。ヴアンダーベルト議長席に就き會を主裁せり。

戰爭責任問題

事務局より議事日程を定め議案として提出せられたるものは、國際聯盟、領土問題、國際法規等の諸問題なりしが、佛國のアルベルトーマ氏が、極力之に反對し、獨逸多數社會黨が、國際社會の主張を無視し、其政府を支持したるは、社會黨の面目を毀傷する大なるものあり。故に今次、大會の決議をして權威あるものたらしめんには、各國社會黨が、今尙依然相互に結束を强固にし、相信賴する深きものあるを示さんが、爲に戰爭に對する責任を論定するの要ありと主張せしかば、責任問題は、會議の劈頭に於て論戰の主題に供せらるゝに至れり。議論大に沸騰し甲論乙駁、容易に決せず翌四日に及べり。獨逸多數社會黨は我等のみ戰爭に對し、特に責任を有するに非らず、我等は力を盡して侵略的帝國主義に反對し來りしも、不幸歐洲大戰の勃發を見るに至れりと論じ、少數派は、之を攻擊し佛國社會黨員亦之に贊し紛々囂々低止する處を見ざるより特別委員を設けて審議するに決し、トーマ案を基礎とし委員會案就り、五日再び上議したるが、佛國委員は、依然前說を固持せしも、多數にて可決せり。其要旨に曰く。

此問題に就ては獨逸多數社會黨は革命後の新獨逸は、戰爭の善後策を講じ、且革命の精神を明にする宣告を發し社會主義の主旨を實行せんとす。戰爭責任に關し各派各自、皆な見解を異にするものあらん。討論は各國の判決に有益なる準備を與ふるものなるを認むるも、判決は近く開かるべき國際會議に讓るべし。ベルン大會は全世界の勞働者の結合を妨くるが如き軍國主義を抑壓し得る自信を得たり。要するに贊否兩者の論を折衷せる妥協的の案にしてトーマの提議は骨拔と就れる也。

國際聯盟問題

次に上議せられしもの國際聯盟問題也。本件に就ては、英獨佛米の特別委員の起草せし草案に就て意見を交換し、二三字句の修正を爲せしのみにて、直ちに可決せり。其大略左の如し。

國際聯盟は各國の議會を基礎となし形成し將來の正義と平和とを確保すべき根柢の上に立てられざるべからず。本聯盟に入るべき全ての國家は、民族の自決により組織せられたるものならざるべからず。國際聯盟は貿易を自由になし、植民地に對する門戶を開放し、移動を容易ならしむ。世界の食糧及原料品の生產及分配を支配する權利を國際聯盟に附與せざるべからず。國際聯盟

の第一任務は、新なる戰爭及軍備を禁ずるにあり。國際聯盟は國際間の紛議を決する爲に國際裁判を創設せざるべからず。國際聯盟は一切の常備軍を廢し、完全なる軍備撤退を計らざるべからず。

要するに國際聯盟の成立を認容し、其構成方法及强制等に論及し居れり。

植民地問題

六日より八日迄の二日間に亙り特別委員會案に據り論議せり。委員會案は、獨逸植民地問題を考慮するを逸し居りたるが爲、本問題の現はるゝや、異論百出、遂に特別委員に附托し、九日更めて上程し原案通り可決せり。彼等は個人の解放を爲し、國際間の障壁を撤し、自決權を確立せんとするものなり。民族問題の民族的解決をなし、平和を確立せんがには國際聯盟の力に據るべきものとなす。此等の見地よりして次の原則を執る。

一、各國人民は自己の運命を決し、住居を選擇する權利を有す。

二、爭議ある領土は國際聯盟の監督の下に一般投票の方法により決定を示す。

三、小民族の保護は最少の權利を確保し、國際聯盟の保護に俟つ。

四、新國家の形成及既存國家併合の場合は國際聯盟は條約に據り各利害關係者の權利は國際聯盟に保證せらる。

五、一民族又は其一部が其國境を變せんとする場合は人民投票の方法に因る。

六、保護國植民地人民は學校の設立地方的自治言論集會等の政治的權利を附與し各自の權利を行使せしむる樣注意せらる。

以上の原則に基き左の數條に關し反對の主張を爲す。

一、勝利者の掠奪及領土獲得の目的に據る國際境界の變史。

二、軍事的必要に出づる國境の決定。

三、歷史的權利及經濟的必要に基く領土併合。

四、爭議ある地域に於ける軍事的占領による事態の承認。

五、戰時又は經濟的勢力範圍の設定。

原則に定むる件に就て具體案を作製する爲各關係國より書類を委員に提出せしめ審議せしむるに決せり。シユレスウヰヒ問題は丁抹獨逸委員間に人民投票に據り決定する協定成立せり。

國際勞働法規問題

本問題に就ては、恰も當時、等しくベルヌに於て開催中なりし、歐洲勞働組合大會の起草せる案により討議せられたるが、本案上程に際し、勞働者の利益を政治的に代表する社會黨は直接關係者の起草せる案を議論なく承認せられ度しと附言し大會も之を諒とし直ちに可決せられたり。其要旨を摘記すれば

一、十五才以下の小兒勞働を禁止し十五才以上十八才以下の幼者の勞働時間は六時間を超ゆるを許さず。

二、婦人勞働者を鑛山業其他の地下業に從事するを禁じ、出產保險制度を設け男女對一賃銀の給與。

三、八時間勞働、土曜日半日勞働制度及保建設備の確立。

四、宅業者に保護に關する法律命令を應用し社會保險制度にも均霑せしむべし。

五、結社集會の自由を許し勞働の種類により差別を加ふべからず、移住勞働者も結社勞働組合參加同盟罷工權の行使を許容せらるべし。

六、左記の場合の外は移民の入國は原則として之を禁止すべからず。

(イ)經濟的不景氣に際し當該國並に外國の勞働者の利益を保護する爲一時移民の入國を制限する場合。

(ロ)公共の健康を保持する爲移民の入國を暫時禁止すること。

(ハ)或限度に於て自國語の讀方又は書方を要求すること。

七、平均賃銀にして生活の基本的標準を滿すに足らざるか勞働組合と雇主との間に契約せる契約實行不可能なる場合には政府は雇主勞働者と同數の委員を出し法定最低賃金を定むる爲勞働局を設立すべし

八、各國の勞働取引所は連絡を保ち失職者を保護し且失業保險を容易ならしむべし又凡て各國は失業保險制度を採用すべし

九、各國凡て國營保險制度を採用し外國にも一律之を適用すべし。

十　本條約を實施し國際勞働規定を改善する目的にて締盟各國は國際聯盟及勞働組合の兩者に屬する各國の代表より成る一委員會を設くべし。

而して右を直に巴里の講和會議に向て轉ちせり。俘虜問題は八日に上議し、俘虜となれる人々の痛苦に同情し速に之を輕減する手段を執るに決す、次に九日愈々、過激派に關する問題の討議に入りしが特別委員會の提出に係る原案、即ち社會主義は經濟的秩序の構成を目的とし民主的各種の文化の階梯を經るべきものなるに拘らず、急激に獨裁的權力者が之を無視するは、吾人の主義に反するのみならず、無資產階級と中產階級との國內戰爭を惹起し、却て反動的獨裁權力者を生ずる恐れあり。露國內の政況視察の爲め委員の派遣を常設委員に慫慂するもの也。又次に世界各國の政府當局に帝國主義的政策を採用し、軍事經濟の兩方面より他國民を壓迫する勿らん事を述べありしが、墺太利のアドラは宣言書を發し、露國過激派に對する不確實なる報道に基き判定を爲すの非を擧げ、强烈なる反對を試み、遂に決定を見るに至らずして十日閉會解散し各委員は歸國の途に就けり

改造日誌（自二月十五日 至三月五日）

十五日 ▲羅馬尼大革命勃發しフェルヂナンド王負傷す▲米國の明年度海軍豫算七億大千萬弗百四十二對百九十四の多數を以て下院を通過す▲京都市公會堂に於て日本友愛會京都支部主催の勞働者大會を開き普通選擧要求の宣言及決議を爲し席上尾崎行雄氏の大演說あり▲伯爵議員大原重朝伯逝去に付き補缺選擧を執行し兒玉秀雄伯當選す▲二月上旬の對支貿易は輸出九百五十五万五千圓輸入七百五十二万二千圓にして差引二百三万三千圓の輸出超過を示せる旨大藏省より發表せらる▲日本主食改良會の發會式は大日本私立衞生會に擧行し半搗米を日本人の主食物とするの建議案を貴衆兩院に提出す▲東京府は東京市電氣局に對し電車改善命令を發す

十六日 ▲米國上院は五十万の常備軍設置案を可決せり▲支那政府は唐紹儀の要求に依り陝西省に對し停戰を嚴命す▲神戸の鈴木商店は神戸高等商業學校に五十万圓を寄附す▲東京市小石川區役所落成す

十七日 ▲歐洲の講和會議に於て我牧野全權より提出せる人種差別撤廢案否決さる▲獨逸新内閣組織されシャイデマン氏首相に就任し同時に新政綱を發表す▲國際聯盟規約の全文廿六ヶ條發表せらる▲日米公使は東清鐵道協同管理の旨支那政府に通告す▲我西伯利亞出征軍はブラゴエチエンスク東方約十里アンドレフカ附近にて約千名の敵と交戰し大隊長堀八郎少佐以下死傷四十名を出す

十八日 ▲對獨休戰條件延長され獨逸はヘリゴランド要塞破壞、キール運河の武裝解除を承諾す▲講和特使牧野伸顯男巴里に於て長文の陳述書を發表▲神宮皇學館長松浦寅三郎氏皇子傅育官長に任命さる▲陸軍大將福島安正氏腦溢血にて逝く享年六十八▲大山巖公未亡人捨松刀自流行性感冒にて逝去享年六十▲全國學生同盟會幹事波多野宮相を宮内省に訪ひ普通選擧實施上奏文を提出す▲佛國首相クレマンソー氏無政府主義者コータンに狙擊さる

十九日 ▲臨時外交調査委員會を開き講和會議の經過を報告す▲二月十六日現在の正貨總額は十五億八千万圓なる旨大藏省より發表▲浦鹽方面派遣中の第一航空隊廣島に凱旋▲米國下院は曩に上院に於て可決せる常備軍五十万人常置案を十七万五千名に削除せり

二十日 ▲支那南北和平會議の第一日開會さる▲寺崎廣業畫伯逝く▲西園寺公望侯一行ポートセアトに着す▲アフガニスタン王暗殺され王弟ナイヴウスサタナナラカン王位に即く

二十一日 ▲樞密院會議を開き衆議院議員選擧法中改正法律案を可決す▲政府は短期國庫債劵（は號）五千二百万圓を發行す

二十二日 ▲政府は日支軍事協約停止の訓電を支那駐屯軍司令官齋藤少將宛に發し同時に泰平組合に對し武器引渡中止を命ず▲特旨を以て李太王殿下葬儀に際し近衞兵を儀仗の爲め派遣せらる▲京都同志社大學校友會は校長に安部磯雄氏を推薦するに決し安部氏に交渉せるも安部氏之を拒絶す▲海軍中將伊東義五郎男逝去す享年六十二▲臨時外交調査委員會を開き對講和方針を凝議す▲墺國ブラーグ市に大擾亂起る

二十三日 ▲米國大統領ウヰルソン氏は西班牙人に狙はれたるも無事なるを得該西班牙人は捕縛さる▲巴威首相アイスネル氏伯爵アルコ・ワルレー中尉の爲め射殺せらる▲獨逸は改訂休戰條約の條項に準據し對波蘭戰時行爲を中止す▲大阪市中之島公園に於て普通選擧問題に對する市民大會を開く▲東京市築地本願寺に於て同情融和大會を開く

二十四日 ▲巴威首相暗殺に次で内紛

長官アウヱル氏及庶民黨のオーゼル氏亦狙撃されて即死し其の結果ミュンヘン大擾亂を惹起し新共和政府組織さる▲政府は衆議院議員選擧法案内示會を開き新政會、無所屬團及國民黨の各委員に之を内示す▲新聞紙法改正協議會を築地靜養軒に開く▲朝鮮學生六十名東京市神田區西小川町の朝鮮人青年會館に集合密議中廿一名西神田署に引致さる▲東京府立工藝學校長石黑友吉氏卒業生に迫られて辭表を提出す▲駐支米國領事は黎元洪氏に對し天津獨逸租界の租借を求む

二十五日 ▲支那直隷省唐山在留の日本人全部支那官憲より退去を命ぜらる▲支那和平會議に於て日本に對する感謝の決議を爲す▲英國政府が講和會議に提出せる徴兵廢止案は否決さる▲政府は衆議院議員選擧法改正案を衆議院に提出す▲政友會は愛媛縣補缺候補者として岩崎高一氏を公認す▲所澤航空隊第一中隊附藤井中尉墜落重傷を負ふ

二十六日 ▲米國政府は講和會議に對し獨艦爆沈の件を提議す▲憲政會は愛媛縣補缺選擧に對し御手洗忠孝氏を公認す▲子爵加納久宜氏逝去享年七十二▲駐日諾威國代理公使アイツェン氏逝く享年四十二

二十七日 暹羅國皇弟ロッポク殿下及前駐日公使サポラー氏長崎に着く▲大正七年度小麥實收高は二千二百五十七万七千二百七十一石にして平年作より一分七厘の減收を示せる旨發表さる

二十八日 ▲東京市助役には永井環山崎林太郎戸野周二郎三氏當選▲西貢米は來五月迄毎月六萬噸特許の旨公報あり白米相場一圓安となる▲ウイルソン大統領米國に廿六日歸着の報あり

一日 ▲民風作興に就て床次内相地方長官に訓示を發す▲去月廿六日スンプオゴヱチヱ附近の過激派主力はアレキセフスク北方にて我歩兵七十二聯隊第三大隊及野砲兵第一中隊とタウク附近にて激戰我死傷者將校以下二百名支隊殆ど全滅の報あり▲普通選擧期成同盟會の大示威運動開催され數萬の學生勞働者日比谷公園に集合靜粛裡に決行さる▲東京驛萬世橋間電車開通▲東京市街乘合自動車營業開始さる▲吉田靜致渡邊世祐兩氏文學博士に決す▲朝鮮學生大漢門前にて騒擾を起し德壽宮に亂入す▲小幡公使は支那政府に對し軍器借款の引渡を中止する旨通告す

二日 ▲仙臺市大火六百戸燒失▲暹羅皇弟入京▲支那和平會議北方代表全部辭職の報あり帝國政府は場合に依りては第二次勸告を發すべき決意ある旨言明す▲西園寺侯巴里到着

三日 ▲李太王國葬儀執行▲朝鮮の騒擾益々激甚となり憲兵軍隊出動して警戒す首魁孫秉熙等多數捕縛さる

四日 後藤男新渡戸博士コレア丸にて渡歐の途に上る▲黑須龍太郎氏普通選擧に連盟の決意にて憲政會を脱會す▲女子大學校長成瀬仁藏氏逝去被叙從五位▲衆議院に普通選擧法案提出さる▲濱口雄幸氏高知補缺選擧公認候補となる▲アルサスローレン最高會議にて佛國領たることを決議せる旨報あり

五日 ▲山極勝三郎博士人工的乳癌發生の研究を發表す▲海軍航空隊井上中佐山田太尉墜落慘死す▲無所屬團所屬代議士松島肇氏普通選擧案贊成の署名を取消したる爲め同案は衆議院事務局より返戻さる▲本年五月白耳義ブラッセル府に開催の萬國商事會議には衆議院より三名即ち政友會憲政會國民黨より各一名を派遣することに決定

運命

文學博士　幸田露伴

世おのづから數といふもの有りや。有りといへば有るが如く、無しと爲せば無きにも似たり。洪水天に滔るも、禹の功これを治め、大旱地を焦せども、湯の德これを濟へば、數有るが如くにして、而も數無きが如し。秦の始皇帝、天下を一にして尊號を稱す、威燄まことに當る可からず。然れども水神ありて華陰の夜に現はれ、璧を使者に托して、今年祖龍死せんと曰へば、果して始皇やがて沙丘に崩ぜり。唐の玄宗、開元は三十年の太平を享け、天寶は十四年の華奢をほしいまゝにせり。然れども開元の盛時に當りて、一行阿闍梨、陛下萬里に行幸して、聖祚疆無からん、と奏したりしかば、心得がたきことを白すよとおぼされしが、安祿山の亂起りて、天寶十五年蜀に入りたまふに及び、萬里橋にさしかゝりて、瞿然として悟り玉へりとなり。此等を思へば、數無きに似たれども、而も數有るに似たり。定命錄、續定命錄、前定錄、感定錄等、小說野乘の記するところを見れば、吉凶禍福は、皆定數ありて、飮啄笑哭も、悉く天意に因るかと疑はる。されど紛々たる雜書、何ぞ信ずるに足らん。假令數ありとするも、測り難きは數

なり。測り難きの數を畏れて、巫覡卜相の徒の前に首を俯せんよりは、知る可きの道に從ひて、古聖前賢の教の下に心を安くせんには如かじ。かつや人の常情、敗れたる者は天の命を稱して歎じ、勝てる者は己の力を説きて誇る。二者共に陋とすべし。事敗れて之を吾が徳の足らざるに歸し、功成つて之を數の定まる有るに委ねなば、其人僞らずして眞、其器小ならずして偉なりといふべし。先哲曰く、知る者は言はず、言ふ者は知らずと。數を言ふ者は數を知らずして、數を言はざる者或は能く數を知らん。

古より今に至るまで、成敗の跡、禍福の運、人をして思を潜めしめ歎を發せしむるに足るもの固より多し。されども人の奇を好むや、猶以て足れりとせず、是に於て才子は才を馳せ、妄人は妄を恣にして、空中に樓閣を築き、夢裏に悲喜を畫き、意設筆綴して、烏有の談を爲る。或は微しく本づくところあり或は全く據るところ無し。小説といひ、稗史といひ、戯曲といひ、寓言といふもの即ち是なり。作者の心おもへらく、奇を極め妙を極むと。豈圖らんや造物の脚色は、綺語の奇より奇にして、狂言の妙より妙に、才子の才も敵する能はざるの巧緻あり、妄人の妄も及ぶ可からざるの警拔あらんとは。吾が言を信ぜざる者は、試に看よ建文永樂の事を。

我が古小説家の雄を曲亭主人馬琴と爲す。馬琴の作るところ、長篇四五種、八犬傳の雄大、弓張月の

壯快、皆江湖の嘖々として稱するところなるが、八犬傳弓張月に比して優るあるも劣らざるものを俠客傳と爲す。憾むらくは異の叙するところ、蓋し未だ十の三四を卒るに及ばずして、筆硯空しく曲亭の浮几に遺りて、主人既に逝きて白玉樓の史となり、鹿鳴草舍の翁これを續げるも、亦功を遂げずして死せるを以て、世其の結構の偉、輪奐の美を觀るに至らずして已みたり。然れども其の意を立て材を排する所以を考ふるに、楠氏の孤女を假りて、南朝の爲に氣を吐かんとする、おのづから是一大文章たらずんば已まざるものあるを推知するに足るあり。惜い哉其の成らざるや。

俠客傳は女仙外史より換骨脫胎し來る。其の一部は好逑傳に藉るありと雖、全體の女仙外史を化し來れるは、掩ふ可からず。此の姑摩媛は卽ち是彼の月君なり。月君が建文帝の爲に兵を擧ぐるの事は、姑摩媛が南朝の爲に力を致さんとするの藍本たらずんばあらず。此は是馬琴が腔子裏の事なりと雖、假に馬琴をして在らしむるも、吾が言を聽かば、含笑して點頭せん。

女仙外史一百回は、淸の逸田叟、呂熊、字は文兆の著すところ、唐熙四十年に意を起して、四十三年秋に至りて業を卒る。其の書の體たるや、水滸傳平妖傳等に同じと雖、立言の旨は、綱常を扶植し、忠烈を顯揚するに在りといふを以て、南安の郡守陳香泉の序、江西の廉使劉在園の評、江西の學使楊念亭の論、廣州の太守葉南田の跋を得て世に行はる。幻詭猥雜の談に、干戈弓馬の事を挿み、慷慨節義の譚に、神仙縹緲の趣を交ゆ。西遊記に似て、而も其の誇誕は少しく遜り、水滸傳に近くして、而も其の案

快は及ばず、三國志の如くして、而も其の殺伐はやゝ少し。たゞ其の三者の佳致を併有して、一編の奇話を構成するところは、女仙外史の西遊水滸三國諸書に勝る所以にして、其の大體の風度は平妖傳に似たりといふべし。憾むらくは通篇儒生の口吻多くして、說話は硬固勃率、談笑に流暢尖新のところ少きのみ。

女仙外史の名は其の實を語る。主人公月君、これを輔くるの鮑師、曼尼、公孫大娘、聶隱娘等皆女仙なり。鮑聶等の女仙は、もと古傳雜說より取り來つて彩色となすに過ぎず、而して月君は即ち山東蒲臺の妖婦唐賽兒なり。賽兒の亂をなせるは永樂十八年二月にして、燕王の簒奪、建文の遜位と相關するあるにあらず、建文猶死せずと雖、簒奪の事成つて既に十八春秋を經たり、賽兒何ぞ實に建文の爲に兵を擧げんや。たゞ一婦人の身を以て兵を起し城を屠り、安遠侯柳升をして征戰に勞し、都指揮衞青をして擊攘に力めしめ、都指揮劉忠をして戰歿せしめ、山東の地をして一時騷擾せしむるに至りたるもの、眞に是稗史の好題目たり。之に加ふるに賽兒が洞見預察の明を有し、幻怪詭秘の術を能くし、天書寶劍を得て、惠民布教の事を爲せるも、亦眞に是稗史の絕好資料たらずんばあらず。賽兒の實蹟既に是の如し、此を假り來りて以て、建文の位を遜れるに淚を墮し、燕棣の國を奪へるに齒を切り、慷慨悲憤して以て回天の業を爲さんとするの女英雄となす。女仙外史の人の愛讀耽翫を惹く所以のもの、決して尠少にあらずして、而して又實に一篇の淋漓たる筆墨、巍峨たる結構を得る所以のもの、決して偶然にあらざるを見る。

賽兒は蒲臺縣の民林三の妻、少きより佛を好み經を誦せるのみ、別に異ありしにあらず、林三死して

之を郊外に葬る。賽兒墓に祭りて、回るさの路、一山の麓を經たるに、たま〳〵豪雨の後にして土崩れ石露はれたり。これを視るに石匣なりければ、就いて窺ひて遂に異書と寶劍とを得たり。賽兒これより妖術に通じ、紙を剪つて人馬となし、劍を揮つて咒祝を爲し、髮を削つて尼となり、教を里閭に布く。饑には功あり、言には驗ありければ、民翕然として之に從ひけるに、賽兒また饑者には食を與へ、凍者には衣を給し、賑濟すること多かりしより、終に追隨する者數萬に及び、尊びて佛母と稱し、其勢甚だ洪大となれり。官之を惡みて賽兒を捕へんとするに及び、賽兒を奉ずる者董彦杲、劉俊、賓鴻等、敢然として起つて戰ひ、益都、安州、莒州、即墨、壽光等、山東諸州鼎沸し、官と賊と交〻勝敗あり。官兵漸く多く、賊勢日に蹙まるに至つて、賽兒を捕へ得、將に刑に處せんとす。賽兒怡然として懼れず。衣を剝いで之を縛し、刀を擧げて之を砍るに、刀刃入る能はざりければ、已むを得ずして復獄に下し、械枷を體に被せ、鐵鈕もて足を繫ぎ置きけるに、俄にして皆おのづから解脫し、竟に遁れ去つて終るところを知らず。三司郡縣將校等、皆冠を失ふを以て誅せられぬ。賽兒は如何しけん其後踪跡杳として知るべからず。永樂帝怒つて、およそ北京山東の尼姑は盡く逮捕して京に上せ、嚴重に勘問し、終に天下の尼姑といふ尼姑を逮ふるに至りしが、得る能はずして止み、遂に後の史家をして、妖耶人耶、吾之を知らず、と云はしむるに至れり。

世の傳ふるところの賽兒の事既に甚だ奇、修飾を假らずして、一部の稗史たり。女仙外史の作者の藉りて以て筆墨を鼓するも亦宜なり。然れども賽兒の徒、初より大志ありしにはあらず、官吏の苛虐するところとなつて而して後爆裂迸發して燄を揚げしのみ。其の永樂帝の賽兒を索むる甚だ急なりしに考ふ

れば、賽兒の徒窮して戈を執って立つに及び、或は建文を稱し永樂に抗するありしも亦知るべからず。永樂の時、史に曲筆多し、今いづくにか其實を知るを得ん。永樂帝簒奪して功を成す、而も聰明剛毅、政を爲す甚だ精、輔佐また賢良多し。こゝを以て賽兒の徒忽にして跡を潜むと雖、若し秦末漢季の如きの世に出でしめば、陳渉張角、終に天下を動かすの事を爲すに至りたるやも知る可からず。嗚呼賽兒も亦奇女子なるかな。而して此奇女子を藉りて建文に與し永樂と爭はしむ、女仙外史の奇、其の奇を求めずして而しておのづから然るあらんのみ。然りと雖予猶謂へらく、逸田叟の脚色は假にして後機に奇なり、造物爺々の施爲は眞にして且更に奇なりと。

明の建文皇帝は實に太祖高皇帝に繼いで位に卽きたまへり。時に洪武三十一年閏五月なり。すなはち詔して明年を建文元年としたまひぬ。御代しろしめすことは正しく五歳にわたりたまふ。然るに廟謚を得たまふこと無く、正德、萬曆、崇禎の間、事しば〱議せられて、而も遂に行はれず、明亡び、清起りて、乾隆元年に至つて、はじめて恭憫惠皇帝といふ謚を得たまへり。其國の德衰へ澤竭きて、内憂外患こも〱逼り、滅亡に垂とする世には、崩じて謚られざる帝のおはす例もあれど、明の祚は其の後猶二百五十年も續きて、此時は太祖の盛德偉業、炎々の威を揚げ、赫々の光を放ちて、天下萬民を悅服せしめしばかりの後なれば、かゝる不祥の事は起るべくもあらぬ時代なり。さるを其の是の如くなるに至りし所以は、天意か人爲かはいざ知らず、一波動いて萬波動き、不可思議の事の重疊連續して、其の狂

海は四年の間の天地を震撼し、其の餘潤は萬里の外の邦國に漸浸するに及べるありしが爲ならずばあらず。

建文皇帝諱は允炆、太祖高皇帝の嫡孫なり。御父懿文太子、太祖に紹ぎたまふべかりしが、不幸にして世を早うしたまひぬ。太祖時に御齢六十五にわたらせ給ひければ、流石に淮西の一布衣より起つて、腰間の劍、馬上の鞭、四百餘州を十五年に斬り靡けて、遂に帝業を成せる大豪傑も、薄暮に燭を失つて荒野の旅に疲れたる心地やしけむ、堪へかねて泣き萎れたまふ。翰林學士の劉三吾、御歎はさることながら、既に皇孫のましませば何事か候ふべき、儲君と仰せ出されんには、四海心を繫け奉らんに、然のみは御過憂あるべからず、と白したりければ、實にもと點頭かせられて、其歳の九月、立て丶皇太孫と定められたるが、即ち後に建文の帝と申す。谷氏の史に、建文帝、生れて十年にして懿文卒すとあるは、蓋し脫字にして、父君に別れ、儲位に立ちたまへる時は、正しく十六歳におはしける。資性穎慧溫和、孝心深くましまして、父君の病みたまへる間、三歳に亘りて晝夜膝下を離れたまはず、薨れさせたまふに及びては、思慕の情、悲哀の涙、絕ゆる間も無くて、身も細々と瘠せ細りたまひぬ。太祖これを見たまひて、爾まことに純孝なり、たゞ子を亡ひて孫を賴む老いたる我をも念はぬことあらじ、と宣ひて、過哀に身を毀らぬやう愛撫せられたりといふ。其の性質の美、推して知るべし。

はじめ太祖、太子に命じたまひて、章奏を決せしめられけるに、太子仁慈厚くおはしければ、刑獄に於て宥め輕めらる丶こと多かりき。太子亡せたまひければ、太孫をして事に當らしめたまひけるが、太孫もまた寬厚の性、おのづから德を植ゑたまふこと多く、又太祖に請ひて、遍く禮經を考へ、歷代の刑

法を參酌し、刑律は敎を弼くる所以なれば、凡そ五倫と相涉る者は、宜しく皆法を屈して以て情を伸ぶべしとの意により、太祖の准許を得て、律の重きもの七十三條を改定しければ、天下大に喜びて德を頌せざる無し。太祖の言に、吾は亂世を治めたれば、刑重からざるを得ざりき、汝は平世を治むるなれば、刑おのづから當に輕かるべし、とありしも當時の事なり。明の律は太祖の武昌を平らげたる呉の元年に、李善長等の考へ設けたるを初とし、洪武六年より七年に亘りて劉惟謙等の議定するに及びて、所謂大明律成り、同じ九年胡惟庸等命を受けて釐正するところあり、又同じ十六年、二十二年の編撰を經て、終に洪武の末に至り、更定大明律三十卷大成し、天下に頒ち示されたるなり。呉の元年より玆に至るまで、日を積むこと久しく、慮を致すこと精しくして、一代の法始めて定まり、朱氏の世を終るまで、獄を決し刑を擬するの準據となりしかば、後人をして唐に視ぶれば簡覈、而して寛厚は宋に如かざるも、其の惻隱の意に至つては各條に散見すと評せしめ、餘威は遠く我邦に及び、德川期の識者をして此を研究せしめ、明治初期の新律綱領をして此に採るところあらしむるに至れり。太祖の英明にして意を民人に致すことの深遠なるは言ふまでも無し、太子の仁、太孫の慈、亦人君の度ありて、明律因りて以て成るといふべし。既にして太祖崩じて太孫の位に卽きたまふや、刑官に諭したまはく、大明律は皇祖の親しく定めさせたまへるところにして、朕に命じて細閲せしめたまへり、前代に較ぶるに往々重きを加ふ。蓋し亂國を刑するの典にして、百世通行の道にあらざる也、朕が前に改定せるところは、皇祖巳に命じて施行せしめたまへり。然れども罪の矜疑すべき者は、尙此に止まらず。それ律は大法を設け、禮は人情に順ふ、民を齊ふるに刑を以てするは禮を以てするに若かず、それ天下有司に諭し、務めて禮敎を崇び、

疑獄を赦し、朕が萬方と與にするを嘉ぶの意に稱はしめよと。嗚呼、旣に父に孝にして、又民に慈なり、帝の性の善良なる、誰かこれを然らずとせんや。

是の如きの人にして、帝となりて位を保つを得ず、天に歸して謚を得る能はず、廟無く陵無く、西山の一坏土、封せず樹せずして終るに至る。嗚呼又奇なるかな。しかも其の因縁の糾纏錯雜して、果報の慘苦悲慘なる、而して其の影響の、或は刻毒なる、或は杳渺たる、奇も亦太甚しといふべし。

建文帝の國を遜らざるを得ざるに至れる最初の因は、太祖の諸子を封ずること過當にして、地を與ふること廣く、權を附すること多きに基づく。太祖の天下を定むるや、前代の宋元傾覆の所以を考へて、宗室の孤立は、無力不競の弊源たるを思ひ、諸子を衆く四方に封じて、兵馬の權を有せしめ、以て帝室に藩屛たらしめ、京師を拱衞せしめんと欲せり。是亦故無きにはあらず。兵馬の權、他人の手に落ち、金穀の利、一家の有たらずして、將帥外に傲り、奸邪間に私すれば、一朝事有るに際しては、都城守る能はず、宗廟祀られざるに至るべし。若し夫れ衆く諸侯を建て、分ちて子弟を王とすれば、皇族天下に滿ちて榮え、人臣勢を得るの隙無し。こゝに於て第二子樉を秦王に封じ、藩に西安に就かしめ、第三子棡を晉王に封じ、太原府に居らしめ、第四子棣を封じて燕王となし、北平府即ち今の北京に居らしめ、第五子橚を封じて周王となし、開封府に居らしめ、第六子楨を楚王とし、武昌に居らしめ、第七子榑を齊王とし、青州府に居らしめ、第八子梓を封じて潭王とし、長沙に居き、第九子杞を趙王とせしが、此は

三歳にして薨し、藩に就くに及ばず、第十子檀を生れて二月にして魯王とし、十六歳にして藩に兗州府に就かしめ、第十一子椿を封じて蜀王とし、成都に居き、第十二子柏を湘王とし、荊州府に居き、第十三子桂を代王とし、大同府に居き、第十四子楧を肅王とし、藩に甘州府に就かしめ、第十五子植を封じて遼王とし、廣寧府に居き、第十六子㮵を慶王として、寧夏に居き、第十七子權を寧王に封じ、大寧に居らしめ、第十八子楩を封じて岷王となし、第十九子橞を封じて谷王となす、谷王といふは其の居るところの宣府の上谷の地たるを以てなり、第二十子松を封じて韓王となし、開原に居らしむ。第二十一子模を瀋王とし、第二十二子楹を安王とし、第二十三子桱を唐王とし、第二十四子棟を郢王とし、第二十五子㰘を伊王としたり。藩王以下は、永樂に及んで藩に就きたるなれば、姑らく措きて論ぜざるも、太祖の諸子を封じて王となせるも亦多しといふべく、而して枝柯甚だ盛んにして本幹却つて弱きの勢を致せるに近しといふべし。明の制、親王は金冊金寶を授けられ、歳祿は萬石、府には官屬を置き、護衛の甲士、少き者は三千人、多き者は萬九千人に至り、冕服車旗邸第は、天子に下ること一等、公侯大臣も伏して而して拜謁す。皇族を尊くし、臣下を抑ふるも、亦至れりといふべし。且つ元の裔の猶存して、時に塞下に出沒するを以て、邊に接せる諸王をして、國中に專制し、三護衛の重兵を擁するを得せしめ、將を遣りて諸路の兵を徵すにも、必ず親王に關白して乃ち發することゝせり。諸王をして權を得せしむるも、亦大なりといふべし。太祖の意に謂へらく、是の如くなれば、本支相幇けて、朱氏永く昌え、威權下に移る無く、傾覆の患も生ずるに地無からんと。太祖の深智遠識は、まことに能く前代の覆轍に鑑みて、後世に長計を貽らんとせり。されども人智は限有り、天意は測り難し。豈圖らんや、太祖が熟慮遠謀し

て施爲せるところの者は、卽ち是孝陵の土未だ乾かずして、北平の塵既に起り、矢石京城に雨注して、皇帝遐陬に雲遊するの因とならんとは。

太祖が諸子を封ずることの過ぎたるは、夙に之を論じて、然る可からずとなせる者あり。洪武九年といへば建文帝未だ生れざるほどの時なりき。其歳閏九月、たま〳〵天文の變ありて、詔を下し直言を求められにければ、山西の葉居升といふもの、上書して第一には分封の太だ侈れること、第二には刑を用ゐる太だ繁きこと、第三には治を求むる太だ速かなることの三條を言へり。其の分封太侈を論ずるに曰く、都城百雉を過ぐるは國の害なりとは、傳の文にも見えたるを、國家今や秦晉燕齊梁楚吳閩の諸國、各其地を盡して之を封じたまひ、諸王の都城宮室の制、廣狹大小、天子の都に亞ぎ、之に賜ふに甲兵衞士の盛なるを以てしたまへり。臣ひそかに恐る數世の後は尾大掉はず、然して後に之が地を削りて之が權を奪はゞ、則ち其の怨を起すこと、漢の七國、晉の諸王の如くならん。然らざれば則ち險を恃みて衡を爭ひ、然らざれば則ち衆を擁して入朝し、甚しければ則ち間に縁りて而して起たんに、之を防ぐも及ぶ無からん。孝景皇帝は漢の高帝の孫也、七國の王は皆景帝の同宗父兄弟子孫なり、然るに當時一たび其地を削れば則ち兵を構へて西に向へり。晉の諸王は、皆武帝の親子孫なり、然るに世を易ふるの後は迭に兵を擁して、以て皇室を危くせり。昔は賈誼漢の文帝に勸めて、禍を未萠に防ぐの道を白せり。願はくば今先づ諸王の都邑の制を節し、其の衞兵を減じ、其の疆里を限りたまへと。居升の言はおのづから理あり、しかも太祖は太祖の慮あり、其の說くところ、正に太祖の思へるところに反すれば、太祖甚だ喜びずして、居升を獄中に終るに至らしめ給ひぬ。居升の上書の後二十餘年、太祖崩じて建文帝立ち

たまふに及び、居升の言、不幸にして驗ありて、漢の七國の喩、眼のあたりの事となれるぞ是非無き。

七國の事、七國の事、嗚呼是何ぞ明室と因緣の深きや。葉居升の上書の出づるに先だつこと九年、洪武元年十一月の事なりき。太祖宮中に大本堂といふを建てたまひ、古今の圖書を充て、儒臣をして太子および諸王に敎授せしめらる。起居注の魏觀字は杞山といふもの、太子に侍して書を說きけるが、一日太祖太子に問ひて、近ごろ儒臣經史の何事を講ぜるかとありけるに、太子、昨日は漢書の七國漢に叛ける事を講じ聞せたりと答へ白す。それより談は其事の上にわたりて、太祖、その曲直は孰に在りやと問ふ。太子、曲は七國に在りと承りぬと對ふ。時に太祖肯んぜずして、否、其は講官の偏說なり、景帝太子たりし時、博局を投じて吳王の世子を殺したることあり、帝となるに及びて、鼂錯の說を聽きて、諸侯の封を削りたり、七國の變は實に此に由る、諸子の爲に此事を講ぜんには、藩王たるものは、上は天子を尊み、下は百姓を撫し、國家の藩輔となりて、天下の公法を撓す無かれと言ふべきなり、此の如くなれば則ち太子たるものは、九族を敦睦し、親しきを親しむの恩を隆んにすることを知り、諸子たるものは、王室を夾翼し、君臣の義を盡すことを知らん、と評論したりとなり。此の太祖の言は、正に是太祖が胸中の秘を發せるにて、夙くより此意ありたればこそ、其より二年ほどにして、洪武三年に、樉、棡、棣、橚、楨、榑、梓、檀、杞の九子を封じて、秦晉燕周等に王とし、其甚しきは、生れて甫めて二歲、或は生れて僅に二ケ月のものをすら藩王とし、次いで洪武十一年、同二十四年の二回に、幼弱の諸子をも封じたるなれ。而して又夙くより此意ありたればこそ、葉居升が上言に深怒して、これを獄死せしむるまでには至りたるなれ。しかも太祖が懿文太子に、七國反漢の事を喩したりし時は、建文帝未だ

生れず、明の國號はじめて立ちしのみ、然るに何ぞ圖らん此の俊德成功の太祖が熟慮遠謀して、斯ばかり思ひしことの、其身死すると共に直に禍端亂階となりて、懿文の子の允炆、七國反漢の古を今にして箸まんとは。不世出の英雄朱元璋も、命といひ數といふもの丶前には、たゞ是一片の落葉秋風に舞ふが如きのみ。

七國の事、七國の事、嗚呼是何ぞ明室と因緣の深きや。洪武二十五年九月、懿文太子の後を承けて其御子允炆皇太孫の位に卽かせたまふ。繼紹の運まさに是の如くなるべきが上に、下は四海の心を繫くるところなり、上は一人の命を宣したまふところなり、天下皆喜びて、皇室萬福と慶賀したり。太孫既に立ちて皇太孫となり、明らかに皇儲となりたまへる上は、齡猶弱くとも、やがて天下の君たるべく、諸王或は功あり或は德ありと雖、遠からず俯首して命を奉ずべきなれば、理に於ては當に之を敬すべきなり。されども諸王は積年の威を挾み、大封の勢に藉り、且は叔父の尊きを以て、不遜の事の多かりければ、皇太孫は如何ばかり心苦しく厭はしく思ひしみたりけむ、一日東角門に坐して、侍讀の太常卿黃子澄といふものに、諸王驕慢の狀を告げ、諸叔父各々大封重兵を擁し、叔父の尊きを負みて傲然として予に臨む、行末の事も如何あるべきや、これに處し、これを制するの道を問はんと曰ひたまふ。子澄名は湜、分宜の人、洪武十八年の試に第一を以て及第したりしより累進してこゝに至れるにて、經史に通曉せるはこれ有りと雖、世故に練達することは未だ足らず、侍讀の身として日夕奉侍すれば、一意たゞ太孫に忠ならんと欲して、かゝる例は其昔にも見えたり、但し諸王の兵多しとは申せ、もと護衞の兵にして僅に自づから守るに足るのみなり、何程の事かあらん、漢の七國を削るや、七國叛きたれども、間も

無く平定したり、六師一たび臨まば、誰か能く之を支へん、もとより大小の勢、順逆の理、おのづから然るもの有るなり、御心安く思召せ、と七國の古を引きて對ふれば、太孫は子澄が答を、げに道理なりと信じたまひぬ。太孫猶齢若く、子澄未だ世に老いず、片時の談、七國の論、何ぞ圖らん他日山崩れ海湧くの大事を生ぜんとは。

太祖の病は洪武三十一年五月に起り、同閏五月西宮に崩ず。其遺詔こそは感ずべく考ふべきこと多けれ。山戰野戰又水戰、幾度と無く畏るべき危險の境を冒して、無產無官又無家、何等の恃むべきをも有たぬ孤獨の身を振ひ、終に天下を一統し、四海に君臨し、心を盡して世を治め、慮を竭して民を濟ひ、而して禮を尙び學を重んじ、百忙の中、手に書を輟めず、孔子の敎を篤信し、子は誠に萬世の師なりと稱して、衷心より之を尊び仰ぎ、施政の大綱、必ず此に依據し、又蚤歲にして佛理に通じ、內典を知るも、梁の武帝の如く淫溺せず、又老子を愛し、恬靜を喜び、自づから道德經註二卷を撰し、解縉をして、上疏の中に、學の純ならざるを譏らしむるに至りたるも、漢の武帝の如く神仙を好尙せず、嘗て宋濂に謂つて、人君能く心を淸くし欲を寡くし、民をして田里に安んじ、衣食に足り、熙々皡々として自づから知らざらしめば、是卽ち神仙なりと曰ひ、詩文を善くして、文集五十卷、詩集五卷を著はせるも、詹同と文章を論じては、文はたゞ誠意溢出するを尙ぶと爲し、又洪武六年九月には、詔して公文に對偶文辭を用ゐるを禁じ、無益の彫刻藻繪を事とするを遏めたるが如き、まことに通ずること博くして拘へらるゝこと少く、文武を兼ねて有し、智勇を併せて備へ、體驗心證、皆富みて深き一大偉人の此の明の太祖、開天行道肇紀立極大聖至神仁文義武俊德成功高皇帝の謚號に負かざる朱元璋、字は國瑞の、世を辭

して其身は地に入り、其神は空に歸せんとするに臨みて、言ふところ如何。一鳥の微なるだに、死せんとするや其聲人を動かすと云はずや。太祖の遺詔、感す可く考ふ可きもの無からんや。遺詔に曰く、朕皇天の命を受けて、大任に世に膺ること、三十有一年なり、憂危心に積み、日に勤めて怠らず、專ら民に益あらんことを志しき。奈何せん寒微より起りて、古人の博智無く、善を好し惡を惡むこと、及ばざること多し。今年七十有一、筋力衰微し、朝夕危懼す、慮るに終らざることを恐るのみ。今萬物自然の理を得、其れ奚んぞ哀念かこれ有らん。皇太孫允炆、仁明孝友にして、天下心を歸す、宜しく大位に登るべし。中外文武臣僚、心を同じうして輔祐し、以て吾が民を福せよ。葬祭の儀は、一に漢の文帝の如くにして異にする勿れ。天下に布告して、朕が意を知らしめよ。孝陵の山川は、其の故に因りて改むる勿れ、天下の臣民は、哭臨する三日にして、皆服を釋き、嫁娶を妨ぐるなかれ。諸王は國中に臨きて、京師に至る毋れ。諸の令の中に在らざる者は、此令を推して事に從へと。

嗚呼、何ぞ其言の人を感ぜしむること多きや。大任に膺ること、三十一年、憂危心に積み、日に勤めて怠らず、專ら民に益あらんことを志しき、と云へるは、眞に是帝王の言にして、堂々正大の氣象、藹々仁恕の情景、百歳の下、人をして欽仰せしむるに足るものあり。奈何せん寒微より起りて、智淺く德寡し、といへるは、謙遜の態度を取り、反求の工夫に切に、諱まず飾らざる、誠に美とすべし。今年七十有一、死旦夕に在り、といへるは、英雄も亦大限の漸く逼るを如何ともする無き者。而して、今萬物自然の理を得、其れ奚にぞ哀念かこれ有らん、と云へるは、流石に孔孟佛老の教に於て得るところあるの言なり。酒後に英雄多く、死前に豪傑少きは、世間の常態なるが、太祖は是眞豪傑、生きて長春不老

の凝想を懷かず、死して萬物自然の數理に安んぜんとす。從容として逼らず、晏如として惕れず、偉なる哉、偉なる哉。皇太孫允炆、宜しく大位に登るべし、と云へるは、一言や鐵の鑄られたるが如し、衆論の絲の紛るゝを防ぐ。これより前、太孫の儲位に卽くや、太祖太孫を愛せざるにあらずと雖、太孫の人となり仁孝聰頴にして學を好み、書を讀むことはこれ有り、然も勇往果決の意氣は甚だ缺く。此を以て太祖の詩を賦せしむるごとに、其詩婉美柔弱、豪壯瑰偉の處無く、太祖多く喜ばず。一日太孫をして詞句の屬對をなさしめしに、大に旨に稱はず、復以て燕王棣に命ぜられけるに、燕王の語は乃ち佳なりけり。燕王は太祖の第四子、容貌偉にして髭髯美はしく、智勇あり、大略あり、誠を推して人に任じ、太祖に肖たること多かりしかば、太祖も此を悅び、人も或は意を寄するものありたり、此に於て太祖密に儲位を易へんとするに意有りしが、劉三吾之を阻みたり。三吾は名は如孫、元の遺臣なりしが、博學にして文を善くしたりければ、洪武十八年召されて出でゝ仕へぬ。時に年七十三。當時汪叡、朱善と與に、世稱して三老と爲す。人となり慷慨にして城府を設けず、自づから號して坦坦翁といへるにも、其の風格は推知すべし。坦坦翁、生平實に坦坦、文章學術を以て太祖に仕へ、禮儀の制、選擧の法を定むるの議に與りて定むる所多く、帝の洪範の注の成るや、命を承けて序を爲り、敕修の書、省躬錄、書傳會要、禮制集要等の編撰總裁となり、居然たる一宿儒を以て、朝野の重んずるところたり。而して大節に臨むに至りては、屹として奪ふ可からず。懿文太子の薨ずるや、身を挺んでゝ、皇孫は世嫡なり、大統を承けたまはんこと、禮也、と云ひて、内外の疑懼を定め、太孫を立てゝ儲君となせし者は、實に此の劉三吾たりしなり。三吾太祖の意を知るや、何ぞ言無からむ、乃ち曰く、若し燕王を立て給はゞ秦王

晉王を何の地に置き給はむと。秦王樉、晉王㭎は、皆燕王の兄たり。孫を廢して子を立つるだに、定まりたるを覆すなり、まして兄を越して弟を君とするは序を亂るなり、世豈事無くして已まんや、との意は言外に明らかなりければ、太祖も英明絶倫の主なり、言下に非を悟りて、其事止みけるなり。是の如き事もありしなれば、太祖みづから崩後の動搖を防ぎ、暗中の飛躍を遏めて、特に嚴しく皇太孫允炆宜しく大位に登るべしとは詔を遺されたるなるべし。太祖の治を思ふの慮も遠く、皇孫を愛するの情も篤しといふ可し。葬祭の儀は、漢の文帝の如くせよ、と云へる、天下の臣民は哭臨三日にして服を釋き、嫁娶を妨ぐる勿れ、と云へる、何ぞ儉素にして仁恕なる。文帝の如くせよとは、金玉を用ゐる勿れとなり。孝陵の山川は其の故に因れとは、土木を起す勿れとなり。嫁娶を妨ぐる勿れとは、民をして禍あらしめんとなり。諸王は國中に臨みて、京に至るを得る無かれ、と云へるは、蓋し其意諸王其の封を去りて京に至らば、前代の遺孽、邊土の黠豪等、或は虛に乘じて事を擧ぐるあらば、星火も延燒して、燎原の勢を成すに至らんことを虞るゝに似たり。此も亦愛民憂世の念、おのづから此に至るといふべし。太祖の遺詔、嗚呼、何ぞ人を感ぜしむるの多きや。

然りと雖太祖の遺詔、考ふ可きも亦多し。皇太孫允炆、天下心を歸す、宜しく大位に登るべし、と云へるは、何ぞや。旣に立つて皇太孫となる、遺詔無しと雖、當に太位に登るべきのみ。特に大位に登るべしといふは、朝野の間、或は皇太孫の大位に登らざらんことを欲する者あり、太孫の年少く勇乏しき、

自づから謙讓して諸王の中の材雄に略大なる者に位を遜らんことを欲す者ありしが如きを猜せしむ。仁明孝友、天下心を歸す、と云へるは、何ぞや。明の世を治むる、纔に三十一年、元の裔猶未だ滅びず、中國に在るもの無しと雖、漠北に、塞西に、滇南に、元の同種の廣大の地域を有して蹯踞するもの存し、太祖崩じて後二十餘年にして猶大に興和に寇するあり。國外の情是の如し、而して域内の事、また英主の世を御せんことを幸とせずんばあらず、仁明孝友は固より尙ぶべしと雖、時勢の要するところ、實は雄材大略なり。仁明孝友、天下心を歸すといふと雖、或は恐る、天下を十にして其の心を歸する者七八に過ぎざらんことを。中外文武臣僚、心を同じうして輔祐し、以て吾が民を福せよ、といへるは、文武臣僚の中、心を同じうせざる者あるを懼るゝに似たり。太祖の心、それ安んぜざる有る耶、非耶。諸王は國中に臨きて京に至るを得る無かれ、と云へるは、何ぞや。諸王の其封國を空しうして奸黠の乘ずるところとならんことを慮るといふも、諸王の臣、豈一時を托するに足る者無からんや。子の父の葬に趨るは、おのづから是情なり、是理なり、禮にあらず、道にあらずと爲さんや。諸王をして葬に會せざらしむるの詔は、果して是太祖の言に出づるか。太祖にして此詔を遺すとせば、太祖ひそかに其斥けて聽かざりし葉居升の言の、諸王衆を擁して入朝し、甚しければ則ち間に縁りて起たんに、之を防ぐも及ぶ無き也、と云へるを思へるにあらざる無きを得んや。嗚呼、子にして父の葬に會するを得ず、父の意なりと謂ふと雖、子よりして論ずれば、父の子を待つゝ亦疎にして薄きの憾無くんばあらざらんとす。詔或は時勢に中らん、而も實に人情に遠いかな。凡そ施爲命令謀圖言議を論ぜず、其の人情に遠きこと甚しきものは、意は善なるも、理は正しきも、計は中るも、見は徹するも、必らず弊に坐し凶を招くもの

なり。太祖の詔、可なることは則ち可なり、人情には遠し。これより先に洪武十五年高皇后の崩ずるや、秦王晋王燕王等皆國に在り、然れども諸王喪に奔りて京に至り、禮を卒へて還れり。太祖の崩ぜると、其后の崩ぜると、天下の情勢に關すること異なりと雖、母の喪には奔りて從ふを得て、父の葬には入りて會するを得ざらしむ。此も亦人を强ひて人情に遠きを爲さしむるものなり。太祖の詔、まことに人情に遠し。豈弊を生じ凶を致す無からんや。果して事端は先づこゝに發したり。崩を聞いて諸王は京に入らんとし、燕王は將に淮安に至らんとせるに當りて、齊泰は帝に言し、人をして勅を賚らして國に還らしめぬ。燕王を首として諸王は皆大に悅ばず、これ尙書齊泰の疎間するなりと謂ひぬ。建文帝は位に即きて劈頭第一に諸王をして悅ばざらしめぬ。諸王は帝の叔父なり、尊族なり、封土を有し、兵馬民財を有せる也。諸王にして悅ばざるときは、宗家の枝柯、皇室の藩屏たるも何かあらん。嗚呼、これ罪齊泰にあるか、建文帝にあるか、抑又遺詔にあるか、諸王にあるか、之を知らざる也。又飜つて思ふに、太祖の遺詔に、果して諸王の入臨を止むるの語ありしや否や。或は疑ふ、太祖の人情に通じ、世故に熟せる、まさに是の如きの詔を遺さゞるべし。若し太祖にして果して登遐の日に際して諸王の葬に會するを欲せざらば、平生無事從容の日、又は諸王の京を退きて封に就くの時に於て、親しく諸王に意を諭すべきなり。然らば諸王も亦發駕奔喪の際に於て、半途にして擁遏せらるゝの不快事に會ふ無く、各ゝ其封に於て哭臨して、他を責むるが如きこと無かるべきのみ。太祖の智にして事此に出でず、詔を遺して諸王の情を屈するは解す可からず。人の情屈すれば則ち悅ばず、悅ばざれば則ち怨を懷き他を責むるに至る、怨を懷き他を責むるに至れば、事無きを欲するも得べからず。太祖の人情に通ぜる、何ぞ之を知る

の明無からん。故に曰く、太祖の遺詔に、諸王の入臨を止むる者は、太祖の爲すところにあらず、疑ふらくは齊泰黄子澄の輩の假託するところならんと。齊泰の輩、もとより諸王の帝に利あらざらんことを恐る。詔を矯むるの事も、世其例に乏しからず、是の如きの事、未だ必ずして無きを保せず。然れども是推測の言のみ。眞耶、僞耶、太祖の失か、失にあらざるか、齊泰の爲か、爲にあらざる耶、將又齊泰、遺詔に托して諸王の入京會葬を遏めざる能はざるの勢の存せしか、非耶。建文永樂の間、史に曲筆多し。今新に史徵を得るあるにあらざれば、疑を存せんのみ、確に知る能はざる也。

太祖の崩ぜるは閏五月なり、諸王の入京を遏められて悅ばずして歸れるの後、六月に至つて戸部侍郎卓敬といふもの、密疏を上る。卓敬字は惟恭、書を讀んで十行倶に下ると云はれし穎悟聰敏の士、天文地理より律曆兵刑に至るまで究めざること無く、後に成祖をして、國家士を養ふこと三十年、唯一卓敬を得たりと歎ぜしめしほどの英才なり。鯁直慷慨にして、避くるところ無し。嘗つて制度未だ備はらずして、諸王の服乘も、太子に擬せるを見、太祖に直言して、嫡庶相亂り、尊卑序無くんば、何を以て天下に令せんや、と說き、太祖をして、爾の言是なり、と曰はしめたり。其の人となり知る可きなり。敬の密疏は、宗藩を裁抑して、禍根を除かんとなり。されども、帝は敬の疏を受けたまひしのみにて、報じたまはず、事竟に寢みぬ。敬の言、蓋し故無くして發せず、必らず竊に聞くところありしなり。二十餘年前の葉居升が言は、是に於て其の中れるを示さんとし、七國の難は今將に發せんとす。燕王、周王、齊王、湘王、代王、岷王等、秘信相通じ、密使互に動き、穩やかならぬ流言ありて、朝に聞えたり。諸王と帝との間、帝は其の未だ位に卽かざりしより諸王を忌憚し、諸王は其の未だ位に卽かざるに當つて

帝を侮り、叔父の尊を挾んで不遜の事多かりしなり。入京會葬を止むるの事、遺詔に出づと云ふと雖、諸王、責を讒臣に托して、而して其の奸惡を除かんと云ひ、香を孝陵に進めて、而して吾が誠意を致さんと云ふに至つては、蓋し辭柄無きにあらず。諸王は合同の勢あり、帝は孤立の狀あり。嗚呼、諸王も疑ひ、帝も疑ふ、相疑ふや何ぞ睽離せざらん。帝も戒め、諸王も戒む、相戒むるや何ぞ疎隔せざらん。疎隔し、睽離す、而して帝の爲に密に圖るものあり、諸王の爲に私に謀るものあり、況んや藩主を以て天子たらんとするものあり、王を以て皇となさんとするものあるに於てをや。事遂に決裂せずんば止まざるものある也。

帝の爲に密に圖る者をば誰となす。曰く、黄子澄となし、齊泰となす。子澄は既に記しぬ。齊泰は溧水の人、洪武十七年より漸く世に出づ。建文帝位に卽きたまふに及び、子澄と與に帝の信賴するところとなりて、國政に參す。諸王の入京會葬を遏めたる時の如き、諸王は皆謂へらく、泰皇考の詔を矯めて骨肉を間つと。泰の諸王の憎むところとなれる、知る可し。

諸王の爲に私に謀る者を誰となす。曰く、諸王の雄を燕王となす。燕王の傅に、僧道衍あり。道衍は僧たりと雖、灰心滅智の羅漢にあらずして、却つて是好謀善算の人なり。洪武二十八年、初めて諸王の封國に就く時、道衍自づから薦めて燕王の傅とならんとし、言つて曰く、大王臣をして侍するを得せしめたまはゞ、一白帽を奉りて大王がために戴かしめんと。王上に白を冠すれば、其文は皇なり。儲位明らかに定まりて、太祖未だ崩ぜざるの時だに、是の如きの怪僧ありて、燕王が爲に白帽を奉らんとし、而して燕王是の如きの怪僧を延いて帷幙の中に居く。燕王の心胸もとより淸からず、道衍の爪甲も毒あ

りといふべし。道衍燕邸に至るに及んで、袁珙を王に薦む。袁珙は字は廷玉、鄞の人にして、此亦一種の異人なり。嘗て海外に遊んで、人を相するの術を別古崖といふものに受く。仰いで皎日を視て、目盡く眩して後、赤豆黒豆を暗室中に布いて之を辨じ、又五色の縷を窓外に懸け、月に映じて其色を別つて訛つこと無く、然して後に人を相す。其法は夜中を以て兩炬を燃し、人の形狀氣色を視て、參するに生年月日を以てするに、百に一謬無く、元末より既に名を天下に馳せたり。其の道衍と識るに及びたるは、道衍が嵩山寺に在りし時にあり。袁珙道衍が相をつく〴〵と觀て、是何ぞ異僧なるや、目は三角あり、形は病虎の如し、性必らず殺を嗜まん、劉秉忠の流なりと。劉秉忠は、學內外を兼ね、識三才を綜ぶ、釋氏より起つて元主を助け、九州を混一し、四海を併合す。元の天下を得る、もとより其の兵力に賴ると雖、成功の速疾なるもの、劉の揮擢の宜を得るに因るもの、亦鮮からず。秉忠は實に奇偉卓犖の僧なり。道衍秉忠の流なりとなさる、まさに是癡處に爬着するもの、是れより二人、友とし善し。道衍の珙を燕王に薦むるに當りてや、燕王先づ使者をして珙と與に酒肆に飮ましめ、王みづから衛士の儀表堂々たるもの九人に雜はり、おのれ亦衛士の服を服し、弓矢を執りて、肆中に飮む。珙一見して卽ち趨つて燕王の前に拜して曰く、殿下何ぞ身を輕んじて此に至りたまへると。燕王等笑つて曰く、吾輩皆護衛の士なりと。珙頭を掉つて是とせず。こゝに於て王起つて入り、珙を宮中に延きて詳に相せしむ。珙諦視すること良久しうして曰く、殿下は龍行虎步したまひ、日角天を插む、まことに異日太平の天子にておはします。御年四十にして、御鬚臍を過ぎさせたまふに及ばせたまはゝ、大寶位に登らせたまはんこと疑あるべからず、と白す。又燕府の將校官屬を相せしめたまふに、珙一々指點して曰く、某は公たるべ

し、某は侯たるべし、某は將軍たるべし、某は貴官たるべしと。燕王語の洩れんことを慮り、陽に斥けて通州に至らしめ、舟路密に召して邸に入る。道衍は北平の慶壽寺に在り、珙は燕府に在り、燕王と三人、時々人を屏けて語る。知らず其の語るところのもの何ぞや。珙は柳莊居士と號す。時に年蓋し七十に近し。抑亦何の欲するところあつて燕王に勸めて反せしめしや。其子忠徹の傳ふるところの柳莊相法、今に至つて猶存し、風鑑の津梁たり。珙と永樂帝と答問するところの永樂百問中、帝鬚の事を記す。相法三卷、信ぜざるものは、目して陋書となすと雖、盡く斥く可からざるものあるに似たり。忠徹も家學を傳へて、當時に信ぜらる。其の著はすところ、古今識鑑八卷ありて、明志採錄す。未だ寓目せずと雖、蓋し藻鑑の道を說く也。珙と忠徹と、倶に明史方伎傳に見ゆ。珙の燕王に見ゆるや、鬚長じて臍を過ぎなば寶位に登らんといふ。燕王笑つて曰く、吾が年將に四旬ならんとす、鬚豈能く復長ぜんやと。道衍こゝに於て金忠といふものを薦む。金忠も亦鄞の人なり、少くして書を讀み易に通ず。卒伍に編せらるるに及び、卜を北平に賣る、卜多く奇中して、市人傳へて以て神と爲す。燕王忠をして卜せしむ。忠卜して卦を得て、貴きこと言ふ可からずといふ。燕王の意漸くにして固し。忠後に仕へて兵部尙書を以て太子監國に輔せらるゝに至る。明史卷百五十に傳あり。蓋亦一異人なり。

帝の側には黃子澄齊泰あり、諸藩を削奪するの意、いかでこれ無くして已まん。燕王の傍には僧道衍袁珙あり、祕謀を醞釀するの事、いかでこれ無くして已まん。二者の間、既に是の如し、風聲鶴唳、人

相驚かんと欲し、劍光火影、世漸く將に亂れんとす。諸王不穩の流言、朝に聞ゆること頻なれば、一日帝は子澄を召したまひて、先生、疇昔の東角門の言を憶えたまふや、と仰す。子澄直ちに對へて、敢て忘れまをさずと白す。東角門の言は、卽ち子澄七國の故事を論ぜるの語なり。子澄退いて齊泰と議す。泰曰く、燕は重兵を擁り、且素より大志あり、當に先づ之を削るべしと。子澄が曰く、然らず、燕は豫め備ふること久しければ、卒に圖り難し。宜しく先づ周を取り、燕の手足を剪り、而して後燕圖るべしと。乃ち曹國公李景隆に命じ、兵を調して猝に河南に至り、周王橚及び其の世子妃嬪を執へ、爵を削りて庶人となし、之を雲南に遷しぬ。橚は燕王の同母弟なるを以て、帝もかねてより之を疑ひ憚り、橚も亦異謀あり、橚の長史王翰といふもの、數〻諫めたれど納れず、橚の次子汝南王有爋の變を告ぐるに及び、此事あり。實に洪武三十一年八月にして、太祖崩じて後、幾干月を距らざる也。冬十一月、代王桂、暴虐民を苦むるを以て、蜀に入りて蜀王と共に居らしむ。

諸藩漸く削奪せられんとするの明らかなるや、十二月に至りて、前軍都督府斷事高巍書を上りて政を論ず。巍は遼州の人、氣節を尙び、文章を能くす、材器偉ならずと雖、性質實に惟美、母の蕭氏に事へて孝を以て稱せられ、洪武十七年旌表せらる。其の立言正平なるを以て太祖の嘉納するところとなりし又是一個の好人物なり。時に事に當る者、子澄、泰の輩より以下、皆諸王を削るを議す。獨り巍と御史韓郁とは說を異にす。巍の言に曰く、我が高皇帝、三代の公に法り、嬴秦の陋を洗ひ、諸王を分封して、四裔に藩屛たらしめたまへり。然れども之を古制に比すれば、封境過大にして、諸王又率ね驕逸不法なり。削らざれば則ち朝廷の紀綱立たず、之を削れば親を親むの恩を傷る。賈誼曰く、天下の治安を欲す

るは、衆く諸侯を建てゝ其力を少くするに若くは無しと。臣愚謂へらく、今宜しく其意を師とすべし、晁錯が削奪の策を施す勿れ、主父偃が推恩の令に效ふべし。西北諸王の子弟は、東南に分封し、東南諸王の子弟は、西北に分封し、其地を小にし、其城を大にし、以て其力を分たば、藩王の權は、削らずして弱からん。臣又願はくは陛下益親親の禮を隆んにし、歲時伏臘、使問絶えず、賢者は詔を下して褒賞し、不法者は初犯は之を宥し、再犯は之を赦し、三犯改めざれば、則ち太廟に告げて、地を削り、之を廢處せんに、豈服順せざる者あらんやと。帝之を然なりとは聞召したりけれど、勢既に定まりて、削奪の議を取る者のみ充滿ちたりければ、高巍の說も用ゐられで已みぬ。

建文元年二月、諸王に詔りして、文武の吏士を節制し、官制を更定するを得ざらしむ。此も諸藩を抑ふるの一なりけり。夏四月西平侯沐晟、岷王楩の不法の事を奏す。よつて其の護衛を削り、其の指揮宗麟を誅し、王を廢して庶人となす。又湘王柏の僞りて鈔を造り、及び擅に人を殺すを以て、勅を降して之を責め、兵を遣つて執へしむ。湘王もと膂力ありて氣を負ふ。曰く、吾聞く、前代の大臣の吏に下さるゝや、多く自から引決すと、身は高皇帝の子にして、南面して王となる、豈能く僕隸の手に辱しめられて生活を求めんやと。遂に宮を闔ぢて自から焚死す。齊王榑もまた人の告ぐるところとなり、廢せられて庶人となり、代王桂もまた終に廢せられて庶人となり、大同に幽せらる。

燕王は初より朝野の注目せるところなり、且は威望材力も群を拔けるなり、又其の終に天子たるべきを期するものも有るなり、又私に異人術士を養ひ、勇士勁卒をも蓄へ居れるなり、人も疑ひ、己も危ぶみ、朝廷と燕と竟に兩立する能はざらんとするの勢あり。されば三十一年の秋、周王橚の執へらるゝを

見て、燕王は遂に壯士を簡みて護衛となし、極めて警戒を嚴にしたり。されども齊泰黃子澄に在りては、もとより燕王を容す能はず。たま〳〵北邊に寇警ありしを機とし、防邊を名となし、燕藩の護衛の兵を調して塞を出でしめ、其の羽翼を去りて、其の咽喉を扼せんとし、乃ち工部侍郎張昺をもて北平左布政使となし、謝貴を以て都指揮使となし、燕王の動靜を察せしめ、魏國公徐輝祖、曹國公李景隆をして、謀を協せて燕を圖らしむ。

建文元年正月、燕王長史葛誠をして入つて事を奏せしむ。誠帝の爲に具に燕邸の實を告ぐ。こゝに於て誠を遣りて燕に還らしめ、內應を爲さしむ。燕王覺つて之に備ふるあり。二月に至り、燕王入覲す。皇道を行きて入り、陛に登りて拜せざる等、不敬の事ありしかば、監察御史曾鳳韶これを劾せしが、帝曰く、至親問ふ勿れと。戶部侍郎卓敬、先に書を上つて藩を抑へ禍を防がんことを言ふ。復密奏して曰く、燕王は智慮人に過ぐ、而して其の據る所の北平は、形勝の地にして、士馬精强に、金元の由つて興るところなり、今宜しく封を南昌に徙したまふべし、然らば則ち萬一の變あるも控制し易しと。帝敬に對へたまはく、燕王は骨肉至親なり、何ぞ此に及ぶことあらんやと。敬曰く、隋文楊廣は父子にあらずやと。敬の言實に然り。楊廣は子を以てだに父を弑す、燕王の傲慢なる、何をか爲さゞらん。敬の言、敦厚を缺き、帝の意、醇正に近しと雖、世相の險惡にして、人情の陰毒なる、悲む可きかな、敬の言却つて實に切なり。然れども帝默然たること良久しくして曰く、卿休せよと。三月に至つて燕王國に還る。都御史暴昭、燕邸の事を密偵して奏するあり。北平の按察使僉事の湯宗、按察使陳瑛が燕の金を受けて、燕の爲に謀ることを劾するあり。よつて瑛を逮捕し、都督宗忠をして兵三萬を率ゐ、及び燕王府

の護衛の精鋭を忠の麾下に隷し、開平に屯して、名を邊に備ふるに藉り、都督の耿瓛に命じて兵を山海關に練り、徐凱をして兵を臨淸に練り、密に張昺謝貴に勅して、嚴に北平の動揺を監視せしむ。燕王此の勢を視、國に歸れるより疾に托して出でず、之を久しうして遂に疾篤しと稱し、以て一時の視聽を避けんとせり。されども水あるところ濕氣無き能はず、火あるところは燥氣無き能はず、六月に至りて燕山の護衛百戸倪諒といふもの變を上り、燕の官校于諒周鐸等の陰事を告げゝれば、二人は逮へられて京に至り、罪明らかにして誅せられぬ。こゝに於て事燕王に及ばざる能はず、詔ありて燕王を責む。燕王辯疏する能はざるところやありけむ、佯りて狂となり、號呼疾走して、市中の民家に酒食を奪ひ、亂語妄言、人を驚かして省みず、或は土壌に臥して、時を經れど覺めず、全く常を失へるものゝ如し。張昺謝貴の二人、入りて疾を問ふに、時まさに盛夏に屬するに、王は爐を圍み、身を顫はせて、寒きこと甚しと曰ひ、宮中をさへ杖つきて行く。されば燕王まことに狂したりと謂ふ者もあり、朝廷も稍これを信ぜんとするに至りけるが、葛誠ひそかに昺と貴とに告げて、燕王の狂は、一時の急を緩くして、後日の計に便にせんまでの詐に過ぎず、本より恙無きのみ、と知らせたり。たま〳〵燕王の護衛百戸鄧庸といふもの、闕に詣り事を奏したりけるを、齊泰請ひて執へて鞫問しけるに、王が將に兵を擧げんとするの狀をば逐一に白したり。

待設けたる齊泰は、たゞちに符を發し使を遣はし、往いて燕府の官屬を逮捕せしめ、密に謝貴張昺をして、燕府に在りて内應を約せる長史葛誠、指揮盧振と氣脈を通ぜしめ、北平都指揮張信といふものゝ、燕王の信任するところとなるを利し、密勅を下して、急に燕王を執へしむ。信は命を受けて憂懼爲す

ところを知らず、情誼を思へば燕王に負くに忍びず、勅命を重んずれば私恩を論ずる能はず、進退兩難にして、行止ともに艱し。左思右慮、心終に決する能はねば、苦悶の色は面にもあらはれたり。信が母疑ひて、何事のあればにや、汝の深憂太息することよ、と詰り問ふ。信是非に及ばず、事の始末を告ぐれば、母大に驚いて曰く、不可なり、汝が父の與、毎に言へり王氣燕に在りと、それ王者は死せず、燕王は汝の能く擒にするところにあらざるなり、燕王に負いて家を滅することなかれと。信愈々惑ひて決せざりしに、勅使信を促すこと急なりければ、信遂に怒つて曰く、何ぞ太甚しきやと。乃ち意を決して燕邸に造る。造ること三たびすれども、燕王疑ひて而して辭し、入ることを得ず。信婦人の車に乘じ、徑ちに門に至りて見ゆることを求め、やうやく召入れらる。されども燕王猶疾を裝ひて言はず。信曰く、殿下爾したまふ無かれ、まことに事あらば當に臣に告げたまふべし、殿下もし情を以て臣に語りたまはずば、上命あり、當に執はれに就きたまふべし、如し意あらば臣に諱みたまふ勿れと。燕王信の誠あるを見、席を下りて信を拜して曰く、我が一家を生かすものは子なりと。信つぶさに朝廷の燕を圖るの狀を告ぐ。形勢は急轉直下せり。事態は既に決裂せり。燕王は道衍を召して、將に大事を擧げんとす。

天耶、時耶。燕王の胸中颶母まさに動いて、黑雲飛ばんと欲し、張玉、朱能等の猛將梟雄、眼底紫電閃いて、雷火發せんとす。燕府を擧つて殺氣陰森たるに際し、天も亦應ぜるか、時抑至れるか、颶風暴雨卒然として大に起りぬ。蓬々として始まり、號々として怒り、奔騰狂轉せる風は、沛然として至り、澎然として瀉ぎ、猛打亂擊するの雨と伴なつて、乾坤を震撼し、樹石を動盪しぬ。燕王の宮殿堅牢ならざるにあらざるも、風雨の力大にして、高閣の簷瓦吹かれて空に飄り、砉然として地に墮ちて粉碎した

り。大事を擧げんとするに臨みて、これ何の兆ぞ。さすがの燕王も心に之を惡みて色懌ばず。風聲雨聲、竹折るゝ聲樹裂くる聲、物凄じき天地を睥睨して、慘として雙語無く、王の左右もまた肅として言はず。時に道衍少しも驚かず、あな喜ばしの祥兆や、と白す。本より此の異僧道衍は、死生禍福の岐に惑ふが如き未達の者にはあらず、膽に毛も生いたるべき不敵の逸物なれば、さきに燕王を勸めて事を起さしめんとしける時、燕王、彼は天子なり、民心の彼に向ふを奈何、とありけるに、昂然として答へて、臣は天道を知る、何ぞ民心を論ぜん、と云ひけるほどの豪傑なり。されども風雨簷瓦を墮す、時に取つての祥とも覺えられぬを、あな喜ばしの祥兆といへるは、餘りに强言に聞えければ、燕王堪へかねて、和尙、何といふぞや、いづくにか祥兆たるを得る、と口を突いてそゞろぎ罵る。道衍騷がず、殿下聞しめさずや、飛龍天に在れば、從ふに風雨を以てすと申す、瓦墜ちて碎けぬ、これ黃屋に易るべきのみ、と泰然として對へければ、王も頓に眉を開いて悅び、衆將も皆どよめき立つて勇みぬ。彼邦の制、天子の屋は、葺くに黃瓦を以てす。舊瓦は用無し、まさに黃なるに易るべし、といへる道衍が一語は、時に取つての活人劍、燕王宮中の士氣をして、勃然凛然、糾々然、直にまさに天下を呑まんとするの勢をなさしめぬ。

燕王は護衛指揮張玉朱能等をして壯士八百人をして入つて衛らしめぬ。矢石未だ交るに至らざるも、刀鎗既に互に鳴る。都指揮使謝貴は七衛の兵、幷びに屯田の軍士を率ゐて王城を圍み、木柵を以て端禮門等の路を斷ちぬ。朝廷よりは燕王の爵を削るの詔、及び王府の官屬を逮ふべきの詔至りぬ。秋七月布政使張昺、謝貴と與に士卒を督して皆甲せしめ、燕府を圍んで、朝命により逮捕せらるべき王府の官屬

を交附せんことを求む。一言の支吾あらんには、巖石鷄卵を壓するの勢を以て臨まんとするの狀を爲し、昺貴の軍の殺氣の迸るところ、箭を放つて府内に達するものすら有り。燕王謀つて曰く、吾が兵は甚寡く、彼の軍は甚多し、奈何せんと。朱能進んで曰く、先づ張昺謝貴を除かば、餘は能く爲す無き也と。王曰く、よし、昺貴を擒にせんと。壬申の日、王、疾癒えぬと稱し、東殿に出で、官僚の賀を受け、人をして昺と貴とを召さしむ。二人應ぜず。復内官を遣はして、逮はるべき者を交附するを裝ふ。二人乃ち至る。衞士甚衆かりしも、門者呵して之を止め、昺と貴とのみを入る。昺と貴との入るや、燕王杖を曳いて坐し、宴を賜ひ酒を行る。寶盤に瓜を盛つて出す。王曰く、たま〳〵新瓜を進むる者あり、卿等と之を嘗みんと、自づから一瓜を手にしけるが、忽にして色を作して詈つて曰く、今世間の小民だに、兄弟宗族、尙相互に恤ぶ、身は天子の親屬たり、而も旦夕に其命を安んずること無し、縣官の我を待つこと此の如し、天下何事か爲す可からざらんや、と奮然として瓜を地に擲てば、護衞の軍士皆激怒して、前んで昺と貴とを擒へ、かねて朝廷に内通せる葛誠盧振等を殿下に取つて押へたり。王こゝに於て杖を投じて起つて曰く、我何ぞ病まん、奸臣に迫らるゝ耳、とて遂に昺貴等を斬る。昺貴等の將士、二人が時を移して還らざるを見、始は疑ひ、後は覺りて、各散じ去る。王城を圍める者も、首腦已に無くなりて、手足力無く、其兵おのづから潰えたり。張昺が部下北平都指揮の彭二、憤慨已む能はず、馬を躍らして大に市中に呼はつて曰く、燕王反せり、我に從つて朝廷の爲に力を盡すものは賞あらんと。兵千餘人を得て端禮門に殺到す。燕王の勇卒龐來興、丁勝の二人、彭二を殺しければ、其兵も亦散じぬ。此勢に乘ぜよやと、張玉、朱能等、いづれも塞北に轉戰して元兵と相馳驅し、千軍萬馬の間に老い來れる者

なれば、兵を卒ゐて夜に乘じて突いて出で、黎明に至るまでに、九つの門の其八を奪ひ、たゞ一つ下らざりし西直門をも、好言を以て守者を散ぜしめぬ。北平既に全く燕王の手に落ちしかば、都指揮使の余瑱は、走つて居庸關を守り、馬宣は東して薊州に走り、宋忠は開平より兵三萬を率ゐて居庸關に至りしが、敢て進まずして、退いて懷來を保ちたり。

　煙は旺んにして火は遂に熾えたり、劍は拔かれて血は既に流されたり。燕王は堂々として旗を進め馬を出しぬ。天子の正朔を奉ぜず、敢て建文の年號を去つて、洪武三十二年と稱し、道衍を帷幄の謀師とし、金忠を紀善として機密に參せしめ、張玉、朱能、丘福を都指揮僉事とし、張昺部下にして內通せる李友直を布政司參議と爲し、乃ち令を下して諭して曰く、予は太祖高皇帝の子なり、今奸臣の爲に謀害せらる。祖訓に云はく、朝に正臣無く、內に奸逆あれば、必ず兵を擧げて誅討し、以て君側の惡を淸めよと。こゝに爾將士を率ゐて之を誅せんとす。罪人既に得ば、周公の成王を輔くるに法とらん。爾等それ予が心を體せよと。一面には是の如くに將士に宣言し、又一面には書を帝に上りて曰く、皇考太祖高皇帝、百戰して天下を定め、帝業を成し、之を萬世に傳へんとして、諸子を封建したまひ、宗社を鞏固にして、磐石の計を爲したまへり。然るに奸臣齊泰黃子澄、禍心を包藏し、橚、榑、栢、桂、楩の五弟、數年ならずして、並びに削奪せられぬ。栢や尤も憫むべし、闔室みづから焚く、聖仁上に在り、胡ぞ寧ろ此に忍ばん。蓋陛下の心に非ず、實に奸臣の爲す所ならん。心尙未だ足らず、又以て臣に加ふ。臣藩を燕に守ること二十餘年、寅み畏れて小心にし、法を奉じ分に循ふ。誠に君臣の大分、骨肉の至親を以て、恒に思ひて愼を加ふ。而るに奸臣跋扈し、禍を無辜に加へ、臣が事を奏するの人を執へて、箠楚刺熱し、

備さに苦毒を極め、迫りて臣不軌を謀ると言はしめ、遂に宋忠、謝貴、張昺等を北平城の内外に分ち、甲馬は街衢に馳突し、鉦鼓は遠邇に喧鞫し、臣が府を圍み守る。已にして護衛の人、貴昺を執へ、始めて奸臣欺詐の謀を知りぬ。竊に念ふに臣の孝康皇帝に於けるは、同父母兄弟なり、今陛下に事ふるは天に事ふるが如きなり、譬へば大樹を伐るに、先づ附枝を剪るが如し、親藩既に滅びなば、朝廷孤立し、奸臣志を得んには、社稷危からん。臣伏して祖訓を視るに云へることあり、朝に正臣無く、内に奸悪あらば、則ち親王兵を訓して命を待ち、天子密かに諸王に詔し鎮兵を統領して之を討平せしむと。臣謹んで俯伏して命を俟つ。と言辭を飾り、情理を綺へてぞ奏しける。道衍少きより學を好み詩を工にし、高啓と友とし善く、宋濂にも推奨され、逃虚子集十卷を世に留めしほどの文才あるものなれば、道衍や筆を執りけん、或は又金忠の輩や詞を綴りけん、いづれにせよ、柔を外にして剛を懐き、己を護りて人を責むる、いと力ある文字なり。卒然として此書のみを讀めば、王に理ありて帝に理なく、帝に情無くして王に情あるが如く、祖靈も民意も、帝を去り王に就く可きを覺ゆ。されども擅に謝張を殺し、妄に年號を去る、何ぞ法を奉ずると云はんや。後苑に軍器を作り、密室に機謀を錬る、これ分に循ふにあらず。君側の奸を掃はんとすと云ふと雖、詔無くして兵を起し、威を恣にして地を掠む、其辭は則ち可なるも、其實は則ち非なり。飜つて思ふに齊泰黄子澄の輩の、必ず諸王を削奪せんとするも、亦理に於て缺け、情に於て薄し。夫れ諸王を重封せるは、太祖の意に出づ。諸王未だ必ずしも反せざるに、先づ諸王を削奪せんとするの意を懐いて諸王に臨むは、上は太祖の意を壞り、下は宗室の親を破るなり。三年父の志を改めざるは、孝といふべし、太祖崩じて、坯土未だ乾かず、直に其意を破り、諸王を削奪せんとする

は、是理に於て缺け情に於て薄きものにあらずして何ぞや。斉黄の輩の爲さんとするところ是の如くなれば、燕王等手を袖にし息を屏くるも亦削奪罪責を免かれざらんとす、太祖の血を承けて、英雄傑特の氣象あるもの、いづくんぞ俛首して寃に服するに忍びんや、瓜を投じて怒罵するの語、其中に機關ありと雖、又盡く僞詐のみならず、本より眞情の人に逼るに足るものあるなり。畢竟兩者各理あり、各非理ありて、爭閲則ち起り、各情無く、各眞情有りて、戰鬪則ち生ぜるもの。今に於て誰か能く其の是非を判ぜんや。高巍の說は、敦厚悅ぶ可しと雖、時既に晩く、卓敬の言は、明徹用ゐるに足ると雖、勢囘し難く、朝旨の酷責すると、燕師の暴起すると、實に互に已む能はざるものありしなり。是所謂數なるものか、非耶。

燕王の兵を起したる建文元年七月より、惠帝の國を遜りたる建文四年六月までは、烽烟劍光の史にして、今一々に之を記するに懶し、其詳を知らんとするものは、明史及明朝紀事本末等に就て考ふべし。たゞ其概略と燕王惠帝の性格風丰を知る可きものとを記せん。燕王もと智勇天縱、且夙に征戰に習ふ。洪武二十三年、太祖の命を奉じ、諸王と共に元族を漠北に征す。秦王晋王は怯にして敢て進まず、王將軍傅友德等を率ゐて北出し、迤都山に至り、其將乃兒不花（ナルブファ）を擒にして還る。太祖大に喜び、此より後屢諸將を帥ゐて出征せしむるに、毎次功ありて、威名大に振ふ。王既に兵を知り戰に慣る。加ふるに道衍ありて、機密に參し、張玉、朱能、丘福ありて、爪牙と爲る。丘福は謀畫の才張玉に及ばずと雖、樸直

猛勇、深く敵陣に入りて敢戰死鬪し、戰終つて功を獻ずるや必ず人に後る、古の大樹將軍の風あり。燕王をして、丘將軍の功は我之を知る、と歎美せしむるに至る。故に王の功臣を賞するに及びて、福其首たり、淇國公に封ぜらる。其他將士の驚悍鷙雄の者も、亦甚だ少からず、燕王の大事を擧ぐるも、蓋し胸算あるなり。燕王の張昺謝貴を斬つて反を敢てするや、郭資を留めて北平を守らしめ、直に師を出して通州を取り、先づ薊州を定めずんば、後顧の患あらんと云へる張玉の言を用ゐ、玉をして之を略せしめ、次で夜襲して遵化を降す。此皆開平の東北の地なり。時に余瑱居庸關を守る。王曰く、居庸は險隘にして、北平の咽喉也、敵此に據るは、是我が背を附つなり、急に取らざる可からずと。乃ち徐安、鍾祥等をして瑱を擊つて、懷來に走らしむ。宗忠懷來に在り、兵三萬と號す。諸將之を擊つを難んず。王曰く、彼衆く、我寡し、然れども彼新に集まる、其心未だ一ならず、之を擊たば必らず破れんと。精兵八千を率ゐ、甲を捲き道を陪して進み、遂に戰つて克ち、忠と瑱とを獲て之を斬る。こゝに於て諸州燕に降る者多く、永平、欒州、また燕に歸す。大寧の都指揮卜萬、松亭關を出で、沙河に駐まり、遵化を攻めんとす。兵十萬と號し、勢やゝ振ふ。燕王反間を放ち、萬の部將陳亨、劉貞をして萬を縛し獄に下さしむ。

帝黃子澄の言を用ゐ、長興侯耿炳文を大將軍とし、李堅、寧忠を副へて北伐せしめ、又安陸侯吳傑、江陰侯吳高、都督都指揮盛庸、潘忠、楊松、顧成、徐凱、李文、陳暉、平安等に命じ、諸道並び進みて、直に北平を擣かしむ。時に帝諸將士を誡めたまはく、昔蕭繹、兵を擧げて京に入らんとす、而も其下に令して曰く、一門の內、自から兵威を極むるは、不祥の極なりと。今爾將士、燕王と對壘するも、務め

て此意を體して、朕をして叔父を殺すの名あらしむるなかれと。（蕭繹は梁の孝元皇帝なり。今梁書を按ずるに、此事を裁せず。蓋し元帝兵を擧げて賊を誅し京に入らんことを圖る。時に河東王譽、帝に從はず、却つて帝の子方等を殺す。帝鮑泉を遣りて之を討たしめ、又王僧辯をして代つて將たらしむ。帝は高祖武帝の第七子にして、譽は武帝の長子にして文選の撰者たる昭明太子統の第二子なり。一門の語、譽を征するの時に當りて發するか。）建文帝の仁柔の性、宋襄に近きものありといふべし。それ燕王は叔父たりと雖、既に爵を削られて庶人たり、庶人にして兇器を弄し王師に抗す、其罪本より誅戮に當る。然るに是の如きの令を出征の將士に下す。これ適以て軍旅の鋭を殺ぎ、貔貅の膽を小にするに過ぎざるのみ、智なりといふ可からず。燕王と戰ふに及びて、官軍時に或は勝つあるも、此令あるを以て、飛箭長槍、燕王を殪すに至らず。然りと雖、小人の過や刻薄、長者の過や寛厚、帝の過を觀て帝の人となりを知るべし。

八月耿炳文等兵三十萬を率ゐて眞定に至り、徐凱は兵十萬を率ゐて河間に駐まる。炳文は老將にして、太祖創業の功臣なり。かつて張士誠に當りて、長興を守ること十年、大小數十戰、戰つて勝たざる無く、終に士誠をして志を逞しくする能はざらしめしを以て、太祖の功臣を榜列するや、炳文を以て大將軍徐達に附して一等となす。後又北は塞を出でゝ元の遺族を破り、南は雲南を征して蠻を平らげ、或は陝西に、或は蜀に、旗幟の向ふ所、毎に功を成す。特に洪武の末に至つては、元勳宿將多く凋落せるを以て、炳文は朝廷の重んずるところたり。今大兵を率ゐて北伐す、時に年六十五。樹老いて材愈堅く、將老いて軍益〻固し。然れども不幸にして先鋒楊松、燕王の爲に不意を襲はれて雄縣に死し、潘忠至り援はん

として月漾橋の伏兵に執へられ、部將張保蔵に降りて其の利用するところとなり、遂に滹沱河の北岸に於て、燕王及び張玉、朱能、譚淵、馬雲等の爲に大に敗れて、李堅、甯忠、顧成、劉燧を失ふに至れり。たゞ炳文の陣に熟せる、大敗して而も潰えず、眞定城に入りて門を閉ぢて堅く守る。燕兵勝に乘じて城を圍む三日、下す能はず。燕王も炳文が老將にして破り易からざるを知り、圍を解いて還る。

炳文の一敗は猶復すべし、帝炳文の敗を聞きて怒りて用ゐず、黄子澄の言によりて、李景隆を大將軍とし、斧鉞を賜はって、炳文に代らしめたまふに至つて、大事ほとんど去りぬ。景隆は紈袴の子弟、趙括の流なればなり。趙括を擧げて廉頗に代ふ。建文帝の位を保つ能はざる、兵戰上には實に此に本づく。炳文の子璿は、帝の父懿文太子の長女江都公主を妻とす。璿父の復用ゐられざるを憤ると甚しかりしといふ。又璿の弟瓛、遼東の鎭守呉高、都指揮使楊文と與に兵を率ゐて永平を圍み、東より北平を動かさんとしたりといふ。二子の護國の意の誠なるも知るべし。それ勝敗は兵家の常なり、蘇東坡が所謂善く奕する者も日に勝つて日に敗るゝものなり。然るに一敗の故を以て、老將を退け、驕兒を擧ぐ。燕王手を拍つて笑つて、李九江は膏粱の竪子のみ、未だ嘗て兵に習ひ陣を見ず、輙ち予ふるに五十萬の衆を以てす、是自から之を坑にする也、と云へるもの、酷語といへども當らずんばあらず。炳文を召して回らしめたる、まことに歎ずべし。

景隆小字は九江、勳業あるにあらずして大將軍となれる者は何ぞや。黄子澄、齊泰の薦むるに因るも、又別に所以有るなり。景隆は李文忠の子にして、文忠は太祖の姉の子にして且つ太祖の子となりしものなり。之に加ふるに文忠は器量沈厚、學を好み經を治め、其の家居するや恂々として儒者の如く、而も

甲を擐き馬に騎り、槊を横たへて陣に臨むや、踔厲風發、大敵に遇ひて益壯に、年十九より軍に從ひて數〻偉功を立て、創業の元勳として太祖の愛重するところとなれるのみならず、西安に水道を設けては人を利し、應天に田租を減じては民を恵み、誅戮を少くすることを勸め、宦官を盛にすることを諫め、洪武十五年、太祖日本懷良王の書に激して之を討たんとせるを止め、(懷良王、明史に良懷に作るは蓋し誤也。懷良王は後醍醐帝の皇子、延元三年、征西大將軍に任じ、筑紫を鎭撫す。菊池武光等之に從ひ、興國より正平に及び、勢威大に張る。明の太祖の、邊海每に和冦に擾さるゝを怒りて、洪武十四年、日本を征せんとするを以て威嚇するや、王答ふるに書を以てす。其略に曰く、乾坤は浩蕩たり、一主の獨權にあらず、宇宙は寬洪なり、諸邦を作して以て分守す、蓋し天下は天下の天下にして、一人の天下にあらざる也。吾聞く、天朝戰を興すの策ありと、小邦亦敵を禦ぐの圖あり、豈肯て途に跪いて之を奉ぜんや、之に順ふも未だ其生を必せず、之に逆ふも未だ其死を必せず、相逢ふ賀蘭山前、聊以て博戯せん、吾何をか懼れんやと。太祖書を得て慍ること甚しく、眞に兵を加へんとするの意を起したるなり。洪武十四年は我が南朝弘和元年に當る、時に王既に今川了俊の爲に壓迫せられて衰勢に陷り、征西將軍の職を後村上帝の皇子良成王に讓り、筑後矢部に閑居し、讀經禮佛を事として、兵政の務を執りたまはず、年代齟齬するに似たり。然れども王と明との交渉は夙に正平の末より起りしことなれば、王の裁斷を以て答書ありしならん。此事我が國に史料全く缺け、大日本史も亦載せずと雖、彼の史にして彼の威を損ずるの事を記す、決して無根の浮譚にあらず。)一個優秀の風格、多く得可からざるの人なり。洪武十七年、疾を得て死するや、太祖親しく文を爲りて祭を致し、岐陽王に追封し、武靖と謚し、太廟に配享したり。

景隆は是の如き人の長子にして、其父の蓋世の武勳と、帝室の親眷との關係よりして、齊黃の薦むるところ、建文の任ずるところとなりて、五十萬の大軍を統ぶるには至りしなり。景隆は長身にして眉目疎秀、雍容都雅、顧盼偉然、卒爾に之を望めば大人物の如くなりしかば、歷出でゝ軍を湖廣陝西河南に練り、左軍都督府事となりたるほかには、爲すところも無く、其功としては周王を執へしのみに過ぎざれど、帝をはじめ大臣等これを大器としたりしならん。然れども虎皮にして羊質、所謂治世の好將軍にして、戰場の眞豪傑にあらず、血を蹀み劍を揮ひて進み、創を裹み齒を切つて鬪ふが如き經驗は、未だ曾て積まざりしなれば、燕王の笑つて評せしもの、實に其眞を得たりしなり。

李景隆は大兵を率ゐて燕王を伐たんと北上す。帝は猶北方憂ふるに足らずとして、意を文治に專らにし、儒臣方孝孺等と周官の法度を討論して日を送る。此間に於て監察御史韓郁（韓郁或は康郁に作る。）といふもの、時事を憂ひて疏を上りぬ。其の意、黃子澄齊泰を非として、殘酷の豎儒となし、諸王は太祖の遺體なり、孝康の手足なりとなし、之を待つこと厚からずして、周王湘王代王齊王をして不幸ならしめたるは、朝廷の爲に計る者の過にして、是則ち朝廷激して之を變ぜしめたるなりとなし、諺に曰く、親者之を割けども斷たず、疎者之を續けども堅からずと。是殊に理有る也となし、燕の兵を擧ぐるに及びて、財を糜し兵を損して而して功無きものは、國に謀臣無きに近しとなし、願はくは齊王を釋し、湘王を封し、周王を京師に還し、諸王世子をして書を持し燕に勸め、干戈を罷め、親戚を敦うしたまへ、然らずんば臣愚おもへらく十年を待たずして必ず噬臍の悔あらん、といふに在り。其の論、彝倫を敦くし、動亂を鎭めんといふは可なり、齊泰黃子澄を非とするも可なり、ただ時既に去り、勢既に成るの後

に於て、此言あるも、嗚呼亦晩かりしなり。帝遂に用ゐたまはず。

景隆の炳文に代るや、燕王其の五十萬の兵を恐れずして、其の五敗兆を具せるを指摘し、我之を擒にせんのみ、と云ひ、諸將の言を用ゐずして、北平を世子に守らしめ、東に出でゝ遼東の江陰侯吳高を永平より逐ひ、轉じて大寧に至りて之を拔き、寧王を擁して關に入る。景隆は燕王の大寧を攻めたるを聞き、師を帥ゐて北進し、遂に北平を圍みたり。北平の李讓、梁明等、世子を奉じて防守甚だ力むと雖、景隆が軍衆くして、將も亦雄傑なきにあらず、都督瞿能の如き、張掖門に殺入して、大に威勇を奮ひ、城殆ど破る。而も景隆の器の小なる、能の功を成すを喜ばず、大軍の至るを俟ちて倶に進めと令し、機に乘じて突至せず。是に於て守る者は便を得、連夜水を汲みて城壁に濺げば、天寒くして忽ち氷結し、明日に至れば復登ることを得ざるが如きことありき。燕王は豫め景隆を吾が堅城の下に致して之を殲さんことを期せしに、景隆既に彀に入り來りぬ、何ぞ箭を放たざらんや、大寧より還りて會州に至り、五軍を立てゝ、張玉を中軍に、朱能を左軍に、李彬を右軍に、徐忠を前軍に、降將房寬を後軍に、將たらしめ、漸く南下して京軍と相對したり。十一月、京軍の先鋒陳暉、河を渡りて東す。燕王兵を率ゐて至り、河水の渡り難きを見て默禱して曰く、天若し予を助けんには、河水氷結せよと。夜に至つて氷果して合す。燕の師勇躍して進み、暉の軍を敗る。景隆の兵動く。燕王左右軍を放つて夾擊し、遂に連りに其七營を破つて景隆の營に逼る。張玉等も陣を列ねて進むや、城中も亦兵を出して、內外交攻む。景隆支ふる能はずして遁れ、諸軍も亦糧を棄てゝ奔る。燕の諸將是に於て頓首して王の神算及ぶ可からずと賀す。王曰く、偶中のみ、諸君の言へるところは皆萬全の策なりしなりと。前には斷じて後には謙す、

燕王が英雄の心を攬るも巧なりといふべし。

景隆が大軍功無くして、退いて徳州に屯す。黄子澄其敗を奏せざるを以て、十二月に至つて却つて景隆に太子太師を加ふ。燕王は南軍をして苦寒に際して奔命に疲れしめんが爲に、師を出して廣昌を攻めて之を降す。

前に疏を上りて、諸藩を削るを諫めたる高巍は、言用ゐられず、事遂に發して、天下動亂に至りたるを慨き、書を上りて、臣願はくは燕に使して言ふところあらんと請ひ、許されて燕に至り、書を燕王に上りたり。其略に曰く。太祖升遐したまひて、意はざりき大王と朝廷と隙あらんとは。臣おもへらく、干戈を動かすは和解に若かずと。願はくは死を度外に置きて、親しく大王に見えん。昔周公流言を聞きては、即ち位を避けて東に居たまひき。若し大王能く首計の者を斬りたまひ、護衛の兵を解き、子孫を質にし、骨肉猜忌の疑を釋き、殘賊離間の口を塞ぎたまはゞ、周公と隆んなることを比すべきにはあらずや。然るを慮りこゝに及ばせたまはで、甲兵を興し、彊宇を襲ひたまふ。されば事に任ずる者、口に藉くことを得て、殿下文臣を誅することを假りて實は漢の呉王の七國に倡へて鼂錯を誅せんとしゝに效はんと欲したまふと申す。今大王北平に據りて數郡を取りたまふと雖、數月以來にして、尚蕞爾たる一隅の地を出づる能はず、較ぶるに天下を以てすれば、十五にして未だ其一をも有したまはず。大王の將士も、亦疲れずといはんや。それ大王の統べたまふ將士も、大約三十萬には過ぎざらん。大王と天子と、義は則ち君臣たり、親は則ち骨肉たるも、尚離れ間たりたまふ、三十萬の異姓の士、など必ずしも終身困迫して殿下の爲に死し申すべきや。巍が念こゝに至るごとに大王の爲に流涕せずんばあらざる也。願

はくは大王臣が言を信じ、上表謝罪し、甲を按き兵を休めたまはゞ、朝廷も必ず寛宥あり、天人共に悦びて、太祖在天の靈も亦安んじたまはん。倘迷を執りて回らず、小勝を恃み、大義を忘れ、寡を以て衆に抗し、爲す可からざるの悖事を僥倖するを敢てしたまはゞ、臣大王の爲に言すべきところを知らざる也。況んや大喪の期未だ終らざるに、無辜の民驚きを受く、仁を求め國を護るの義と、徑庭あるも亦甚し。大王に朝廷を肅淸するの誠意おはすとも、天下に嫡統を簒奪するの批議無きにあらじ。もし幸にして大王敗れたまはずして功成りたまはゞ、後世の公論、大王を如何の人と謂ひ申すべきや。巍は白髮の書生、蜉蝣の微命、もとより死を畏れず、洪武十七年、太祖高皇帝の御恩を蒙りて、臣が孝行を旌はしたまふを辱くす。巍既に孝子たる、當に忠臣たるべし。孝に死し忠に死するは巍の至願也。巍幸にして天下の爲に死し、太祖在天の靈に見ゆるを得ば、巍も亦以て愧無かるべし。巍至誠至心、直語して諱まず、尊嚴を冒瀆す、死を賜ふも悔無し、願はくは大王今に於て再思したまへ。と憚るところ無く白しける。されども燕王答へたまはねば、巍數次書を上りけるが、皆效無かりけり。

巍の書、人情の純、道理の正しきところより言を立つ。知らず燕王の此に對して如何の感を爲せるを。たゞ燕王既に兵を起し戰を開く。巍の言善しと雖、大河既に決す、一葦の支へ難きが如し。しかも巍の誠を盡し志を致す、其意と其言と、忠孝敦厚の人たるに負かず、數百歲の後、猶讀む者をして憤然として感ずるあらしむ。巍と韓郁とは、建文の時に於て、人情の純、道理の正に據りて、言を爲せる者也。

年は新になりて建文二年となりぬ。燕は洪武三十三年と稱す。燕王は正月の酷寒に乘じて、蔚州を下し、大同を攻む。景隆師を出して之を救はんとすれば、燕王は速に居庸關より入りて北平に還り、景隆の軍、寒苦に惱み、奔命に疲れて、戰はずして自から敗る。二月、韃靼の兵來りて燕を助く。蓋し春暖に至れば景隆の來り戰はんことを慮りて、燕王の請へるなり。春闌にして、南軍勢を生じぬ。四月朔、景隆兵を德州に會す、郭英、吳傑は眞定に進みぬ。帝は魏國公徐輝祖をして、京軍三萬を帥ゐて疾馳して軍に會せしむ。景隆、郭英、吳傑等、軍六十萬を合し、百萬と號して白溝河に次す。南軍の將平安驍勇にして、嘗て燕王に從ひて塞北に戰ひ、王の兵を用ゐるの虛實を識る。先鋒となりて燕に當り、矛を揮ひて前む。瞿能父子も亦踴躍して戰ふ。二將の向ふ所、燕兵披靡す。夜、燕王、張玉を中軍に、朱能を左軍に、陳亨を右軍に、丘福を騎兵に將とし、馬步十餘萬、黎明に畢く河を渡る。南軍の瞿能父子、平安等、房寬の陣を擣いて之を破る。張玉等之を見て懼色あり。王曰く、勝負は常事のみ、日中を過ぎずして必ず諸君の爲に敵を破らんと。即ち精銳數千を麾いて敵の左翼に突入す。王の子高煦、張玉等の軍を率ゐて齊しく進む。兩軍相爭ひ、一進一退す。喊聲天に震ひ、飛矢雨の如し。王の馬、三たび創を被り、三たび之を易ふ。王善く射る、射るところの箭、三箙皆盡く。乃ち劍を提げて、衆に先だちて敵に入り、左右奮擊す。劍鋒折れ缺けて、擊つに堪へざるに至る。瞿能と相遇ふ。幾んど能の爲に及ばる。王急に走りて隄に登り、佯つて鞭を麾いで後繼者を招くが如くして纔に免かれ、而して復衆を率ゐて馳せて入る。平安善く鎗刀を用ゐ、向ふ所敵無し。燕將陳亨、安の爲に斫られ、徐忠亦創を被る。高煦急を見、精騎數千を帥ゐ、前んで王と合せんとす。瞿能また猛襲し、大呼して曰く、燕を滅せんと。

たま〳〵旋風突發して、南軍の大將の大旗を折る。南軍の將卒相視て驚き動く。王これに乘じ、勁騎を以て繞つて其後に出で、突入馳擊し、高煦の騎兵と合し、瞿能父子を亂軍の裏に殺す。平安は朱能と戰つて亦敗る。南將俞通淵、滕聚等皆死す。燕兵勢に乘じて營に逼り火を縱つ。急風火を扇る。是に於て南軍大に潰え、郭英等は西に奔り、景隆は南に奔る。器械輜重、皆燕の獲るところとなり、南兵の横尸百餘里に及ぶ。所在の南師、聞く者皆解體す。此戰、軍を全くして退く者、徐輝祖あるのみ。瞿能、平安等、驍將無きにあらずと雖、景隆凡器にして將材にあらず、燕王父子、天縱の豪雄に加ふるに、張玉、朱能、丘福等の勇烈を以てす。北軍の克ち、南軍の潰ゆる、まことに所以ある也。

山東參政鐵鉉は儒生より身を起し、嘗て疑獄を斷じて太祖の知を受け、鼎石といふ字を賜はりたる者なり。北征の師の出づるや、餉を督して景隆の軍に赴かんとしけるに、景隆の師潰えて、諸州の城堡皆風を望みて燕に下るに會ひ、臨邑に次りたるに、參軍高巍の南歸するに遇ひたり。偕に是文臣なりと雖、今武事の日に當り、目前に官軍の大に敗れて、賊威の熾んに張るを見る、感憤何ぞ極まらん。巍は燕王に書を上りしも效無かりしを歎ずれば、鉉は忠臣の節に死する少きを憤る、慨世の哭、憂國の涙、二人相持して、泫然として泣きしが、乃ち酒を酹みて同に盟ひ、死を以て自から誓ひ、濟南に趨りてこれを守りぬ。景隆は奔りて濟南に依りぬ。燕王は勝に乘じて諸將をして進ましめぬ。燕兵の濟南に至るに及びて、景隆尙十餘萬の兵を有せしが、一戰に復敗られて、單騎走り去りぬ。燕師の勢愈旺んにして城を圍らんとす。鐵鉉、左都督盛庸、右都督陳暉等と、力を盡して捍ぎ、志を堅うして守り、日を經れど屈せず。事聞えて、鉉を山東市政司使と爲し、盛庸を大將軍と爲し、陳暉を副將軍に陞す。景隆は召還さ

れしが、黄子澄、練子寧は、之を誅せずんば、何を以て宗社に謝し將士を勵まさんと云ひしも、帝卒に問ひたまはず。燕王は濟南を圍むこと三月に至り、遂に下すこと能はず。乃ち城外の諸溪の水を堰きて灌ぎ、一城の士を魚とせんとす。城中是に於て大に安んぜず。鉉曰く、懼るゝ勿れ、吾に計ありと。千人を遣りて詐りて降らしめ、燕王を迎へて城に入らしめ、豫て壯士を城上に伏せて、王の入るを俟ひて大鐵板を墜して之を撃ち、又別に伏を設けて橋を斷たしめんとす。燕王計に陷り、馬に乘じ蓋を張り、橋を渡り城に入る。大鐵板驟かに下る。ただ少しく早きに失して、王の馬首を傷つく。王驚きて馬を易へて馳せて出づ。橋を斷たんとす。橋甚だ堅し。未だ斷つに及ばずして王竟に逸し去る。燕王幾んど死して幸に逃る、天助あるものゝ如し。王大に怒り、巨礮を以て城を撃たしむ。城壁破れんとす。鉉愈屈せず、太祖高皇帝の神牌を書して城上に懸けしむ。燕王敢て撃たしむる能はず。鉉又數〻不意に出でゝ壯士をして燕兵を脅かさしむ。燕王憤ること甚しけれども、計の出づるところ無し。道衍書を馳せて曰く、師老いたり、請ふ暫らく北平に還りて後擧を圖りたまへと。王圍を撤して還る。鉉と盛庸等と、勢に乘じて之を追ひ、遂に德州を回復し、官軍大に振ふ。鉉是に於て擢でられて兵部尙書となり、盛庸は歷城侯となりたり。

盛庸は初耿炳文に從ひ、次で李景隆に從ひしが、洪武中より武官たりしを以て、兵馬の事に習ふ。濟南の防禦、德州の回復に、其の材を認められて、平燕將軍となり、陳暉、平安、馬溥、徐眞等の上に立ち、吳傑、徐凱等と與に燕を伐つの任に當りぬ。庸乃ち吳傑、平安をして西の方定州を守らしめ、徐凱をして東の方滄州に屯せしめ、自から德州に駐まり、犄角の勢を爲して漸く燕を蹙めんとす。燕王、

徳州の城の、修築已に完く、防備も亦嚴にして破り難く、滄州の城の潰え圮るゝこと久しくして破り易きを思ひ、之を下して庸の勢を殺がんと欲す。乃ち陽に遼東を征するを令して、徐凱をして備へざらしめ、天津より直沽に至り、俄に河に沿ひて南下するを令す。軍士猶知らず、其の東を征せんとして而して南するを疑ふ。王嚴命して疾行すること三百里、途に偵騎に遇へば、盡く之を殺し、一晝夜にして曉に比びて滄州に至る。凱の燕師の到れるを覺りし時には、北卒四面より急攻す。滄州の衆皆驚きて防ぐ能はず。張玉の肉薄して登るに及び、城遂に拔かれ、凱と程暹、兪琪、趙滸等、皆獲らる。これ實に此年十月なり。

十二月、燕王河に循ひて南す。盛庸兵を出して後を襲ひしが及ばざりき。王遂に臨淸に至り、館陶に屯し、次で大名府を掠め、轉じて汶上に至り、濟寧を掠めぬ。盛庸と鐵鉉とは兵を率ゐて其後を躡み、東昌に營したり。此時北軍却つて南に在り、南軍却つて北に在り、北軍南軍相戰はざるを得ざるの勢成りて、東昌の激戰は遂に開かれぬ。初は官軍の先鋒孫霖、燕將朱榮、劉江の爲に敗れて走りしが、兩軍持重して、主力動かざること十日を越ゆ。燕師いよ／＼東昌に至るに及んで、盛庸、鐵鉉、牛を宰して將士を犒らひ、義を唱へ衆を勵まし、東昌の府城を背にして陣し、密に火器毒弩を列ねて、肅として敵を待つたり。燕兵もと勇にして毎戰毎勝す。庸の軍を見るや鼓譟して薄る。火器電の如くに發し、毒弩雨の如くに注げば、虎狼鴟梟、皆傷ついて倒る。又平安の兵の至るに會ふ。庸是に於て兵を麾いて大に戰ふ、燕王精騎を率ゐて左翼を衝く。左翼動かずして入る能はず。轉じて中堅を衝く。庸陣を開いて王の入るに縱せ、急に閉ぢて厚く之を圍む。燕王衝撃甚だ力むれども出づることを得ず、殆んど其の

獲るところとならんとす。朱能、周長等、王の急を見。韃靼騎兵を縦つて庸の軍の東北角を撃つ。庸之を禦がしめ、圍やゝ緩む。能衝いて入つて死戰して王を翼けて出づ。張玉も亦王を救はんとし、王の已に出でたるを知らず、庸の陣に突入し、縦横奮撃し、遂に惡鬪して死す。官軍勝に乘じ、斬獲萬餘人、燕軍大に敗れて奔る。庸兵を縦つて之を追ひ、殺傷甚だ多し。此役や、燕王數ゝ危し、諸將帝の詔を奉ずるを以て、刃を加へず、燕王も亦之を知る。王騎射尤も精し、追ふ者王を斬るを敢てせずして、王の射て殺すところとなる多し。適ゝ高煦、華聚等を率ゐて至り、追兵を撃退して去る。

燕王張玉の死を聞きて痛哭し、諸將と語るごとに、東昌の事に及べば、曰く、張玉を失ふより、吾今に至つて寢食安からずと。涕下りて已まず、諸將も皆泣く。後功臣を賞するに及びて、張玉を第一とし、河間王を追封す。

初燕王の師の出づるや、道衍曰く、師は行いて必ず克たん、たゞ兩日を費すのみと。東昌より還るに及びて、王多く精鋭を失ひ、張玉を亡ふを以て、意稍休まんことを欲す。道衍曰く、兩日は昌也。東昌の事了る、此より全勝ならんのみと。益ゝ士を募り勢を鼓す。建文三年二月、燕王自から文を撰し、流涕して陣亡の將士張玉等を祭り、服するところの袍を脱して之を焚き、以て亡者に衣するの意をあらはし、曰く、其一絲と雖や、以て余が心を識れと。將士の父兄子弟之を見て、皆感泣して、王の爲に死せんと欲す。

燕王遂に復師を帥ゐて出づ。諸將士を諭して曰く、戰の道、死を懼るゝ者は必ず死し、生を捐つる者は必ず生く、爾等努力せよと。三月、盛庸と夾河に遇ふ。燕將譚淵、董中峰等、南將莊得と戰つて死し南軍亦莊得、楚知、張皂旗等を失ふ。日暮れ、各兵を斂めて營に入る。燕王十餘騎を以て庸の營に逼つて野宿す。天明く。四面皆敵なり。王從容として去る。庸の諸將相顧みて愕き眙るも、天子の詔、朕をして叔父を殺すの名を負はしむる勿れの語あるを以て、矢を發つを敢てせず。此日復戰ふ。辰より未に至つて、兩軍互に勝ち互に負く。忽にして東北風大に起り、砂礫面を擊つ。南軍は風に逆ひ、北軍は風に乘ず。燕軍吶喊鉦鼓の聲地に振ひ、庸の軍當る能はずして大に敗れ走る。燕王戰能んで營に還るに、塵土滿面、諸將も識る能はず、語聲を聞いて王なるを覺りしといふ。王の黃埃天に漲るの中に在つて馳驅奔突して叱咤號令せしの狀、察す可きなり。

吳傑、平安は、盛庸の軍を援けんとして、眞定より兵を率ゐて出でしが、及ばざること八十里にして庸の敗れしことを聞きて還りぬ。燕王、眞定の攻め難きを以て、燕軍は回出して糧を取り、營中備無しと言はしめ、傑等を誘ふ。傑等之を信じて、遂に滹沱河に出づ。王河を渡り流に沿ひて行くこと二十里、傑の軍と藁城に遇ふ。實に閏三月己亥なり。翌日大に戰ふ。燕將薛祿、奮鬪甚だ力む。王驍騎を率ゐて、傑の軍に突入し、大呼猛擊す。南軍箭を飛ばす雨の如く、王の建つるところの旗、集矢蝟毛の如く、燕軍多く傷つく。而も王猶屈せず、衝擊愈急なり。會また暴飈起り、樹を拔き屋を發す。燕軍之に乘じ、傑等大に潰ゆ。燕追ひて眞定城下に至り、驍將鄧戩、陳鵬等を擒にし、斬首六萬餘級、盡く軍資器械を得たり。王其の旗を北平に送り、世子に諭して曰く、善く之を藏し、後世をして忘る勿らしめよと。旗

世子の許に至る。時に降將顧成、坐に在りて之を見る。成は操舟を業とする者より出づ。魁岸勇偉、膂力絶倫、滿身の花文、人を聳かして自から異にす。太祖に從つて、出入離れず。嘗て太祖に隨つて出でし時、巨舟沙に膠して動かず、成卽便舟を負ひて行きしことあり。鎭江の戰に、執へられて縛せらるゝや、勇躍して縛を斷ち、刀を持てる者を殺して脫歸し、直に衆を導いて城を陷しゝことあり。勇力察す可し。後戰功を以つて累進して將となり、蜀を征し、雲南を征し、諸蠻を平らげ、雄名世に布く。建文元年耿炳文に從ひて燕と戰ふ。炳文敗れて、成執へらる。燕王自から其縛を解いて曰く、皇考の靈、汝を以て我に授くるなりと。因つて兵を擧ぐるの故を語る。成感激して心を歸し、遂に世子を輔けて北平を守る。然れども多く謀畫を致すのみにして、終に兵に將として戰ふを肯んぜず、兵器を賜ふも亦受けず。蓋し中年以後、書を讀んで得るあるに因る。又一種の人なり。後、太子高熾の羣小の爲に苦めらるるや、告げて曰く、殿下は但當に誠を竭して孝敬に、孳々として民を恤みたまふべきのみ、萬事は天に在り、小人は意を措くに足らずと。識見亦高しといふべし。成は是の如き人なり。旗を見るや、愴然として之を壯として涙下りて曰く、臣少きより軍に從ひて今老いたり、戰陣を歷たること多きも、未だ嘗て此の如きを見ざるなりと。水滸傳中の人の如き成をして此言を爲さしむ、燕王も亦惡戰したりといふべし。而して燕王の豪傑の心を攬る所以のもの、實に王の此の勇往邁進、艱危を冒して肯て避けざるの雄風にあらずんばあらざる也。

四月、燕兵大名に次す。王、齊泰と黃子澄との斥けらるゝを聞き、書を上りて、吳傑、盛庸、平安の衆を召還せられんことを乞ひ、然らずんば兵を釋く能はざるを言ふ。帝大理少卿薛嵒を遣りて、燕王

及び諸將士の罪を赦して、本國に歸らしむることを詔し、燕軍を散ぜしめて、而して大軍を以て其後に蹑かしめんとす。嵓到りて却つて燕王の機略威武の服するところとなり、歸つて燕王の語直にして意誠なるを奏し、皇上權奸を誅し、天下の兵を散じたまはゞ、臣單騎闕下に至らん、と云へる燕王の語を奏す。帝方孝孺に語りたまはく、誠に嵓の言の如くならば、齊黃我を誤るなりと。方孺惡みて曰く、嵓の言、燕の爲に游說するなりと。五月、吳傑、平安、兵を發して北平の糧道を斷つ。燕王、指揮武勝を遣りて、朝廷兵を罷むるを許したまひて、而して糧を絕ち北を攻めしめたまふは、前詔と背馳すと奏す。帝、書を得て兵を罷むるの意あり。方孝孺に語りたまはく、燕王は孝康皇帝同產の弟なり、朕の叔父なり、吾他日宗廟神靈に見えざらんやと。孝孺曰く、兵一たび散すれば、急に聚む可からず、彼長驅して闕を犯さば、何を以て之を禦がん、陛下惑ひたまふなかれと。勝を錦衣獄に下す。燕王聞て大に怒る。孝孺の言、眞に然り、而して建文帝の情、亦敦しといふべし。畢竟南北相戰ふ、調停の事、復爲す能はざるの勢に在り、今に於て兵戈の慘を除かんとするも、五色の石、聖手にあらざるよりは、之を錬ること難きなり。

此月燕王指揮李遠をして輕騎六千を率ゐて徐沛に詣り、南軍の資糧を焚かしむ。李遠、丘福、薛祿と策應して、能く功を收め、糧船數萬艘、糧數百萬を焚く、軍資器械、俱に煨燼となり、河水盡く熱きに至る。京師これを聞きて大に震駭す。

七月、平安兵を率ゐて眞定より北平に到り、平村に營す。平村は城を距る五十里のみ。燕王の世子、危きを告ぐ。王劉江を召して策を問ふ。江乃ち兵を率ゐて滹沱を渡り、旗幟を張り、火炬を舉げ、大に

軍容を壯にして安と戰ふ。安の軍敗れ、安還つて眞定に走る。

方孝孺の門人林嘉猷、計をもつて燕王父子をして相疑はしめんとす。計行はれずして已む。

盛庸等、大同の守將房昭に檄し、兵を引いて紫荊關に入り、保定の諸縣を略し、兵を易州の西水寨に駐め、險に據りて持久の計を爲し、北平を窺はしめんとす。燕王これを聞きて、保定失はれんには北平危しとて、遂に令を下して師を班す。八月より九月に至り、燕兵西水寨を攻め、十月眞定の援兵を破り、併せて寨を破る。房昭走りて免る。

十一月、駙馬都尉梅殷をして淮安を鎭守せしむ。殷は太祖の女、寧國公主に尙す。太祖の崩ぜんとするや、其の側に侍して顧命を受けたる者は、實に帝と殷となり。太祖顧みて殷に語りたまはく、汝老成忠信、幼主を託すべしと。誓書および遺詔を出して授けたまひ、敢て天に違ふ者あらば、朕が爲に之を伐て、と言ひ訖りて崩れたまへるなり。燕の勢漸く大なるに及びて、諸將觀望するもの多し、乃ち淮南の民を募り、軍士を合して四十萬と號し、殷に命じて之を統べて、淮上に駐まり、燕師を扼せしむ。燕王これを聞き、殷に書を遺り、香を金陵に進むるを以て辭と爲す。殷答へて曰く、進香は皇考禁あり、遵ふ者は孝たり、遵はざる者は不孝たり、とて使者の耳鼻を割き、峻嚴の語をもて斥く。燕王怒ること甚し。

燕王兵を起してより既に三年、戰勝つと雖、得るところは永平・大寧・保定にして、南軍出沒して已まず、得るもまた棄つるに至ること多く、死傷少からず。燕王こゝに於て太息して曰く、頻年兵を用う、何の時か已む可けん、まさに江に臨みて一決し、復返顧せざらんと。時に京師の內臣等、帝の嚴なるを

怨みて、燕王を戮くに意ある者あり。燕に告ぐるに金陵の空虚を以てし、間に乘じて疾進すべしと勸む。燕王遂に意を決して、十二月に至りて北平を出づ。

四年正月、燕の先鋒李遠、徳州の裨將葛進を滹沱河に破り、朱能もまた平安の將賈榮等を衡水に破りて之を擒にす。燕王乃ち館陶より渡りて、東阿を攻め、汶上を攻め、沛縣を攻めて之を略し、遂に徐州に進み、城兵を威して敢て出でざらしめて南行し、三月宿州に至り、平安が馬步兵四萬を率ゐて追躡せるを淝河に破り、平安の麾下の番將火耳灰を得たり。此戰や火耳灰稍を執つて燕王に逼る、相距るたゞ十步ばかり、童信射つて馬に中つ、馬倒れて王免れ、火耳灰獲らる。王卽便火耳灰を釋し、當夜入つて宿衞せしむ、諸將これを危ぶみて言へども、王聽かず。次いで蕭縣を略し、淮河の守兵を破る。四月平安小河に營し、燕兵河北に據る。總兵何福奮擊して、燕將陳文を斬り、平安勇戰して燕將王眞を圍む。眞身に十餘創を被り、自づから馬上に刎ぬ。安いよ〳〵逼りて、燕王に北坂に遇ふ。安の槊ほとんど王に及ぶ。燕の番騎指揮王騏、馬を躍らせて突入し、王わづかに脫するを得たり。燕將張武惡戰して敵を卻くと雖、燕軍遂に克たず。是に於て南軍は橋南に駐まり、北軍は橋北に駐まり、相持する者數日、南軍糧盡きて、蕪を採つて食ふ。燕王曰く、南軍飢えたり、更に一二日にして糧やゝ集まらば破り易からずと。乃ち兵千餘を留めて橋を守らしめ、潛に軍を移し、夜半に兵を渡らしめて繞つて敵の後に出づ。時に徐輝祖の軍至る。甲戌大に齊眉山に戰ふ。午より酉に至りて、勝負相當り、燕の驍將李斌死す。燕復遂に克つ能はず。南軍は再捷して振ひ、燕は陳文、王眞、韓貴、李斌等を失ひ、諸將皆懼る。燕王に說いて曰く、軍深く入りたり、暑雨連綿として、淮土濕蒸に、疾疫漸く冒さんとす、小河の東は、平野

にして牛羊多く、二麥まさに熟せんとす、河を渡り地を擇み、士馬を休息せしめ、隙を觀て動くべきなりと。燕王曰く、兵の事は進ありて退無し、勝形成りて而して復北に渡らば、將士解體せざらんや、公等の見る所は、拘攣するのみと。乃ち令を下して曰く、北せんとする者は左せよ、北せざらんとする者は右せよと。諸將多く左に趨る。王大に怒つて曰く、公等みづから之を爲せと。此時や燕の軍の勢、實に岌々乎として將に崩れんとするの危に居れり。孤軍長驅して深く敵地に入り、腹背左右、皆我が友たらざる也、北平は遼遠にして、而も本據の四圍亦皆敵たる也、燕の軍戰つて克てば則ち可、克たずんば自づから支ふる無き也、而して當面の敵たる何福は兵多くして力戰し、徐輝祖は堅實にして隙無く、平安は驍勇にして奇を出す、我軍は再戰して再挫し、猛將多く亡びて、衆心疑懼す、戰はんと欲すれば力足らず、歸らんとすれば前功盡く癈りて不振の形勢新に見れんとす。將卒を强ひて戰はしめんとすれば、人心の乖離、不測の變を生ずる無きを保せず。諸將の爭つて左するを見て王の怒るも亦宜なりといふべし。然れども此時の勢、ただ退かざるあるのみ、燕王の衆意を容れずして、敢然として戰はんと欲するもの、機を看る明確、事を斷ずる勇決、實に是豪傑の氣象、鐵石の心腸を見はせるものならずして何ぞや。時に坐に朱能あり。能は張玉と共に初より王の左右の手たり。諸將の中に於て年最も少しと雖、善戰の功、もとより人の敬服するところとなれるもの、身の長八尺、年三十五、雄毅開豁、孝友敦厚の人たり。慨然として席を立ち、劍を按じて右に趨きて曰く、諸君乞ふらくは勉めよ、昔漢高は十たび戰つて九たび敗れぬれど終に天下を有したり、今事を擧げてより連に勝を得たるに、小挫して輙ち歸らば、更に能く北面して人に事へんや、諸君雄豪誠實、豈退心あるべけんや、と云ひければ、諸將相見て敢て

言ふものあらず、全軍の心機一轉して、生死共に王に從はんとぞ決しける。朱能後に龍州に死して、東平王に追封せらるゝに至りしもの、豈偶然ならんや。

燕軍の勢非にして、王の甲を解かざるもの數日なりと雖、將士の心は一にして、兵氣は善變せるに反し、南軍は再捷すと雖、兵氣は惡變せり。天意とや云はん、時運とや云はん。燕軍の再敗せること京師に聞えければ、廷臣の中に、燕今は且に北に還るべし、京師空虛なり、良將無かるべからず、と曰ふ者ありて、朝議徐輝祖を召還したまふ。輝祖已むを得ずして京に歸りければ、何福の軍の勢殺げて、單絲の綫少く、孤掌の鳴り難き狀を現はしぬ。加ふるに南軍は北軍の騎兵の馳突に備ふる爲に、塹濠を掘り、壘壁を作りて營と爲すをば常としければ、軍兵休息の暇少く、往々虛しく人力を耗すの憾ありて、士卒困罷退屈の情あり。燕王の軍は塹壘を爲らず、たゞ隊伍を分布し、陣を列して門と爲す。故に將士は營に至れば、即ち休息するを得。暇あれば王射獵して地勢を周覽し、禽を得れば將士に頒ち、壘を拔くごとに悉く獲るところの財物を賚ふ。南軍と北軍と、軍情おのづから異なるあること是の如し。一は人役に就くを苦み、一は人用を爲すを樂む、彼此の差、勝敗に影響せずんばあらず。

かくて對壘日を累ぬる中、南軍に糧餉大に至るの報あり。燕王悅んで曰く、敵必ず兵を分ちて之を護らん、其の兵分れて勢弱きに乘じなば、如何で能く支へんや、と朱榮・劉江等を遣りて、輕騎を率ゐて、餉道を截らしめ、又游騎をして、樵採を妨げ擾さしむ。何福乃ち營を靈璧に移す。南軍の糧五萬、平安馬步六萬を帥ゐて之を護り、糧を負ふものをして中に居らしむ。燕王壯士萬人を分ちて敵の援兵を遮らしめ、子高煦をして兵を林間に伏せ、敵戰ひて疲れなば出でゝ擊つべしと命じ、躬づから師を率ゐて逆

へ戰ひ、騎兵を兩翼と爲す。平安軍を引いて突至し、燕兵千餘を殺しゝも、王步軍を麾いて縱擊し、其陣を横貫し、斷つて二となしゝかば、南軍遂に亂れたり。何福等此を見て、安と合擊し、燕兵數千を殺して之を却けしが、高煦は南軍の罷れたるを見、林間より突出し、新鋭の勢をもて打擊を加へ、王は兵を還して掩ひ擊ちたり。是に於て南軍大に敗れ、殺傷萬餘人、馬三千餘匹を喪ひ、糧餉盡く燕の師に獲らる。福等は餘衆を率ゐて營に入り、壘門を塞ぎて堅守しけるが、此夜福令を下して、明旦砲聲三たびするを聞かば、圍を突いて出で、糧に淮河に就くべし、と示したり。然るに此も亦天か命か、其翌日燕軍靈璧の營を攻むるに當つて燕兵三たび砲を放つたり。南軍誤つて此を我砲となし、爭つて急に門に趨きしが、元より我が號砲ならざれば、門は塞がりたり、前者は出づることを得ず、後者は急に出でんとす、營中紛擾し、人馬滾轉す。燕兵急に之を擊つて、遂に營を破り、衝擊と包圍と共に其捷を極む。南軍こゝに至つて大敗收む可からず、宗垣、陳性善、彭與明は死し、何福は遁れ走り、陳暉、平安、馬溥、徐眞、孫晟、王貫等、皆執へらる。平安の俘となるや、燕の軍中歡呼して地を動かす。曰く、吾等此より安きを獲んと。爭つて安を殺さんことを請ふ。安が數〻燕兵を破り、驍將を斬る數人なりしを以てなり。燕王其の材勇を惜みて許さず。安に問ひて曰く、淝河の戰、公の馬躓かずんば、何以に我を遇せしぞと。安曰く、殿下を刺すこと、朽を拉ぐが如くならんのみと。王太息して曰く、高皇帝、好く壯士を養ひたまへりと。勇卒を選みて安を北平に送り、世子をして善く之を視せしむ。安後永樂七年に至りて自殺す。安等を喪ひてより、南軍大に衰ふ。黃子澄、靈璧の敗を聞き、胸を撫して大慟して曰く、大事去る、吾輩萬死、國を誤るの罪を贖ふに足らずと。

五月、燕兵泗州に至る。守將周景初降る。燕の師進んで淮に至る。盛庸防ぐ能はず、戰艦皆燕の獲るところとなり、盱眙陷れらる。燕王諸將の策を排して、直に揚州に趨く。揚州の守將王禮と弟宗と、監察御史王彬を縛して門を開いて降る。高郵、通泰、儀眞の諸城、亦皆降り、北軍の艦船江上に往來し、旗鼓天を蔽ふに至る。朝廷大臣、自づから全うするの計を爲して、復立つて爭はんとする者無し。方孝孺、地を割きて燕に與へ、敵の師を緩うして、東南の募兵の至るを俟たんとす。乃ち慶城郡主を遣りて和を議せしむ。郡主は燕王の從姉なり。燕王聽かずして曰く、皇考の分ちたまへる吾地も且つ保つ能はざらんとせり、何ぞ更に地を割くを望まん、たゞ奸臣を得るの後、孝陵に謁せんと。六月、燕師浦子口に至る。盛庸等之を破る。帝都督僉事陳瑄を遣りて舟師を率ゐて庸を援けしむるに、瑄却つて燕に降り、舟を具へて迎ふ。燕王乃ち江神を祭り、師に誓ひて江を渡る。舳艫相銜みて、金鼓大に震ふ。盛庸等海舟に兵を列せるも、皆大に驚き愕く。燕王諸將を麾き、鼓譟して先登す。庸の師潰え、海舟皆其の得るところとなる。鎭江の守將童俊、爲す能はざるを覺りて燕に降る。帝、江上の海舟も敵の用を爲し、鎭江等諸城皆降るを聞きて、憂懣して計を方孝孺に問ふ。孝孺民を驅りて城に入れ、諸王をして門を守らしむ。李景隆等燕王に見えて割地の事を說くも、王應ぜず。勢いよ／＼逼る。群臣或は帝に勸むるに浙に幸するを以てするあり、或は湖湘に幸するに若かずとするあり。方孝孺堅く京を守りて勤王の師の來り援くるを待ち、事若し急ならば、車駕蜀に幸して、後擧を爲さんことを請ふ。時に齊泰は廣德に奔り、黃子澄は蘇州に奔り、徵兵を促す。蓋し二人皆實務の才にあらず、兵を得る無し。子澄は海に航して兵を外洋に徵さんとして果さず。燕將劉保、華聚等、終に朝陽門に至り、備無きを覘ひて還りて報ず。燕

王大に喜び、兵を整へて進む。金川門に至る。谷王橞と李景隆と、金川門を守る。燕兵至るに及んで、遂に門を開いて降る。魏國公徐輝祖屈せず、師を率ゐて迎へ戰ふ、克つ能はず。朝廷文武皆倶に降つて燕王を迎ふ。

史を按して兵馬の事を記す、筆墨も亦倦みたり。燕王事を擧げてより四年、遂に其志を得たり、天意か、人望か、數か、勢か、將又理の應に然るべきものあるか。鄒公瑾等十八人、殿前に於て李景隆を毆つて幾ど死せしむるに至りしも、亦益無きのみ。帝、金川門の守を失ひしを知りて、天を仰いで長吁し、東西に走り迷ひて、自殺せんとしたまふ。明史、恭閔惠皇帝紀に記す、宮中火起り、帝終る所を知らずと。皇后馬氏は火に赴いて死したまふ。丙寅、諸王及び文武の臣、燕王に位に卽かんことを請ふ。燕王辭すること再三、諸王羣臣、頓首して固く請ふ。王遂に奉天殿に詣りて、皇帝の位に卽く。是より先建文中、道士ありて、途に歌つて曰く、

燕を逐ふ莫れ、
燕を逐ふ莫れ、
燕を逐へば、日に高く飛び、
高く飛びて、帝畿に上らん。

是に至りて人其言の應を知りぬ。燕王今は帝たり、宮人内侍を詰りて、建文帝の所在を問ひたまふに、皆馬皇后の死したまへるところを指して應ふ。乃ち屍を煨燼中より出して、之を哭し、翰林侍讀王景を召して、葬禮まさに何如すべきと問ひたまふ。景對へて曰く、天子の禮を以てしたまふべしと。之に從

ん。

建文帝の皇考興宗孝康皇帝の廟號を去り、舊の謚に仍りて、懿文皇太子と號し、建文帝の弟呉王允熥を降して廣澤王とし、衞王允熞を懷恩王となし、徐王允熙を敷惠王となし、尋で復庶人と爲ししが、諸王後皆其死を得ず。建文帝の少子は中都廣安宮に幽せられしが、後終るところを知らず。

魏國公徐輝祖、獄に下さるれども屈せず。諸武臣皆歸附すれども、輝祖始終帝を戴くの意無し。帝大に怒れども、元勳國舅たるを以て誅する能はず、爵を削つて之を私第に幽するのみ。輝祖は開國の大功臣たる中山王徐達の子にして、雄毅誠實、父達の風骨あり。齊眉山の戰、大に燕兵を破り、前後數戰、毎に良將の名を辱めず。其姊は即ち燕王の妃にして、其弟增壽は京師に在りて常に燕の爲に國情を輸せるも、輝祖獨り毅然として正しきに據る。端嚴の性格、敬虔の行爲、良將とのみ云はんや、有道の君子といふべきなり。

兵部尙書鐵鉉、執へられて京に至る。廷中に背立して、帝に對はず、正言して屈せず、遂に寸磔せらる。死に至りて猶罵るを以て、大鑊に油熬せらるゝに至る。參軍斷事高巍、かつて曰く、忠に死し孝に死するは、臣の願なりと。京城破れて、驛舍に縊死す。禮部尙書陳廸、刑部尙書暴昭、禮部侍郞黃觀、蘇州知府姚善、翰林修譔王叔英、翰林王艮、浙江按察使王良、兵部郞中譚冀、御史曾鳳韶、谷府長史劉璟、其他數十百人、或は屈せずして殺され、或は自死して義を全くす。齊泰、黃子澄、皆執へられ、屈せずして死す。右副都御史練子寧、縛されて闕に至る。語不遜なり。帝大に怒つて、命じて其舌を斷らしめ、曰く、吾周公の成王を輔くるに倣はんと欲するのみと。子寧手をもて舌血を探り、地上に、成王

安在の四字を大書す。帝益怒りて之を磔殺し、宗族棄市せらるゝ者、一百五十一人なり。左僉都御史景清、詭りて歸附し、恒に利劒を衣中に伏せて、帝に報ひんとす。八月望日、清緋衣して入る。是より先に靈臺奏す、文曲星帝座を犯す急にして色赤しと。是に於て清の獨り緋を衣るを見て之を疑ふ。朝畢る。清奮躍して駕を犯さんとす。帝左右に命じて之を收めしむ。劒を得たり。清志の遂ぐべからざるを知り、植立して大に罵る。衆其齒を抉す。且抉せられて且罵り、血を含んで直に御袍に噀く。乃ち命じて其皮を剝ぎ、長安門に繫ぎ、骨肉を碎磔す。清帝の夢に入つて劒を執つて追ひて御座を繞る。帝覺めて、清の族を赤し郷を籍す、村里も墟となるに至る。

戶部卓敬執へらる。帝曰く、爾前日諸王を裁抑す、今復我に臣たらざらんかと。敬曰く、先帝若し敬が言に依りたまはゞ、殿下豈此に至るを得たまはんやと。帝怒りて之を殺さんと欲す、而も其才を憐みて獄に繫ぎ、諷するに管仲・魏徵の事を以てす。帝の意、敬を用ゐんとする也。敬たゞ涕泣して可かず。帝猶殺すに忍びず。道衍白す、虎を養ふは患を遺すのみと。帝の意遂に決す。敬刑せらるゝに臨みて、從容として嘆じて曰く、變宗親に起り、略經畫無し、敬死して餘罪ありと。神色自若たり。死して經宿して、面猶生けるが如し。三族を誅し、其家を沒するに、家たゞ圖書數卷のみ。卓敬と道衍と、故より隙ありしと雖、帝をして方孝孺を殺さゞらしめんとしたりし道衍にして、帝をして敬を殺さしめんとす。敬の實用の才ありて浮文の人にあらざるを看るべし。建文の初に當りて、燕を憂ふるの諸臣、各意見を立て奏疏を上る。中に就て敬の言最も實に切なり、敬の言にして用ゐらるれば、燕王蓋し志を得ざるのみ。萬曆に至りて、御史屠叔方奏して敬の墓を表し祠を立つ。敬の著すところ、卓氏遺書五十卷、

予未だ目を寓せずと雖、管仲魏徵の事を以て諷せられしの人、其の書必ず觀る可きあらん。

卓敬を容るゝ能はざりしも、方孝孺を殺す勿れと云ひし道衍は如何の人ぞや。眇たる一山僧の身を以て、燕王を勸めて簒奪を敢てせしめ、定策決機、皆みづから當り、臣天命を知る、何ぞ民意を問はんといふの豪懷を以て、天下を鼓動し簸盪し、億兆を鳥飛し獸奔せしめて憚らず。功成つて少師と呼ばれて名いはれざるに及んで、而も蓄髮を命ぜらるれども肯んせず。邸第を賜ひ、宮人を賜はれども、辭して皆受けず、冠帶して朝すれども、退けば即ち緇衣、香烟茶味、淡然として生を終り、榮國公を贈られ、葬を賜はり、天子をして親づから神道碑を製するに至らしむ。又一箇の異人といふべし。魔王の如く、道人の如く、策士の如く、詩客の如く、實に袁洪の所謂異僧なり。其の詠ずるところの雜詩の一に曰く、

志士は　苦節を守る、
達人は　玄言に滯らんや。
苦節は　貞（かた）くす可からず、
玄言　豈其れ然らんや。
出ると處ると　固より定有あり、
語るも默するも　緣無きにあらず。
伯夷　量何ぞ隘きや、
宣尼　智何ぞ圓なる。
所以に　古の君子、

命に安んずるを、乃ち賢と爲す。

苦節は貞くす可からずの一句、易の爻辭の節の上六に、苦節、貞くすれば凶なり、とあるに本づくと雖、口氣おのづから是道衍の一家言なり。況んや易の貞凶の貞は、貞固の貞にあらずして、貞卦の貞とするの說無きにあらざるをや。伯夷量何ぞ隘きといふに至つては、古賢の言に據ると雖、聖の淸なる者に對して、忌憚無きも亦甚しといふべし。其の擬古の詩の一に曰く、

良辰　遇ひ難きを念ひて、
筵を開き　綺戸に當る。
會す我が　同門の友、
言笑　一に何ぞ膴なる。
素絃　淸商を發し、
餘響　樽俎を繞る。
緩舞　吳姬出で、
輕謳　越女來る。
但欲ふ　客の拚醉せんことを、
觥籌　何ぞ肯て數へむ。
流年　猋馳を嘆く、
力有るも　誰か得て阻めむ。

人生　須らく歡樂すべし、
長に辛苦せしむる勿れ。

擬古の詩、もとより直に抒情の作とす可からずと雖、此是緇を披て香を焚く佛門の人の吟ならんや。其の北固山を經て賦せる懷古の詩といふもの、今存するの詩集に見えずと雖、僧宗泐一讀して、此豈釋子の語ならんやと曰ひしといふ。北固山は宋の韓世忠兵を伏せて、大に元の兀朮を破るの處たり。其詩また想ふ可き也。劉文貞公の墓を詠ずるの詩は、直に自己の胸臆を攄ぶ。文貞は即ち秉忠にして、袁洪の評せしが如く、道衍の燕に於けるは、秉忠の元に於けるが如く、其の初の僧たる、其の世に立つて功を成せる、皆相肖たり。蓋し道衍の秉忠に於けるは、岳飛が關張と比しからんとし、諸葛亮が管樂に擬したるが如く、思慕して而して倣模せるところありしなるべし。詩に曰く、

良驥　色　羣に同じく、
至人　迹　俗に混ず。
知己　苟も遇はざれば、
終世　怨み讟まず。
偉なる哉　藏春公や、
簞瓢　巖谷に樂む。
一朝　風雲の會あり、
君臣　おのづから心腹なり。

大業　計已に成りて、
勳名　簡牘に照る。
身退いて　即ち長往し、
川流れて　去つて復ること無し。
佳城　百年の後、
鬱々たり　盧溝の北。
松楸　烟靄青く、
翁仲　蘼蕪緑なり。
强梁も　敢て犯さず、
何人か　敢て樵牧せん。
王侯の　墓累々たるも、
癈すること　草宿をも待たず。
惟公　民望に在り、
天地と　傾覆を同じうす。
斯人　作す可からず、
再拜して　還一哭す。

藏春は秉忠の號なり。盧溝は燕の城南に在り。此詩劉文貞に傾倒すること甚だ明らかに、其の高風大

業を擧げ、而して再拜一哭すといふに至る。性情行經相近し、徘徊感慨、まことに止む能はざるものありしならん。又別に、春日劉太保の墓に謁するの七律あり。まことに思慕の切なるを證すといふべし。

東游せんとして郷中諸友に別るゝの長詩に、

我生　四方の志あり、
樂まず　郷井の中を。
茫乎たる　宇宙の內、
瓢轉して　秋蓬の如し。
孰か云ふ　挾む所無しと、
耿々たるもの　吾胸に存す。
魚の淵(いけ)に止まるを爲すに忍びんや、
禽の籠に囚はるゝを作すを肯ぜんや。
三たび登ると　九たび到ると、
古德と與に同じうせんと欲す。
去年は　淮楚に客たりき、
今は往かんとす　浙水の東。
身を竦てゝ　雲衢(くものちまた)に入る、
一錫(ひとつのつゑ)　游龍(うごけるりう)の如し。

　笠は衝く　霏々の霧、
　衣は拂ふ　颸々の風。
の句あり。身を竦てゝの句、颯爽悦ぶ可し。其末に、
　江天　正に秋清く、
　山水　亦容を改む。
　沙鳥は　烟際に白く、
　岫葉は　霜前に紅なり。
といへる如き、常套の語なれども、また愛す可し。古徳と同じうせんと欲するは、是假にして、淮楚浙東に往來せるも、修行の爲なりしや游覧の爲なりしや知る可からず。然れども詩情も亦饒き人たりしは疑ふ可からず。詩に於ては陶淵明を推し、笠澤の舟中に陶詩を讀むの作あり、中に淵明を學べる者を評して、
　應物は　趣　頗合し、
　子瞻は　才　當るに足る。
と韋、蘇の二子を擧げ、其他の模倣者を、
　里婦　西が顰に效ふ、
　唉ふ可し　醜愈々張る。
と冷笑し、又公暇に王維、孟浩然、韋應物、柳子厚の詩を讀みて、四子を賛する詩を爲せる如き、其の

好む所の主とするところありて泛濫ならざるを示せり。當時の詩人に於ては、高啓を重んじ、交情また親しきものありしは、奉レ答ニ高季迪一、寄ニ高編脩一、賀ニ高啓生一レ子、訪ニ高啓鍾山寓舍一辱ニ詩見一レ貽、雪夜讀ニ高啓詩一等の詩に徴して知るべく、此老の詩眼暗からざるを見る。逃虛集十卷、續集一卷、詩精妙といふにあらずと雖、時に逸氣あり。今其集に就て交友を考ふるに、袁珙と張天師とは、最も親熟するところなるが如く、贈遺の什甚だ少からず。珙と道衍とは本より互に知己たり。道衍又嘗て道士席應眞を師として陰陽術數の學を受く、因つて道家の旨を知り、仙趣の微に通ず。詩集卷七に、挽ニ席道士一とあるもの、疑ふらくは應眞、若くは應眞の族を悼めるならむ。張天師は道家の棟梁たり、道衍の張を重んぜるも怪むに足る無きなり。故友に於ては最も王達善を親む。故に其の寄ニ王助教達善一の長詩の前半、自己の感慨行藏を叙して忌まず、道衍自傳として看る可し。詩に曰く、

乾坤　果して何物ぞ、
開闔　古より有り。
世を擧つて　孰か客に非ざらん、
離會　豈偶と云はんや。
嗟予　蓬蒿の人、
鄙猥　林籔に匿(かく)る。
自づから慚づ　駑蹇(とけん)の姿、
寧ぞ牛馬を學んで走らん。

臭山　窈(ふか)くして而して深し、
性を養ひて　老朽を甘んず。
且　木石と共に居りて、
氷檗(ひょうばく)と　志　堅く守りぬ。
人は云ふ　鳳　枳に栖むと、
豈同じからんや　魚の罥に在るに。
藜藿(れいかく)　我膓を充し、
衣敝れて　兩肘露る。
夔龍(きりう)　高位に在り、
誰か來りて　可否を問はん。
盤旋す　草莽の間に、
樵牧　日に相叩く。
嘯詠　寒山に擬し、
惟　道を以て自負す。
忍びざりき　强ひて塗抹して、
乞媚びて　里婦(さとのをんな)に效ふに。
山靈　濯(たく)すことを容さず、

辟歷　岡阜を破りぬ。
門を出でゝ　天日を睹る、
行也　焉ぞ　肯て苟もせん。
一舉して　即ち北に上れば、
親藩　待つこと惟久しかりき。
天地　忽ち　大變して、
神龍　氷湫より起る。
萬方　共に忻び躍りて、
率土　元后を戴く。
吾を召して　南京に來らしめ、
爵賞　恩厚を加ふ。
常時　天眷を荷ふ、
愛に因つて　醜を知らず。　（下略）

嘯詠寒山に擬すの句は、此老の行爲に照らせば、矯飾の言に近きを覺ゆれども、若夫れ知己に遇はずんば、强項の人、或は吳山に老朽を甘んじて、一生世外の衲子たりしも、また知るべからず、未だ遽に盧高の辭を爲すものと斷ず可からず、たゞ道術の性の豪雄なる、嘯詠吟哦、或は獅子の繡毬を弄して日を消するが如くに、其身を終ることは之有るべし、寒山子の如くに、蕭散閑曠、塵表に逍遙して、其身

を遺るゝを得可きや否や、疑ふ可き也。神龍氷湫より起るの句は、燕王崛起の事をいふ。道ひ得て佳なり。爰に因つて醜を知らずの句は、知己の恩に感じて吾身を世に徇ふるを言へるもの、亦善く標置すといふべし。

道衍の一生を考ふるに、其の燕を幇けて簒を成さしめし所以のもの、榮名厚利の爲にあらざるが如し。而も名利の爲にせずんば、何を苦んでか、紅血を民人に流さしめて、白帽を藩王に戴かしめしぞ。道衍と建文帝と、深仇宿怨あるにあらず、道衍と燕王と、大恩至交あるにもあらず、實に解す可からざるある也。道衍己の偉功によつて以て佛道の爲にすと云はんか、佛道明朝の爲に壓逼せらるゝありしに非る也。燕王覬覦の情無き能はざりしと雖、道衍の扇を鼓して火を煽るにあらざれば、燕王未だ必ずしも毒烟猛燄を揚げざるなり。道衍抑又何の求むるあつて、燕王をして決然として立たしめしや。王の事を擧ぐるの時、道衍の年既に六十四五、呂侚、苑增、皆老いて而して後立つと雖、圓頂黑衣の人を以て、諸行無常の敎を奉じ、而して落日暮雲の時に際し、逆天非理の兵を起さしむ。嗚呼又解すべからずといふべし。若强いて道衍の爲に解さば、惟是道衍が天に禀くるの氣と、自づから負む(たの)の材と、莽々、蕩々、糾々、昂々として、屈す可からず、撓む可からず、消す可からず、抑ふ可からざる者、燕王に遇ふに當つて、砉然として破裂し、爆然として迸發せるものといふべき耶、非耶。予其の逃虚子集を讀むに、道衍が英雄豪傑の蹟に感慨するもの多くして、佛燈梵鐘の裏に幽潜するもの少きを思はずんばあらざるなり。

道衍の人となりの古怪なる、實に一沙門を以て目す可からずと雖、而も文を好み道の爲にするの情も、亦僞なりとなす可からず。此故に太祖實錄を重修するや、衍實に其監修を爲し、又支那ありてより以來の大編纂たる永樂大典の成れるも、衍實に解縉等と與に之を爲せるにて、是皆文を好むの餘に出で、道餘錄を著はし、淨土簡要錄を著はし、諸上善人詠を著はせるは、是皆道の爲にせるに出づ。史に記す。道衍晩に道餘錄を著はし、頗る先儒を毀る、識者これを鄙む。其の故郷の長洲に至るや、同產の姉を候す、姉納れず。其友王賓を訪ふ、賓も亦見えず、但遙に語つて曰く、和尙誤れり、和尙誤れりと。復往いて姉を見る、姉これを罵る。道衍惘然たりと。道衍の姉、儒を奉じ佛を斥くるか、何ぞ婦女の見識に似ざるや。王賓は史に傳無しと雖、おもふに道衍が詩を寄せしところの王達善ならむか。聲を揚げて遙語す、鄙むも亦甚し。今道餘錄を讀むに、姉と友との道衍を薄んじて之を惡むも、亦過ぎたりといふべし。道餘錄自序に曰く、余壯に僧たりし時、元季の兵亂に値ふ。年三十に近くして、愚庵の及和尙に徑山に從つて禪學を習ふ。暇あれば内外の典籍を披閱して以て才識に資す。因つて河南の二程先生の遺書と新安の晦庵朱先生の語錄を觀る。(中略)三先生既に斯文の宗主、後學の師範たり、佛老を攘斥すといふと雖、必ず當に理に據つて至公無私なるべし、則ち人心服せん。三先生多く佛書を探らざるに因つて佛の底蘊を知らず。一に私意を以て邪詖の辭を出して、枉抑太だ過ぎたり、世の人も心亦多く不平なり、況んや其學を宗とする者をやと。(下略)道餘錄は乃ち程氏遺書の中の佛道を論ずるもの二十八條、朱子語錄の中の同二十一條を目して、極めて謬誕なりと爲し、條を逐ひ理に據つて一々剖析せるものなり。槧成つて巾笥に藏すること年ありて後、永樂十年十一月、自序を附して公刊す。今これを讀むに、

大抵禪子の常談にして、別に他の奇無し。蓋し明道、伊川晦庵の佛を排する、皆雄論博議あるにあらず卒然の言、偶發の語多し、而して廣く佛典を讀まざるも、亦其の免かれざるところなり。故に佛を奉ずる者の、三先生に應酬するが如き、本是辨じ易きの事たり、膽を張り目を怒らし、手を戟にし氣を壯にするを要せず。道衍の峻機險鋒を以て、徐に幾百年前の故紙に對す、縱說横說、甚だ是容易なり。是其の観る可き無き所以なり。而して道衍の筆舌の銳利なる、明道の言を罵つて、豈道學の君子の爲ならんやと云ひ、明道の執見僻說、委巷の曲士の若し、誠に咲ふ可き也と云ひ、明道何ぞ乃ち自づから苦むこと此の如くなるやと云ひ、伊川の言を評しては、此は是伊川みづから此說を造つて禪學者を誣ふ、伊川が良心いづくにか在ると云ひ、管を以て天を窺ふが如しとは夫子みづから道ふなりと云ひ、程夫子倔强自任す、聖人の道を傳ふる者、是の如くなる可からざる也と云ひ、晦庵の言を難しては、朱子の寐語と云ひ、惟私意を逞しくして以て佛を謗ると云ひ、朱子も亦怪なりと云ひ、晦庵此の如くに心を用ゐば、市井の間の小人の爭ひて販賣する者の所以と何を以てか異ならんやと云ひ、先賢大儒、世の尊信崇敬するところの者を、侮弄冷嘲すること太だ過ぎ、其の口氣甚だ憎む可し。是蓋し其姉の納れず、其友の見ざるに至れる所以ならずんばあらず。道衍の言を考ふるに、大槩禪宗に依り、楞伽、楞嚴、圓覺、法華、華嚴等の經に據つて、程朱の排佛の說の非理無實なるを論ずるに過ぎず。然れども程朱の學、一世の士君子の奉ずるところたるの日に於て、抗爭反擊の辯を逞しくす。書の公にさるゝの時、道衍既に七十八歲、道の爲にすと曰ふと雖、亦爭を好むといふべし。此も亦道衍が莽々蕩々の氣の、已む能はずして然るもの耶、非耶。

道衍は是の如きの人なり、而して猶卓侍郎を容るゝ能はず、之を赦さんとするの帝をして之を殺さしむるに至る、素より相善からざるの私ありしに因るとは云へ、又實に卓の才の大にして器の偉なるを忌みたるにあらずんばあらず。道衍の忌むところとなる、卓惟恭もまた雄傑の士といふべし。

道衍の卓敬に對する、衍の詩句を假りて之を評すれば、道衍量何ぞ隘きやと云ふ可きなり。然るに道衍の方正學に對するは則ち大に異なり。方正學の燕王に於けるは、實に相容れざるものあり、燕王の師を興すや、君側の小人を掃はんとするを名として、其の目して以て事を構へ親を破り、天下を誤るとなせる者は、齊黃練方の四人なりき。齊は齊泰なり、黃は黃子澄なり、練は練子寧なり、而して方は即ち方正學なり。燕王にして功の成るや、もとより此四人を得て甘心せんとす。道衍は王の心腹なり、初よりこれを知らざるにあらず。然るに燕王の北平を發するに當り、道衍これを郊に送り、跪いて密に啓して曰く、臣願はくは託する所有らんと。王何ぞと問ふ。衍曰く、南に方孝孺あり、學行あるを以て聞ゆ、王の旗城下に進むの日、彼必ず降らざらんも、幸に之を殺したまふ勿れ、之を殺したまはゞ則ち天下の讀書の種子絕えんと。燕王これを首肯す。道衍の卓敬に於ける、私情の憎嫉ありて、方孝孺に於ける、私情の愛好あるか、何ぞ其の二者に對するの厚薄あるや。孝孺は宋濂の門下の巨珠にして、道衍と宋濂とは蓋し文字の交あり。道衍の少きや、學を好み詩を工にして、濂の推奬するところとなる。道衍豈孝孺が濂の愛重するところの弟子たるを以て、深く知るところありて庇護するか、或は又孝孺の文章

學術、一世の仰慕するところたるを以て、之を殺すは燕王の盛德を傷り、天下の批議を惹く所以なるを慮りて憚るか、將又眞に天下讀書の種子の絕えんことを懼るゝか、抑亦孝孺の嚴厲の操履、燕王の剛邁の氣象、二者相遇はゞ、氷塊の鐵塊と相擊ち、鷙王と龍王との相鬪ふが如き悽慘狠毒の光景を生ぜんことを想察して預め之を防遏せんとするか、今皆確知する能はざるなり。

方孝孺は如何なる人ぞや。孝孺字は希直、一字は希古、寧海の人。父克勤は濟寧の知府たり、治を爲すに德を本とし、心を苦めて民の爲にす。田野を闢き、學校を興し、勤儉身を持し、敦厚人を待つ。かつて盛夏に當つて濟寧の守將、民を督して城を築かしむ。克勤曰く、民今耕耘暇あらず、何ぞ又畚鍤に堪へんと。中書省に請ひて役を罷むるを得たり。是より先に久しく旱せしが、役の罷むるに及んで甘雨大に至りしかば、濟寧の民歌つて曰く。

孰か我が役を罷めしぞ、
使君の　力なり。
孰か我が黍を活かしめしぞ、
使君の　雨なり。
使君よ　去りたまふ勿れ、
我が民の　父なり　母なり。

克勤の民意を得る是の如くなりしかば、事を視ること三年にして、戶口增倍し、一郡饒足し、男女怡々として生を樂みしといふ。克勤愚菴と號す。宋濂に故愚庵先生方公墓銘文あり。滔々數千言、備に其の

人となりを盡す。中に記す、晩年益々畏愼を加へ、書の爲す所の事、夜は則ち天に白すと。愚庵はたゞに循吏たるのみならざるなり。濂又曰く、古に謂はゆる體道成德の人、先生誠に庶幾焉と。蓋し濂が譔墓の辭にあらず。孝孺は此の愚庵先生第二子として生れたり。天賦も厚く、庭訓も嚴なりしならむ。幼にして精敏、双眸炯々として、日に書を讀むこと寸に盈ち、文を爲すに雄邁醇深なりしかば、郷人呼んで小韓子となせりといふ。其の聰慧なりしこと知る可し。時に宗濂一代の大儒として太祖の優待を受け、文章德業、天下の仰望するところとなり、四方の學者、悉く稱して太史公となして、姓氏を以てせず。濂字は景濂、其先金華の潜溪の人なるを以て潜溪と號す。太祖濂を廷に譽めて曰く、宋景濂朕に事ふること十九年、未だ嘗て一言の僞あらず、一人の短を誚らず、始終二無し、たゞに君子のみならず、抑賢と謂ふ可しと。太祖の濂を視ること是の如し。濂の人品想ふ可き也。孝孺洪武の九年を以て、濂に見えて弟子となる。濂時に年六十八、孝孺を得て大に之を喜ぶ。潜溪が方生の天台に還るを送るの詩の序に自記して曰く、晩に天台の方生希直を得たり、其の人となりや凝重にして物に遷らず、穎銳にして以て諸を理に燭す、間發して文を爲す、水の涌いて山の出づるが如し、喧啾たる百鳥の中、此の孤鳳皇を見る、いかんぞ喜びざらんと。凝重穎銳の二句、老先生眼裏の好學生を寫し出し來つて神有り。此の孤鳳皇を見るといふに至つては、推重も亦至れり。詩十四章、其二に曰く、

念ふ　子が　初めて來りし時、
才思　繭絲の若し。
之を抽いて　已に緒を見る、

染めて就せ　五色の衣。

其九に曰く、

須らく知るべし　九仞の山も、

功　或は　一簣に少くを。

學は　貴ぶ　日に隨つて新なるを、

愼んで　中道に癈する勿れ。

其十に曰く、

彝經　明訓　耿たり、

白日　靑天に麗る。

苟も徒に　文辭に溺れば、

螢燭　姸を爭はんと欲するなり。

其十一に曰く、

姬も　孔も　亦何人ぞや、

顏面　了に異ならじ。

肯て　盆盎の中に墮せんや、

當に　瑚璉の器となるべし。

其終章に曰く、

明年　二三月、
羅川　花正に開かん。
高きに登りて　日に盼望し、
子が能く　重ねて來るを遲たむ。

其才を稱し、其學を勸め、其の流れて文辭の人とならんことを戒め、其の奮つて聖賢の城に至らんことを求め、他日復再び大道を論ぜんことを欲す。潛溪が孝孺に對する、稱許も甚だ至り、親切も深く徹するを見るに足るものあり。嗚呼、老先生、孰か好學生を愛せざらん、好學生、孰か老先生を慕はざらん。孝孺は其翌年丁巳、經を執つて浦陽に潛溪に就きぬ。從學四年、業大に進んで、潛溪門下の知名の英俊、皆其の下に出で、先輩胡翰も蘇伯衡も亦自ら如かずと謂ふに至れり。洪武十三年の秋、孝孺が歸省するに及び、潛溪が之を送る五十四韻の長詩あり。其引の中に記して曰く、細かに其の進修の功を占ふに、日々に異なるありて月々に同じからず、僅に四春秋を越ゆるのみにして而して英發光著斯の如し、後四春秋ならしめば、則ち其の至るところ又如何たるを知らず、近代を以て之を言へば、歐陽少卿蘇長公の輩は、姑らく置きて論ぜず、自餘の諸子、之と文藝の場に角逐せば、孰か後となり孰か先となるを知らざる也。今此說を爲す、人必ず予の過情を疑はんも、後二十餘年にして當に其の知言にして、生に許す者の過に非るたるを信ずべき也。然りと雖予の生に許すところの者、寧ぞ獨り文のみならんやと。又曰く、予深く其の去るを惜み、爲に是詩を賦す、既に其の素有の善を揚げ、復勗むるに遠大の業を以てすと。潛溪の孝孺を愛重し獎勵すること、至れり盡せりといふべし。其詩辭を行る自在にして、

意を立つる莊重、孝孺に期するに大成を以てし、必ず經世濟民の眞儒とならんことを欲す。章末に句有り、曰く、

生は乃ち　周の容刀、
生は乃ち　魯の璵璠。
道眞なれば　器乃ち貴し、
爰ぞ須ゐん　空言を用ゐるを。
孳孳として　務めて踐形し、
負く勿れ　七尺の身に。
敬義　以て衣と爲し、
忠信　以て冠と爲し、
慈仁　以て佩と爲し、
廉知　以て鞶と爲し、
特り立つて　千古を睨まば、
萬象　昭らかにして昏き無からむ。
此意　竟に誰か知らん、
爾が爲に　言　諄諄たり。
徒に　强聒すと謂ふ勿れ。

孝孺後に至りて此詩を錄して人に視すの時、書して曰く、前輩後學を勉めしむ、惓惓の意、特り文辭のみに在らず、望むらくは相與に之を勉めむと。臨海の林佑、葉見泰等、潛溪の詩に跋して、又各宋太史の期望に副ひんことを孝孺に求む。孝孺は果して潛溪に負かざりき。

一一　宜しく紳に書すべし。

孝孺の集は、其人天子の惡むところ、一世の諱むところとなりしを以て、絶滅に歸し、歿後六十年にして臨海の趙洪が梓に附せしより、復漸く世に傳はるを得たり。今遜志齋集を執つて之を讀むに、蜀王が所謂正學先生の精神面目奕々として儼存するを覺ゆ。其の幼儀雜箴二十首を讀めば、坐、立、行、寢より、言、動、飲、食等に至る、皆道に違はざらんことを欲して、而して實踐躬行底より德を成さんとするの意、看取すべし。其雜銘を讀めば、冠、帶、衣、履より、筆、硯、杖、車等に至る、各物一々に湯の日新の銘に則りて、語を下し文を爲す反省修養の意、看取すべし。雜誡三十八章、學箴九首、家人箴十五首、宗儀九首等を讀めば、希直の學を爲すや空言を排し、實踐を尊み、體驗心澄して、而して聖賢の域に躋らんとするを看取すべし。明史に稱す、孝孺は文藝を末視し、恒に王道を明らかにし太平を致すを以て己が任と爲すと。（是鄭曉の方先生傳に本づく）眞に然り、孝孺の志すところの遠大にして、願ふところの眞摯なる、人をして感奮せしむるもあり。雜誡の第四章に曰く、學術の微なるは、四書之を害すればなり。姦言を文り、近事を摭り、時勢を窺伺し、便に趨り隙に投じ、富貴を以て志と爲

す。此を利祿の蠧と謂ふ。耳剽し口衒し、色を詭り辭を淫にし、聖賢に非ずして而も自立し、果敢大言して、以て人に高しとし、而して理の是非を顧みず。是を名を務むるの蠧といふ。鉤摭して說を成し、上古に合するを務め、先儒を毀訾し、以謂らく我に及ぶ莫き也と、更に異義を爲して、以て學者を惑はす。是を訓詁の蠧といふ。道德の旨を知らず、雕飾綴緝して、以て新奇となし、齒を鉗し舌を刺して、以て簡古と爲し、世に於て加益するところ無し。是を文辭の蠧といふ。四者交〻作りて、聖人の學亡ぶ。必ずや諸を身に本づけ、諸を政敎に見はし、以て物を成す可き者は、其れ惟聖人の學乎。聖道を去つて而して循はず、而して惟蠧にこれ歸す。甚しい哉惑へるや、と。孝孺の此言に照らせば、鄭曉の傳ふるところ、實に虛しからざる也。四箴の序の中の語に曰く、天に合して人に合せず、道に同じうして時に同じうせずと。孝孺の此言に照らせば、既に其の卓然として自立し、信ずるところあり安んずるところあり、潛溪先生が謂へる所の、特り立つて千古を睨み、萬象昭らして昏き無しの境に入れるを看るべし。又其の克畏の箴を讀めば、あゝ皇いなる上帝、衷を人に降す、といへるより、其の方に昏きに當つてや、恬として宜しく然るべしと謂ふも、中夜靜かに思へば、夫れ豈吾が天ならんや、廼ち奮つて而して悲み、亟やかに前轍を改む、と云ひ、一念の微なるも、鬼神降監す、安しとする所に安んずる勿れ、嗜む所を嗜む勿れ、といひ、表裏交〻修めて、本末一致せんといへる如き、恰も神を奉ぜる者の如き思想感情の漲流せるを見る。父克勤の、晝の爲せるところ、夜は則ち天に白したるに合せ考ふれば、孝孺が善良の父、方正の師、孔孟の正大純粹の敎の德光惠風に浸涵して、眞に心胸の深處よりして道を證し德を成すの人たらんことを願へるの人たるを看るべき也。

孝孺既に文藝を末視し、孔孟の學を爲し、伊周の事に任ぜんとす。然れども其の文章亦おのづから佳、前人評して曰く、醇麗博朗、沛乎として餘有り、勃乎として禦ぐ莫しと。又曰く、醇深雄邁と。其の一大文豪たる、世もとより定評あり、動かす可からざるなり。詩は蓋し其の心を用ゐるところにあらずと雖、亦おのづから觀る可し。其の王仲縉感懷の韻に次する詩の末に句あり、曰く

壯士　千載の心、
豈憂へんや　食と衣とを。
由來　海に浮ばんの志、
是　軒冕の姿にあらず。
人生　道を聞くを尙ぶ、
富貴　復　奚とか爲さん。
賢にして有り　陋巷の樂、
聖にして有り　西山の饑。
頤を朶る　失ふところ多し、
苦節　未だ非とす可からず。

道衍は豪傑なり、孝孺は君子なり、逃虛子は歌つて曰く、苦節貞くすべからずと。遜志齋は歌つて曰く、苦節未だ非とす可からずと。逃虛子は吟じて曰く、伯夷量何ぞ隘きやと。遜志齋は吟じて曰く、聖にして有り西山の饑と。又其の滎陽を過ぎるの詩の中の句に吟じて曰く、之に因つて首陽を念ふ、西顧

すれば清風生ずと。又乙丑中秋後二日兄に寄する詩の句に曰く、苦節伯夷を慕ふと。人異なれば情異なり、情異なれば詩異なり。道衍は僧にして、觥籌又何ぞ數へんといひて、快樂主義者の如く、希直は俗にして、飲の箴に、酒の患たる、謹者をして荒み、莊者をして狂し、貴者をして賤く、存者をして亡びしむ、といひ、酒卮の銘には、親を洽くし衆を和するも、恒に斯に於てし、禍を造り敗をおこすも、恒に斯に於てす、其惡に懲り、以て善に趨り、其儀を愼むを尙ぶ、といへり。逃虛子は佛を奉じて、而も順世外道の如く、遜志齋は儒を尊んで、而も淨行者の如し。嗚呼、何ぞ其の奇なるや。然も遜志齋飲を解せざるにあらず。其の上巳南樓に登るの詩に曰く、

昔時　喜んで酒を飲み、
白を擧げて　深きを辭せざりき。
玆の中歲に及んでよりこのかた、
已に復　人の斟むを畏る。
後生　ゆるがせにする所多きも、
豈識らんや　老の會臨するを。
志士は　景光を惜む、
巓に登れば　已に岑を知る。
毎に聞く　前世の事、
頗る見る　古人の心。

逝く者　まことに息まず、
將來　誰か今に嗣がむ。
百年　當に成る有るべし、
泯滅　寧ぞ欽むに足らんや。
毎に憐む　伯牙の陋にして、
鐘　死して　其琴を破れるを。
自ら得るあらば　苟に傳ふるに堪へむ、
何ぞ必ずしも　知音を求めんや。
俯しては觀る　水中の鯈、
仰いでは覩る　雲際の禽。
眞樂　吾隱さず、
欣然として　煩襟を豁らす。

前半は巵酒の歡樂、學業の荒廢を致さんことを嘆じ、後半は一轉して、眞樂の自得にありて外に待つ無きをいふ。伯牙を陋として破琴を憐み、莊子を引きて不隱を擧ぐ。それ外より入る者は、中に主たる無し、門より入る者は家珍にあらず。自を擧げて樂となす、何ぞ是れ至樂ならん。

遜志齋の詩を逃虚子の詩に比するに、風格おのづから異にして、精神復に殊なり。意氣の俊邁なるに至つては、互に相遜らずと雖、正學先生の詩は竟に是正學先生の詩にして、其の歸趣を考ふるに、毎に正々堂々の大道に合せんことを欲し、絶えて欹側詭譎の言を爲さず、放逸曠達の態無し。勉學の詩二十四章の如きは、蓋し壯時の作と雖、其の本色なり。談詩五首の一に曰く、

　世を擧つて　皆宗とす　李杜の詩を。
知らず　李杜の　更に誰を宗とせるを。
能く　風雅　無窮の意を探らば、
始めて是　乾坤　絶妙の詞ならん。

其二に曰く、

道德を　發揮して　乃ち文を成す、
枝葉　何ぞ曾て　本根を離れん。
末俗　工を競ふ　繁縟の體、
千秋の精意　誰と與に論ぜん。

是正學先生の詩に於けるの見なり。華を斥け實を尙び、雅を愛し淫を惡む。尋常一樣詩詞の人の、綺麗自ら喜び、藻絢自ら衒ひ、而して其の本旨正道を逸し邪路に趨るを忘るゝが如きは、希直の斷じて取らざるところなり。希直の父愚庵、師潛溪の見も、亦大略是の如しと雖、希直の性の方正端嚴を好むや、おのづから是の如くならざるを得ざるものあり、希直決して自ら欺かざる也。

孝孺の父は洪武九年を以て歿し、師は同十三年を以て歿す。洪武十五年呉沉の薦を以て太祖に見ゆ。太祖其の擧止端整なるを喜びて、皇孫に謂つて曰く、此莊士、當に其才を老いしめて以て汝を輔けしめんと。閲十年にして又薦められて至る。太祖曰く、今孝孺を用ゐるの時に非ずと。太祖が孝孺を器重して、而も擧用せざりしは何ぞ。後人こゝに於て慮を致すもの多し。然れども此は强ひて解す可からず。太祖が孝孺を愛重せしは、前後召見の間に於て、たまたま仇家の爲に累せられて孝孺の闕下に械送せられし時、太祖其名を記したまひて特に釋されしことあるに徵しても明らかなり。孝孺の學德漸く高くして、太祖の第十一子蜀王椿、孝孺を聘して世子の傅となし、尊ぶに殊禮を以てす。王の孝孺に賜ふの書に、余一日見ざれば三秋の如き有りの語あり、又王が孝孺を送るの詩に、士を閲す孔だ多し、我は希直を敬すの句あり、又其一章に

謙にして以て　みづから牧し、
卑しうして以て　みづから持す。
雍容　儒雅、
鸞鳳の　儀あり。

とあり、又其の賜詩三首の一に

文章　金石を奏し、
衿佩　儀刑を視る。
應に世々　三輔に遊ぶべし、

焉んぞ能く一經に困せん。

の句あり。王の優遇知る可くして、孝孺の恩に答ふるに道を以てせるも、亦知るべし。王孝孺の讀書の廬に題して正學といふ。孝孺はみづから遜志齋といふ、人の正學先生いふものは、實に蜀王の賜題に因るなり。

太祖崩じ、皇太孫立つに至つて、廷臣交〻孝孺を薦む。乃ち召されて翰林に入る。德望素より隆んにして、一時の倚重するところとなり、政治より學問に及ぶまで、帝の咨詢を承くること殆ど間無く、翌二年文學博士となる。燕王兵を擧ぐるに及び、日に召されて謀議に參し、詔檄皆孝孺の手に出づ。三年より四年に至り、孝孺甚だ煎心焦慮すと雖、身武臣にあらず、皇師數〻屈して、燕兵遂に城下に到る。金川門守を失ひて、帝みづから大內を焚きたまふに當り、孝孺伍雲等の爲に執へられて獄に下さる。

燕王志を得て今既に帝たり。素より孝孺の才を知り、又道衍の言を聽く。乃ち孝孺を赦して之を用ゐんと欲し、待つに不死を以てす。孝孺屈せず。よつて之を獄に繫ぎ、孝孺の弟子廖鏞廖銘をして、利害を以て說かしむ。二人は德慶侯廖權の子なり。孝孺怒つて曰く、汝等予に從つて幾年の書を讀み、還つて義の何たるを知らざるやと。二人說く能はずして已む。帝猶孝孺を用ゐんと欲し、一日に諭を下すこと再三に及ぶ。然も終に從はず。帝卽位の詔を草せんと欲す、衆臣皆孝孺を擧ぐ。乃ち召して獄より出でしむ。孝孺喪服して入り、慟哭して悲み、聲殿陛に徹す。帝みづから榻を降りて勞らひて曰く、先生勞苦する勿れ、我周公の成王を輔けしに法らんと欲するのみと。孝孺曰く、成王いづくにか在ると。帝曰く、渠みづから焚死すと。孝孺曰く、成王卽存せずんば、何ぞ成王の子を立てたまはざるやと。帝曰

く。國は長君に賴る。孝孺曰く、何ぞ成王の弟を立てたまはざるや。帝曰く、これ朕が家事なり、先生はなはだ勞苦する勿れと。左右をして筆札を授けしめて、おもむろに詔して曰く、天下に詔する、先生にあらずんば不可なりと。孝孺大に數字を批して、筆を地に擲つて、又大哭し、且罵り且哭して曰く、死せんには卽死せんのみ、詔は斷じて草す可からずと。帝勃然として聲を大にして曰く、汝いづくんぞ能く遽かに死するを得んや、たとへ死するとも、獨り九族を顧みざるやと。孝孺いよ〳〵奮つて曰く、すなはち十族も我を奈何にせんやと。聲甚だ厲し。帝もと雄傑剛猛なり、是に於て大に怒つて、刀を以て孝孺の口を抉らしめて、復之を獄に錮す。

孝孺の宋潛溪に知らるゝや、蓋し其の釋統三篇と後正統論とを以てす。四篇の文、雄大にして莊嚴、其大旨義理の正に據つて、情勢の歸を斥け、王道を尙び、覇略を卑み、天下を全有して、海內に號令する者と雖、其道に於てせざる者は、目して正統の君主とすべからずとするに在り。秦や隋や王莽や晉宋齊梁や、則天や符堅や、此皆これをして天下を有せしむる數百年に踰ゆと雖、正統とす可からずと爲す。孝孺の言に曰く、君たるに貴ぶ所の者は、豈其の天下を有するを謂はんやと。又曰く、天下を有して而も正統に比す可からざる者三、簒臣也、賊后也、夷狄也と。孝孺篇後に書して曰く、予が此文を爲りてより、未だ嘗て出して以て人に示さず。人の此言を聞く者、咸予を嗤笑して以て狂と爲し、或は陰に之を詆訶す。其の然りと謂ふ者は、獨り予が師太史公と、金華の胡公翰とのみと。夫れ正統變統の論、

もとより史の爲にして發すと雖、君たるに貴ぶ所の者は豈其の天下を有するを謂はんやと論ぜるの後二十餘年にして、一朝簒奪の君に面し、其の天下に誥ぐるの詔を草せんことを逼らる。嗚呼、運命遭逢も亦奇なりといふべし。孝孺又嘗て筆の銘を爲る。曰く、

妄に動けば　悔有り、
道は　悖る可からず。
汝　才ありと謂ふ勿れ、
後に　萬世あり。

又嘗て紙の銘を爲る。曰く、

之を以て言を立つ、其の道を載せんを欲す。
之を以て事を記す、其の民を利せんを欲す。
之を以て敎を施す、其の義ならんを欲す。
之を以て法を制す、其の仁ならんを欲す。

此等の文、蓋し少時の爲る所なり。嗚呼、運命遭逢、又何ぞ奇なるや。二十餘年の後にして、筆紙前に在り。これに臨みて詔を草すれば、富貴我を遲つこと久し、これに臨みて命を拒まば、刀鋸我に加はらんこと疾し。嗚呼、正學先生、こゝに於て、成王いづくに在りやと論じ、こゝに於て筆を地に擲つて哭す。父に負かず、師に負かず、天に合して人に合せず、道に同じうして時に同じうせず、凜々烈々として、屈せず撓ます、苦節伯夷を慕はんとす、壯なる哉。

帝孝孺の一族を收め、一人を收むる毎に輙ち孝孺に示す。孝孺顧みず、乃ち之を殺す。孝孺の妻鄭氏と諸子とは、皆先づ經死す。二女逮へられて淮を過ぐる時、相與に橋より投じて死す。季弟孝友また逮へられて將に戮せられんとす。孝孺之を目して涙下りければ、流石は正學の弟なりけり、

阿兄　何ぞ必ずしも　涙潸々たらむ、
義を取り　仁を成す　此間に在り。
華表　柱頭　千歳の後、
旅魂　舊に依りて　家山に到らん。

と吟じて戮せられぬ。母族林彦清等、妻族鄭原吉等、九族既に戮せられて、門生等まで、方氏の族として罪なはれ、坐死する者およそ八百七十三人、遠謫配流さるゝもの數ふ可からず。孝孺は終に聚寶門外に磔殺せられぬ。孝孺慨然、絶命の詞を爲りて戮に就く。詞に曰く、

天降ニ亂離一兮孰知ニ其由一。
奸臣得レ計兮謀レ國用レ猶。
忠臣發レ憤兮血涙交流。
以レ此殉レ君兮抑又何求。
嗚呼哀哉　庶レ不ニ我尤一。

廖鏞廖銘は孝孺の遺骸を拾ひて聚寶山上に葬りしが、二人も亦收められて戮せられ、同じ門人林嘉猷は、かつて燕王父子の間に反間の計を爲したるもの、此亦戮せられぬ。

方氏一族是の如くにして殆ど絶えしが、孝孺の幼子德宗、時に甫めて九歲、寧海縣の典史魏公澤の護匿するところとなりて死せざるを得、後孝孺の門人兪公允の養ふところとなり、遂に兪氏を冒して、子孫繁衍し、萬曆三十七年には二百餘丁となりしこと、松江府の儒學の申文に見え、復姓を許されて、方氏また榮ゆるに至れり。廖氏二子及門人王稌等捨骸の功また空しからず、萬曆に至つて墓碑祠堂成り、祭田及び嘯風亭等備はり、松江に求忠書院成るに及べり。世に在る正學先生の如くにして、豈後無く祠無くして泯然として滅せんや。

節に死し族を夷せらるゝの事、もと悲壯なり。是を以て後の正學先生の墓を過ぎる者、愴然として感じ、泫然として泣かざる能はず。乃ち祭弔慷慨の詩、果篇積章して甚だ多きを致す。衛承芳が古風一首中に句あり、曰く、

古來　馬を叩く者、

采薇　逸民を稱す。

明の德　詎ぞ周に遜らん、

乃ち其の仁を成す無からんや。

と。劉秉忠を慕ふの人道衍は其の功を成して秉忠の如くなるを得、伯夷を慕ふの人希直は其の節を成して伯夷に比せらるゝに至る。王思任二律の一に句あり、曰く、

十族　魂の暗き月に依るあり、

九原　愧の青燈に付する無し。

と。李維楨五律六首の中に句あり、曰く、

國破れて　心仍在り、
身危うして　舌尙存す。

又句あり、曰く、

氣は壯なり　河山の色、
神は留まる　宇宙の身。

燕王今は燕王にあらず、儼として九五の位に在り、明年を以て改めて永樂元年と爲さんとす。而して建文皇帝は如何。燕王の言に曰く、予始め難に遘ふ、已むを得ずして兵を以て禍を救ひ、誓つて奸惡を除き、宗社を安んじ、周公の勳を庶幾せんとす。意はざりき少主予が心を亮せず、みづから天に絕てりと。建文皇帝果して崩ぜりや否や。明史には記す、帝終る所を知らずと。又記す、或は云ふ帝地道より出で亡ぐと。又記す、滇黔巴蜀の間、相傳ふ帝の僧たる時の往來の跡ありと。これ言を二三にするものなり。帝果して火に赴いて死せるか、抑又髮を薙いで逃れたるか。明史卷一百四十三、牛景先の傳の後に、忠賢奇秘錄および致身錄等の事を記して、錄は蓋し晚出附會、信ずるに足らずの語を以て結び、暗に建文帝出亡、諸臣庇護の事を否定するの口氣あり。然れども卷三百四鄭和傳には、成祖、惠帝の海外に亡げたるを疑ひ、之を蹤跡せんと欲し、且つ兵を異域に耀かし、中國の富强を示さんことを欲すと記せり。鄭和の始めて西洋に航せしは、燕王志を得てよりの第四年、即永樂三年なり。永樂三年にして猶疑ふあるは何ぞや。又給事中胡濙と內侍朱祥とが、永樂中に荒徼を遍歷して數年に及びしは、卷二百

九十九に見ゆ。仙人張三丰を索めんとすといふを其名とすと雖、山谷に仙を索めしむるが如き、永樂帝の聰明勇決にして豈眞に其事あらんや。得んと欲するところの者の、眞仙にあらずして、別に存するあること、知る可き也。蓋し此時に當つて、元の餘孽猶所在に存し、漠北は論無く、西陲南裔、亦盡くは明の化に順はず、野火燒けども盡きず、春風吹いて亦生ぜんとするの勢あり。且つや天一豪傑を鐵門關邊の渴石に生じて、カザン(Kazan)弑されて後の大帝國を治めしむ。これを帖木兒(Timur)と爲す。西人の所謂タメルラン也。帖木兒サマルカンドに據り、四方を攻略して威を振ふ甚だ大に、明に對しては貢を納ると雖、太祖の末年に使したる傅安を留めて歸らしめず、之を要して領內諸國を歷遊すること數萬里ならしめ、既に印度を掠めて、デルヒを取り、波斯を襲ひ、土耳古を征し、心ひそかに支那を窺ひ、四百餘州を席卷して、大元の遺業を復せんとするあり。永樂帝の燕王たるや、塞北に出征して、よく胡情を知る。部下の諸將もまた夷事に通ずる者多し。王の南する、幕中に番騎を藏す。凡そ此等の事に徵して、永樂帝の塞外の狀勢を曉れるを知るべし。若し建文帝にして走つて域外に出で、倔强にして自大なる者に依るあらば、外敵は中國を覦ふの便を得て、義兵は邦內に起る可く、重耳一たび逃れて却つて勢を得るが如きの事あらんとす。是永樂帝の懼れ憂ふるところたらずんばあらず。鄭和の艦を泛めて遠航し、胡濙の仙を索めて遍歷せる、密旨を啣むところあるが如し。而して又鄭は實に威を海外に示さんとし、胡は實に異を幽境に詢へるや論無し。善く射る者は雁影を重ならしめて而して射、善く謀る者は機會を復ならしめて而して謀る。一箭二雁を獲ずと雖、一雁を失はず、一計双功を收めずと雖、一功を得る有り。永樂帝の智、豈敢て建文を索むるを名として使を發するを爲さんや。況んや又鄭和は宦官に

して、胡濙と偕にせるの朱祥は内侍たるをや。秘意察す可きあるなり。

鄭和は王景弘等と共に出て使しぬ。和の出づるや、帝袁柳莊の子の袁忠徹をして相せしむ。忠徹曰く可なりと。和の率ゐる所の將卒二萬七千八百餘人、舶長さ四十四丈、廣さ十八丈の者、六十二、蘇州劉家河より海に泛びて福建に至り、福建五虎門より帆を揚げて海に入る。閲三年にして、五年九月還る。建文帝の事、得る有る無し。而れども諸番國の使者和に隨つて朝見し、各〻其方物を貢す。和又三佛齊國の酋長を俘として獻ず。帝大に悅ぶ。是より建文の事に關せず、專ら國威を揚げしめんとして、再三和を出す。和の使を奉ずる前後七回、其の間、或は錫蘭山(Ceylon)の王亞烈苦奈兒と戰つて之を擒にして獻じ、或は蘇門答剌(Sumotala)の前の前の僞王の子蘇幹剌と戰つて、其妻子を併せて俘として獻じ、大に南西諸國に明の威を揚げ、遠く忽魯謨斯(Holumusze ペルシヤ)麻林(Mualin? アフリカ?)祖法兒(Dsuffar アラビヤ)天方(= Beitullah = House of God の譯、メッカ、アラビヤ)等に至れり。明史外國傳のやゝ詳なるは、鄭和に隨行したる費珍の著はせる西洋番國志を採りたるに本づく歟といふ。

胡濙等もまた得る無くして已みぬ。然も張三丰を索めしこと、天下の知る所たり。乃ち三丰の居りし所の武當の大和山に觀を營み、夫を役する三十萬、貲を費す百萬、工部侍郎郭璡、隆平侯張信等、事に當りしといふ。三丰嘗て武當の諸巖壑に游び、此山異日必ず大に興らんといひしもの、實となつてこゝに現じたる也。

建文帝は如何せしぞや。傳へて曰く、金川門の守を失ふや、帝自殺せんとす。翰林院編修程濟白す、出亡したまはんには如かじと。少監王鉞跪いて進みて白す。昔高帝升遐したまふ時、遺篋あり、大難に臨まば發くべしと宣ひぬ。謹んで奉先殿の左に收め奉れりと。羣臣口々に、疾く出すべしといふ。宦者忽にして一の紅なる篋を舁き來りぬ。視れば四圍は固むるに鐵を以てし、二鎖も亦鐵を灌ぎありて開くべくも無し。帝これを見て大に慟きたまひ、今はとて火を大内に放たせたまふ。皇后は火に赴きて死したまひぬ。此時程濟は辛くも篋を碎き得て、篋中の物を取出す。出たる物は抑何ぞ。釋門の人ならで誰かは要すべき、大内などには有るべくも無き度牒といふもの三張ありたり。度牒は人の家を出て僧となるとき官の可して認むる牒にて、これ無ければ僧も暗き身だるなり。三張の度牒、一には應文の名の錄され、一には應能の名あり、一には應賢の名あり。袈裟、僧帽、鞋、剃刀、一々倶に備はりて、銀十錠添はり居ぬ。篋の內に朱書あり、之を讀むに、應文は鬼門より出で、餘は水關御溝よりして行き、薄暮にして、神樂觀の西房に會せよ、とあり衆臣驚き戰きて面々相看るばかり、しばらくは言ふ者も無し。やゝありて天子、數なり、と仰あり。帝の諱は允炆、應文の法號、おのづから相應ずるが如し。且つ明の基を開きし太祖高皇帝はもと僧にましましき。後にこそ天下の主ともなり玉ひたれ、元の順宗の至正四年、年十七におはしける時は、疫病大に行はれて、御父御母兄上幼き弟皆亡せたまへるに、家貧にして棺槨の供だに爲したまふ能はず。藁葬といふ悲しくも悲しき事を取行はせ玉はんとて、仲の兄と二人してみづから遺骸を舁きて山麓に至りたまへるに、綆絶えて又如何ともする能はず、仲の兄馳還つて綆を取りしといふ談だに遺りぬ。其の仲の兄も亦亡せたれば、孤身依るところなく、遂に皇覺寺に入りて僧

と爲り、食を得んが爲に合淝に至り、光固汝潁の諸州に托鉢修行し、三歳の間は草鞋竹笠、憂き雲水の身を過したまへりといふ。帝は太祖の皇孫と生れさせたまひて、金殿玉樓に人となりたまひたれども、如是因如是縁、今また袈裟念珠の人たらんとす。不思議といふも餘あり。程濟即ち御意に從ひて祝髮しまゐらす。萬乘の君主金冠を墜し、剃刀の冷光翠髮を薙ぐ。悲痛何ぞ能く堪へむや、吳王の敎授楊應能は、臣が名應能に應ず、願はくは祝髮して隨ひまつらんと白す。監察御史葉希賢、臣が名は賢、應賢たるべきこと疑無しと白す。各髮を剃り衣を易へて牒を披く。殿に在りしもの凡そ五六十人、痛哭して地に倒れ、倶に矢つて隨ひまつらんとまをす。帝、人多ければ、得失を生ずる無きを得ず、とて麾いて去らしめたまふ。御史曾鳳韶、願はくは死を以て陛下に報ひまつらん、と云ひて退きつ、後果して燕王の召に應ぜずして自殺しぬ。諸臣大に慟きて漸くに去り、帝は鬼門に至らせたまふ。從ふ者實に九人なり。至れば一舟の岸に在るあり。誰ぞと見るに神樂觀の道士王昇にして、帝を見て叩頭して萬歳を稱へ、嗚呼、來らせたまへるよ、臣昨夜の夢に高皇帝の命を蒙りて、此にまゐり居たり、と申す。乃ち舟に乘じて太平門に至りたまふ。昇導きまゐらせて觀に至れば、恰も已に薄暮なりけり。陸路よりして楊應能、葉希賢等十三人同じく至る。合二十二人、兵部侍郎廖平、刑部侍郎金焦、編修趙天泰、檢討程亨、按察使王良、參政蔡運、刑部郎中梁田玉、中書舍人梁良玉、梁中節、宋和、郭節、刑部司務馮㴶、鎭撫牛景先、王資、劉仲、翰林待詔鄭洽、欽天監正王之臣、太監周恕、徐王府賓輔史彬と、楊應能、葉希賢、程濟となり。帝、今後はたゞ師弟を以て稱し、必ずしも主臣の禮に拘らざるべしと宣ふ。諸臣泣いて諾す。廖平くゝに於て人々に謂つて曰く、諸人の隨はんことを願ふは、固よりなり。但し隨行の者の多き

は功無くして害あり、家室の累無くして、膂力の捍ぎ衛るに足る者、多きも五人に過ぎざるを可とせん、餘は倶に遙に應援を爲さば、可ならんと。帝も、然るべしと爲したまふ。應能、應賢の二人は比丘と稱し、程濟は道人と稱して、常に左右に侍し、馮漼は馬二子と稱し、郭節は雪菴と稱し、宋和は雲門僧と稱し、趙天泰は衣葛翁と稱し、王之臣は補鍋を以て生計を爲さんとして老補鍋と稱し、牛景先は東湖樵夫と稱し、各〻姓を埋め名を變じて、陰陽に扈從せんとす。帝は滇南に往きて西平侯に依らんとしたまふ。史彬これを危ぶみて止め、臣等の中の、家いさゝか足りて、旦夕に備ふ可き者の許に錫を留めたまひ、緩急移動したまはゞ不可無かるべしと白す。帝もこれを理ありとしたまひて、廖平、王良、鄭洽、郭節、王資、史彬、梁良玉の七家を、かはる〴〵主とせんことに定まりぬ。翌日舟を得て帝を史彬の家に奉ぜんとす。同乘するもの八人、程、葉、楊、牛、馮、宋、史なり。餘は皆涙を揮つて別れまゐらす。帝は道を溧陽に取りて、呉江の黄溪の史彬の家に至りたまふに、月の終を以て諸臣また漸く相聚まりて伺候す。帝命じて各〻歸省せしめたまふ。燕王位に卽きて、諸官員の職を拋つて遯去りし者の官籍を削る。呉江の邑丞鞏德、蘇州府の命を以て史彬が家に至り、官を奪ひ、且曰く、聞く君が家建文皇帝をかしづくと。彬驚いて曰く、全く其事無しと。次の日帝楊、葉、程の三人と共に呉江を出で、舟に上りて京口に至り、六合を過ぎ、陸路襄陽に至り、廖平が家に至りたまふに、其後を訊ふ者ありければ、遂に意を決して雲南に入りたまふ。

永樂元年、帝雲南の永嘉寺に留まりたまふ。二年、雲南を出で、重慶より襄陽に抵り、また東して、史彬の家に至りたまふ。留まりたまふこと三日、杭州、天台、雁蕩の遊をなして、又雲南に歸りたまふ。三年、重慶の大竹善慶里に至りたまふ。此年若くは前年の事なるべし、帝金陵の諸臣慘死の事を聞きたまひ、泫然として泣きて曰く、我罪を神明に獲たり、諸人皆我が爲にする也と。

建文帝は今は僧應文たり。心の中はいざ知らず、袈裟に枯木の身を包みて、山水に白雲の跡を逐ひ、或は草庵、或は茅店に、閑坐し漫遊したまへるが、燕王今は皇帝なり、萬乘の尊に居りて、一身の安き無し。永樂元年には、韃靼の兵、遼東を犯し、永平に寇し、二年には韃靼と瓦剌（Oirats, 西部蒙古）との相和せざる爲に、邊患無しと雖、三年には韃靼の塞下を伺ふあり。特に此年はタメルラン大兵を起して、道を別失八里（Bisbalik）に取り、甘肅よりして亂入せんとするの事あり。甘肅は京を距る遠しと雖、タメルランの勇威猛勢は、太祖の時よりして知るところたり、永樂帝の憂慮察す可し。此事明史には其外國傳に、朝廷、帖木兒の道を別失八里に假りて兵を率ゐて東するを聞き、甘肅總兵官宋晟に勅して儆備せしむ、とあるに過ぎず。然れども塞外の事には意を用ゐること密にして、永樂八年以後、數々漠北を親征せしほどの帝の、帖木兒東せんとするを聞きては、奚んぞ能く晏然たらん。太祖の洪武二十八年、傅安等を帖木兒の許に使せしめて、安等猶未だ還らず。忽にして此報を得、疑慮する無きを得んや。帖木兒、父は答剌豈（Taragai）、元の至元二年を以て生る。生れて跛なりしかば、惡む者チムールレンク（Timur lenk）と呼ぶ。レンクは跛の義の波斯語なり。タメルランの稱これによつて起る。人となり雄毅、兵を用ゐ政を爲すを善くす。太祖の明の基を開くに前後して大に勢を得、洪武五年より後、征戰三

十餘年、威名亞非利加、歐羅巴に及ぶ。帖木兒は回教を奉ず。明の初回教の徒の甘肅に居る者を放つ。回徒多く帖木兒の領土に歸す。帖木兒の甘肅より入らんとせるも、故ある也。永樂元年(1403)より永樂三年に至るまで帖木兒の許に在りしクラウイヨ（Clavijo, Castilion Ambassador）記す、タメルラン、支那帝使を西班牙帝使の下に座せしめ、吾兒たり友たる西帝の使を賊たり無賴の徒たる支帝の下に坐せしむる勿れと。又同時タメルラン軍營に事へしバワリヤ人シルトベルゲル(T. Schiltberger)記す、支那帝使進貢を求む、タメルラン怒つて曰く、吾復進貢せざらん、貢を求めば帝みづから來れと。乃ち使を發して兵を徵し、百八十萬を得、將に發せんとしたりと。西曆千三百九十八年は、タメルラン西部波斯を征したりしが、其冬明の太祖及び埃及王の死を知りたりと也。帖木兒が意を四方に用ゐたる知る可し。然らば則ち燕王の兵を起ししより終に位に卽くに至るの事、タメルラン之を知る久し。建文二年(1400)よりタメルランはオツトマン帝國を攻めしが、外に在る五年にして、永樂二年(1404)サマルカンドに還りぬ。カスチリヤの使と、支那の使とを引見したるは、卽ち此歲にして、其の翌年直に馬首を東にし、爭亂の餘の支那に亂入せんとしたる也。永樂帝の此報を得るや、宋晟に敕して儆備せしむるのみならず、備へたるあること知りぬ可し。宋晟は好將軍なり、平羌將軍西寧侯たり。かつて御史ありて晟の自ら專にすることを劾しけるに、帝聽かずして曰く、人に任ずる專ならざれば功を成す能はず、況んや大將は一邊を統制す、いづくんぞ能く文法に拘らんと。又嘗つて曰く、西北の邊務は、一に以て卿に委ぬと。其の材武稱許せらるゝ是の如し。タメルランの來らんとするや、帝また別に虞るゝところあり。蓋し燕の時兵を擧ぐるに當つて、史之を明記せずと雖、韃靼の兵を借りて以て功を成せること、蔚州を圍めるの時

に徵して知る可し。建文未だ死せず、從臣の中、道衍金忠の輩あつて、西北の胡兵を借るあらば、天下の事知る可からざるなり。鄭和胡濙の出づるある、徒爾ならんや。建文の草庵の夢、永樂の金殿の夢、其のいづれか安くして、いづれか安からざりしや、試に之を問はんと欲する也。幸にしてタメルランは、千四百〇五年卽永樂三年二月の十七日、病んでオトラル(Otoral)に死し、二雄相下らずして龍鬪虎爭するの慘禍を禹域の民に被らしむること無くして已みぬ。

四年應文は西平侯の家に至り、止まること旬日、五月庵を白龍山に結びぬ。五年冬、建文帝、難に死せる諸人を祭り、みづから文を爲りて之を哭したまふ。朝廷帝を索むること密なれば、帝深く潛みて出でず。此歲傅安朝に歸る。安の胡地を歷游する數萬里、域外に留まる殆ど二十年、著す所西遊勝覽詩あり、後の好事の者の喜び讀むところとなる。タメルランの後の哈里(Hali)雄志無し、使を安に伴なはしめ、方物を貢す。六年、白龍庵災あり、程濟募り葺く。七年、建文帝、善慶里に至り、襄陽に至り、滇に還る。朝廷密に帝を雲南貴州の間に索む。

八年春三月、工部尚書嚴震安南に使するの途にして、忽ち建文帝に雲南に遇ふ。舊臣猶錦衣にして、舊帝既に布衲なり。震たゞ恐懼して落涙止まらざるあるのみ。帝、我を奈何にせんとするぞやと問ひたまふ。震對へて、君は御心のまゝにおはせ、臣はみづから處する有らんと申す。人生の悲しきに堪へずや有りけん、其夜驛亭にみづから縊れて死しぬ。夏帝白龍庵に病みたまふ。史彬、程亨、郭節たま〳〵至る。三人留まる久しくして、帝これを遣りたまひ、今後再び來る勿れ、我安居す、心づかひすなと仰す。帝白龍庵を舍てたまふ。此歲永樂帝は去年丘福を漠北に失へるを以て、北京を發して胡地に入り、

本雅失里(Benyashili)阿魯台(Altai)等と戰ひて勝ち、擒狐山、淸流泉の二處に銘を勒して還りたまふ。

九年春、白龍庵有司の毀つところとなる。夏建文帝浪穹鶴慶山に至り、大喜庵を建つ。十年楊應能卒し、葉希賢次いで卒す。帝因つて一弟子を納れて應慧と名づけたまふ。十一年旬に至りて還り、十二年易數を學びたまふ。此歳永樂帝また塞外に出で、瓦剌を征したまふ。皇太孫九龍口に於て危難に臨む。十三年建文帝衡山に遊ばせたまふ。十四年、帝程濟に命じて從亡傳を錄せしめ、みづから叙を爲らる。十五年史彬白龍庵に至る、庵を見ず、驚訝して帝を索め、終に大喜庵に遇ひ奉る。十一月帝衡山に至りたまふ、避くるある也。十六年、黔に至りたまふ。十七年始めて佛書を觀たまふ。十八年峨眉に登り、十九年粤に入り、海南諸勝に遊び、十一月還りたまふ。此歳阿魯台反す。二十年永樂帝、阿魯台を親征す。二十一年建文帝章臺山に登り、漢陽に遊び、大別山に留まりたまふ。

二十二年春、建文帝東行したまひ、冬十月史彬と旅店に相遇ふ。此歳阿魯台大同に寇す。去年阿魯台を親征し、阿魯台遁れて戰はず。師空しく還る。今又塞を犯す、永樂帝また親征す。敵に遇はずして、軍食足らざるに至る。歸路楡木川に次し、急に病みて崩ず。蓋し疑ふ可きある也。永樂帝旣に崩じ、建文帝猶在り、帝と史彬と客舍相遇ひ、老實貞良の忠臣の口より、簒國奪位の叔父の死を聞く。世事測る可からずと雖、薙髮して宮を脫し、墮淚して舟に上るの時、いづくんぞ茅店の茶後に深仇の冥土に入れるを談ずるの今日あるを思はんや。おゝ亦奇なりといふべし。知らず應文禪師の如何の感を爲せるを。卽ち彬とともに江南に下り、彬の家に至り、やがて天台山に登りたまふ。

仁宗の洪熙元年正月、建文帝觀音大士を潮音洞に拜し、五月山に還りたまふ。此歳仁宗崩じて、帝を索むること、漸くに忘れらる。宣宗の宣德元年秋八月、從亡諸臣を菴前に祭りたまふ。此歳漢王高煦反す。高煦は永樂帝の子にして、仁宗の同母弟、宣德帝の叔父なり。燕王の兵を擧ぐるや、高煦王に從つて力戰す。材武みづから負み、騎射を善くし、酷だ燕王に肖たり。永樂帝の儲を建つるに當つて、丘福、王寧等の武臣意を高煦に屬するものあり、高煦亦頗に戰功を恃みて期するところあり。然れども永樂帝長子を立てて、高煦を漢王とす。高煦怏々たり。仁宗立つて其歳崩じ、仁宗の子大位に即くに及びて、遂に反す。高煦の宣德帝に於けるは、猶燕王の建文帝に於けるが如きなり。其父反して而して帝たり、高煦父の爲せるところを學んで、陰謀至らざる無し。然れども事發するに至つて、帝親征して之を降す。高煦乃ち廢せられて庶人となる。後鎖繫されて逍遙城に內れらるるや、一日帝の之を熟視するにあふ。高煦急に立つて帝の不意に出で、一足を伸して帝を勾し地に踣せしむ。帝大に怒つて、力士に命じ、大銅缸を以て之を覆はしむ。高煦多力なりければ、缸の重さ三百斤なりしも、項に缸を負ひて起つ。帝炭を缸上に積むこと山の如くならしめて之を燃す。高煦生きながらに焦熱地獄に墮し、高煦の諸子皆死を賜ふ。燕王範を垂れて反を敢てし、身幸にして志を得たりと雖、終に城外の楡木川に死し、愛子高煦は焦熱地獄に墮つ。如是果、如是報、悲む可く悼む可く、驚く可く嘆ずべし。

二年冬、建文帝永慶寺に宿して詩を題して曰く、

杖錫　來り遊びて　歳月深し、

山雲　水月　閑吟に傍ふ。
塵心　消盡して　些子も無し、
受けず　人間の物色の侵すを。

これより帝優游自適、居然として一頭陀なり。九年史彬死し、程濟猶從ふ。帝詩を善くしたまふ。嘗て賦したまへる詩の一に曰く、

牢落　西南　四十秋、
蕭々たる白髮　已に頭に盈つ。
乾坤　恨あり　家いづくにか在る、
江漢　情無し　水おのづから流る。
長樂　宮中　雨氣散じ、
朝元　閣上　雨聲收まる。
新蒲　細柳　年々綠に、
野老　聲を呑んで　哭して未だ休まず。

又嘗つて貴州金竺長官司羅永菴の壁に題したまへる七律二章の如き、皆誦す可し。其二に曰く、

楞嚴を閱し罷んで　磬も敲くに懶し。
笑つて看る　黃屋に　團瓢を寄するを。
南來　瘴嶺　千層迥に、

北望　天門　萬里遙なり。
款段　久しく忘る　飛鳳の輦、
袈裟　新に換る　袞龍の袍。
百官　此日　知る何れの處ぞ、
唯有り　羣烏の　早晩に朝する。

建文帝是の如くにして山青く雲白き處に無事の餘生を送り、僊人隱士の踪跡杳渺として知る可からざるが如くに身を終る可く見えしが、天意不測にして、魚は深淵に潜めども案に上るの日あり、禽は高空に翔くれども天に宿するに由無し、忽然として復宮に入るに及びたまふ。其事まことに意表に出づ。帝の同寓するところの僧、帝の詩を見て、遂に建文帝なることを猜知し、其詩を竊み、思恩の知州岑瑛のところに至り、吾は建文皇帝なりといふ。意蓋し今の朝廷また建文を窘めずして厚く之を奉ず可きをおもへるなり。瑛はこれを聞きて大に驚き、盡く同寓の僧を得て之を京師に送り、飛章して以聞す。帝及び程濟も京に至るの數に在り。御史僧を糺すに及びて、僧曰く、年九十餘、今たゞ祖父の陵の旁に葬られんことを思ふのみと。御史、建文帝は洪武十年に生れたまひて、正統五年を距る六十四歳なるを以て、何ぞ九十歳なるを得んとて之を疑ひ、やうやく詰問して遂に其僞なるを斷ず。僧實は鈞州白沙里の人、楊應祥といふものなり。よつて奏して僧を死に處し、從者十二人を配流して邊を戍らしめんとす。帝其中に在り。是に於て已むを得ずして其實を告げたまふ。御史また今更に大に驚きて、此事を密奏す。正統帝の御父宣宗皇帝は、漢王高煦の反に會ひたまひて、幸に之を降したまひたれども、叔父の爲

に兵を動すに至りたるの境遇は、まことに建文帝に異なること無し。其の宣宗に紹ぎたまひたる天子の、建文帝に對して如何の感をや爲したまへる。御史の密奏を聞召して、卽ち宦官の建文帝に親しく事へたる者を召して實否を探らしめたまふ。吳亮といふものあり、建文帝に事へたり。乃ち亮をして應文の果して帝なるや否やを探らしめたまふ。亮の應文を見るや、帝たゞちに、汝は吳亮にあらずや、と云ひたまふ。亮猶然らざるを申せば、帝舊き事を語りたまひて、爾亮に非ずといふやと仰す。亮胸塞がりて答ふる能はず、哭して地に伏す。建文帝の左の御趾には黑子ありたまひしことを思ひ出でゝ、亮近づきて御趾を摩し視るに、正しく其のしるし御座したりければ、懷舊の涙遏めあへず、復仰ぎ視ること能はず。退いて其由を申し、さて後自經して死にけり。こゝに事實明らかになりしかば、建文帝を迎へて西內に入れたてまつる。程濟この事を聞きて、今日臣が事終りぬとて、雲南に歸りて庵を焚き、同志の徒を散じぬ。帝は宮中に在り、老佛を以て呼ばれたまひ、壽をもて終りたまひぬといふ。

女仙外史に、忠臣等名山幽谷に帝を索むるを記する、有るが如く無きが如く、實の如く虛の如く、縹渺有趣の文を爲す。永樂帝楡木川の崩を記する、鬼母の一劍を受くとなし、又野史を引いて、永樂帝楡木川に至る、野獸の突至するに遇ひ、之と搏す、擢されてたゞ半軀を剩すのみ、殮して而して匠を殺し、其迹を泯滅する所以なりと。野獸か、鬼母か、吾之を知らず。西人或は帝胡人の殺すところとなる爲す。然らば則ち帝丘福を尤めて、而して福と其死を同じうする也。帝勇武を負ひ、毎戰危きを冒す、楡木川の

歟、蓋し明史諱みて書せざるある也。
歟か、歟か。紅篋の度牒、袈裟、剃刀、噫又何ぞ奇なるや。道士の靈夢、御溝の片舟、噫又何ぞ奇なるや。吾嘗つて明史を讀みて、其奇に驚き、建文帝と共に所謂歟なりの語を發せんと欲す。後又道衍の傳を讀む。中に、記して曰く、道衍永樂十六年死す。死に臨みて帝言はんと欲するところを問ふ。衍曰く、僧溥洽といふもの繫がるゝこと久し、願はくは之を赦したまへと。溥洽は建文帝の主錄僧なり。初め帝の南京に入るや、建文帝僧となりて遁れ去り、溥洽狀を知ると言ふものあり、或は溥洽の所に匿すと云ふあり。帝乃ち他事を以て溥洽を禁めて、而して給事中胡濙等に命じて徧く建文帝を物色せしむ。之を久しくして得ず。溥洽坐して繫がるゝこと十餘年。是に至りて帝道衍の言を以て命じて之を出さしむ。衍頓首して謝し、尋で卒すと。篋中の朱書、道士の靈夢、王鉞の言、吳亮の死と、道衍の請と、溥洽の默と。嗚呼、歟たると歟ならざると、道衍蓋し知ることあらん。而して楡木川の客死、高煦の焦死、歟たると歟たらざるとは、道衍袁珙の輩の固より知らざるところにして、たゞ天之を知ることあらん。(終)



我善坊にて

正宗白鳥

三月二日。

昨夜は有樂座で新藝術座のカルメンを觀て十二時前に歸つて來た。數十日來毎夜新聞小說を一回づゝ書くのが習慣になつてゐるので、一度でも例を破つて休んでは寢心地が惡い氣がして、强いて筆を採ることにした。やうやく書終つて寢床に就いたのは二時過ぎであつた。疲勞が激しい上に、食當りのためか胃の加減が惡くつて寢づらかつた。

で、午前中は横になつて新聞や雜誌を讀んだり、假眠をしたりして過した。例の如く今月の雜誌には婦人雜誌にまでも、民本主義といふことが、いろ〳〵な人によつていろ〳〵な方面に於いて說かれてゐる。時勢の變遷思想の傳播力は遮らんとしても遮られないことが感ぜられる。日本の現代に生きてゐる我々は、短かい一生に目まぐろしいほどさま〴〵な社會心理の移動を見なければならない。しかし私自

身は世界的に頻りに高唱されてゐる。和譯語の民本主義、あるひは原語のデモクラシーといふ者から、何等の刺戟をも受けることが出來ない。軍國主義と民本主義と何方がいゝかと詰問されゝば、無論民本主義だと雷同するが、後の方の主義が盛んになつても、世の中が幸福な樂土と早變はりするとは思はれない。アダムか誰れか人間の始祖の持つて生れた素質と運命とが絶大な奇蹟によつて一變しない限りは人類の滅亡するまで、何等かの形に於て競爭や軋轢やの慘憺たる状態がこの世から消える譯はないと思ふ。英雄崇拜も止むことはないと思ふ。不公平不平等の取去られることはないと思ふ。

全體私は自分の性癖として昔から社會問題については興味を有つことが出來ない。作物の上にそれを取扱はうなどゝは夢にも思つたことがない。世に生きてゐる上は等閑視すべきものではないと思つて、強いて目をその方へ向けることがあつても、その點ではよく〱縁なき衆生の一人であるらしく、どうしても身を入れて研究し考察し得る氣になれないのは情けない。

雜誌を下へ置いて、世界を風靡してゐる民本主義のことを考へ、その主義の大黒柱の如く重んぜられて、茫大な人氣を博してゐるウイルソン氏のことを考へてゐると、私はふと昨年のクリスマスの二三日前に、神田の青年會館で聽いた内村鑑三氏の説教を思出した。その時は何かの用事で神田へ行つて、歸りがけに、ふと會館の立看板を見て、二十年前に心醉してゐた氏のことを思出して、半ばは好奇心から、半ばは昔懷かしさから立寄つたのであつた。芝居とか活動とかどの盛り場へ行つても華美な裝ひをした男女に滿ちてゐる今の世の中に、其處には昔ながらの質素な服裝をした青年青女が寒さうに集まつてゐた。

教壇に立つた内村先生は、聖書を讀む時に眼鏡を用ゐる外には、二十年前に比べてさう變つてはゐなかつた。鷲のやうな鼻、底びかりのしてゐる眼差（まなざ）し、頬には昔よりも肉がついてゐた。話題はルカ傳二章の説明であつたが、私は時の經つのも忘れて、飽かず聽了つた。……かう云つては失禮か知らないが、以前のやうな場當りじみた皮肉が無くなつて、技巧の妙をつくしてゐた。これに比べると、今の役者や文章家の藝は拙いものだと感ぜられた。

先生が數十年來、世の變遷によつても讀書によつても動かされない信念を持つてゐるのを、私は尊くも思ひ羨ましくも思つた。ことにこの時の説教によつて、先生が基督の再臨を確信し、聖書全部の無謬を堅く信じてゐるのを知つて、私は大いに興味を寄せた。今の世にも、かういふことを信じてゐる人のゐることが、私には非常に面白かつた。私はまだ先生の説に化せられはしないが、基督の教へを唯一の眞理と信ずる上はそこまで達しなければ駄目だと思ふ。私の心には少時の信仰が新たに復活はしないらしいが、しかし、藝術至上主義や民本主義などよりは、内村氏の所謂「再臨説」や「無謬説」の方が一層深い意味をもつて私の胸に響くのである。

午餐には比目魚（ひらめ）の刺身で粥を啜らうとしてゐるところへ、Y君といふ私の親戚に當る人が訪ねて來た。同年輩で家も隣同士だつたので、子供の時には一緒に遊んで一緒に學校へ通つてゐたのであつたが、Y君の小學卒業後間もなく、時代の波に襲はれて、その一家は解散されて、大勢の兄弟がおのがじし諸方へ職を求めて出て行くやうになつてから、私などとも會ひ合ふ機會はなく、十數年を經過したのである。

Y君は胡麻鹽頭になつて、顔付も見違へるやうに老けてゐる。が、體格はこれ一つを資本にして浮世を渡つて來たと云ひさうに、岩疊だ。諸國にちらばつてゐる兄弟のことや、中には數年來消息も止絶えてゐる者のことを話して、「僕は今神戸でブローカーをやつてゐる」と云つた。相手の話は私に取つて一々懷かしい思出となつたが、商賣ちがひだから話の合はないところが多い。「君は名譽の上では大臣級の人間になつてゐるんだから……」とか、「僕等とはちがつて君は名譽を得るために勉強して來たのだらうが、それに博士にもならないのは變だと思つてゐたよ」とか、話がこんなことになつて來ると、今の私には擽ぐつたい思ひをするほどの興味さへ起つて來ない。私は「さうだね」を繰返した。

Y君は三四時間話して歸つた。同君の家も私の家も同じくらゐな田地持で、兩家の主人は先祖以來代々村の者から旦那樣と呼ばれて通つて來たのであつたが、Y君の父親は閑碁が好きで、私の記憶によると、朝から晩まで碁を打つてゐたやうであつた。私の父も初めは多少碁を嗜んでゐたさうであるが、何か感ずるところがあつて、斷然こんな遊びを禁じた。兩家の家運の盛衰が主人が碁石を持つ持たぬにかゝはつてゐるやうに、私はY君が歸つた後で考へた。

三日。

四五日來溫かゝつたが、昨夕から風が寒くなつて、今朝は久振りに手水鉢に氷が張つた。

今日は私の誕生日である。

日暮れ前から帝劇へ行つて、K氏T氏などゝ席を並べて、市村座連の舊い芝居を觀た。「伊賀越」のやうな陳腐な狂言でも、相變らず婦人客を泣かせてゐる。觀客は場に溢れてゐる。二番目の「文七元結」は

殆んど二十年前に三崎町の川上座で伊井一座で演じたのを見たことがあつたが、私も隨分長い年月芝居を觀て來たものだ。

二番目の序幕を見たゞけで歸つたが、歸ると、京都の南座に出勤してゐる鐵笛薇陽兩氏とそれに秋江氏と三人連名の繪端書が机の上に屆いてゐた。「三人集つて見ると君をもう一人ほしい感じがする」と、薇陽氏の筆で記されてゐる。これ等の諸氏と芝居の眞似をしたり、飮食ひして遊び歩いたりしてゐた時も、最早十數年の昔となつたが、あの時分が僕の青春時代であつたのかも知れない。しかし、早くから腦も胃も弱かつた私は、あの時分だつて、形の上でこそ若々しく浮かれてゐれ、心の中では些とも樂んでゐなかつた。……教會に畏(かしこ)まつて神の教へを聽いてゐた時でも、遊廓の一室で艶話(つやばなし)に笑つてゐた時でも、私の心の中は殆んど同じ狀態を保つてゐたと云つていゝ。

「夢は枯野をかけめぐる」私は二十代からさうだつた。今日は私の四十回の誕生日だ。枯野の夢も長すぎる。



馬琴の新研究

馬琴の晩年とおみち

市島春城

（一）

曲亭馬琴の事を考へるについて、私は、その息子の宗伯夫人であつたおみちと云ふ女に、強い感興を動かされる。晩年、馬琴の淋しい生活を彩つたのは、此のおみちであつた。馬琴の『八犬傳』が、完成されたのは、勿論、馬琴のエナージーが強いために、相違ないが、一つは、おみちに助けられた點が、極めて多いのである。その事を詳かにするには、馬琴の家庭を一瞥する必要がある。

元來、馬琴は、馬琴より二三歳長じてゐた女の元へ、入聟したので、而も、其の相手の女は『強悍』の二字を以て、形容された程であつたか

ら、可なりに、馬琴を苦め、口やかましく、云ふ場合も、尠くはなかつた。馬琴の内助者として、適當して居なかつた。それに、馬琴の息子の宗伯は、身體極めて虚弱で、馬琴が、宗伯を、一人前の醫者とする迄には、可なりの苦心を重ねた。左樣した有樣だから、宗伯夫人として、迎へられたおみちは、舅姑に對する務め、良人に對する務め、一切をその一身に荷はねば、ならなかつた。

馬琴は、全體が、凡帳面な、義理堅い、やかまし屋と云ふ肌合の人であつたから、恐らく、舅として可なりに、むづかしかつたにちがい無い。それに、晩年に於ける馬琴の勢力は、文壇と社會とに跨つて次第に、偉大になつてゐたから、その風采を想望して、江戶の人々は勿論、地方から來た物好きな人や崇拜者が、馬琴を訪問することが多い。けれども、馬琴は一々、それ等の客に逢ふことを、好まないから、その斷りを云ふ役は、勢ひ、おみちが負擔しなければ、ならなかつた。又た馬琴に對する諸方の贈物も、可なりにあつた、馬琴は、一々、それを帳面に記して置いて、家製の丸藥を以て、返禮した。それも亦おみちが、取扱はねば、ならなかつた。(此の丸藥は、宗伯が醫師である所から、生活上の便宜によつて、賣出したものであらう)それから、舅と姑との間に起る小さい風波についても亦、おみちが、仲裁の役に當らねば、ならなかつた。此邊の詳細は例の馬琴の日記が證據立てゝゐる。

(二)

殊に、年若いおみちに取つて、一番重荷となつたのは『八犬傳』の手傳ひであつた。はつきりしたとは、わからないが、おみちには、特別に、文學的敎養が、なかつたやうである。(勿論、無學ではなかつ

たらうが）而して其の文學的教養は、主として、馬琴の家へ來てから、受けたやうである。盲目になつた馬琴の口授によりすがつて『八犬傳』の十分の三ばかりに當る分量を完成させるについては、おみちも、可なりに、苦んだ。馬琴の云ふのを、一々間違ひなく、筆記すると云ふことが、既に、一つの重荷であつた。次ぎに、それが、印刷に附せられた後、校正の誤りについて、馬琴は、一字や、二字の誤りさへ、やかましく、叱り付けると云ふ風であつたから、此の校正と云ふ事も亦、おみちに取つては、太きい負擔であつたにちがい無い。而も、馬琴に叱られ、勵まされ乍ら、『八犬傳』完成に力を盡したことは、平凡な女の、到底出來ないことである。

此事實に關する動かぬ證文は馬琴自身の筆で誌されてある。

そればかりでは無い。おみちは、其の良人の宗伯に對しても、可なりに、妻としての道を立てゝ、良人が、いつ歸つて來ても、それを歡待するやうに、用意してゐた。これには、宗伯も、おみちの忠實な態度と心がけとを、心から、嬉しく、思つたやうである。既に、馬琴に對し、宗伯に對し、此のやうな忠實な女であつた以上は、その『强悍』の代名詞であつたやうな姑に對しても、優しかつたことは、云ふ迄もあるまい。

(三)

殊に、宗伯は夭折して、家計も亦不如意になつた時代の馬琴を慰めたのは、おみちであつた。宗伯は馬琴が渾身の愛を傾けた唯一の子である。そのため、馬琴は、分不相應の金を消費することを惜まなか

つた。瀧澤家の家名を維持し、且つ馬琴老後の杖ともなり、柱ともなるべきものとして、宗伯を『家の寶』としてゐた。その宗伯が病のため、自分よりも、一足先きに、冥途へ行つた時、馬琴の悲みは、如何に深かつたであらう。平生、理性が發達して、强い意志に鞭つて、世の中に對して來た人だけに、一家の大きな不幸に對しては、却てその悲みを自制し切れない程の苦悶があつたにちがい無い。それぱかりでなく、その生活上の苦痛も、馬琴が内職とした貸本業や、その他に失敗した爲め、且つは、宗伯の助力をも失つた爲め、次第に、不如意になつて、馬琴が、宗伯の次ぎに愛したらうと思はれる藏書の一部を、ポツ／＼賣り離したのは、一層馬琴に、取つて、淋しいことであつたらう。

此の際、おみちが居なかつたら、馬琴は、一時、絶望のどん底に陥つたかも、知れないのである。幸ひにして、おみちが居た。彼の女は、暗くなつた馬琴の心に、一道の光明を與へた。挫折しやうとした馬琴の意氣に、一道の炎を加へた。それがため、馬琴は、この灰色の晩年に、倘ほ屈しないで『八犬傳』を完成し得たのである。我は、おみちを尊い女、難有い女だと思ふ。馬琴の生活を研究するについて、此のおみちを見逃しては、ならぬと思ふのである。

失明當時の馬琴と其家庭の暗雲

文學博士　坪内逍遙

（一）

馬琴の晩年が准悲劇的生活であつたこと、其妻お百が龜篠や片もひのモデルではなかつたかと思ふや

うな一種の下品な悍婆であつたこと、及び嫁のお路が極めて孝順で、其僻んだ、口やかましい姑と嚴格過ぎて氣むづかしい舅馬琴との間に立つて、よく事へて、畢生の大著『八犬傳』の完成までも手傳つたといふ希有の事蹟は、全く今春城君が話された通りであり、さうしてそれは、誰れしも例の『八犬傳』の回外剩筆であらまし知つてゐた事ではあつたが、更にそれらの事蹟が明かになつたのは、明治四十四年に饗庭篁村君があの讀みづらい馬琴の日記の要概を丹精して選抄し、且つそれを公刊してくれられてからであつたといつてよい。あの日記は、原本のまゝでは、迚も私などには七面倒で、容易に近附きがたいものである。

あの「日記鈔」を讀んだ當時に、最も深く私が感じたことは、同じく馬琴夫婦と嫁のお路とに關する事ではあるが、今春城君が話された諸點とは、全く別樣の觀察に成るものなのだから、ざつとそれを話し添へて見よう。

あの「日記鈔」中の記事で、特に私の注意を惹いたのは天保九年度のそれである。丁度東京の宅から取寄せたのが屆いたから、其中から先づそれを抄出しよう。馬琴が七十一歳の時の記である。

天保九年四月二十日

一、この節お百事につき娘ども苦勞いたし、かれこれ心配、皆是れ我不德の故にて、時の不祥かくの如し。しかれども於我お百をあしかれと思ふにあらず彼れの心を安からしめ、一門の無事を願ふのみ。

同閏四月十日

一、夜に入り、お百父子に對して怨言をのべ、捨身すべしなど云ふ。予徐にこれを諭して、七年以來吾家治らざるは、畢竟吾不德の致す所、人を怨むによしなし。夫婦七十餘歳に至れば、餘命幾ばくかあるべき、無益の怒りに心を勞する勿れと、萬事我不德にし

て致す所を以て敗詭す。しかれども全く甘服なすにあらず、只聊か怨怒をくつろぎて止む。女子小人の養ひがたきは聖人すら然り、況んや凡夫のわれら、實に愧づるに堪へたり。

同九年五月十六日

一、內亂にて今日予著述休筆、諸事廢棄也。事皆吾不德の致す所、人を怨むの心なし。其罪吾一人にあり。おそるべし、つゝしむべし。

讀んだ當時、此三項の記事は、私をして、ふと二た昔も前の古い記憶をば呼起さしめた。すなはち、自分が文壇へ出た當座の明治十八九年頃に、或人から聽きはつゝてゐた馬琴の晩年に關する或奇怪な風說を憶ひ出した。で、私は「あゝこれだ！或はこれが原なのだらう。」と我知らず口の中でつぶやいたのである。言語道斷の、理不盡千萬な訛傳や誣說とても、ともかくもそれが成立するに至るには、何等かの由緒因緣があるものらしい。少しく考へて見れば、到底あるまじきことゝ推察されねばならぬ事をも人の善を聞いては疑ひ、人の惡を聞いては信じたがるのが人情の常であるから、とかく如何はしい事となると、却つて如何にもあつたらしげに言ひ觸らすのが習ひである。それは今日の新聞の雜報や六號活字式の噂話に其廓大された現證を見る所で、多少さういふ話の材料とされた經驗のある人達は、善惡ともそれらの噂話は、十二分の割引をしてからでなければ決して受取らない例となつてゐるが、時とすると、「それをあの人までが事實と思ふのか？」と呆れることがあると同じに、とんだ甚しい史傳上の訛傳や謬說が、どうかすると、一かどのオーソリチーと立てられてゐる人々の間にすら傳說されてゐることがあるから油斷がならぬ。私は彼の日記の文を讀返し〳〵して、馬琴の爲に氣の毒の感に堪へなかつた。

が、其わけを話すには、まづ其頃の自分の境遇を話してかゝらねばならぬ。

（二）

私が例の「小說神髓」だの「書生氣質」だのといふ「舊惡全書」を頻りに公けにしてゐた頃は、もう既に二十六歲以後の事であつたが、時代其者が今よりも幼稚であつた上に、私自身が怠け者でもあり、うはついてもゐたので、外國文學の知識も、其時分は英米の文學だけ、それも主として十九世紀の劈頭まで、國文學も（大學で聽講した「萬葉」や「源語」や「竹取」や「鏡」や其他のクラシックスを別格とすると）自ら修めたといひ得られる部分は極めて淺狹なものであつた。本當に感興を持つて讀み耽つてゐたものといふと、主として文化文政度の戲作類、それだけは大抵剩さず讀み得た積りであつたが、それより以前のとなると、源內や蜀山や軍記物や片假名本の支那小說の翻譯や敎訓物や怪談本やお伽物なぞを除くの外は、大かた知らず、西鶴さへも只名前だけ、近松も、世話物となると、芝居で觀た「梅忠」や「紙治」ぐらひのもの、八文字屋もほんの三四種しか讀んでゐなかつた。化政度の著述とても、考證や隨筆となると、種彥、馬琴、京傳なぞのが眼目であつた。ところが、おもひ〳〵外國の文學史や文學評論なぞを研究するにつれて、作者の人格及び閱歷と其作との關係に深い興味を持たない譯にはゆかなくなつて來たのだが、

私の德川文學史に對する知識は、其頃はまだ甚だ淺薄で粗雜で、「作者部類」や「蛛の糸卷」式の著者のあることさへも知らなかつたので、大きに窮した。或はよく搜したら、當時の東京大學の圖書館內に

も、其方面の二三の雜著ぐらゐはあつたかも知れんが、手近にさういふ筋の博識も居らず、田舍出で交際は狹し、おまけに怠け者でもある、手蔓もなく、取着きやうもなかつた。其うち、誰れに紹介して貰つたか忘れてしまつたが、當時の戲作と劇と遊女町と火事師の歴史にかけては東京中でたつた一人と噂されてゐた——博識家——關根只誠翁——の許へ折々出入する身となつた。翁は今の關根博士正直君や默菴君の嚴君で、其頃既に七十歳であつたらうと思ふが、まだ頗る矍鑠たるもので、毎日、殆ど朝から晩まで、例の丹精な「誠垓只錄」の筆を休めず、たまに餘り草臥れると、其頃はまだ狹くるしい巷路で、今のやうに本郷の切通しと一直線にはなつてゐなかつたあのいづくら横町の藥師の傍に在つた間口がたつた一間、奥行同じく一間の古本屋の店先に腰を掛けて、愛想のよいそこの若い主人を相手に、或は古雜著の話、或は世間話と、縱横無盡の雜談に時を過すのが翁の保養法の一つであつたのである。其頃私は眞砂町の十八番地に住んでゐたし、其本屋とは親しかつたのでよくそこで翁と落合つた。私は、一時は少くとも月に一度は翁を訪ねて、主として文化文政度の戲作者連の傳記に就いて質問した。

翁は其都度深切に質問に答へてくれられた上に、翌日又は數日後に、自家の控へ本又は抄寫本中から其部分だけを細字で綺麗に拔書して送つてくれられるのがきまりであつた。私の德川文藝史に關する新知識は、此際翁のお庇で大分加へられた。「岩傳毛の記」だの、「蛛の糸卷」だのゝ存在は翁に始めて教へられたやうに記憶する。もつとも其頃は饗庭篁村君と親しくなつて、月に二三度は缺さず會つて、文化以前の文學に就いていろ／＼啓發されることの多かつたのだから、どつちから教へられたかよくは記えてゐない。とにかく私はそれらを種に「中央學術雜誌」といふ月刊雜誌へ種彦や三馬や春水、馬琴など

の評傳めいたものを書いて見た。それは無論取るに足らん粗莽なものであつたが、或はそれが徳川期の戯作者を批評しようとした維新後の最初の試みであつたかも知れない。

序ながら、此「中央學術雜誌」はたしか明治十八年の創刊で、高田半峰、市島春城其他の同人の發企に係るもので、おそらく外國の批評雜誌の廣く學藝にまでも關するもの丶體式を移した最初の雜誌であつたらう。彼の「明六雜誌」などとは著眼も文體をも異にしたもので、主として政治學、經濟學、文學の評論に力を盡したものであつた。我小說批評に、ともかくも一小紀を劃したともいつてよい半峰居士の「書生氣質」の評や「佳人の奇遇」の評も此雜誌に現れ、長谷川四迷の全くの處女論文も此雜誌へ私の紹介で出た。それは露の某批評家の說に據つて小說を總論したものであつた冷々亭主人といふのが其頃の二葉亭の號である。又「演劇改良會の解散を望む」だの、何のといふ半峰居士の隨分切込んだ演劇論も載つたし、春城君の手紙趣味も、もう既に其時分から發揮されてゐた。

只誠翁の知識は、前記四方面の事に關しては、實に該博なものであつたが、其抄寫法は、所謂隨聞隨見といふ式なので、取捨はクリチカルではなかつた。敢て重複をも嫌はず、時としては必ずしも矛盾をも訛謬をも避けないといふ風であつた。が、それにも係らず、如何にも話上手なので——當時、向島の永機宗匠か、南新二老人か、翁かといふほどの話上手であつたから、其話を聽いてゐると、百年も昔の人物や事件さへも、時々目の前へ浮出してくるやうに思はれた。就中、劇の話は面白かつた。其話しぶりが枯れ切つたもので、決して氣障な假聲などにはならなかつたが、それでも興が乘つてくると、時々

其有様を暗示するに足る身振がまじる。「それが大時代の幕切れでさ。高麗屋が――ね、そら例の鼻の、こんな鹽梅式に高い――（と握り拳で鼻の形を自分の鼻頭に拵へて見せて）「かた〳〵さらば!!」と大太刀を、斯ういふ風に……」と兩手で左から大きく廻して右の肩へ大刀を擔ぐ眞似をして見せた時の翁の表情は今も尙私の目に浮ぶ。其頃は最も芝居好、役者繪好であつた私は、翁のさうした表情が嬉しくてたまらなかつた。と言ふのは、實際、翁は初代豐國が畫いた五代目團十郎のやうな、大きい、長い顏で鼻の高い、心持目尻の下つた、口の大きい人だつた。早い話が、默菴君の顏を二倍大にして、滋味と重味とを持たせたといふ顏だつた。つまり、二男の息子さんは只好、親爺さんは只誠、そこに號だけの差があつた。

（三）

つい、枕話が長くなり過ぎたが、丁度其頃の事である。さういふ戲作や劇に關する種々雜多の昔話の間に、ふと話が馬琴の晩年の事へ移ると、翁は急に聲を落して、一寸猫脊になつて「ありやね、實はイモ〇〇なんでしたよ」とやゝ早口に言つて、じつと私の顏を見たが私は只「へい!?」と要領を得ない返辭をしたツきりであつたので、拍子抜けがしたか、話頭はいつか他の事へ轉じてしまつた。

實をいふと、むかうの言ふことがよく此方へ通じなかつたのである。まだ田舍にゐた明治八九年の頃にさへ、戲作を通じて、見事江戸の言葉を大抵は心得てゐる積りで、半可つてゐた私だが、どうしてまだ〳〵東京のスラングで、私には獨逸語同然なのが幾らもあつた。英語と獨逸語との間には從兄弟同士

位ゐの緣故があるから、羅馬字で書いたのを見ると、ほゞ見當が着くこともあるが、耳で聽いたのでは丸きり分らない。東京のスラングはまさかそれほどではない。イモ〇〇？ たしか一二度何處かで聞いたやうだとは思つたが、すぐには其意味が浮んで來ない、其中に話が轉じてしまつたので、其日はそのまゝ辭して歸り、やがて其事も忘れてしまつてゐたが、餘程程經てから、何かの序に自然と其意味が明かになると共に、話した人が人だけに、全くの根なしごとゝも見做しかねて、其際押返し出所を質しておかなかつたことを後悔したが。其頃はもう翁はゐなかつた。それに此話は、故人に關することゝいへ假初の話としても嬉しからぬ内容の事件なのであるから、其のち人と馬琴を語る場合にも、つひぞ持出したこともなかつたので、我知らず其記憶を――不信九分、疑念一分のまゝで――腦のどん底へ葬つてしまつてゐた。

ところが、其後二十餘年を經て、前掲の「日記鈔」中の記事を讀むと共に、私は思はず「あゝこれだ！これが原だらう！」と案を拍つた。

馬琴の嗣琴嶺の宗伯が三十八歲で夭折したのは天保乙未六年の五月で、時に馬琴は六十八歲、お百は三つ上なのだから七十一、お路は假に宗伯より七つ下として三十一歲、五つ劣りとして三十三歲ぐらゐでもあつたらう。彼女は、饗庭君の調査によると、もと〳〵お百とは氣が合はず、宗伯とも琴瑟和合とはゆかなかつたのだから、遺子太郎があつたとはいへ、年齡上からも、關係上からも、再緣しても然るべきであつたが、彼女は、貞節を守つて、決して再緣などをしようともせず、引續き瀧澤家に留まつて舅姑に孝順を盡し、殊に天保七年以後は、一家内の事、一つとして其手をわづらはさないことはなかつたこ

と、實に春城君の話された通りであつた。で、馬琴は天保八年三月十五日の日記に、斯う書いてゐる。

一、去冬十一月轉宅以來お路殊に立働き、實に寸暇なし、彼れなくばあるべからず。云々。

これは四谷信濃坂上へ移つてからの事をいふのである。

同九年九月晦日

一、予滯食且つ時候あたりにて、水瀉兩三度、且つ溢り且つ腹痛す。黑丸子服用、今夜四時より、就枕。お路は九つ時過まで夜なべ縫刺いたし、九つ時頃就枕。八つ半時頃予廁へゆく。お路起きいて、燈を秉る。其後又睡眠。

十年以後に至つては、馬琴は殆ど全くの失明者同樣となつたのであるから、お路の務めは更に又繁劇を加へた。二郎と呼んだ太郎の代番の男が居り、無論下婢の一人ぐらゐは居たことであらうが、太郎の世話や家政一切は勿論お路の責任、加ふるに老夫婦の介抱から、著作の校正、原稿の筆記、書面の代筆代讀、參考書類の讀み役、無聊を慰める爲の雜著の讀み役、月代を剃る役までも一人で兼帶して、八面六臂の働きをしたのであるから、馬琴が感涙を落して喜んだのも尤もである。お百はもう其頃七十四歲邪魔にこそなれ、何の役にも立たなかつたに相違ない。

(四)

日記の記事によつて、こゝまで家庭の情況を辿つて來て見ると、まだ甚だ簡疎ながら、お百婆さんの怨罵怒號が果してどういふ因緣であつたかが、ほゞ見當が附くやうに思はれる。「七年以來吾家治らざるは畢竟吾不德の致す所」と馬琴が謂つてゐる此七年といふのは、天保七年を指すのであるらしいから、娘

どもが持剩した家庭の風波は、宗伯の死んだ恰も其翌年から騷ぎはじめたのだと見て當然らしい。又、それは、「お路なくばあるべからず」と激賞した丁度其年に相當すると、如何に其頃馬琴にお路が大事がられてゐたかゞ想像され、お百の如きは居るのか居ないのかさへも分らないくらゐである。さらぬだに女は嫉妬心の深いのが常であるのに、宗伯の居た時分からさへ仲のわるかつた嫁姑、かてゝ加へて性來の僻み女のお百が、老いてます／＼ひねくれねじけて頑なになつてゐたとすると、此間に於ける家庭不折合の消息は、大抵推測が附かうではないか？　馬琴傳の何かの話の序に、故關根翁はいつた。「わつしは若い時分にさる處で馬琴の妻の其お百に逢ひましたよ。『手前は瀧澤馬琴の家內でございますが……』などと、名宣らんでもいゝ處へもしや／＼り出るといふ風でね。いやな、氣障な婆さんでしたよ。」とにかく人柄の卑い、口數の多い女であつたに相違ないから、愚痴が嵩じては、親類緣者間へどんな事を言つてあるいたか、分つたものでない。「此節お百事に付き、娘ども苦勞いたし、かれこれ心配」とある、此娘どもはお路以外の他家へ嫁した娘をも含めていふのであらうから、天保九年の四月二十日には、何かお百が別居するとか、お百と別居させるとかいふやうな事に附いて問題が起つたのではあるまいか？　其閏四月十日に「夜に入り、お百予に對して怨言をのべ、捨身すべしなど云ふ」とあるは、如何に無理解の頑婆の言としても容易ならん言葉で、此際の葛藤の頗る念入りであつたことが揣摩される。前略が常例の日記中に於て、此夜の記は比較的くはしく、且つ具體的に、而も自責の語が痛切に繰返してあるのを注意すべきである。同年五月十六日に至つて、此紛紜は尙釋けなかつたものと見えて、「右內亂にて今日予著述諸事廢業也。事皆我不德の致す所、人を怨むるの心なし。其罪吾一人にあり。おそるべし、

つゝしむべし」と書いてゐる。幸田露伴君は此段を評して「内亂の二字下し得て妙。七十餘歳にして何事をかぐどつきにけむ、老い來つて獅子愈々神威あり、曲亭翁の迷惑さこそと思ひやらる。吾が不徳の致す所として反求ニ諸己一、翁の老實を見る」といはれたが、お百婆さんの其獅子吼は、私には、主としてお路に關した理不盡な怨嗟であつたらしく推想される。馬琴が手古摺盡した困惑の體は、ひたもの自分を責めて、他を諒和しようとしたのに見える。其以前ならば、何等かの自是論法（セルフ・ヂヤスケフイチーション）を持出さないでは濟まさぬ筈の馬琴が、あたまから己れを凡夫と卑下して、恐懼し戒愼し慚愧して止まないのは、一は高齢老實の然らしめたのであらうが、一は、それより他に方法がなかつたのではあるまいか？　生中にお路を庇へばますます僻む。假にもお百の不條理を諭し立てすれば、いよいよ怒る。萬事我不徳にして致す所を以て教諭す」るより外に仕方が無かつたのであらう。あゝ我れ、若き頃遠慮足らず、ひたすら目前の都合のために、かういふ頑冥不靈な賤婦の家に入夫となつたのがわるかつた。あゝ自業自得だ！或は彼れは、それをば今更に後悔もし慚愧もしたであらう。或はまた、お百の頑冥なのをも嫉妬深いのをも、永い間の經驗で十二分に知つてゐながら、お路の奉仕を喜ぶの餘り、知らずしらず片贔負に流れて、お百をあるか無きかに待遇し、ますます邪推を募らせたのを、それを實際我不徳ゆゑだと自責したのでもあらうか？　とにもかくにも、馬琴の家庭が、其失明前後に於て、最も慘憺たる情況を呈してゐたといふことは爭はれない。

（五）

此大紛紜よりも前、天保八年三月晦日の日記に斯ういふことがある。

一、昨夕此方の門の戸へ多く泥を塗り候馬鹿者有レ之、今朝見レ之て余に告ぐ。早春も門脇並に窓下へ泥を塗り候へども、多用にてそのまゝ打捨置候ふゆへ、猶不レ飽して同人の所爲なるべし。右は近隣地借りの御家人の所爲のよし、過日お路隣家内義の噂にてはじめて知りしと云ふ。其人甚だ腹きなき小人にて、人のよろしきをそねみ候ふ癖有レ之、依レ之子弟に申し付け、夜に乘じてさるひが事をなすよし也。いづくのうらにも馬鹿者はある事也。右の泥けばき〇〇にてすり落し、よく拭ひ去り候ふやうお路に申付けおく。お路則ち拭ひ去る。

これはどこにも有りがちの馬鹿いたづらに過ぎなかつたのでもあらう。が、若し假に（小説式に）之を前の紛紜へ附會しようとすれば、すなはちこれは、近隣の馬鹿者共が、馬琴一家の平素の無愛想と盛名と見識ぶりとを、小癪にさはつてゐたばかりでなく、或はお百婆さんが愚痴の餘りに口走つた奇怪な怨嗟なぞを聞き傳へて、さまア見ろ式の惡戲であつたのだと附會されないこともない。「捨身すべし！」とまで猛り迫つた悍婆のヒステリー聲は、時に墻外へ漏れなかつたとは斷言しがたいからである。舶徒や片もひにお百の平生を暗示した馬琴は嫉妬にわれを忘れた彼女の影を巽風の妻の於鬼子に宿らせてゐたと見て、或は中つてゐるかも知れぬ。かりそめにも煙らしいものが揚つたには、たとひ紙卷の吸殼然たる火種にもせよ、どこかで一時くすぶつてゐたに相違ない。只誠翁は、前にも評しておいた如く、決してクリチカルな研究家ではなかつたが、又言を愼むには餘り江戸前過ぎた氣象の人ではあつたが、萬更何か據りどころがなくて、あゝした傳説を口外される筈もない。が、くれ〴〵も其當時、折返して其出所を質しておかなかつたのが遺憾である。

(六)

あゝ聲譽は時の海內に遍き高齡七十一歳の老文豪、それでゐて家庭はやつと下婢ひとり、男ひとり使ふだけの餘裕あるかなし、五十餘年來の丹精で集めた唯一の慰藉の藏書をさへも賣つてしまひ、老後の柱たるべき一人兒には先だゝれ、糟糠の妻たる七十四歳の老媼と今は後家の嫁ひとり、孫ひとり、門人は初めから拒絕して一人も許さず、新來の訪問客は頭から追ひ返すのが例であつたから、出版書肆が出入する外には、交際とては殆ど無く、物淋しさと薄暗さとが彌が上に覆ひかぶさるやうに思はれたらしいのに、かてゝ加へた苦々しい家庭の紛紜、それさへあるに、兩眼ともに、今は殆ど悉く用をなさなくなつて、細字はもう讀むことも書くことも出來なくなつたといふ、作者としての彼れが最大不幸の初期ともいふべき此天保八九年度こそ彼れが一生中の最も氣の毒な時であつたらうと思ひやられる。宗伯在世の天保六年以前は勿論の事、お百死後の最晚年は、——(お百は天保十二年二月七十八で死んだ)——全然失明といふ不幸こそはあれ、家庭の不和といふことだけはほゞ保たれたであらうから、まだしも聊か慰むるに足りたであらう。「八犬傳」の回外剩筆を稿し了つた時の彼れは、明かに其勞の絕頂に立つてゐたのであるから、むしろ最も得意でもあつたらう。「羅馬衰亡史」の最後のページを書き了つて筆を投じたギッボン其人のに似た無限の愉快と感謝とがあつたらう。が、此兩眼も昏く、心も昏かつた天保八九年度の彼れは!、私は、「八犬傳」の最後の自筆の稿やあの最後の讀みわけがたい日記の文字の上に見える有形の悲慘よりも、八九年度の日記の裏に潜むらしい無形のみじめさに同感するのである。巨人や

天才の晩年は大抵不幸であるとはいへ、馬琴のやうな、謹嚴な用心深い、どちらかといへば常識的な巨人にして、これほどまでに中晩年のみじめであつたのは尠い。さうして、それがまた今まで注意されなかつたのも不思議だ。或はこれも其交際の狹かつたが爲で、一家内の事は、あくまでも一家内の事として、世に知られずに終つたのであらうか？　或は私の以上の臆測は、穿鑿過ぎた全くの臆測なのであらうか？

（大正七年三月一日於熱海）

「馬琴の新研究」は、かねて、馬琴の事に精通せらるゝ市島春城氏が、偶然、熱海の坪内博士別邸で、馬琴談を試みられたに對して、坪内博士が感興を催ほされ、更らに、春城氏の談話の後へ自ら筆を執つて平素の蘊蓄を此に傾倒されたものである。

改造第二號豫告

思想問題（長編）　文學博士　桑木嚴翼

題未定　法學博士　神戸正雄

同　帝大教授　木村泰賢

食糧問題　法學博士　矢作榮藏

國民思想より國民性　文學博士　三浦周行

經濟戰に於ける徴兵制度（長編）　工學博士　青柳榮司

社會政策　法學博士　河津暹

題未定　法學博士　江木衷

逍遙錄　法學博士　和田垣謙三

尊氏と直義　文學博士　渡邊世祐

題未定　文學博士　幸田露伴

小說　田山花袋

脚本（長編）　秋田雨雀

題未定（長編）　谷崎潤一郎

定價

本號に限り定價金六拾錢

定價	一冊	六冊	十二冊
定價	四十錢	二圓三十錢	四圓五十錢
送料	貳錢	送料共	送料共

毎月一回一日發行

大正八年三月二十四日印刷納本
大正八年三月廿八日再版發行
大正八年四月三日發行

東京府品川町淺間臺二四六　編輯兼發行者　横關利藤太
東京市京橋區西紺屋町廿七番地　印刷者
印刷所　秀英舍

編輯所　東京南品川東淺間臺二四六　改造社　電話高輪一一九〇

發行所　東京神田今川小路二丁目四番地　清水書店　電話本局九六四・九六五　振替東京七四四七番

大賣捌所　東京堂　上田屋　至誠堂　北隆館　東海堂　良明堂

注意　新刊圖書寄贈廣告其他編輯上に關する用件は凡て改造社編輯部へ御申出で下されたく候

（改造第一卷第一號）（大正八年三月二十四日印刷納本、大正八年四月三日發行）

東京秀英舍印刷

（大正八年三月二十一日第三種郵便物認可）（毎月一回一日發行）定價本號に限り六十錢